光遠き地の冒険者たち

きー子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光遠き地の冒険者たち

【Ｎコード】
Ｎ１１０７Ｔ

【作者名】
きー子

【あらすじ】
凶悪な魔物や無法者がはびこる大陸世界、“光遠き地”に生きる人々の物語。底辺を生きる旅人の少年剣士、ウィリアム。辺境の町の少女薬師、クロエ。広大な世界に比しては取るに足りない彼らの出会い、それが冒険の幕開けであった。
レベル１から行く王道中世風ファンタジー。成長もの。

Ｌｅｖｅｌ１：『落とし穴で落ちモノ』

冒険者の道はかくも険しい。見上げた先は迷宮の天井。

――灰髪の少年、ウィリアムは落とし穴に落ちていた。立ち往生である。投げ縄、カギ爪の類の持ち合わせが無いわけではないが、このダンジョンを構成するものは主に土であった。四方を囲う壁は、ただただ土壁。石ではない。しかも、濡れたようににわかに柔らかい。ゆえに、引っ掛けどころが無いのだ。よって立ち往生。少年の周囲には空しく毒蛇の死骸が転がっている。落とし穴との連携として仕掛けられていた罠の一環であろうが、これは難なく始末することが出来た。ちょっと噛まれたけど。ちょっと気分悪いけど。ちょっと。

「どーおすっかな……」

顔色のあまりよくないウィリアム少年は毒蛇の毒袋を剥ぎ取る作業に従事しながら、不意に回想する。仕事を斡旋してくれた酒場のおばちゃんのことである。彼女から頂いた有難いお言葉を。『一人でダンジョンに突貫なんてするもんじゃあないよ死ぬよ』。全くもって正論である。なぜ彼女の言うことを聞いておかなかったのか。年の功とは恐ろしい。そして、そんなことを彼女の目の前でもし言ってしまったら、もっと大変なことになるに違いない。自分がそこまでの命知らずではなくて、本当によかった。

――金が必要だったのだ。

ウィリアムは、食い詰めていた。魔物の巣穴と呼称するに相応しい、迷宮に飛び込むことをも厭わぬ程に、だ。付き纏う危険は勿論のこと、見返りである財宝が存在するとは限らない。――だが、身の丈不相応の富を手に入れることが出来る、その可能性も多少ながら存在する。少年は、その可能性に賭けた。

結果が、現在の状況である。

とはいえ、命は残っているのだから重畳。こんなところで立ち往

生していても仕方が無い。そろそろ進まなくてはなるまい。なに、どうとでもなるはずだ。ウィリアムはそう考え、軽く濁ったような色の黒い瞳を天に向ける。落とし穴そのものは、そこまで深くない。さて、剣を突き立てて取っ掛かりにしていけば、上まで登っていけるだろうか。ウィリアムとしては悪くない案のように思えた。かぎ爪ではどうしても滑ってしまう壁も、剣をしっかりと突き刺せば土くれの壁程度、なんということは無いのではないか。そしてウィリアムの腰には、実に都合良く、二振りの剣が提げられている。ウィリアム少年は二刀の剣士であった。

「行くか」

ウィリアム少年は覚悟を決めた（あるいは諦めた）視線をじろりと向け、剣を抜き、刃を真っ直ぐに柔らかな土壁へ突き立てる。剣が傷んでしまうことは、思慮の外である。どうせ安物だった。柔らかな壁にあっさりと刃は沈み、そのまま崩れてしまいそうな危機感を感じる。特に、突き立てた剣へ体重を掛ける瞬間が非常に危険だ。ウィリアムの体格はさほど大柄というわけでもないが、小柄というわけでもない。ごく普通、十五歳程度の少年としては一般的な体格と言えるだろう。よって、あまり負荷をかけない内に次なる一歩を踏み出すことにした。取っ掛かりさえあれば、後は難無く登れよう。

「……なんとかなりそうだな」

一時はどうなることかと思ったが、どうとでもなるものだ。ははは、何が死ぬよ、だ。おばちゃんめ。脅してくれやがって。ウィリアムは早速と能天気な思考を繰り広げながら、不意に前方（というか上方）不注意であったことに気付いて――驚愕に目を見開いた。

上からお尻が落ちてきていた。

ぐしゃっ。

「ひぎぃ！」

そこそこ良いところまで登ってきていたウィリアム少年が、ケツから真っ逆さまに地面に落ち、イヤな音を立てて落ちる。そしてお尻の下敷きになった。お尻というか、女子だった。少女である。少

女のお尻に敷かれて死ぬのならばウィリアム少年もまた役得であり、そして本望に違いあるまい。ピクピクと下敷きになって震えるウィリアム。

「……」

そして少女、無言。ウィリアムはぴくぴくと痙攣して、本当に死にそうになりながら言う。

「退いてください」

「……」

こくこく。静かに頷いて、もそもそと腰を上げ、立ち上がる少女。さて、いざ立ち上がった姿をこうして見ても、その姿は随分と小さなそれであった。背にまとめられた黒髪に蒼眼、そして愛らしい顔立ち。ウィリアムと立ち上がって並んでみれば、果たしてその頭が胸の辺りにまで届くかどうか、そんな有様であろう。比べることが酷であると言っても良い。

「……一体どうしたことかと」

「……ごめんなさい」

「いや、それはいいんで」

「……クロエ」

「……？」

「……名前」

「……」

鈴の転がるような、そしてどこか舌足らずな声。要領を得ない会話に天を仰ぎながら、ウィリアムは懸命に会話を試みる。交渉技能の決して高くないウィリアムではあったが、しかし決して彼女ほど低いということはないだろう、と思った。多分。

「僕はウィリアムだ。まあ適当に呼んでくれ。……で、だ」

「……うん」

「見るに、此処の探索に来たって風じゃないな」

こくり、と彼女――クロエは頷く。簡素なローブに身体を包み、身に一つポーチを提げるばかり。魔物の巣と称しても些かの間違い

でもないダンジョンに踏み込むには、余りにも相応しくなく、そして軽装の限りである。本気ならば無用心なこと極まりないが――つまりなんらかの事情がある、ということでもあるか。

「……魔物に追いかけられて……いつも、この辺りでは、そんなことと無いんだけど」

「で、目に入った洞窟に逃げ込んでしまったと」

こくり。何というううっかり少女。とウィリアムは思うが、しかし、あながち完全に間違った選択肢という訳でもない。なぜならば、魔物には魔物特有の縄張り意識を持つことが少なくない。つまり、己の行動領域の範囲外であるダンジョンには踏み込んでこない、ということがままあるのだ。もちろん、その内部で襲われない保障は無いが……ウィリアムらのいる階層は、深層にあたる場所ではない。そして、入り口までのそう多くない敵は、ウィリアムが切り伏せていた。そしてその結果、逃げることに夢中になって――

「うん……まあ大体わかった」

「……顔色、悪い」

「会話を噛みあわせて！」

ウィリアムはどう見ても年下（にしか見えない風体）の少女に頭を下げて懇願する。と、クロエは己の提げたポーチに手を伸ばし、その内側をごそごそと漁りだした。その中にはなにやら緑色の物体が溢れ返っている。草。薬草だろうか。はて、彼女はそれを目的として町からこの森の辺りまで出てきたのだろうか――と観察しながら、瞳を細める。そして反対に、彼女のくりくりと良く動く瞳もまた、ウィリアムの姿を観察しているようだった。顔を。というか、顔色を。明らかに悪い、顔色を。

「……蛇毒。これ、効く」

ぽん、とウィリアムは何気ない風に手渡される。

「飲むのか」

「……ぐいっと」

「こう、煎じるとか……手心というか……」

「……道具が、なくって」
小さく申し訳なさそうに頭を下げるクロエ。致し方なし。これを食わねば男が廃り、株が下がり、前衛失格の烙印を押されてしまうに違いない。ウィリアムは様々な被害妄想に陥りながら、息を止めて口に含み、噛まずに咽喉の方へ流し込み、そして触れただけでも後からやってくる苦味に襲われ、世界に絶望し、その身をよじらせ悶絶した。
顔色は、よくなった。

「……大丈夫？」
「僕は大丈夫だ。いや、むしろ助けて貰ったんだ。文句なんて無いさ。毒でコロリと逝ってたかもしんないんだからな。うん、そうだ」
だからなんてことはないんだ、僕が怒るのは筋違いなのだ、そう自らに言い聞かせて精神の均衡を取り戻さんとするウィリアム。ハハハ、などと乾いた笑いまで漏らす始末。末期的だが、その様子にどうやってフォローを入れれば良いのか、対人技能の低いクロエには分からなかった。しかしそれを彼女の責とするのは、少々酷であろう。
「……というわけでだ。助けて貰った代わり、話を聞かせてくれないか。僕がいたって襲われるのはほぼ確実。借りは働きで返すぜ」
「……うん」
小さく首を縦に振り、頷く。現実問題、眼前の少年が戦力として充てになるかどうかを計ることは難しいだろうが（というか毒にやられていた時点で少々の不安が残らざるを得ないだろうが）、この際ぜいたくは言っていられないという状況であろう。藁にもすがる気持ちである。
僕は藁かよ！　とはウィリアムの気持ちだが、流しておくことにする。
「……ゴブリン五体に追われて、しっちゃかめっちゃか」
「五体か……。一人で相手取るには厳しいな。クロエ、君の力は借

りれるか」

「……多少の魔法、なら。でも、一撃で仕留めるには、魔力を使い切ってしまう。……かく乱程度なら――相手方は、連携が取れている上に、行きずりの人から追いはぎしてるみたい、だった」

「なるほど。タチが……悪い」

魔法――この世界では精霊か天使か悪魔か、ともかく人の理を外れた者の力を借り、行使するすべは、ことごとく魔法か魔術のたぐいだ。幼い姿ながらもそれを扱い得るという言葉に、ウィリアムは舌を巻いた。

そして、クロエの観察眼と冷静な言葉に、ほうと息を吐く。幼い顔付きながらも今の彼女の様子には、どこか大人びたものさえ垣間見られた。ウィリアムは、おもむろに座り込み――腕組み、思索する。いまだ落とし穴の中で。ダンジョン内で立ち往生するのは危険だが、こうなっては落とし穴は、却って安全地帯にもなるように思えた。魔物とて、わざわざ好き好んで落ちたくはあるまい。

して、五体では厳しいウィリアムの見解には、ゴブリンの性質を語る必要がある。ゴブリンは所詮、下級程度の小鬼、一匹ごとに相手にするならば全くもって大したことのない相手だが――その脅威は、彼奴らの集団性にある。その数が五つと集まれば、熟練した冒険者ならばいざ知らず、駆け出しの冒険者一人では困難極まるとすら言える。故に、その戦い方に関しては――真剣に検討する必要があった。

「奴らが諦めるまで待つのが、生き残るには確実、だが」

「……うん」

言いながら、ウィリアムはクロエの姿を見やる。彼女の身体能力、そして体力――見目ばかりから判断してはいけない、などとは良く言うものだが、しかし妥当な判断をすれば、こう結論付けることが出来るだろう。非力で、幼い少女であるところのクロエを引き連れたまま、持久戦でダンジョン内部で持ち堪えることにもまた、些かの危険が伴わざるを得ない、と。

落とし穴に落ちたままとはいえいつまで放逐してくれるとも限らんことだし、と嘯いて、よしと頷き、壁に突き立ったままの剣を抜き放つ。

「多分、攻めに出た方が確実――というより、生き残れる確率は高まるだろ。別に勝たなくていい、生き残れりゃいいんだ――飛び出して反応する前に一匹、運が良けりゃ一匹取られて油断してるところをもう一匹。一匹は魔法で狙い取れるようにやろう。そうすれば頭数は同じ……悪い条件じゃあない」

好条件でもないが、しかしどうとでもなろう。ウィリアムは呟く。幸いなことに、こうして話し合っていることで消耗した体力も幾ばくか戻ってきている。二匹くらいなら同時に相手取れると考えたところで――不意にクロエの言葉が聞こえた。鈴の音のような声。

「……確率なら。あげられる」

「ほんとか」

聞き返し、ゆるりと頷いてみせる少女。彼女の提案に耳を傾けんとし、まっすぐに向けられる、どこか無感動な瞳を見た。感情の薄いような視線が、ゆらりと揺れた気がする。――どこか抜け目の無い目をしていた。薄紅色の唇を開き、続ける。

「私をおとりにする」

「ジーザス」

思わず変な声を上げてしまうウィリアム。

ウィリアムはそそくさとクロエを肩車しながら、尋ねる。

「考えはあるんだろうな」

「……」

「どうした」

「……どうして、肩車」

「登らないと話進まないんで……」

嗚呼と得心行ったように手を打って、頷く。ウィリアムの肩の上に立ち上がり、壁を登りきった先――落とし穴の淵に指先を掛けるクロエ。と、ふと気付いたかのように、指先に力をかけながら、呟

く。
「……これ。使える、かも」
「なにがだ」
「……上。みないで」
「ごめん」
大丈夫だ。何も見えなかった。何も見えない。だから僕はそのことに何も言及することはない。誰に言い訳するともなく心中ウィリアムは嘯きながら、剣の二振りを鞘の内に収める。上に登ったクロエに縄を持ってもらい、引っかかりとなるところに掛けてもらう。持つべき者は仲間であった。一人ではままならなかったこともなんとかなる。素晴らしい。一人でもなんとかなりそうだったということは、きれいさっぱりと記憶の彼方に追いやっているウィリアムであった。
「……上からの。魔法で、散らせるかも」
「良案だな。……でも、現実的にどうやってやるか、だよな」
「……肩車で」
「やめて」
格好が付かないとかそれ以前の問題として、辛い。いや、辛くはないかもしれないが。神妙に見やる。少なくとも、さっき彼女を背に乗せたときの感覚は、重いとは感じなかった。軽かった。というか軽すぎた。が、見目相応ともいえるかもしれない。さて、ダンジョンの出口（入り口）に向かって二人は歩み出す。床と壁は土くれなど、些か粗末だが、階段はしっかりと石造りのそれであった。安全基準上の問題かもしれない。魔物にとっての。
そして階段の向こう側に、光が見える。地上から降り注ぐ、確かな光。しかしそこから先は、同時に彼ら二人にとって戦場を意味するものでもある。一匹――見張りの役目を果たす、ゴブリンの影が見えた。
「よし」
「……うん」

「行くか」
「……」
二人は互いに頷きあう。
そして――死地に飛び込むことと相成った。

Ｌｅｖｅｌ２：『仮宿に帰るまでが冒険です』

ゴブリンと、そう名付けられし魔物。毛深く、赤色に近い褐色の肌を持ち、どこか猿にも似た異形の小鬼――それが、その魔物の姿であった。

そして、迷宮の内部から確認することが出来るゴブリンは一匹。しかしこちらから仕掛ければ、獲物探しにでも散開しているに違いない、仲間のゴブリンがすぐさま戻ってくるだろう。そして、それで構わない。ウィリアムは階段の一歩目に足を掛けると――そのまま、足音を隠しもせず、翔ぶが如く疾走する。

「――ッッ」

迷うこと無く抜き放つ。空の光を返して走る一閃の元に、ゴブリンの首を刈る。ぐらりとよろめき、倒れる姿を、返り見もしない。舗装された道を外れた、草原――元々はそれぞれがそれぞれのダンジョンに居着き、互いに無干渉を貫いていた結果、平和を保っていたその場所――に、散逸している小鬼が、四匹。それらがすぐさま集合し、陣形を固めた。その様を――見止め、すぐさまにクロエが駆け出す。ウィリアムが身を屈めた。迷うこと無く、クロエはその背を踏み台にして、行く。

「ぐえっ」

「……」

にわかに申し訳なさそうな表情をしていたのは果たしてウィリアムの気のせいであったか否か。余計な思索の間は一瞬。勢いのままに宙空に飛び上がったクロエの、その無手に、魔力の集約を示す光が宿る、瞬間――焔が生まれた。恐らくは精霊に属する魔術。それが、そのまま上空から撃ち下ろされる。ゴブリン一匹程度ならば、容易に飲み込み得る、焔の塊。その驚異に、四匹のそれぞれがそれぞれ散らばろうとして――果たして一匹、逃げ遅れた間抜けが、その炎の餌食となる。その姿は一挙に燃え上がり、ごとりと魔物が手

にしていた鉄の剣が地に落ち、そして骨も残らず燃え尽きた。同時。ウィリアムが地を蹴り抜く瞬間と全く同時、クロエが――何かを、投げつける。ゴブリンに向けてそのまま飛来し、ごつんとその頭を打った。なんのことはない。ただのたいまつである。そして投げ付けた主は、クロエ――いかにも小さく、そして非力な少女の姿。そのゴブリンが、刹那、物狂いじみた怒声を張り上げる。鉄の剣を、振りかざす。常ならば集団の利ゆえにか冷静な判断が出来たかもしれないが――続けざまに二匹の仲間を屠られた低級の魔物に、そんな知恵は望むべくもなかった。背を向け逃走の姿勢に入るクロエを、単騎で追い掛けんとするゴブリン――その愚挙に、統率が失われる一瞬。真っ直ぐに飛び出していたウィリアムが一閃、刃を振り抜く。逸れ者の一匹の胴を真っ二つに切り裂き、狩る。

「――――次ッッ」

瞬時に切って返す。クロエを追うゴブリンを、迅速に仕留める必要があった。彼女の矮躯程度、例えゴブリンの一撃とはいえども、取り返しの付かない傷が残る可能性がある。それは出来得る限り避けねばならないと、ウィリアムは思考する。既に相手方に数での利はない。ゆえに最早、どうとでもなるだろうという状況。ゴブリンのその背を仕留めんとすれば、また己の身も狙われる定めであろうが――それは必要経費である。まともに食らいさえしなければ、問題はない。勢い良く地を踏み締める瞬間、開いたクロエとの距離を一歩で詰められる間合い。彼女が走る事を止めさえしなければ、彼女の背に刃が届くよりも速く――ウィリアムの剣にて切り伏せられよう。

急げ。風を切る様に駆け出し、刃を振り翳し。その背を狙い――瞬間だった。

「……後ろッ」

クロエの声が、したのは。その姿が立ち止まってウィリアムを振り返り、その涼やかな声が、ウィリアムの背を示していたのは。目の前にはゴブリンが、まさに凶器を手にして、振りかざしたその刃

を振り下ろさんとしているというにも関わらず。
そんなことは承知の上なのだと――ウィリアムは歯噛みする。
「――……ンのっ、くそばかッ」
思わず声に出して毒づくほど、それは愚直な行為であった。少女自身が傷つく事を顧みない――愚直な行為であった。間を置かず、刃が振り下ろされる。避けようもない。避けられようはずもない。振り下ろされる刃が、少女の脳天に向けて落ち――俄に身をよじり、刃が逸れる。逸れた刃が少女の腿に、無情に落ちる。その刃先が、非情にも突き立っていた。白い肌が鮮血に濡れるその光景（ありさま）を、見取り――ウィリアムの疾走が、加速した。刃を引き連れる。その白刃が突き立ち、そして貫くまでの、刹那の間隙。
「死ィ――――ッッ！」
飛ぶ。迷うこと無く掲げた刃を、脳天に突き立てる。脳漿か何か、得も言えぬ奇妙な色合いの液体が、天に向かって吹き上がった。刃を捻るように抉り、深々と突き立て、確実に仕留める。殺意を撒き散らすような一撃。そして突き立てた刃を抜き収めぬまま、腰のもう一振りを抜き――背にいるであろう。ウィリアムの背後を付け狙っていたであろう、気配に感じていた、クロエが指差し示したその姿に向けて一振り。最後の一匹を狙う凶刃。
ウィリアムのあまりにもあまりな、凶気の撒き散らし方に――魔物こそが、一歩を引いた。振るわれた刃も、その身をかすかに掠めるばかり。本能から刃を躱しせしめたゴブリンも、しかしすでに一匹しかいない状況。逃げ出そうとしたのか、踵を返して――尋常ならざる足取りで、ふらふらとよろめき――ばたりと、倒れる。まるで、毒にでもやられたかのような。
「……ふ、ぅ」
毒。そう、毒だ。ウィリアムは先刻に蛇を剥ぎ取った際、毒袋の毒を、収めた刃の剣先にたっぷりと――塗しておいたのだった。刃を収め、ゴブリンの頭に突き立ったままであった一振りの剣を引き抜き、一息吐くと――急いで少女の傍らに駆け寄る少年。

「……よし、クロエ、とりあえず傷の手当てだ」
「……」
「なんか僕に不満そうな顔されてる！」
「……ばかって」
「バカだろう！」
ウィリアム少年はそう言うものの、少女クロエとしては、どこか納得行かないかのような様子である。わざわざ身を呈して傷を負いもしたにも関わらず、馬鹿と言われるのはあんまりだ――とでも言いたげな、そんな顔である。そしてそれは、ウィリアムにとっても分からないわけではない。
でも頼んだわけではない。というか積極的にやめてほしい。やめてほしいと頼みたい。それがウィリアムの正直な心境であった。
「……戦力外の、わたしが、負担を、背負っておく、ほうが……効率的」
「確かに」
確かに――あのとき、クロエがそこで立ち止まらなければ、ウィリアムがゴブリンの背を切り伏せるのは、あと一手遅れていた。その結果、ウィリアムが背後から痛烈な一撃を食う可能性は否めない。剣を振り切った攻撃後の一瞬は、何よりも無防備な姿を晒している時であるからだ。
「……ということ」
「納得」
「……した？」
「しねえよ！　嫁入り前の娘さんを傷物にしたら僕にはどうにも出来ねえよ！　そこのところ考えてよ！」
「……」
「宜しいでしょうか」
「……うん」
不満そうではあるが、ゆらゆらと黒い髪を揺らして頷いてみせる少女。多分、阿呆なことを言い合っているよりも、早めに傷の手当

てをしたほうが良いか、という彼女の冷静な判断により、自ら折れたのである。外見に反してクロエは、ウィリアムよりかは幾許か大人であった。見た目には寄らないものだ。と、少女はローブをまくりあげ、白くか細い患部を露とする。穴の開いてしまったローブは以後、使い物にはなるまい。

「……。よし」

迅速に傷口を水筒の水で洗い、薬草を煎じた薬を塗付し、しっかりと包帯を巻く。毒消しの類の持ち合わせはなかったが、そこは必需品、傷薬が余っていたのは僥倖であった。とはいえ取り敢えずの応急処置に過ぎぬ。痛みはするし、大人しくしておけば当面の問題は無いだろうが、何にせよ後できちんと看てもらう必要はあった。

いそいそとローブの裾を引き戻しつつ、クロエは立ち上がらんと試みる。そして、転げた。すっころげた。前のめりに、倒れた。表情をしかめる。流石にいかんともしがたい。

「無茶すんない」

「……心配。かける」

「気にするなら怪我するんじゃないよ！　ぷんぷん」

「……あ」

「……。取り敢えず背負っていこう」

今気づいた、みたいな顔をされて、本日何度目かの天を仰ぎながら、ウィリアムは頷く。神妙な視線を感じる様な気もするが、積極的に気にしないことにした。さて、まずはきちんと整備された道にまで戻ることが第一である。なにせ町外れは些か物騒だ――だがこの場所は、元居た町までそう遠くはない。そしてクロエの重量ならば、恐らく問題はあるまい。という算段をつける。

その時、だった。

ゆらりとクロエが彼方を指差す。かすかに震えた指先。ウィリアムが振り返る。少年が、そこに見た。そこに――いた。兜と剣で武装し、通常のゴブリンより一回り大きな体格の、魔物。異様な、青色の肌。ゴブリンの親玉格、悪鬼――――ゴブリンチーフ。

「うえ。……そう、か」

確かに、聞いた。ゴブリンは五匹だと聞いた。ある程度の統率力を持った、五匹のゴブリン――彼らが、一匹の長の元に動いているわけではないと、果たして誰が保証出来たろうか。あまりにも、甘かった。そしてその魔物は、ウィリアムがクロエを背負って一対一で逃げ切れるほど、甘い敵でも、無かった。普通のゴブリンよりも数段上の強敵――危険指定生物（ボスモンスター）。

その危険性の真価は、部下であるところのゴブリンを複数引き連れた時にこそ発揮される、が。その手下をやられ、逆上した悪鬼と――未熟な剣士であるところのウィリアムが、手負いの少女を背後に庇い、相対してしまっているという、この状況。逃げられるかと、ウィリアムは彼女に視線を投げる。小さな身じろぎの後、静かに首が、横に振られた。ならばと、ウィリアムは剣を抜く。不意打ちも何も無い。万策は尽くした後だ。

これは――死んだかな、とウィリアムは思った。

Ｌｅｖｅｌ３：『賞金首との戦い』

ウィリアムは剣の一本を鞘に収め、そしてもう片方の剣――未だ毒塗りのそれ――を両手構えにて、静かに彼方を見据えた。刃の向こう側に佇む、悪鬼を、しかと据える。青色肌の鬼。異形の魔物。ゴブリン等の隊長格――ゴブリンチーフ。静かに、沈んだ瞳が観察する。今にも此方を食って掛からんとする鬼の姿、それは良く見ればどうやら――手負いのそれであった。深手ではないが、しかし身体の動かし方や関節の駆動に、そこはかとない“ぎこちなさ”が見受けられるのだ。とはいえウィリアムにとっては、例えその条件であっても真っ向勝負を挑める戦いではないということに、変わりは無いのだが。

ふるふると、横に振られた首を思い返す。少女はここから逃げられない。長距離に渡って通常通りに歩き続けることは、困難。ならばとウィリアムは考える。開けた平原であるこの場所において、不意の一撃など望むべくもない――即ち撃退は困難。だがしかし、長時間こちらに彼奴を引きつけることは、不可能ではないのではないか。彼女さえ逃げ果せてくれれば、手負いのゴブリンの頭領程度、一人で撒く手段くらいはどうとでもなろう。そう考えた所で――静かに刃を構える。相手方の出方を待つ。

瞬間、咆哮が響いた。知性の感じられない音響。魔物の威圧。風を切り、一足飛びに飛び掛る姿は、ケダモノと称するに些かの躊躇いも覚える類の所作。早い。それこそ、待ちに徹していなければ、ウィリアムごとき三流の剣士は、一撃で仕留められてしまうほどに。振りかぶられた剣が、真っ逆さまにウィリアムの脳天へと、落ちる。愚直に一直線に振り落とされる。その前動作。振り下ろされんと、掲げられた刃に、力を込められる瞬間――ウィリアムは、その一瞬を狙う。その一閃が莫大な威力を得る直前、両手に構えた剣を、下段から切り上げる。その動きには淀みなく、迷いがない。初めか

ら、狙いはこれだった。何度も想定し、シミュレートし続けた、動き――その結果を出力する。刃と刃が撃ち合い、火花を散らした。

がきんっ！

硬質な金属音と共に、刃が跳ね上がる。にわかに仰け反りを見せるゴブリンチーフ。純粋な膂力に圧倒的に劣るウィリアムは、その力が発揮される前に、生かされる前に、殺す他ない。そして、その剣を見事“剣技”によって跳ね上げせしめても、ゴブリンチーフは、その剣を手放しすらしないのだから、脱帽だ。脳内麻薬が溢れでそうになる。脳内の思考を冷却しながら、斬り上げた剣を――落とす。その肩口へ。

「――喰らえッッ」

ずぐりと、突き立てる。突き立て、深々と抉り込む。剣先に塗りたくられた毒のあまり、その全てを肌の内側に摺り込むかのように、突き刺す。吹き出す血流。そしてその剣を引き抜きすらせずに、一歩距離を置きながら、腰に携えた剣を抜き放つ。刃を抜く暇すら、惜しい。その剣を向け、身体ごとぶち当たるように突き立てる。その土手っ腹へと、剣先を進ませる。穿つ。同時、轟く聞き苦しい叫び声。少しは効いたかくそったれ、ウィリアムは毒づきながら、脇腹を掻っ捌くように刃を横一線に切り抜け、振り抜く。――そして痛みすら厭わず、痛みを凌駕して、再度化物は刃を振り上げた。

「……あ」

「――ああッ！？」

危機を悟る声が、背後からもまた聞こえた。クロエの涼やかな音。まずい。それによって悟る。眼前の光景は、まぎれもなく現実である、と。まずい。この距離からではいかようにも切り込まれる。ウィリアムはそれを理解した瞬間、剣の柄を握るがままに拳を握り、固めた。一歩、バックステップ。そのまま踏み込みながら、振りかぶった拳を振るう。

ご、ずっ……！　と、響く鈍い音。剣閃では遅い。それでは届かない。届くよりもなお速く、刻まれてしまう。ゆえに拳。顔面を、

ぶん殴る。その感触は、まるで――鉄板か、鋼でも殴りつけたかのような手応え。拳ばかりが熱を持ったかのように、疼くような痛みを覚えていた。当の魔物は、まるで堪える様子がない。互いの間合いを開く結果にすら、至らない。自然。一閃が、ウィリアムの身体を、抜けた。

ぱしゃんっ。弾ける赤い色。全身を走り抜ける、まるで身を焦がすような熱と、激痛。身体が真っ二つになったかのような衝撃。あるいはあと一瞬遅れれば、事実その通りになっていただろうが――ほんの一瞬、身を跳ねさせ、致命は避けていた。致命の傷は、確かに避けた。しかし致命傷に限りなく近い、一閃だった。ウィリアムは、ぎちぎちと歯を食いしばり、苦悶の声を上げる。苦鳴の言葉を噛み締めて、飲み込む。怨嗟の呪いを殺意に換えて、刃に乗せ、その矛先を――目の前の異形に向ける。吐き出しそうになる弱音を噛み殺し、堪えながら、ぜいぜいと息を吐く。胸から胴にかけてを真っ直ぐに切り裂かれ、斜めに走り抜けた傷。とてもとても、無視しておいても構わないような傷ではない。間断なく溢れ出す血流の激しさが、それを雄弁に語っていた。そして、ウィリアムはそのことを自ら確認する余裕すらなかったが――しかし確かに、身体の熱が急速に失われていく状況を、リアルタイムに体感していた。早いとこ仕留めるか、逃げ果せるか。血に濡れた剣を構えたまま、背に向け、気にかけてくれるなと視線を投げかけようとしたところで――

忽然とクロエの姿が、消えていた。

良しと頷く。良いタイミングであった。今この時を逃していれば、これ以上の時間稼ぎは不可能に近い。逃げてくれたかとウィリアムは確信し、そして顔を上げた。自分もまた、こんな所で死んでやるものか――駆け出す構えで、ずしゃりと踏み出す一歩。身を屈め、地を踏み締め、手のひらを大地に手繰らせる。獣にも似た前傾、突貫の姿勢。がづんと音を立てるような勢いで、地を蹴り出して、ウィリアムは飛び出す。己が身を一本の矢とするが如く、駆け出す最中に、“ゴブリンの首”を全力で振りかぶって――ゴブリンチーフ

に目掛け、投擲する。悪逆の所業に、ゴブリンチーフは応えた。怒り。それは、怒りの声であった。仲間を冒涜されたかのような、その死を嘲笑われたかのような怒声。

――知ったことか……！

払いのけるか否か、怪物に生じた逡巡を、抜け目なくウィリアムは見逃さない。死骸の頭部がその身を打った瞬間に、躍りかかる。先刻突き刺した胴の傷を狙い、突剣。剣先から、一直線に貫く。響く、悲鳴じみた奇矯な声音。それに気圧されることなくウィリアムは、その青色の肌の肩口に“突き刺さった”ままとなっていた剣を、咄嗟に引き抜く。悲鳴は物狂いのごとき怒声へと転ずる。溢れる夥しいほどの血流が、刃にまとわりついていた。構うものかと息を吐き、剣を翳したその時だった。

突如として、猪突猛進。命の危機を、危険を省みず、まるで“死に物狂い”そのものの有り様で――ウィリアムに振り下ろされた、一閃。

がきんっ！！

響き渡る、鋼音（はがね）。ウィリアムが真っ向から、まともにその刃を、受け止めてみせる。見事に受け止めてみせた。否。そうではない。受け止めて――しまった、のだ。反射的に、死への恐怖から、その刃を掻い潜ることままならず、構えた剣で押しとどめる。手遅れに近しい、圧倒的な失策。押しとどめれば、ウィリアムの膂力は、魔物のそれにはるかに劣る。即ち――後は押し込まれる他、ない。例え相手がどれほどに傷を負っていようとも、毒を含めども。あるいは死力を振り絞る敵は、常以上の膂力を発揮しようか。そもそものレベルが違う相手との力比べは――無謀以外の、なにものでもない。

歯を食いしばる。刃を食い込ませまいと、力を込めて堪える。しかし、僅かばかりも押し返せないどころか、押し込まれる。追い詰められる。どうしようもなく、追い込まれる。純粋な実力差という現実は、力量差を物ともしない奮戦、善戦を――たった一撃で引っくり返す。世は無情だ。この世に神はいない。ウィリアムはひとし

きりいもしない神を呪い、覚悟を決めた。一息に殺されるか、緩慢な死にくびり殺されるか。どっちにしろ御免だが、あいにくウィリアムには、その程度の選択肢しか与えられていない。彼に、都合の良い運の持ち合わせは、すでに無い。持ちこたえたとて、第三者による助けなど、望むべくもなかった。都合の良いことは、そう何度も――起こらない。

まあ、良いか。

人一人、助けて死ねるのなら、僕の人生も――――

そんなに、無意味じゃあなかった。

ウィリアムがそう己に言い聞かせた時、起こった現象（イベント）は、だから都合の良いことでもなんでもなく――至極当然の、帰結だった。するりと、懐に忍ばされるように、何気なく差し出されるかのように――ウィリアムの眼前に、“死”が滑りこんでくる。目の前の、ゴブリンチーフの咽喉に。突き付けられた。そしてそのまま突き込まれる。背後から魔物の咽喉を貫き、そして突き出た刃が、ウィリアムの目にも見えた。

「な」

んだって、と。声すら続かないほどの驚愕を、ウィリアムは覚えた。ただただ、驚いた。ありえるはずがない、と思ったことが、起こってしまっていたからだった。彼は確信していた。だから、恐らくは誰よりも、目の前の出来事に驚いていた。あるいは今、その生命を貫かれた、ゴブリンチーフ以上に。彼は、確信していたのだ――クロエという名の少女は確かに逃げ果せたはずであった、と。

ゴブリンチーフの背後に、彼女は、クロエはそこにいた。ウィリアムが、逃げ果せたと思い込んでいた少女の姿はそこにあった。真っ当には動かない脚を引きずって、身を這い蹲り、先刻に撃破したゴブリンが所持していた鉄の剣を、得物にして――そっと、敵の背後に回っていたのだ。まるでウィリアムの慮外から、そして、ウィ

リアムを殺害することに注力していた魔物の、盲点から。ただただウィリアム目掛けて刃を押し込もうとしていた結果、無防備に晒された隙だらけの背を狙い――その咽喉を、突いたのだ。

そして驚愕も一瞬。後は流れるように、ウィリアムの身体が駆動する。半ば反射のレベルで、動き出す。生きるために、生への渇望を原動力に、力の抜けたゴブリンチーフの剣をさばく。そのまま喉元へと、刃を突き入れた。捻る。肉を抉り、横一線。掻っ捌き、切り開く。一片の容赦すらなく、ただただ自分が――自分たちが――生き残るために、殺す。声にも、音にすらもなりそこねた断末魔を残して、倒れる身体。その身を看取るものは、すでにもう亡い。

「クロエ」

強敵を、随分に格上の強敵を、撃破したものだとウィリアムは思った。二度は出来そうもない。未だ高鳴ったままの鼓動が収まらない。とはいえ、受けた傷も決して浅くはない。己も、そして彼女もだ。すぐにでも町に戻って然るべき処置を受けなければならない。ゆえにウィリアムは、その背にクロエの身体を負ぶさりながら言う。

「逃げれたんじゃなかったのな……」

「……」こくり。

「一度ならず二度までも――ちょっと離れときゃそれで良かったろうに」

背に彼女の重みを感じれば、そのまま駆け出す。傷そのものはウィリアムの方が深いだろうが、しかしウィリアムは剣士である。肉体が資本だ。即ち、少し休みさえすればどうとでもなる。が、いかにも身体の弱いクロエは、そうも行かないだろう。現在の出血量を鑑みれば、結構にのっぴきならない状況であると言えた。かなり、危うい。

「……」ふるふる。

「うん」

「……誰が私を運ぶの」

「それもそうだった」
それだけ、と少女の嘯く声。ははと軽く笑い飛ばしながら——ぐったりと小さな頭が背にもたれかかってくる感触を感じて、駆ける足並みを幾許か早めた。果たして彼らを追い詰めるかのごとく、天は曇りだす。
一雨来そうな空模様であった。

Ｌｅｖｅｌ４：『一難去ってまた一難』

宿の一室、ベッドの上でクロエは目を覚ました。つきり、とにわかに脚が痛む。傷跡の痛みだ。そして、どこか頭がぼおっとしていた。クロエは汗ばんだ己の額に掌を宛てがう。少しだけ、熱っぽい。上半身ばかりを起こし、窓から外を眺めてみれば、そこは真っ暗闇のざあざあぶり。まるで川の一つでも氾濫させたかのような有り様。建物を叩く雨音が、酷くやかましく耳を打つ。その騒音から逃れるように視線をそらせば、気づいた。ベッドのシーツに顔面ばかりを埋めるようにして、俯せにぐったりと顔を伏せている、ウィリアムと名乗りし少年の姿である。傍らには水で濡らされた布巾などが転げていた。

――ああ、そうか、とクロエは回想する。

彼、ウィリアムの背に負ぶされて辿る帰り路。恐らくは不幸中の幸い、魔物もこの大雨に出歩くことを厭ったか、巣の中で大人しくしてくれていたのだろう――脅威に出くわすことなく、最寄りの町に帰り着くことができた。それは確かなのだが、しかし、どこか曖昧だ。どういった経緯でこの場所に寝かされているのか、その過程が、クロエの記憶からは綺麗サッパリと消え去っていたからである。ゆらり、とクロエは何かを探し求めるように視線を見渡す。といっても、質素な宿の室内に、一本のろうそくが灯り代わりに炎をくゆらせている、視界に入るのはその程度のものだった。なのでクロエは、最も手近なところにある灰色髪の頭を、揺り起こすことにした。

ゆらゆら。

ゆさゆさ。

ごんごん。

一通りの控えめな刺激を加えたところで、ウィリアムはのったりと亀の歩みのようなゆっくりさで、頭を起こした。ぴくぴくと震える瞼をぐしぐしと擦りつつ、ああとか、ううとか、オアーとか、と

にかくなんだか、まるで意味をなさない声を無闇にまき散らしている。壮絶に眠たそうだった。彼の身にまとう布の服の袂から、胸の傷に施された治療のあとが覗いている。それを見てか、クロエはほっと一息を吐いた。

「……あれか。寝ちゃってたか、僕」

「……おはよう」

「夜だな」

「……夜、だね」

あんまりにもあんまりなマイペースさを醸し出すクロエだった。が、ウィリアム少年にしても、それをあまり気にした様子はない。割と強引に叩き起されたことに関しても、特に気にした様子はない。というよりも、恐らくは、気づいていないのだろう。ウィリアムは、見るからに神経の図太そうな、しがない少年であるのだから。

「……みてくれ、てた？」

クロエが尋ねるとウィリアムは、そう、それだよ、と思い出したかのように手を打ち、クロエを指さした。「酷い熱だったんだ、大丈夫かよ、まだ頭がぼーっとしてるんじゃないか。あんまり無理するもんじゃない」と、朗々と言葉を吐き出すウィリアムに、ようやくクロエも得心が行く。怪我を負って身体が弱り切ったところで、激しい雨脚にすっかりと体温を冷やされてしまったせいか、高熱をこじらせて、軽く意識と記憶を吹き飛ばしてしまったと――まあ、そんなところであろう。こくり、とクロエは頷く。

「……ありがとう」

「気にするない、それよりちゃんと休んだ方がいい。子どもの内は身体弱いんだから」

「……人のこと、いえない」

「僕はもう十五だからな」

「……私、十九」

「ああ！？」

お前もうちょっと嘘を吐くにしても現実的な嘘があるだろうよク

ロエェ少なくとも僕の年上と言い張るには些かの無理があるぞ！
という旨の発言を受け、むくれたクロエが布団に潜り込んだことは言うまでもないことなのだが、彼女の自己申告した年齢が嘘偽りのないものである、とだけはここで明言しておくべきであろう。そんな、死線の後の――穏やかな夜のことであった。

さて。二人の宿泊した宿『旅の帳亭』は、小さなこの町の中でもかなり栄えた部類に入るであろう。いわゆる冒険者向けの安宿といったところだが、一階は酒場、それ以降の階は宿とされている一体型の施設だ。冒険者という名のその日暮らしの無法者どもにとってはありがたいことである。酒場が仕事の斡旋を兼ねている場合も、この世界では少なからない。ウィリアムが迷宮調査を請け負ったのも、ずばりこの酒場であった。

すっかりと雨は上がり、小鳥がちゅんちゅんと鳴き始める朝。朝チュン。などといったイベントが挟まることは全く無く、ウィリアムとクロエは宿を出るついでに朝食を摂ることにした。カウンター席に座しつつ、ウィリアムはため息を吐く。なぜかといえば、あれだけの大立ち回りを演じたにも関わらず、彼には一銭の金も入ってくるアテが無かったからだ。引き受けた仕事そのものは見事に“ふい”にしたのだから、至極当然のことである。――とはいえ、何を嘆いても腹は空く。注文の言葉を投げかけようとした、そのときだった。

ずしり。

ウィリアムの目の前で音を立てて、何かがぎっしりと詰め込まれた、小さな袋が置かれた。果たして誰の手によるものか。単身でダンジョンに突撃するという無謀なウィリアムをさとしてくれた、この酒場と宿屋の店主を兼任する、ちょっと肥満がちのおばちゃんが目の前にいた。おはよう身体のほうは大丈夫かい？　と、彼女はクロエに陽気な言葉を投げかけていた。「……御早う御座居ます。イルおばさん」クロエは戸惑いなしに、大丈夫と小さく笑みを乗せて

頷く。流れの冒険者ではなく、この町に住まう者等のやりとり、といった様子である。――いや、それはいい。

「おばちゃん」

「なんだい、坊。よく生きて帰ったね。注文かい」

「いやそうじゃなくて。これ」

ウィリアムは袋を指差す。「それかい。あんたのだよ」はあ、とウィリアムは曖昧に頷く。試しに手に取ってみる。ずしりとした重みが、ウィリアムの手の中に伝わってきた。今まで感じたことが無いような重みである。そのまま、軽く袋ごと揺すってみる。ちゃりちゃりと音を立てた。かかかとおばちゃんが腰に手を当てて豪快に笑った。

「貧乏性だねえ。金だよ。１５０Ｇある」

「ひゃくごじゅう！？」

「……一月くらいは、すごせるね」

ぱちぱち、とクロエが緩い雰囲気を醸しだして拍手する。１５０Ｇと記せば字面的には何とも微妙な数字だが、当たり前に一日を過ごすために必要な金は、せいぜいが１Ｇ程度。ウィリアムのような根無し草は、宿を利用する必要があることを鑑みて、その上でも――クロエが言ったように一月、あるいはそれ以上の期間を容易に持ちこたえることが出来る金額である。ウィリアムは思わず目を剥いた。物心ついてから、世界を当て所なくふらつき回るようになって以降、こんな金は――見たことも手に取ったこともなかったのだ。席から立ち上がり、腰の落ち着けどころを無くしてしまったかのように、呆然と立ち尽くす。

「こんな金、どっからわいて出たんだ」

「お前さん、ゴブリンの徒党とやりあったんだろう？　あれの退治は国からの依頼もあってね。その関係で金が入ってきたのさ」

「ちょっとよくわかんないです」

「少し前にこの近くに大規模化した迷宮があってね、その内に人に害を加え始めるだろうってんで帝国の調査団がまるごと“ねだやし

”にしたのさ。で、件のゴブリンどもが、その時に逃げ落ちた魔物の一部みたいでね。詫び金みたいな側面もあるんだろうよ、まあ、坊が正式に仕事を受けてた訳じゃないけど、やってくれたのは確かみたいだったからね。って、わけで――」

今後ともご贔屓にねってことよ、とおばちゃんは――いかにも酒場のマスター然とした気前のよさで、豪快に笑った。立ったままのウィリアムは、しばし魂が抜けたかのようにぼうっとして――そして、瞳を潤ませ、おばちゃんに抱きついた。肥満の身体は、なんだかふよんふよんだった。母性の象徴と言いたいところだが、それとはなにか違う気がした。

「おばちゃんありがとうォオオオオオオオオ」

「礼を言う代わりにお姉さんと呼びなァ」

「無理」

「言うたね坊」

「……おばさん、ミルクと、あげパン」

「僕がハムとチーズのパイとりんごジュースで」

「あーいよっ」

憂鬱な朝は、吉報に覚める。

搾りたてのりんごジュース。今朝に届けられたばかりの新鮮な牛乳。レーズンを練りこんだ生地を油で揚げ、砂糖をまぶした菓子パン。保存食であるところのチーズを豪快に振りまいて焼き上げたパイ。主人が存分に腕を振るった食事と共に、ウィリアムとクロエは益体もなく、たくさんのことを話した。

唐突に転がりこんだお金の使い道だとか。すぐにでもウィリアムは出発するつもりだったのか、だとか。だとすれば、どこに行くつもりだったのか、だとか。ウィリアムは自分が痛快に行き倒れかけたところをこの町に行き着いたという愉快な経歴を語り、もちろん行くあてもさっぱり無いのでもう少しは居着くつもりだということを軽々しく喋り、誇張を一切交えることなく豪快に所持金がほとんどゼロだったということを爆笑混じりに話し、そして軽く距離を置

かれたりしつつ、クロエがこの町の小さな薬屋の店番を勤めているのだということを聞いた。
「薬屋？」
「……うん。ちっさいの」
「クロエちゃんとこの薬屋はこの町じゃあ、ちょいと有名でねえ」
「……お店は目立たない、けど」
「有名？」
ウィリアムは塩味の効いたパイをぺろりと片付けながら首をかしげる。
「……ちょっとだけ」
「“どんな毒にもこれひとつ”、万能のどくけしそうが売ってる、世界で唯一の薬屋さ」
「ものすっげえ地味……」
ウィリアムは思わず呟く。静かにりんごジュースの入ったグラスを傾け——少しして、頭の中で冷静に考えて、そして思い直した。
それって、もしかしてすごいんじゃないのか？
対処療法なんて言葉も吹き飛ばして、毒蛇の毒だろうが毒を孕んだスライムの毒だろうが麻痺毒だろうが梅毒だろうがともかく、ありとあらゆるこの世界に存在する毒——そのことごとくを、ただのどくけしそう一つで覆い尽くす、治し切ってみせる。それはまるで世界の常識をひっくり返せるくらいの、世界の法則をひっくり返しているくらいの、魔法の道具（マジックアイテム）と言ってもおかしくは無いんじゃないか。浅学なウィリアムですら——そう、考えた。
「巷には出まわってないからねえ、んでも、この町ではちっと有名さ。大通りのでっかい雑貨屋あるだろ、何ともお冠だってうわさ」
「……商売って、たいへん」
「ひとごとだなあ」
しみじみと呟きを漏らして菓子パンをむぐむぐと頬張るクロエの姿は、なんだかいまひとつ、ウィリアムには大変そうには見えなかった。深刻そうな色合いもなかった。そしてもちろん、年上にも見

えなかった。
「……そうだな。んじゃ、クロエの店に寄っておきたいな。場所わかんねえんだ」
「……」こくり。
クロエの頷きを見て取れば、よしとグラスを空けて、ウィリアムは立ち上がる。クロエがそれに続いた。
「ご馳走様。僕らの宿代とまとめて置いとくよ」
金貨を数枚取り出して置く。一泊に食事代、合わせても１０Ｇにすら満たない。冒険者向けの安宿とは言えども、庶民的な金銭感覚にならうならば、これは概ね一般的な代金である。「また来なァ、クロエちゃんもたまにはね」との言葉を背に、ウィリアムは袋を手にしたまま踵を返した。ぺこりとお辞儀をするクロエ。朝っぱらとはいえ朝食を摂りに降りてくる者も増えてきた。そんな冒険者達の中にあって、クロエはなんとなくこの場に相応しからぬ見た目の存在であるからして、常ならばこうした盛り場にはあまり寄ることがないのだろう。
さてと出口に差し掛かったところで――どん、とウィリアムにぶつかる感覚があった。反射的に、振り返る。そこにいたのは――金髪碧眼の、青年であった。背が高く、痩身。若い。ウィリアムと同じくらいの年頃か、あるいは少し年上か。暗い瞳をした少年であるところのウィリアムとは異なり、どこか爽やかな雰囲気が漂う。軽装にマントを身につけた、身軽な風体である。
「おっと。すまんね」
と、青年は言った。少し困った様な笑みを浮かべて、会釈する。悪意は見られなかった。そして、その整った相貌が原因か、どこか悪印象を覚えづらい。「や、気にせず」ウィリアムは素直に両手をひらひらと振って、穏便に済ませる。そのまま外に視線を向けかけた、その時――不意に、違和感が引っかかった。見過ごし難い、違和感だった。
振り返る。クロエの小さな掌が、男の手首をしっかりと掴んでい

た。
「……離して、ください」
「離すって、掴んでるのは君だろう、嬢ちゃん？」
「……――とぼけるな」
ゆらりと、クロエの瞳が半目のまま掲げられる。じとりと、睨めつけるように男の姿を見据えた。今なら――数秒の時を隔てた今なら、ウィリアムにも違和感の正体をはっきりと理解出来る。明確に理解している。先刻、ウィリアムは当然のような両の掌を振って、“気にしていない”という旨を伝えた。ならば――その掌の中にあった、金貨の詰まった袋は、どこに行った？　ぎちり、と男の手首を掴むクロエの力が、強められる。そこに大した力はこめられてはいない、だろう。しかし――なにか、得も言えぬ威圧感があった。
「……やるね」
青年はニィと口の端を歪め――ひひ、と極めて人の悪い笑みを浮かべた。そして、外套の内側から掌を取り出す。大人しく、その手を開いた。がしゃりと音を立て、響く金属音。袋が、床に落ちる。瞬間だった。青年が――正しく“すり抜ける”ようにウィリアムの脇を抜け、出口から飛び出す。一拍遅れて、ウィリアムも飛び出した。しかし既に曲がり角にまで滑り込んだか、どこぞの路地に飛び込んだか。その姿を見止めることはできなかった。
あっけに取られたような、一瞬。後から外に出たクロエが、ぐいっとウィリアムにお金の袋を押し付けてくる。
「……ちゃんと。持ってないと」
「非常に面目ない……」
「……欲、あんまりない？」
いや僕としては世俗の欲望に塗れまくってるつもりなんだけど……と、ウィリアムはおもむろに申し立てしつつ、それを受け取った。
「あー。いや。しっかりしなきゃだな。僕らの仕事を見ておばちゃんが出してくれたんだもんな」
「……金額以上の、価値」

「ありがとう」
「……どういたし、まして」
「ついては、これを分配しようと思うんだが」
「……管理は、自分で、しなきゃ」
「いや、僕だけの力じゃないしだな」
「……私、使うこと、ない」
「というか山分けという響きに憧れる」
「……おばか」
「クロエッ、おまっ、僕の浪漫をッ」
なぜなのだか、やけに騒々しい道程であった。

Ｌｅｖｅｌ５：『暗雲来たる』

城塞都市『カタラウム』。ウィリアムが流れ来、そしてクロエが住まう、大陸の片隅にある小規模な街だ。都市を取り囲む城壁、敷き詰められた石畳、立ち並ぶ石造建築、そして街の中心に位置する教会の鐘。特別なところはないが、片田舎の街にしては十分と言えた。というのもこの地域は元々、小さな村や集落が点在するばかりの無法地帯であった。それがほんの十数年と前、地域そのものを帝国の監督下に置くことを目的としてか、この街はつくられたのである。いわばこの都市は――“帝国の眼”と呼称するに相違あるまい。

さて、この街の路地の裏側。いささか目立たない立地条件のもとに、薬屋『黒枝』は位置していた。ウィリアムには判読しかねる奇っ怪な東洋言語に、クロエ、とルビが振られている。怪しい。それも、かなり。ウィリアムは、素直にそう思った。とはいえ道幅は広く、特に薄暗いといった印象は受けない。

「……ここ」

「ああ……」

「……お祖母ちゃんの、お店」

「怪しいな……」

「……うん」

クロエは素直に頷いた。ああ、やっぱりそうか。そう思ってるのか。というかお祖母ちゃんのなのか、なるほどお祖母ちゃんなら孫娘は目の中に入れたって痛くないもんな、そりゃあ店の名前になって孫の名前を付けるってもんだぜ僕に孫いたことないけど、などとウィリアムが胡乱な思考を巡らせていると、クロエがきぃと扉を軋ませて、奥へ。ちょいちょいと手招く様子が見え、後に続く。

店内は、存外に明るかった。天井近くの壁際などには洋灯が備え付けられている。手の届く位置には無く、即ち、魔力を用いて遠隔から灯をともすことが出来る仕組みになっているのだろう。そして、

商品のたぐいは、棚などに直接並べられているわけではないようだった。木造のカウンターの向こう側に、扉が見える。扉にかけられた錠前が、立ち入り禁止であることを物語っていた。

「と、言いますか」

「……？」

「大切な孫に何を怪我させとんじゃい表出ろオラァーって僕はおばあちゃんに物凄い勢いで怒られるのでは」

「……だいじょうぶ」

それはない、とでも言うかのように、ふるふるとクロエは首を横に振る。

「……お祖母ちゃん、お仕事で、遠出しなきゃならなくなったから。……お留守番中」

「なあ、クロエ」

「……？」

「その、なんだ、言いにくいことなんだが、実は遠くってもう戻ってこれない場所だったりしないよな」

「……元気だよ」

七十一歳、生涯現役、とクロエは笑って付け足した。その奇妙な自信にウィリアムは慄く。身震いすら覚える。今の時代の栄養事情とか平均年齢とかちゃんと考えてるのかよ。いや、考えなくても人は生きるが、それでも凄すぎるだろ、とウィリアムは絶句せざるを得なかった。余談だが、この世界の平均寿命は、長く見積もってもせいぜいが五十前である。四十にもなれば、老境と呼んでも差し支えはないだろう。浅慮なウィリアムにも、彼女の祖母は相当な人間であることが想像できた。

「じゃあ、僕に手伝えることでもねえかい」

「……十分」

「さっきの分。働きで返すさ」

「……。うーん」

ウィリアムとしては、少女が脚を痛めていることもあってか、元

々そのつもりだったのだろう。当然といったような表情で、クロエに言う。おとがいに指先を宛てがって、少しだけ悩んだあと、彼女はぴんと人差し指を立ててこう言った。

死ぬほど地味な仕事であった。

「……注文聞き」

薬屋『黒枝』では、用途、用法別に注文を取っている。怪我に効くもの、風邪に効くもの、炎症に効くもの、毒に効くもの。そこから予算、塗り薬などの形態を加味して、商品を用意する。大抵は既に用意している商品を倉庫――奥の部屋から取り出してくるばかりだが、場合によってはその時その時によって調合を行うこともあった。そしてこの時、ひとつの問題が生ずる。今のクロエは脚を痛めている、つまり僅かな距離とはいえ、店内を往復するために歩き回らなければならないという問題だ。これは良くない。では、どうすれば良いか。これは簡単な話で、ウィリアムが接客全般を担当し、クロエが商品の取り扱いに専念すれば問題は解決すると、つまりそういった按配である。

さて、結果から言おう。

反応、評判はすこぶる良くなかった。

「ウオー疲れた……」

陽が沈み始め、夕暮れの鐘が鳴り響く。そろそろ店仕舞いか、という頃合いであった。ウィリアムはぐったりとカウンターに突っ伏して、顔面から埋もれる。というのも、ウィリアムが接客仕事の類に慣れていないこともあるが、客からの「誰だこれ……」といった意味合いのこもった視線に晒されていたからである。反応が、悪い、というわけではない。良くなかった、というだけのことだ。誰だって暗い瞳をした少年が出迎えるよりは、幼く（という風にしか見えない）、割合愛らしい（しかも、珍しい黒髪の）少女が店番をしてくれている方が、嬉しいに決まっている。決してウィリアムの礼儀が絶望的になっていない、というわけではない、ということは彼の

名誉のために言っておかねばなるまい。

「……にしても」

割合、暇でないものなのだな、とウィリアムは思考する。訪れた客足は、程々。商売繁盛と言えるほどでもないが、店を続けるのに困ることはないだろう。しかもこの街には、大通りに面して、でんと立派な道具屋が鎮座しているのだ。商人ギルドの息のかかった大手の道具屋を相手に、真っ向から渡り合うことは、並大抵の戦ではない。その事実を鑑みれば、この小さな店を訪れる客は——決して少なくはなかった。

「……おつかれさま」

かちゃりと扉の開く音。突っ伏していたウィリアムの後ろから、クロエは労いの声をかけた。少しびっこを引いてはいるが、安静にしていたおかげか、ほとんどその歩みに違和感はない。

「接客って思ったより大変だな……僕には向いてなさそうだぜ」

「……礼節は、私よりしっかりしてる」

「ありがとう。……まあ、マニュアル人間なんだ」

「きまじめ……」

クロエの言葉にかはは、と笑いながら、ゆっくりとウィリアムは振り返った。

「にしても、お客さん、多いもんだな。“お嬢さんに宜しく”って何回も言われたよ」

「……うん。馴染みに、してくれてる」

そう。

一日の間、店番を務めていただけのウィリアムでも分かったことだが、どうやらこの店に訪れる客の大概は、いわゆる常連客のようだった。それはつまり、小ぢんまりとした店構えでありながらも、それなりの信頼を得ている、ということだろう。商売というものは、後が続かなければ難しい。

「……お祖母ちゃんの薬。よく効く、から」

相貌にうっすらと笑みを乗せて、クロエは言った。ふうむとウィ

リアムは頷きながら、ふと気づく。いつもは無表情になりがちのクロエが、祖母について語る言葉を持つ時には、良く笑っているような――気がしたのである。

成程、贔屓にするのも悪くないと、ウィリアムはその顔を見ながら、思った。

「さて、そろそろ店仕舞いの時間だろうし…僕はお暇するぜ」

「……夕飯でも」

「いや、そこまで世話になるわけには」

ぐぎゅるる。

と、間の抜けた音が店内に響いた。果たして夜の訪れを知らせるかのように、街の鐘が鳴り響く。ウィリアムはおもむろに天を仰ぎ、神を呪い、世を憂い、そして己の心根の軟弱を悔やんだ。そして、大通りのど真ん中で飢えに行き倒れかけた日々が、半ばトラウマのように回想される。神妙に、少年は頭を下げた。

「頂きます」

「……はい」

にわかにその表情が綻んだのは、ウィリアムの気のせいだったかもしれない。

夜も更け、一つ屋根の下に女がひとりか、あるいは男と女がひとりずつか。どちらの方がより安全か、そう問われれば、前者の方が、決して安全とは言えないが、まだマシである――と、そう言えるのではないだろうか。少なくとも、ウィリアム少年はそう思う。食事は、良い。一人の食卓の味気なさは、もの寂しさは、慣れてしまえばそれまでだが、しかしいかんともし難い。だから、ありがたく共に頂きもする。むしろ大好きだ。が、その後は、わけが違った。故に――

「……泊まる？」

「廊下で丸くなります」

「……一部屋、空いているけども」

「ノー、ノー！」

多感なお年頃であるところのウィリアムにとって、そういった出来事（イベント）は、出来る限り隅っこにのけておきたい類である。つい昨夜に一夜を共にしたような記憶もウィリアムには存在していたが、それは例外だ。看病という名目（というか、本当にそういう目的）があった。しかし、今夜はそうは行かない。

その一方でクロエは、驚くほど意に介した様子がなかった。奔放というよりは、無頓着なのだろう。肉体的に幼いことが所以なのか、そこのところは定かではないが。

つまり、そういった経緯で、ウィリアムはニ階の廊下に片膝立てて座し、貸してもらった毛布を頭から被っていた。剣だの荷物だの、装備の類は解除した軽装。照明は落とされ、すっかりと暗闇。その中で、眼前に立つクロエの姿を、ウィリアムはゆらりと見上げる。就寝前であるためか、後ろでくくっていた髪はすっかりと下ろしていた。

「……一つ」

「うん」

「……聞きたい、こと」

「なんだろう……」

僕としてもこれほど丁重に扱われることなんか滅多に無かったぜ、その辺が大いに疑問なんだけど、とは、聞かなかった。ウィリアムが問いを投げかけるよりも先に、その疑問に対する答えが提示されたからだった。

「……あの時、逃げれば良かったのに、って」

「言ったな」

「……同じこと」

「？」

首を傾げるウィリアムに、クロエは少年の胸を指さして、言う。

「……逃げれば、怪我もしなかった。なぜ？」

「クロエ、僕は大いに君に感謝している、でも、束縛されたくは、

ない」
「……」
一息吐いて、そしてウィリアムはまくし立てる。
「あの時、逃げ出して、生き残った僕が、後悔するんだよ。ああ、僕が頑張ってれば、なんとか助けられたかもしれない。共に死なずに生き残って同じかまどのパンの一つや二つでも食べることが出来たかもしれない。そんなことを、何年も、何十年も、あるいは死ぬまで、死の瀬戸際まで悔やむかもしれない。そんなのは御免だ――誰かの影に縛られ続けるなんてのは、ごめんだ」
「……ばかだなあ」
「ひどい」
ウィリアムが大真面目に語った言葉を、呆れたような声ひとつで流し、そしてクロエは笑った。おかしそうに、笑った。そして、言う。
「……おやすみなさい」
「おやすま」
寝室に向かうその背を、軽く掌を掲げて見送り、そしてウィリアムは眼を閉じた。ぱたんと音を立て、扉が閉ざされる。そのまま眠りに――つくこともなく、ゆっくりと、瞳を開く。目の前に広がる、一片の曇りすら無い夜の闇。寝付けない、というわけではないし、寝心地が宜しくない、というわけでもない。そもそも、ウィリアムの身は野宿に慣れ親しんでいる。ベッドなどの方がかえって落ち着かないくらいだ。
ならば、なぜか。
「……」
それはいわゆる、胸騒ぎと呼ばれるもの。単に胸の傷が痛む、というわけでは決してない。何か不穏な気配を、ウィリアムは確かに感じ取っていた。無根拠な、唐突な思いつきでもなく――そう思わせる要因が、いくつにもあり過ぎた。

――今朝の盗人。あれは突発的な犯行か。確かに僕は隙だらけの盗んで下さいと言わんばかりの有様だったかもしれないが、にしてはあまりにも逃げへの反応が早すぎた。仮に、彼が腕っこきの盗賊（シーフ）であったとしたら、僕のケチな金に手を付ける必要なんかない。そして、普通に考えれば、幼い少女にしか見えないクロエにスリを咎められるなんて、完全に思考の範疇の外だろう。実際、僕自身が思いもよらなかったんだ。何らかの理由で、僕ら――流れの僕に目を付ける人などいるはずがないから、具体的にはクロエ――にちょっかいをかけてきた、そう考える方が、ずっと自然だ。だとすれば、その理由は、なんだ。

暗闇の中でウィリアムは静かに、ゆっくりと思考を巡らせる。しかし、下手な考え休むに似たりとは良く言ったもので、緩慢な思索はあっさりと突き当たりに行き着いてしまった。ウィリアムはかぶりを振って、それ以上の思考を打ち止める。

「……引っかかる、けど、まあいいか」

明日話そう、と呟きを落として、ウィリアムが再び瞳を閉ざしかけた、その時――開くはずのない玄関の戸口が、かちゃりと、静かな音を立てた。それは、解錠の音色。暗闇に研ぎ澄まされた少年の聴覚が、その音を聞き逃さずに捉える。ウィリアムは、剣を手にしてゆっくりと立ち上がり、きしりと音を立てて歩み出す。木造りの階段を軋ませ、降りきらない所で、依然閉ざされたままの扉を視界に入れ、警戒を怠るまいとする。――瞬間、彼の脳裏にわき上がる疑問符。

鍵を開けることが出来るくせに、その上で玄関から堂々と踏み込む、そんな理由が――そんな危険を冒す理由が、どこにある？

その考えに至った刹那の間にウィリアムはきびすを返し、階段を駆け上がった。床に置きっ放しにしていた剣を取り上げる。思い過ごしの取り越し苦労ならば、それで良い。だが、そうでなければ――駆ける脚を寝室の扉の前で踏み切り、そのまま蹴り開けた。鍵は

かかっていなかった。目の前には、何事かと慌てて飛び起きたクロエの姿。しかし、それは、ウィリアムの蛮行を原因とするものではなかった。

なんのことはない、壁際の開窓が外側から開かれて――金髪碧眼、ロープを片手、軽装の上から外套（クローク）を翻す闖入者が、そこにいた。

「げッ」

「――今朝方のッ」

「……田舎ッ剣士風情がッ、首突っ込んで、くんじゃねェッ！」

露骨に不味いと声を上げる青年に目掛けて一直線にウィリアムは邁進する。間合いに踏み込むのと抜刀は、全く同時であった。迷うこと無く、斬りかかる。

「うるさい知るかッ！」

「くそ、やっぱこんな仕事、受けるもんじゃねェ、なッ……！」

ガキン、と甲高く響き渡る金属音。ウィリアムの長剣と、青年の短刀が――打ち合い、火花を散らす。ぎちり、と互いが歯を食いしばり、鍔迫り合った。

「――取りあえず、死なすッ！！」

Ｌｅｖｅｌ６：『三人目』

ウィリアムと青年が、刃を打ち合う。膂力は互角。勝負は、一進一退。ならば先に限界を迎えるのは、互いの体力ではなく――いずれかの得物。ガキン、と刃が跳ね上がった。ショートソードの鋼鉄の刃が、ウィリアムのロングソードの鉄の刃を叩き折ったのだ。貧乏性故に装備にかける金をケチったのが仇となってしまった形である。

「――ちッ」

「道ィ、開けなッ！」

青年は、深追いをするつもりはない。既に無力化したウィリアムを碧眼で一瞥するのみで、そのまま出口、扉の方へとまっしぐらに駆け出す。パタン、と音を立てて戸が閉ざされる。クロエが、閉ざした扉のすぐそばで、立ち尽くしていた。それを見た青年は――もはや止まらなかった。否。むしろ少女を人質に取ってしまえばこっちのものと、一直線に駆ける。さながら猪のごとく。

それがいけなかった。真っ直ぐに向かい来る様など、クロエにとって、的（マト）に等しい。

「……ッ」

その白い掌が眩い灯火を生み出し、それはやがて人の身を灼きうる焔の弾となる。ひうんと空を切り、クロエは無造作に掌を振るう。炎が、撃ち出された。――餌（クロエ）か囮かに目の眩んだ青年には躱しようもなく、なすすべなく着弾する。火花が、弾けた。

「あッぢ！！　あづァッ！！　がああああああああッ！？！？」

苦悶の声を上げ、もんどり打つように転げながら床に倒れこむ青年。それなりに端正、端麗であると言えたであろう姿が台無しにならんかという勢いで、火達磨と化する。猫が鉄板の上で踊るよりも幾らか凄惨で、そして愉快に痛快な有様ではあったが、クロエにしてもウィリアムにしても、このまま家屋が燃えてしまっては困る。

というわけで、速やかに鎮火することにした。
「……えい」
「おんどりゃー」
「熱ッ！？　いや痛ェッ！？　痛ッ熱ッ死ぬ！　殺せ！　いっそ殺せ！」
ウィリアムは剣の鞘を振り下ろしてボコボコと殴り、クロエはおもむろに青年を靴で踏み付け、焔を散らばらせ、小さくし、あるいはもみ消していく。
「……死んだら、困る」
「僕らが色々と聞き出せなくなるもんな」
外道が、という言葉はひとまず聞こえなかったことにして、二人は消火活動に勤しんだ。無惨な光景であった。

幾許か、というよりもかなり貧相になってしまった感のある青年を、ロープで椅子に拘束した。ウィリアムとしてもクロエとしても、青年の目的などを聞くことには意味があるような――というよりも、その必要があるように、感じられたからだ。実際に身の危険が及びかけたということを考えれば、尚更のことである。幸いなことに眼前の青年は、腕っぷしがいまひとつのようだったが。かすかに焦げた金髪の青年は――エリオと名乗った。向かい合わせに座するはクロエ、その傍らにウィリアムが立つ。
クロエは青年の姿を見定め、ウィリアムは押収したショートソードを手の中で弄んでいた。
「……目的は？」
「考えりゃわかんだろ、嬢ちゃんを攫いに来た、そんだけさ」
「僕らはその先、“どうして”かを聞いているんだけどな」
クロエが問い、青年が答える。エリオは拘束された状況でありながらも、どこか不敵な雰囲気を崩さないままでいる。先刻の蹂躙（リンチ）からは幾許か精神の均衡を取り戻したようだ。したたかだな、とウィリアムは思う。存外に、立ち直りが早い。

「オレは一介の雇われ犯罪者だぜ、そんな事がわかると思うか？」
「……雇われ」
「雇い主は？」
「知らんなァ～」
ぴゅー、ぴゅーと彼方の方へ首を向けて口笛を吹くエリオ。特筆すべき調子の良さである。
「よし、殺そう」
「待てよ。まァ待てよ。まあまあ待てよ」
そして首筋に押し当てられる短刀の刃の感触、その冷たさに態度を急変させる変わり身の早さ。というよりこれはむしろ、ウィリアムの行動力に引きずられたのだろう。エリオの言葉を聞いてからの思考、判断、そして行動に移すまでの時間があまりにも短すぎた。迅速である、と言っても良い。躊躇など微塵も存在していなかった。
エリオの額に、知らず冷や汗が伝う。
「オレが知らねェってのは本当だ、なんせ向こうが身元を明かさなかったんだからな、依頼してきたのも、何か後ろで企んでる奴なんだろォよ」
「内密に、露見したら困る……つまり、この街の人間だな」
「……恨みのあては、無いけれど。私を攫って、得をするひと」
静かに、ゆっくりと、己の中で噛み砕くように呟きを落とすクロエ。
ウィリアムが、薄々と抱いていた疑問。なにか、きな臭さ程度のものしか感じられなかった気配が――クロエの言葉によって、脳裏に実像を結んだ。意図せぬうちに、視線が釣り上がる。
「なるほどね、少年少女。オレが言うまでもねェ」
ははん、とエリオは細い眉を潜めた。瞳を眇めて、嘯く。
「雑貨屋――――か」
ウィリアムが、苦虫を噛み潰したような面で言葉を吐き出した。
静かな怒りが滲み出している様子が、傍目にも感じられる姿。暗い瞳に、微かな熱が灯っていた。

「……どうして」
少女の零す声には、憂いの色が隠し切れず、表出している。ゆらゆらと揺れる黒髪のもと、瞳が波紋を生み出すかのように揺らいだ。
「商人ギルドも取り扱ってねえ品を、生み出すことが出来る嬢ちゃんが、のうのうと、無防備に、一人になってくれてやがる、こんな美味しい話は無いぜ。仮に嬢ちゃんが製法を知らなくても、知ってる人間との取引に使えるだろ。で、客だって奪える。坊主丸儲けだな――金のなる木が落ちてるようなもんだ。誰だって拾う」
「……うん」
頷くクロエの姿は――そう、言われずとも本当は分かっていたような、様子であった。受け入れがたい事実を他者から叩き付けられて、認めるしかないという表情。彼女に――あるいは彼女にまつろわる者に、向けられた悪意を。
「これからは身の回りに気を配る、ほか無いだろうぜ、嬢ちゃん」
エリオの、その忠告じみた言葉を聞いて――ウィリアムはそこで、そういえばと前々から気になっていたことを問うた。それは決して、エリオの言葉と無関係ではない。
「クロエのお祖母ちゃん、いつから空けてるんだい」
「……五日前、から」
「エリオ、あんたが依頼を受けたのは」
「三日前、だな。急ぎの依頼で引き受けたがる奴も多からんでお困りの様子だったぜ――オレとしても、あんまし気持ちのいい仕事じゃあねェかったが、ま、悪くはねえ。前金も貰ったしなァ」
エリオが道化た仕草で、太っ腹なこったァよと聞いていないことまですらすらと捲したてながら、縛られたまま器用に肩を竦めてみせる。
「……一週間もすれば、戻るって」
「つまり、詳しくは分からんが、向かいはその婆さんを恐れてるってわけだ。と、なると――」
その婆さんとやらは相当なやり手なんだろォぜ、とエリオは天井

を仰いだまま嘯いた。ウィリアムらが彼の言葉を丸ごと信じるならば、つじつまは合う。彼女の祖母の存在が防波堤となっており、そしてそれの無い今、クロエの身の上は極めて危険な状況であると、つまりそういうことになってしまう。

「“それひとつ”で毒を治療する、薬の調合。僕からすれば、十分に非現実的だな。万能薬（エリクシール）にも近しい」

けれどもそれは実際に存在していて、それを為した人物こそが、クロエの祖母であるという。なるほどそれは、恐るるに足りた。戦闘能力がどうこう以前の問題として、不気味、なのである。あまりにも、底が知れない。その存在が大手方の手を警戒させていたと、考えられないことではなかった。

「向かいがたとしてもタイムリミット付きなわけだ――まあ、オレは降りるさ。約束する。オレとしては今は金よりも命が惜しい、平たくいえば解放して貰いてェわけだな。元々乗り気じゃねー仕事だ」

ひひと整った容貌にそぐわぬ下卑た笑みを、わざわざ浮かべるエリオ。その様子を見ながら、ウィリアムは緩慢に立ち上がる。そのままエリオの前に立ち、ゆっくりと振り下ろした。

そのまま、床に落ちる。それは、金貨の袋だった。

「……あ？」

「５０Ｇだ」

「あァ、あの時オレの狙った」

「僕と、彼女で７５Ｇ、山分けのつもりだったんだが」

「……つまり」

「実に“乗り気”になれると思う依頼だ。力を貸してくれ。あいつらぶっ飛ばす」

「……あァ！？」

ウィリアムの言葉には、少なからぬ怒気が含まれていた。そう語る少年を前にして、エリオは驚愕の声を吐き出す。彼の足元には、金貨の詰まった袋が転がっていた。大金という訳ではないが、然し決して安からぬ金であった。否、彼のような、あるいはウィリアム

のような一介の冒険者（ならずもの）にとっては、大金だと言って差し支えは無いのかもしれない。

「オレみたいなのがどうこう出来る問題じゃねェよ」

「あんたがいるなら、目はある。いかようにでもらちを開けてやる」

目の前の少年を、エリオは狂人を見る目で見た。全く以てどうかしている。彼の言葉はすなわち、直接的には大商人、間接的には商人ギルドそのものを、敵に回すということだ。しかも、大した力も持っていないような、ただの三人の個人で。

「死んでも無理だ」

「どうせ一度僕に殺された命だろ」

「護衛の手を集めて、嬢ちゃんの祖母さんを待つのが確実だと思うがね」

「それじゃあ、根本は解決しない」

そう言い切るウィリアムの背後で、口を噤んでいたクロエの、思案げに閉ざされた瞳がゆっくりと開かれた。真っ直ぐにエリオを見据える、蒼く澄んだ双眸。

「……私の望みは、お祖母ちゃんの店を、守ること」

「なら、尚更」

「……出来得ることを、出来る限りは、やる。……お願い」

ちょん、と小さな頭を下げた。全く以て、どうかしている。しかしその望みが叶うのならば、それはとても、胸のすく思いがするだろうなと、エリオは思った。地位か金か。守る物を持ち合わせた、遠く高みの人間に、自らの手が届くのだとしたら——己らの力で一泡吹かせてやれるのだとしたら、と。

そんな風に——思って、しまった。

Ｌｅｖｅｌ７：『前哨』

太陽が、昇っていた。窓から、まばゆい陽が差し込む。ちゅんちゅんと鳥の鳴く声が聞こえる。夜が、明けていた。

「クロエ」

ウィリアムが、爽やかな朝に相応しからぬ、沈んだ声で呼びかける。

「……なぁに？」

「店、開ける気か」

「……うん」

こくりと、クロエは頷く。当然と言ったような仕草だ。しかしその瞳の下には、大きな隈が出来ていた。明らかに、げっそりとしていた。体力に乏しい少女にとって、ほとんど一睡もしていないような状況は、辛かろう。

「馬鹿。店番くらいなら僕が出来るけど、調合一つ取り間違えでもしたら大惨事だろう」

「……うん」

「クロエ」

「……」

「クロエェェェ」

「……うん」

半ば瞳を閉ざしたまま、胡乱な声とともに、こくこくと少女が頷きを落とす。ウィリアムの、割り合い必死な呼びかけにも動じるところがない。というか、明らかに限界だった。このままでは、立ったままで眠りこけるなんてことが十二分にありえる。

「まあ、クロエ、っつうんだな？　嬢ちゃんは寝かせとけよ」

「……うん」

「かなり駄目っぽいから、そうする」

エリオの言葉に、ウィリアムは頷く。クロエは相変わらず、頷い

ていた。おそらく、否、むしろ確実に無意識の挙動である。ずるずると少女をベッドに引っ張っていくウィリアムの様子を見守りながら、エリオは言った。

「というかだな、オレを解放していいのかい。このままトンズラする可能性だってあるんだぜ」

「……だいじょうぶ」

「いや、君はかなり大丈夫じゃない」

エリオの身はすでに拘束されておらず、彼を戒めていたロープは床に転がっていた。別に縄抜けなどという器用な技術を披露したわけではなく、ただ純然に、解いてもらったというだけの話である。クロエの言葉に律儀に突っ込みを入れるウィリアムだが、彼女は構わず続けた。

「……貴方の金貨に、私の“熱”を込めておいた。魔法で、私との相対的な位置を、探知出来る」

「抜け目ねェ嬢ちゃんだ」

ひひとエリオは笑い、ウィリアムはほうと感心したような息を吐いた。便利なものだ。先日、ゴブリンを相手に魔法をお見舞いしてみせたように、彼女の属性は“炎”に偏ったものか。そしてどちらかと言えば、攻撃的な物よりも、補助的な術を得意とするのだろう。

「そんな凄いことも出来るんだな」

「……ぐー」

「子どもの割にな」

「十五の僕より年上だぞ。十九だって」

「嘘吐け！！　オレでも十七だわ！」

「まあ僕だってそう思うけどな！」

エリオの見た目は年齢通りのもので、ウィリアムよりは背丈も高い。が、クロエの見た目は完全に年不相応である。東洋の血がそうさせるのか、しかしそれにしても、限度というものがあった。そんな益体のない会話をくりひろげながら、不意にウィリアムが切り出す。

「――実際の所さ」
「あァ？」
その言葉に、エリオが首を傾げた。が、少年は構わずに続ける。
「ほら、僕らの金を狙っただろ」
「そんなこともあった気がするな」
「あれ、結局何の意味があったんだ」
「実力の“ほど”をはかる意味さ。ターゲットと連れ立った間抜けが一人。オレの見立てじゃ、あんたは大したことがねェと思ったんだがね、ウィル」
エリオは気やすい調子でウィリアムを一瞥して、ひひと笑って言った。ウィルとは、ウィリアムという名に由来する愛称といったところだろう。ウィリアムは瞳を眇め、怪訝な様子でエリオを見返す。
「でも、あれ、かえって僕は警戒したぞ。実際、あのことが無けりゃ、まんまとクロエを攫われてただろうし」
実際、目の前の盗賊、エリオの腕は、決して悪くない。むしろ優れている。例えば昨夜――玄関口の扉を開けていたのは、中の人間を引き付けておく囮の役割――それだけではなく、逃走の際、速やかに玄関口から飛び出すことが出来る、その選択肢を増やす意味も果たしていたのだ。その熟れた仕事は、熟練者のそれをウィリアムに想起させる。そして、だからこそエリオに仕事を依頼したのだと思う。だがしかし、決してそれだけでもない。
「まあ、乗り気じゃねェ仕事だったしな」
「……損得勘定だけでもないんだな」
だからこそ、力を貸してもらおうなどと血迷ったことを、ウィリアムは考えたのかもしれない。
「それを言うなら、あんたもだぜ」
「僕か」
「そうだ」
エリオはウィリアムを指先で指し示すと、頷いてみせる。ウィリアム自身は不思議げに首を傾げたが、エリオは構わず言葉を続けた。

「別に嬢ちゃんを手助けする義理はねェだろ」
「まあ、無いな」
少年は、あっさりと頷いた。だが、頷いた上で「けれども」と繋ぐ。
「僕一人でいるよか、クロエといる方が、世界が広がると思うんだよな。ついでに、命の恩人だ」
「ついでか」
「一山いくらの命だからな」
さも当然とばかりに、ウィリアムは言い切った。身も蓋もない言い方だが、悪びれた様子はない。かといって恩義を感じていない——というわけでも無いようだった。
「世界——世界ねェ」
「世界が閉じてると、地位も金も手に入らないと思うんだ」
「あんたは本当に身も蓋もねェな！」
「欲しい物は欲しいだろ。他人に媚びへつらってまで欲しくはないけど」
平たく言えば——今の僕は、そう、仲間が欲しいんだ。
ウィリアムはそう言うと、へっへ、と照れくさそうに笑った。エリオは、人が悪そうにひひひと笑い返す。こつんと拳を重ねて悪童の語らいを打ち切った後も、エリオは何度も、得心がいったように頷いていた。
「なるほど、なるほどな。そんじゃ、オレはやらなきゃならんことのために、駆けまわってくらァ」
「っていうと」
「雇用主様を探さなきゃな」
なるほど、とウィリアムは頷く。こちらから探ることの出来る手がかりは、そこしか無いと言っても良い状態だからだ。くだんの商店が怪しいのだと目星をつけていても、確証は無い。
「適当に話つけてくるぜ——嬢ちゃんの護衛は頼まァ、オレ以外の奴が雇われてないとも限らねェし」

「攻めこむための悪知恵でも働かせておくよ」
「そいつぁイイな」
そう言ってきびすを返すと同時――唐突に、何かを思い出したかのように、エリオが振り返った。ウィリアムに、かたく握った拳を向ける。そして、人差し指と中指の間に親指を挟むサインをしてみせた。
それを見た少年は、取りあえず本気殴りを食らわせた。吹き飛ぶような勢いでエリオが部屋から退出していく。
思わず額を掌で押さえながら、ため息を吐いた。
「……うぃる？」
「なんだろう」
「……すぅ」
ウィリアムは、ベッドで伏せるクロエの様子を覗きこむ。見ると、静かに寝息を立てる少女の姿があった。
「――寝言か」
随分とやかましくしてしまったのが宜しくなかったのだろう。少年は静かに反省する。本日休業の看板を提げてこないとな、と、少女の寝顔を見守りながら、ウィリアムは思った。

「依頼の、キャンセルですか」
「あァ」
昼過ぎの街の酒場で、金髪碧眼の青年と奇妙な人物が、テーブルを隔てて向い合っていた。青年は、エリオだった。先日と変わらぬ軽装で、燃やされ焦げ付いた衣服も元通りといった姿で、青年はそこにいた。真っ直ぐに、向かい側に座する奇怪な人影を見据える。
その人物をことさら怪しく思わせるその要因は、ひとえにその風体にあった。
真っ黒な頭巾（フード）で目元すらをも覆い隠し、同色の外套（クローク）がその身を包み込んでいた。人相どころか体の線をすらをも窺わせない、徹底した正体不明っぷり。夏も近しい温暖な気候、空気は乾燥しており、

過ごしやすいとはいえ――その姿はあまりに奇妙で、面妖で、必然的に人々の視線を集めた。しかしその人影は、怪しく思われることを、全く意に介していない様子だった。怪しく思われてでも、その身元を隠蔽することを、全てに先んじて――優先していた。

「話が違うぜ、一人、護衛がついていた。そしてオレにはどうにも出来そうにない」

エリオの語る言葉は、半分が嘘で、半分は本当だった。護衛――即ちウィリアムを指して言った言葉――そのものは、一対一で相対すれば、決して踏破し得ぬ敵ではない。だから、どうにもならないという表現は正確ではない。

だが青年は、すでにウィリアムの言葉に“のせられ”ていた。ゆえに、エリオの言葉は実質的には真実だとも、言えるのだった。

「護衛――お話、聞かせて貰っても」

相対する依頼主が、平坦な声で問う。

性別さえも判然としない、感情のこもっていない声色。

「剣士の、男だ。まァ、ガキだな」

暗に、ガキごときに打ち破られたという事実を、なんの気無く口にするエリオ。盗みを生業としていた青年は、ちゃちなプライドのたぐいを、ほとんど持ち合わせていない。

「……承知しました。お断りの旨、受領致します。前金は、受け取っておいて下さいませ」

「そうか？　用意しておいたんだが」

エリオは首を傾げて、テーブルの上に金貨の包みを置く。元々から、返却するつもりであったのだ。

「構いません。ですが、お一つ、お約束を」

「なんだ」

「御依頼の内容を人口に膾炙致さぬ様、宜しくお願い致します」

つまるところ――前金は口止め料として持っておけ、ということだと、エリオは解釈した。その言葉を聞いて、エリオは黙りこくる。守りかねる約束であったからだ。というより、すでに破ってしまっ

ている約束だったからだ。神妙に瞳を細めて天井を見上げた後、ため息を吐き、こう言った。

「無理だ。持ってってくれ」

「当方としても受け取りかねますゆえ。ご了承下さいませ」

その人影はそういうと、音も無く立ち上がった。それでは失礼致しますと、一言向けて、踵を返す。テーブルの上にはいつの間にか、エリオの分も合わせた支払い分の金貨が残されていた。

「……“商店”の子飼いだろうな、やっぱり」

使いか従者か、それは知れぬが。一人テーブルに取り残されたエリオは、残っていたエールを一気に飲み干すと、立ち上がる。

もちろん、彼か彼女かの後をつけるためだった。

Ｌｅｖｅｌ８：『暗躍』

奇妙な人影を、張り込む。否、それはもはや追い縋るといっても良い。気配を消すよう努めていたにも関わらず――エリオの尾行は明らかに感づかれ、気づかれていた。人の行き交う道に紛れ込まれて、それでもなんとか、外套を翻す姿を視界のうちに収める。

その身が駆ける様は、異様なまでに速い。加えて、体力も尋常ではない。ずっと走り続けているにも関わらず、エリオの方が先に力尽きそうなほどだ。仕草や言葉の端々から見て取れる繊細さに、女かと、彼は考えていたのだが――果たしてその認識を改める必要があるかもしれない、とエリオは思考する。

裏路地に滑り込んだ影を、追跡する。何度となく角を曲がり、三叉路を追い、しまいには方向感覚を失いかねないほどに愚直に走る。かろうじて、角を曲がる直前にその姿を見止めてはいたが、いつ撒かれてもおかしくはなかった。

その時。

「……――！」

唐突にエリオは、黒い影と向かい合っていた。彼は思わず眼を見開く。恐らく“それ”は、右往左往する最中に、自身の姿が彼の視界から消えた一瞬を見計らない――その身を切って返したのだ。ほんの刹那の出来事。尋常ならば、それこそすれ違う時を捕まえれば良いと、考えただろうが、とてもそんな生ぬるい速度ではない。エリオが身を返すよりも早く行き違い、路地に紛れられる。咄嗟に来た道を引き返すが、そこにはすでに、影もかたちも伺えない別れ道ばかりがあった。

「やられた……痛み分けか」

ぐったりと、棒切れのようにままならない脚を引きずりながら、エリオはぼやく。しばらく立ち尽くしたまま、空を見上げた。陽はにわかに陰り、そして赤く染まっていた。

城塞都市『カタラウム』の中心には、中央広場が存在する。刻限によってはこの広場で流れの商人たちによる市場が催され、あるいは公開処刑が行われ、そして広場の周囲には聖堂教会や身分の高い貴族の屋敷、そういった錚々たる建物が通りに面して立ち並ぶ。街の中心部、ここに、“城塞都市”最大を誇る雑貨屋『バリー総合商店』は存在していた。それこそ、公の庁舎とも見まがいかねない規模で。

全四階層、その最上階、最も奥まった一室――誰しもが容易には踏み込みかねる領域に、男はいた。男は、商店の主、バリー・バルザックだった。齢二十五を超えてにわかに髭をたくわえた茶髪の男。壮年と呼ぶには、まだ少し若いだろう。恰幅よく、目に見えてきらびやかではないが、身につけた衣服も上質の布の類と知れる。反して、室内の家具などは一目でわかるほど豪奢な代物ばかりであったが。

「報告を、聞こうか」

男は椅子に座したまま、問うた。ぎしりと椅子の足が軋む音を立てながら、振り返る。

「件のことを依頼した――賊逸れの男の件ですが、本日、お断りの旨を頂きました」

そこにいたのは、彼の言葉に答えたのは、あの黒尽くめの姿だった。室内でも、この状況でも、その風体は些かも崩れていない。そして、主としているのであろう男の前ですら、その素顔を晒すつもりは、毛ほどもない様子であった。

「……腕利きと聞いていたのだが、な。所詮は破落戸（ゴロツキ）か」

使えんな、と嘯くバリーの表情は、己が従者にも背を向けるばかりで、うかがえはしない。ただ不機嫌そうな様子ばかりは、一目で見て取れるほどに明らかであった。

「言い含められておりました様に、前金は、口止め料とするようお伝えしましたが――受け取りをお断り致されました。返却には応じ

ておりませんが」
「既に漏らしたのやもしれんな」
「いかがいたしましょう」
「機会があれば消しておくに越したことはないが、そうだな。捨て置け」
「了解致しました」
黒尽くめの姿が、静かに頭を下げた。背を向けていた男が、ぎしりと座椅子をきしませながら、向き直った。その表情は――苦虫を噛み潰したかのように、苦々しげなものであった。思案げに瞳を細めると、目の前にたたずむ姿へ、視線を落とす。
「……代わりが要るな。先日、賊の集団が都市に入ったようだ。話を付けられるか」
「確かなことならば」
「間違いあるまい」
その言葉には一片の疑念すらも無い。一介の大商人の風情すらも漂わせるが――なんのことはない、恐らくは門の周辺を警護する衛兵なぞに金を握りこませて、情報を得ているのだろう。断言する主に、従者は答える。
「では、明日にでも」
「多少の荒事は構わん。出来る限り、早く、そう――」
苦い相貌が、それこそ、忌々しげなまでのものへと、変ずる。ぎり、と歯を噛み締めた。
「“魔導十哲（アウトサイダー）”の――あの婆さんが、戻らん内に、迅速にだ」
「委細、承知しました」
恭しく礼を落としたその姿を見届けると、「行っていいぞ」と言い含める。そしてバリーはまた、ぎしりと椅子を軋ませ、机に向かった。男が向かっていたのは、商人ギルドへの報告書であった。月毎の売上高、そしてギルドに上納する金貨の枚数。
――のし上がってやるのだ。そのために、男には、ギルドの流通経路にも存在していない、かの薬屋の商品が必要であった。交易商

の言葉に寄るならば、「ハズレがない」と語られるほどの品なのだ。
――否、必要ではないのかもしれない。しかしそれは、目に見えてはっきりと分かる、近道だった。それによって手に入る金貨の枚数、そしてそれ以上に、ギルド内での男の地位の向上は、計り知れないものがあるだろう。
穏便な話し合いも試みたが、それが実を結ぶことはなかった。
『あなた方と――ギルドと契約を結ぶことは、即ち、組織での独占を認めることになるわね。頷きかねるわ。この店にはね、そう、ずいぶん昔、十数年と前から、取り引きさせて頂いている流れの商人方がいらっしゃるのよ。あなたの提案を受け入れることは、彼らへの裏切りだわね。お話は、有り難いことですが――お断りします』
細く痩せた老婆の、しかし芯の通った力強い言葉が、バリーの脳裏に反芻される。忌々しい。だが、同時に、道理だとも思う。だから、許せとは考えない――ただ、行うだけだ。人攫いでも、人殺しでも。
不意に振り返ると、男の従者は既にいなかった。きっと、言い付け通り、すぐにでも話を付けに、街中の酒場を駆け回るのだろうか――さて。
当の黒尽くめの影は、“商店”四階の廊下で、先刻の会話を反芻していた。従者は、ひとつだけ、商店の主に嘘を吐いていたのだ。厳密には、はっきりと嘘を吐いたわけではないのだが――似たようなものだ。彼か彼女かは、全く不覚を取ったものだと、頭巾のもとで、表情を歪める。そして、外套の内側に、その掌を差し伸ばした。その中から取り出される、包みがひとつ。
そこには、金貨が十数枚ほど、つめこまれていた。
それは――受け取らなかったはずの、あの、一包の金貨であった。
たったひとつだけの、不覚。機会はあの時、エリオとこの身が重なり、そして擦れ違った、あの一瞬しか無いだろう。“スリ”と同様の技法にして、全く逆の用法――即ち、“しのびこまされていた

”のだ。
「……捨て置け、でしたか」
是非に消して捨ておかねばなりませんと、影は、ひとりごちた。
「というわけで困ったことに、確認は取れずじまいなんだな、これが」
エリオは軽く肩を竦めてそういった。どことなくくたびれた姿をしている。というのもやはり、散々と追走劇をくり広げた弊害であろう。実りがゼロというわけではないが、成果は著しくない。そんな調子で青年は、薬屋の一室へと戻って来ていた。
「まあ、元より足が出る間抜けは期待し難かったしな……」
ウィリアムが顎に掌を宛てがい、呟く。傍らには、朝から昼にかけて眠るという人間として間違った生活を過ごしたクロエが、憂いを含んだ表情で、思案げに窓の外を見やっていた。空はすでに、仄暗い。
「金は突っ返してやったがね、大した意味があるわけでもねーし」
「……そうでも、ない」
エリオの何気ない言葉に、クロエがぽつりと呟いた。ウィリアムとエリオが、ほぼ同時に少女の方へ視線を向ける。彼女は、どこか遠く——否、確かに一定の方角を見つめていた。こくりと頷くと、クロエは二人に視線を返す。確信を掴んだ、という表情であった。
「——熱源を探知した。金貨は今、あそこにある」
「……あ」
忘れていた、という表情で、エリオが呆けた声を漏らした。クロエの指差す先には、街の中心がある。クロエが実に何気なく言っていたためか、まるでそのことはエリオの意識の外であったのだ。流石と嘯きながら、ぽん、とウィリアムが彼の肩を叩く。
「まあ、結果往来だろ」
「んだな」
「……うん」

そこはかとなく、軽かった。
「で、なにか手はあるのか」
エリオの問いに、ウィリアムは、ニ、と笑った。
「僕らが問題とするのは、襲撃者だ。で、更に大きな問題が、この襲撃者と、仕手――つまり商店側の関係が、証明出来ないってことだ」
「あァ」
だから――と、ウィリアムが続ける。
「この繋がりを、明白にする。明白にして晒してやるんだ」
「方法は、あるんだろうな」
その言葉に、クロエがこくりと頷いてみせる。瞳を細めて、二人に視線を渡し、そして、ゆっくりと口を開いた。
「……詳しくは、夕食のあとに」
「やった！」
「よしきた」

――そして、前準備に奔走する一日が過ぎ、次の夜が来た。
「行くか」
エリオの装備は常のそれと変わらなかった。軽装にロープだの鉤爪だのの小道具を携え、腰には短剣を一振り帯びている。が、出来得る限り身のこなしを優先してのことか、外套は身につけていなかった。
「僕も行ってくる」
代わりに、その外套――身体を包み、覆うことを主目的としたクロークは、ウィリアムが身につけていた。フードでその相貌をも隠して、その姿はいつかの黒尽くめにも似た風体をしていたが、黒ではなく茶こけたカラーリングであるため、その印象は随分と異なるだろう。
「ウィル。もってけ」
「うん？」

エリオがぽんと長物を放り投げた。布に包み込まれたそれは、受け取ったウィリアムの手にずしりとのしかかってくる。全長にして一メートルほどもある。布をほどくと、現れたのは、幅広の剣の鞘だった。

「喧嘩用（カッツバルゲル）の剣だ」

「高かったんじゃないか」

「借りてきた」

エリオが悪辣に笑ってみせる。ウィリアムは、笑いながらもため息を一つ吐き出した。どこかでかっぱらってきたんじゃないだろうな——そう思いながらも、受け取る。何にせよ、使わない手は無い、と考えたからだ。金欠のために安物の細っこいロングソードを振り回してきたウィリアムにとって、これほど有り難いものはない。その外套の内側に一刀を携えて、振り返る。

「クロエ。出来るだけ急ぎで戻ってくる、けど、用心しておいてくれ」

「……うん。いってらっしゃい——無理は、しないで」

逃れ得ぬ緊張感を覚えながらも、クロエはかすかな笑みを浮かべて見送る。

「応」

「オッケエ」

そして互いに頷きあうと、深夜の街の中心に向かって散って行った。

作戦、開始。

Ｌｅｖｅｌ９：『都市の暗がりに冒険者は罷り通る』

夜の街に通りを行き交う足並みは決して多からぬ。暗闇のはびこる街の中心には、にわかに人家の灯が届くばかりだ。

闇に隠れて中央広場に向かい、そこからウィリアムは“バリー総合商店”の様子を伺った。そこにあからさまな見張りの姿は見えない――が、もちろん、無防備なはずもない。その点は、前もって調べがついているところだ。

「……」

路地の間から視線ばかりを覗かせて、息を潜める。街全体を回る守衛（ガード）とはまた別に、屋敷の周辺を巡回し、不審者の存在に目を光らせる者がいた。恐らくは商店子飼いの私兵であろう。あるいはそれが雇われの冒険者か、それはウィリアムに区別のつくことではないが、ともかく、彼らが商店の屋敷、その周囲に配置されていることは確かであった。

「……行こう」

そしてウィリアムのなすべきことは、機を先んじて不意を打つこと。狙うべき隙は、即ち彼らが飽くまでも“商店”の警護を任としている、ということだ。他方へ警戒の目を光らせている、その時、その身自身は限りなく無防備である。

ウィリアムは夜闇に紛れて通りに躍り出て、警邏する兵のひとりに、背後から取り付いた。すぐさま、外套の内から剣を引き出す。その足音に振り返られるよりも早く――遮二無二に剣先を、装甲の隙間を縫って突き出した。

「が……っ！？」

軽装の革鎧（レザーアーマー）に身を包んだ男であった。ウィリアムはそのうめき声を聞きながら、刃を突き込み、抉り、引き抜く。噴き出す血流につれて、赤い飛沫が地を濡らした。武器を握る腕を殺し、確実に無力化する。殺しはしない。男が、口を開く。

「――敵襲ッッ！！」

残る力を、命を振り絞るかのようにして、彼はその一言を叫んだ。どこまで届くものか、少なくとも人家の住民たちは厄介事に巻き込まれるまいと身を潜めるか、高みの見物となるだろうが――果たして、彼の一声からほとんど間もなく、人影がひとつ、向かい来る様子がウィリアムの眼に見えた。来ると知覚したその時も、暗闇に浮かんだその姿はぐんぐんと加速して、不惑に少年へと迫る。ウィリアムが身構え――男がその場を退き、そして白刃が強襲してきたのは、全くの同時であった。

夜闇に、凶刃が輝く。ウィリアムは、一歩も引かず、真っ向から受け止めた。ギィンッ！　と甲高い音を鳴らし、一瞬、散れる火花が暗闇を照らし出す。鎖帷子（リングメイル）に、白いラインが入った青の上着（サーコート）を着込んだ姿。打ち合うそばから相手方は刃を引き、すぐさま身を切り返すと、脚を払う一閃を繰り出した。流れるような動作。速い、と思いながらもウィリアムは身を退き、距離を離す。脚をやられるのは、まずい。機動力は少年の生命線だ。

「グレイ、すぐに退けッ！　応援の伝令を頼む！」

「――了解、ですッ」

「……」

女の声であった。男がそれに応えてよろけかける身体をひきずり、赤い雫を点々と零しながらも走り出した。ウィリアムはその様子を無言で見逃し、敵方と相対する。彼女は恐らく、私兵部隊の中でも隊長の座に位置する者だろう。異常事態にすぐさま駆け付けてみせたということは即ち、己の配下にまで気を配っているということの証左でもある。それは、上に立つ者としての、行いだ。

「……少しはやるようだな。賊」

「……」

彼女の言葉に、ウィリアムは――答えない。声も発さず、顔も晒さず。身体そのものを包み、覆い隠している。なるほど賊と称されても文句の言えない姿だった。それでもウィリアムは、静かに剣を

構えた。身を伏せるように沈めて、開けた間合いをはかるように刃をかざす。刹那、彼女の髪が揺らいだ。ほのかな女性らしさを残す、肩口で短く切りそろえられた赤髪。それがふわりと先触れのように揺れて――再三、刃が落ちる。ウィリアムの脳天を目掛けて。

がきんっ！

鋼の音を鳴り散らしながら、ウィリアムはようやっとのことで、一閃を受け止める。ウィリアムとほとんど背丈の変わらない彼女の剣は、男女の体格差などという概念をものともしない。その上、剣戟、衝突（インパクト）の瞬間、ウィリアムの掌に感じられた膂力は――女性の細腕であるということを、まるで感じさせもしなかった。その強靭さに、ウィリアムは、少なからず戦慄する。

女が、ウィリアムの全貌を、真っ向から見下ろした。まるで外套の向う側を見透かすかのような、透き通った蒼の瞳であった。

「何が目的かは知らないが――切り伏せさせて貰うぞ」

肉薄する刃が、押し込まれ、ウィリアムに迫るところを、既（すんで）の所で弾き返す。それでも押し返し切ることは適わず、彼女がにわかに距離を離すばかりに留まった。ウィリアムの手の中には未だ、激突の衝撃から来る痺れが残っているというにも関わらず。おまけに長時間この状況のままでいれば、じきに援軍が駆けつけて来るであろうことは想像に難くない。あまり長い間は持たないな――と、そう考えながら、少年は再び剣を握り締める。

女へと攻め込めるような隙は、あいにくながら窺えない。徹底した守勢の姿形で、ウィリアムは構えた。

一方のエリオは、徹底した暗躍を続けていた。闇に潜み、影に隠れ、路地の裏を行く。民家の灯を厭い、人目を避け、敵襲の声に引き続いて、中央広場で騒動が巻き起こっている様子を気取りながら、“商店”の裏へと回る。その目的は、なんてことはない。こんなものは、盗賊たる彼がやってきた、いつものこと。即ち――裏手からの不法侵入である。不思議な事に裏側に当たる見張りの姿は見られ

なかったが、エリオは何構うことない様子で、屋敷の壁面に取りついた。

石壁の取っ掛かりを探る、エリオ単独での暗闘が密かに開始される。手探りの動きは、どこかおぼつかない様子だった。というのも、これはまずもって容易なことではない。足元がおぼつかないなどという話以前の問題であるし、登頂最中で誰かの目に触れれば、それでオジャンなのだ。射掛けられてしまえば、当たろうと当たるまいと、これはまず落ちる。落ちて、おしまいだ。そんな戦いを強いられる青年の心中はいかばかりか、沸き上がる不安を経験から来る自信によって――そして、飽くまでこの“作戦”は、己一人で挑んでいるものではないのだと、そう言い聞かせて、挑む。

この時すでに、エリオの手の震えは、不思議といくらか収まっていた。

「行くかァ」

鉤爪とロープ、それだけで十分だ。出来ることならば梯子でも持ってきて尺を稼いでおきたいところであったが、何せかさ張る。致し方ないと諦めて、ついに脚を掛けて――行く。

だが、いざ行けば、実際には数分とかかる仕事ではない。というより、それ以上の時間をかけていられる余裕は無い、と言った方が正確だろうか。四階の硝子窓から内側の様子を覗き込めるまでの高みに至ったエリオは、腰に提げた刃を引き抜く。この世の中、例え金満家でなくとも、硝子張りの窓は珍しくない。人間が“魔法”という名の火力をコントロールし得ているのだから、当然のことではあった。

ゆえに盗賊であるところのエリオが、その技術の発展に合わせた、“硝子をも斬りうる鋭さの刃”を持ち合わせていることもまた、自然の成り行きと言えよう。刃で硝子を鮮やかに切り抜くと、音を立てることなく邸内への侵入を果たす。緊急事態の為に窓からロープを降ろしながら、エリオは周囲の様子を見渡した。赤い絨毯の敷き詰められた廊下、壁際には何ぞと知れぬ絵画、そして部屋への扉が

幾つもと立ち並ぶ。さてどうしたものかとエリオは思索する。

今回、彼――否、彼らの目的とするものは、即ち、情報。一介の薬屋への襲撃に関与する証拠か、あるいはそんな大層なものでなくてもいい。何刻(なんどき)に騒動を起こそうとしているのか、それを知る者に、全て吐かせてしまえば良いのだ。前もって知ってさえいれば、いかようにでも対処できよう、と、そういう運びになるのだが、此処からは全くの手探りである。

取りあえず偉そうな奴がいる所と言えば最奥が相場だろう。安全面からしても――というわけで、エリオは左右に人影が見当たらない様子を確認すると視線を切って、まずは屋敷の南側へ向かうことにした。今エリオがいる廊下のど真ん中が、ちょうど南北の境目に当たっている。足音を立てないよう、しかし急いでエリオが歩み出した、その時だった。

ズドン！！　と、戦術級の魔術でも炸裂したかのような衝撃を、エリオはその身に感じた。否、紛うこと無く、背後から、撃ち込まれていた。青年の痩身がまるで飛ぶ鳥のような勢いで吹き飛び、高速を保ったまま壁に叩き付けられて、ようやく留まる。

「……げほッ、がァ……ッ！？」

止まりながらも、その身に受けた損傷は、凄まじいものがあった。ごぽりと泡立つように、口腔から血塊が溢れ出す。冗談ではなく、なぜ自分の体が壁にめり込んでいないのか、エリオは不思議なくらいだった。まるで何をされたのか理解出来ないまま、金髪を掻き乱して、エリオは立ち上がった。己が元いた場所に、視線を向ける。

黒尽くめ。いつか見たその影は、邸内であるにも関わらず、何も変わらない姿で、そこにいた。

「全く都合の悪いタイミングで鼠が入り込んでくれたものです――急所も躱したようですし」

その影が、静かに拳を引いた。

拳。拳か。砲弾でも撃ち込まれたようなあの衝撃は、彼か彼女かの、拳の一撃によって果たされたというのか。そんなものは、まる

で、化物（フリークス）だ。エリオは心中、愕然とする。

「まあ、良いでしょう。どうせ、今夜には全て片が付くのですから」

ゆらりと、頭巾（フード）の下から覗く翡翠色の視線が、エリオを射抜いた。冷たい瞳だった。否が応にでも彼は理解する――己は今、猫に追い詰められた鼠程度の存在に過ぎないのだと。

しかし、それでも彼は、生き延びて、逃げ果せなければならなかった。それも、可及的速やかに。でなければ、今、相手の口から零れた何気ない言葉――そしてエリオ達にとっては極めて重要な情報――も、一切の意味をなさないのだから。死人は、口を効かない。

静かに刃を抜きながら、エリオは相対する。出来ることならば今すぐ逃げ出したいが、そんな隙は見当たらなかった。悪あがきの代わりに、エリオは言葉を投げかける。

「――よう。先日振り」

「御機嫌よう」

挨拶に答えると同時、“それ”が踏み込んできた。廊下を疾駆し、一瞬にして彼の身に迫る。静かに刃を翳すが、果たしていかばかりの仕事をしてくれようか。エリオは瞳を見開いて、身構える。

「そして、さようなら」

腰だめの拳が、真っ直ぐに振り抜かれた。

事は城壁に程近い区域に移る。というのも、その地域こそが、薬屋『黒枝』の位置する所であった。そして、当の一軒家を暗がりから見やる男達がいた。男達――それは大よそ十人規模、否、それ以上に及ぼうかという極めて穏当ならぬ集団であった。

「ホーク団長ォ、多分あそこで間違いねえッスよ。怪しげな看板かかってましたし」

「多分たあ何だ、ああ!?　転がすぞ!?」

「まあまあ声がデカいですよ団長、で、どうします」

「火つけてみるとかどう?」

「良いねぇ～」

「やった！　久しぶりに若い女の肉を引き裂けるんだな！？」
「普通そこは犯すとかからだろォよしっかりしろよ」
「つか死ぬだろ」
「火つけても死ぬぞ」
「死んだら困るねぇ」
「いいや、炙り出すには丁度いいな、出てこなかったら、そうだな、ガードのふりでもして攫ってやろう」
「流石団長！」
「頭いいッスね！」
「天才だわ」
「肉……」
――といった風に、喧々諤々の様相。下卑、下衆、あるいは野卑、そんな言葉がいかにも似合いといった有様。それぞれがそれぞれ、好き勝手に喋り散らす声が、夜をはばからない喧騒を織り成していた。彼らは一様に男で、そして、控えめに言っても小奇麗と表現できる風体の者は見当たらない。いわゆる山賊か、盗賊か、傭兵団の類か。それを戦力として見るなら、もはや一個の群体として勘定すべきだろう。
しかし、何はともあれ、ひとつ確実に言えることがある。彼らは今、クロエに迫る強大な脅威足りえる存在である、ということだ。それも、極めて絶望的な種に属する。
一通りの話をまとめ終えると、これまで協調性の欠片も見当たらなかった彼らは、しかし通りに飛び出すと、速やかに店舗の周囲を囲い込んだ。男らのひとりが石を打ち、炎を起こす。ごうと暗闇を照らす光が木の棒に移され、まさにその一軒家に火をかけんとした。
その時だった。入り口の扉がきぃと音を立て、開かれた。現れたのは、少女だった。武器も持ちあわせておらず、護衛の一人すらも無い、ただのひとりの少女。そもそも、自ずから出てこられるという展開を予想していなかった男達は、思わず目を見張った。
それは、少女の風体が、些か物珍しいものであったことも、あろ

うか。

肩を撫で、丈は踝のすぐ上まであろうかという長衣。前で打ち合わせた衣を帯で抑えた姿は、遙か東国より伝わる“着物”に酷似していた。渦巻や括弧などの不可思議な文様が直線と曲線によって織り成され、左右でシンメトリになるよう装飾が施されていた。地の色は、大地のように赤茶けた色彩。その上を、橙、藍、黒、赤、白――独特の色使いの刺繍が躍っている。それは至極色鮮やかながらも――きらびやかというよりむしろ大人しく、悠然としたものを感じさせた。

果たしてそれはいずこかの民族衣装に違いないだろうが――同時にそれは疑いなく、少女にとっての正装でもある。そう思わせる程に、幼い容姿ながら、堂々とした立ち姿を、彼女は見せていた。――クロエだった。

「……やめて」

闇に、ぱちぱちと火花の弾ける音がした。

「やめて――下さいませんか」

涼やかな声が、通る。先日は店の奥に控えていたがゆえに見受けられなかったが、今日のこれは、間違いなく、彼女の“店の主”としての姿だった。いわば、自ら規定した制服――と言ったところか。

店を守るべき主――クロエとしては矢張り、彼らの存在に対して、無自覚にはいられなかった。視線は多方面から感じられ、仲間が分散して待機しているのだろうかと、そう考えられる状況。窓から外の様子を覗けば、彼らが店舗の周囲を囲い込む様子を、見て取ることが出来たのだから。――飛び出さないわけには、行かなかった。

「ふうむ」

一瞬、男衆が呆気に取られたような状況で、いち早く平静を取り戻した男がいた。周囲からは団長と呼称されていた男であった。彼、ホークは、鋭い目付きで、少女の姿を見据える。そして、ざっくりと短く切られた茶髪を掻きむしりながら、「そうだな」と思案げに呟いた。

「俺らとしても、店はどっちでもいいんだな。別にこのちっちぇえ店が焼けようが焼けなかろーがどうでもいい」
単に焼きたかっただけのひとりの男が不平の声をあげたが、意に介さずに、彼は続ける。
「でも、こっちとしても仕事があるんだよなァ」
「……」
クロエが視線を返し、無言で促す。“きっ”と強い目付きを心がけてはいたが、それはやはり、幼い少女が強がっているようにしか見えなかった。周囲を十人規模の男に包囲されて、その上での振る舞いと鑑みれば、そのくそ度胸ばかりは評価に値するだろうか。
「大人しく攫われてくれ」
「お断りです」
下卑た笑みに、少女の声が間髪入れず返礼する。
――集団が、にわかに殺気立った。

Ｌｅｖｅｌ１０：『都市の暗がりに無法者が踊る』

がきんっ！！

高らかに響く金属音。エリオの持ち合わせる短刀が、突き出される拳を受け止めた音だった。受け止めて、そしてその上で、遙かに勝る膂力に押し返される。まさしく、怪物じみた鉄拳。刃を立てたにも関わらず、その手からは、血の一滴さえも零れ出ていない。

「――ふむ。止めて、みせますか」

「……化物めッ」

感心したような、くぐもった声。それに対して吐き捨てるように返しながら、エリオは拳を掻い潜り、黒尽くめの脇に躍り出る。不意、唸りを上げて、空を裂き、脚が跳ね上げられた。靴底がエリオの胸を穿つ。そのまま彼の身は背後まで吹き飛び――地に、叩きつけられた。床とぶつかり、その威力のあまりに跳ね上がる彼の身体。その勢いに任せ、エリオはそのまま着地した。臓腑でも傷めたのか、ひゅうひゅうと尋常ならざる息を吐きながら、ゆらりと相手の姿を一瞥する。

「苦しませるつもりは無いのですけれども――恨みもありませんし」

「恩義はあるがなッ」

「少々、後悔は感じないでも無いのですが」

ぺ、と唾棄しながらエリオは言う。そう、彼には恩義があった。

“気乗りしない仕事”を受けるに足りる程の恩が。とはいえそれは、“食い詰めて行き倒れた所を助けられ一宿一飯の世話を受けた”という実に情けのない話であり、仔細を語られる機会は恐らくあるまい。そこまでされて仕事の世話までをも持ちかけられては、心情としては断り難いのが人情ではある。

「そうかい、悪いなッ！」

とはいえ、此処で大人しく殺されるまでの義理は、エリオには無かった。そのまま脇目もふらずに、背を向けての逃走を開始した。

極めて迅速な判断である。そして、最良の行動でもあるだろう。――しかし、結果は芳しくなかった。たんっ、と床を蹴る音がひとつして、直後、エリオはその背に迫る気配を感じ取った。ぞくりと、悪寒に身体が震える。風切音を引き連れて、迫る剛拳。エリオは半ば転げるように前のめりに駆け出し、一撃をいなす。

そもそも“戦い”が成立する実力差では無かった。その身は確実に、遙か高みに鍛え上げられた拳士である。あるいは、魔術によって極限まで身体を硬化させ、運動性能を底上げしているのか。少し剣が扱えるだけの、それもきちんとした剣術を学んでいるわけではないエリオが――真っ当に渡り合う術はない。

「じゃあな！」

ゆえにエリオは迷いなく飛び出した。それは、先刻に開いた窓だった。まるで宙に身体を投げ出すかのようにして、相手の視界から姿を消す。ほんの一瞬、黒尽くめの姿が足を止めた。

「逃がす訳には、参りませんね」

そう言って、窓から身を乗り出す。

「真逆（まさか）――落ちましたか」

よもや飛び降りるつもりではあるまいが、果たしてロープ伝いに壁面を降りているのだろうか、その確認のためだった。後は警備の兵を配置して、先回りをしてやれば、それでおしまいになるお話だった。

そのはずだった。

突如、黒尽くめの襟首辺りを、ぐいと掴む手が伸びた。その腕は、窓の上方から伸びていた。開いた窓から身を乗り出していた相手には、為す術がない。そして、それ以上に――“上”など、完全に意識の外だった。視線を向ける間もなく、声が落ちてきた。エリオの声だった。

「落ちるのはオレじゃねえ、あんただ」

エリオは、窓のその上、壁面に鉤爪を引っ掛けて、どうにかこうにかといった様子で、ぶら下がっていた。その姿態のままで、引っ

掴んだ黒尽くめの身を、ぐい、と全力で引っ張る。存外に軽い身体だった。上半身のほとんどを引きずりだして、空中に投げ出された身体を、エリオは無造作に土足で踏む。

「“じゃあな”」

「な――ッ！！」

上擦った声を意に介さず、別れの言葉を繰り返した。そのまま身体を引きずりだして、蹴落とす。悲痛な叫びを引き連れて、そしてどんどん小さくなっていく声を聞きながら、エリオは邸内に、再び侵入した。下は、見ない。重力に引きずられて落ちていったことは確かだろう。何せ、四階の高さだ。生きてはいるかもしれないが、無事では済むまいとたかをくくり、エリオは探索を再開した。はぁ、と息を吐く。

「……やれやれ」

大いに損耗した肉体を引きずる。痛みも、疲労も、限界に達していた。エリオとしては、出来ればさっさとトンズラしたいところなのだが、しかし、彼にはやらなければならないことがあった。やけに警備の薄っぺらな邸内を探り、駆け回り、そして最奥に辿り着く。最早、こそこそと動きまわる必要もあるまい。バァン！！　と派手な音を立てて、エリオは扉を蹴り開けた。

「よう、旦那ァ」

軽い調子の言葉を吐きながら、室内に押し入る。豪奢な調度品が一揃いした一室であった。そして、そこには、一人の男がいた。商店の主、バリー・バルザック。彼とて邸内の異変を悟ってはいただろうが――しかし、此処に至るとまでは夢にも思っていなかったのだろう。突如としての闖入者に、彼は露骨な驚愕の表情を浮かべていた。

「――誰だ、否ッ、ネロッ、いないのか、疾く来い！」

常人ならば思考が停止しかける所を、咄嗟の判断で男は声を上げた。助けを呼ぶ声だったが、それに応えて駆けつける者はいない。人望云々のお話ではなく、純粋に人がいないのだろう。あるいは彼

の呼ぶその名は、今、地に伏している者の名であったろうか。男のそんな様子に構わないで、エリオはずんずんと彼に歩み寄った。凶器たる刃を片手にして。

「……何だ、何が望みだッ」

「オレは“同職ギルド”の者だ。薬屋から手をひけ」

「……ッ！」

男が声に詰まる。

同職ギルドとは、職人たちの手によるギルドだ。ギルドの中で、製造する商品の質などを保持し、流通ルートを確立する。商人ギルドからすれば、立派な商売敵と言ったところだ。世界的規模で鑑みれば、勢力としてほとんど拮抗した状態としても良いだろう。その言葉が意味する、即ち互いがバックとする存在の関係に、男――バリーは顔を青くする。

もちろんエリオのハッタリだった。

「わ……分かった」

「宜しい」

ニィ、とエリオは笑った。ぽい、と手にした刃を捨てて背を向ける。男が安堵に吐息を零す音が、聞こえた。

「――わきゃ無えだろうよォォォォッ！！」

「ヒイ！？！？」

瞬間的に振り返り、怒涛の勢いでエリオは拳を振り上げた。正直なところ、エリオにとって、先刻までのやり取りは、全く以てどうでも良かった。そもそも、今交わした口約束が、いかなる効力を発揮すると言うのか。クロエが襲撃を受ける羽目になった元凶でもある目の前にいる男、“商店の主”に、何はともあれ拳をぶち込んでやるという、その一点こそが肝要であり、この点でウィリアムとエリオの意見は完全なる一致を見た。そしてクロエも概ね賛同した。

ゆえに、振り下ろす。殴打する。「これはオレの分ッ！　これがウィル（あいつ）の分ッ！　これが嬢（あいつ）ちゃんの分ッ！　んでこれが嬢（あの）ちゃんの婆（ひと）ちゃんの分だァァァッ！！」「ギャアアア！！！」殴る。殴る。

殴った。物凄い勢いで殴った。それこそ、顔の形が変わるのではないかというほどに。

「ふぅ」

ひとしきり拳を振るい、ピクピクと痙攣するバリーが静かになったところで、エリオは室内の物色を始めた。短剣を拾い上げ、恐らく非常時のための備えだろう、傷薬などを頂戴する。少しでも怪我を癒さなければ、例え大急ぎでクロエ等の所に戻ったとして、足手まといになる公算が高すぎた。故にこれまでの行為も、それほど状況を逸脱したものではないと言える、その範疇だろう。回復薬の類をいそいそと着服しながら呟く。

「急ぐか」

下の階層が少々騒がしくなっていた。エリオはその様子を敏感に気取る。

言葉のとおりに早足で、くだんの窓の所まで戻り、ロープを使って外に降り立った。ようやく人心地、と息を吐く。そしてそこには、かの黒尽くめの身体が転がっていた。ぐったりと倒れ伏しているようだが、どうやら息はある。と、不意に好奇心をくすぐられたエリオは、ひょいと無造作に、そのフードをまくり上げた。

女の顔だった。鮮やかな翡翠色の瞳。藍色の髪を二つ結い。中々に愛らしい。

「……」

見なかったことにしよう、とエリオは心に決めた。

さて、街の片隅――少女を取り囲む集団の男達、といった異様な絵面。いささかも穏やかさを感じられない光景のまさに渦中で、クロエは男達の代表格らしき者と相対していた。あるいは、集団を統制する役割に当たる彼がいなければ、今すぐにでもクロエの矮躯は引き裂かれてしまっていたかもしれない。男、ホークはゆるりと自らの顎を撫でて、視線を少女に落とした。

「そいつは――頂けねえな」
そう言う男の表情から、野卑な笑みは失せていた。鋭く細められた瞳は、目の前の少女を品定めするように、見つめている。周囲の男達が、“長”に同調するかのごとく野次を飛ばした。「巫山戯んな！」「もうやっちめえ」「面倒だしな」「ついでに焼こうぜ」――多種多様に騒がしい声が上がる。
「……」
正装の少女は、ゆっくりと様子をうかがうように周囲を見渡した。そして、静かに口を開く。
「……ふざけるな！」
か細く涼やかな声で、精一杯に張り上げられる怒声。釣り上がった瞳。目を見開きながら、クロエは逃げようといった様子を見せない。眼前の理不尽に立ち向かおうという姿勢を、崩さない。彼女の一声を皮切りとしてか、元より殺気立った集団が、弾けた。どっと群れをなして、彼らが少女に襲いかからんとする。それと同時に、クロエは懐中から小さな短剣を取り出した。否、短剣というにも頼りない、ただの短刀（ナイフ）。
それを少女は己の首筋に押し当てた。
「――野郎共ッ！！」
ホークが一喝する。その雷声で、途端に集団がぴたりと動きを止めた。振り上げられたそれぞれの武器は降ろされて、やり場を失った殺意がわだかまりながらも、次第に静寂を取り戻す。
その中心に、クロエがいる。その白く細い首に、かすかに食い込んだ短刀。その刃を伝い、血の雫が一滴一滴と零れ、地を紅く濡らす。ほのかな痛みに表情を歪めながらも、少女は整然と立ち尽くし、たたずんでいた。
「死ぬ気か」
「……死にたくは、ない。でも、私が死ねば困るのは、貴方達も、おなじ」
今、クロエが彼らと対等な状況を創りだすには、これしかなかっ

た。それでも暗闇の中で、彼女のナイフを握る両手は、かすかに震えている。当然のことだった。怖いし、死にたくもない。おまけに、少し本気を出せば簡単に蹂躙されてしまうだろうという相手、それも十数人に包囲されているという絶望的なまでの劣勢。平静ならぬ息が漏れ、泉のごとき瞳に波紋が起こり、わずかな揺らぎを生んでいた。

「……そうか」

瞬間にホークが動いた。迅速な初動で、少女との距離を一瞬にしてゼロにする。

「――――！！！」

クロエの瞳が驚愕に見開かれた。彼女に覚悟があったのならば、それこそ命を捨ててでも良いという覚悟があれば、その一瞬のうちに、己の喉を突くことが出来たかもしれない。だがそんなことは、土台無理な話だ。彼女の握る短刀の切っ先は、にわかに肌を裂いたばかりで、止まる。男が、クロエの華奢な腕を捕まえた。

ごつごつとしたホークの手が、クロエの細い手首を握り、捻った。からん、と音を立ててナイフが地に落ちる。その柄を男の脚が蹴り飛ばし、彼方へと追いやった。

「っ、痛……！」

「――どうにも出来ねえよ、餓鬼」

「……う、あっ……！」

「……お前ら、ロープ持ってこい、取り押さえるぞ」

クロエの矮躯がびくりと震え、瞳が潤む。いくらクロエが足掻いてみても、男の腕はびくともしなかった。周囲の男達が、沸きに沸く。

どうにもならない、ままならない。少女はあまりにも、無力だった。

Ｌｅｖｅｌ１０：『都市の暗がりに無法者が踊る』（後書き）

このままえっちされてもおかしくない

Ｌｅｖｅｌ１１：『都市の暗がりに剣戟が鉄火を散らす』

時は少々遡る。中央広場のウィリアムは、依然厳しい戦いを強いられていた。周辺の警護は厳重さを増し、“商店”の入り口はしっかりと固められている。その様子を横目に一瞥しながらも、一切の気を抜くことは出来なかった。眼前に再び、女の剣閃が迫り来る。それをウィリアムは咄嗟に捌く、が、いかんせん、重い。一撃一撃が。このままでは、防戦が崩れるのも時間の問題か。周囲にもそう伺えたのか、あるいは――相対する女が、そのように命じているとも見える。

だが、戦局には、一つの変化が見られた。

「……ッ！！」

ウィリアムが、突如として身を翻し、外套をはためかせ、横っ飛びに石畳を転がる。次の瞬間、元居た場所に、遥か彼方から飛来せし一矢が、突き立った。地を穿ち、揺らぐ鉄の矢。鐘楼か、屋内の高層か、屋根の上か――ともかく、いずこからかウィリアムへの狙撃が行われているのであった。この暗闇であるにも関わらず、そして目の前の女を射掛けてもおかしくないというのに。

「相も変わらぬ良い腕だ――ふッ！」

女は静かな笑みを浮かべると共、一歩の踏み込みを見せた。回避行動という隙を露にするウィリアム目掛け、掬い上げるように刃が振るわれる。ウィリアムは地に手を突く、一瞬の判断で己の身を退かせた。

――結果。ひゅん、と音を立てて放たれた一閃が、ウィリアムの身を捉える。身を包む外套を掻っ捌き、その凶刃をウィリアムの生身、腹部に到達せしめ、その肌を、撫でた。刃を濡らした紅が、あるいはその身からも滴り落ちて、地を汚している。

「……ッ」

決して深手ではなく、致命でもない。だが、その傷の意味は重か

った。傷を負うほど、血を流すほど、ウィリアムの能力は衰えていく一方なのだから。飛び跳ねる様に立ち上がり、刃を掲げながら、ウィリアムは相対することをやめない。

「悪足掻きだな」

「……」

「投降するなら、悪いようには――いや、するだろうな。筆舌に尽くし難いことをするだろうが、だが、死にはすまいよ」

正直だな、と思いながらも、ウィリアムは頷かなかった。同時に、少年は知覚する。自分に浴びせられる、一点の光を。それは、遙か彼方から伸びる一点の光の線。その光源には、ひときわ大きな灯りがともる。

そこには、恐らく射手であろうと思われる、小さな影がいた。この光が、暗闇の中で、ウィリアムの姿を捉え得たのだ。同時にそれは、射手の腕が伴わなければ全くの無意味なのだが――そしてその狙撃手は、今、ウィリアムにしかと狙いを付けている。

それを承服した上で、ウィリアムは剣を握りしめた。

「……そうか」

彼女はそれを見取ると、瞑目して少年に刃を向け――

その時、ウィリアムが、まるでがむしゃらに女に向かって突っ込んだ。ほんの刹那の豹変に彼女は眼を見開く、が、なんてことはない、猪のような突貫に、恐れることなど何も無い。ひらりと女はウィリアムの暴挙を回避すると、同時。

「血迷ったかッ、――――ッ！？」

鮮やかに身を返すと、そのままウィリアムの背を、斬りつけんとした。確かに、斬りつけんとして――しかしそこに、ウィリアムの身は無かった。まるで、初めから彼女のことは眼中に無いかのように、ウィリアムは一直線に駆け出したのだ。彼女に背を晒すことも意に介さずに、全速力で駆ける――“商店”の屋敷へ向かい。射手の照準も間に合わず、瞬間、周囲がにわかにざわめく。

「総員、慌てるなッ！　入り口を固めろッ！」

咄嗟の女の判断、号令に合わせ、私兵部隊が動く。ウィリアムが遮二無二に突貫してみせても、その防衛戦は、いかに足掻いても突破出来そうにない。総数十五、それぞれ五人が左翼、右翼、中央を固める陣形。とてもではないがその隙間を抜けるなんて芸当は不可能だ。少なくとも、ウィリアムには不可能だ。そして背後からは女が迫る。

「……――――ッ！！」

不可能だ、そんなことは、ウィリアムが、最も良く理解している。ゆえに駆けた、駆け抜けた。“商店”への突貫を狙う――狙う、ふりをして、防衛戦に突き当たる直前の所で切って返す。右翼の更に右を抜け、狭く薄暗い路地へ、滑りこむ。

あまりの呆気無さに、気の抜けるような不覚に、女が一瞬、足を止める。そして、瞬間、気づいた。中央広場などという必要以上に目立つ所で、わざわざ凶行に及び、そして防戦一方を貫き、危機を悟れば早々に尻を捲って逃げる、このような不自然な行動を取られれば、誰でも勘付く。

――――陽動だ。

「……野郎めッ！！」

「た、隊長ッ、アルマ隊長、どこへッ！」

「確実に仕留めるッ！　すまない、もう手遅れかもしれないが、皆、“内部”を探ってくれ！」

「……りょ、了解ッ！」

隊員が、そして隊長が、互いに互いへの信頼を置いているのか。果たすべき役割をお互いに委ね、そしてそのために全力を尽くす。彼女――赤髪のアルマはなにくそと走り出し、そして言い付けられた男がその背に敬意を払い頭を下げた。私兵部隊が、持ち場を守るための一部の人間を残して邸内になだれ込んだ所で、彼女はウィリアムの背を見止める。

この時、すでにエリオが“商店”の主をひとしきり殴り飛ばしていたことは、余談として留めておくべきだろう。

さて、自分の目的を果たしたウィリアムは、颯爽と全力での疾走を開始した。早く、速く、疾く。ウィリアムとしては、クロエの身の安全を鑑みれば、とてものんびりはしていられない。そして第一、彼女の所へ戻るためには、凶相を浮かべた背後の女、アルマを撒く必要があるのだから、尚更だ。難題である。そして、難儀だった。手負いのウィリアムでは、何とも骨が折れる仕事だ。むしろ、骨で済んでくれるのならば僥倖か。

仮にの話だが、真向勝負で彼女と打ち合えば、ウィリアムの敗北、そして死は必至であると言えよう。先刻の騒ぎは、ウィリアムが初めから勝利を放棄し、防戦（じかんかせぎ）に徹していたからこそ、あの結果で終わったのだ。

「逃が、さん――ッ！！」

振り抜かれる剛剣が、凄まじい風の音を引き連れる。女のそれとは思えぬほどの猛威が、ウィリアムの後ろ髪を煽った。一閃が、ウィリアムのすぐ後ろを通り抜けていく。

「うぉぉッ……！！」

刃のよぎった後に、はらはらと灰色の髪が散り、落ちた。瞬間的に詰められていた距離を、ぎりぎりの所で離して、もつれかける脚を引きずるかのように、ウィリアムは駆ける。

「ふん」

「……なんてゴリラ女だ！！」

「なんだと！！！」

しまった怒らせた。そう思うも、時すでに遅し。今や衛兵（ガード）の眼に触れる危険は無いので、自身の声を気にする必要はなかったのだが、それが仇となってしまった。というか、問題は、明らかにウィリアムにあった。過ぎた時間は取り戻せない。

曲がり角を踏み切り、暗闇の路地裏を駆け抜け、背より襲い来る剣閃を紙一重にいなして躱す。言葉にすればそれだけだが、これほど困難なことはない。点々を零れる血を足跡がわりに残し、徐々に中央広場を遠ざかり、城壁へと近付きながらも、ウィリアムはまる

で逃げ切れる気がしなかった。
彼女は、激昂を露にしながらも、冷静だった。
「いよいよ後が無いな――今なら腕一本で許すぞ！」
「……断る！」
吐き捨てながらも、ウィリアムは焦りはじめる。というのも、彼女の言葉が事実であるからに他ならない。その上、全力で走り続けるにしても、ウィリアムの疲労はとっくに限界近くに達しようとしているという苦境。真っ直ぐに行けば、そろそろクロエの居場所には辿りつけるだろうが、よもや追跡者を引き連れたままに舞い戻るわけには行かない。大きく迂回していくしかないか――と、ウィリアムが、そう考えた、まさにその時だった。

「ロープあっかァ」
「なんか長過ぎねえッスか、これ」
「燻製にでもする？」
「結局火炙りかよ」
「焼きてえ」
「真面目にやれお前ら！！」
路地の隙間、彼方の暗闇から、声が聞こえた。男達の声だった。男の一人が、その手に炎をたずさえている。その焔を灯りとして、照らし出される暗闇の向う側が、ウィリアムにも見えた。
一人の少女が、俯せに地に組み伏せらていた。男の一人に後ろ手に腕を捕まえられ、そして梃子でも動かないように押さえつけられている、光景だった。周りを複数人の、十数人規模の男達が取り囲み、ロープだの短刀だの松明（たいまつ）だのを片手に、下卑た笑いを交わしている。
「……ぐずぐずしていれば……いい」
「ああ？」
呟きを零したクロエの腕を、男――ホークがぎちりとひねり上げる。少女の表情が痛みにしかめられるが、瞳を眇めたまま、構わず

言葉を続けた。
「……そろそろ。助けに……きて、くれる、ころ、だもの」
「は」
呆けたようなホークの声。構わず少女は、俯せの姿勢のままで、顔を掲げる。誰の表情をうかがうでもなく、クロエは視線を上げた。その眼は、天に輝く月を見ていた。「あーん？」「そいつァまじぃね」と、笑い混じりの会話を男達が繰り広げる中で、クロエがひとり、月を睨んでいる。その視界を覗きこむかのように、ホークが視線を遮った。
「は――ははははッ！！」
高らかに響く、笑い声。そこに込められたものは、一山の悪意だ。続けざまに連鎖するかのごとく、弾ける。哄笑――それはきっと、悪党どもの宴とも言うべきひと騒ぎに違いない。
「無ェよ、あるかよ、そんなに都合のいい話がよ！　餓鬼が夢を見るのも大概にしろよ、あァ、餓鬼はおねむの時間か？　ッたく、さっさと逃げりゃあこんな事にはならなかったかもなァ？！　このしょっぺえ店に何の拘りがあるか知らねえけどな！」
「馬鹿に、して、くれるな……ッ！」
――理性がウィリアムに語りかける。彼女を守るためならば、まずは追っ手を撒くことが先決ではないか、と。更なる災厄を招くべきではないだろう、と。然り、全く以て道理だとウィリアムも一考する。
「お利口かと思いきゃ、とんだ夢見がちだあな」
「……たすけも、くる、と……っ」
「関係ねえなあ！？　一人や二人の助けがどうした！？　これだけの人数にどうするつもりだろうな！　怖気付いて“おしまい”だろォよ、現実はきびしいんだぜ、教えてやろうか、雌餓鬼――っ！」
ホークが、嘲笑いと共に、クロエの髪を掴んだ。乱暴に扱われた黒い髪が力尽くに引っ張られ、儚く乱れる。その光景を眼にしたウィリアムの思考が――脳裏に灼けつくような怒りに、塗りつぶされ

た。

そもそも、ウィリアムの今回の騒動への比類なきモチベーションは、その大元が――“商店”に一泡吹かせてやる、という衝動から来たものであった。そしてその衝動は、クロエに抱く好感と、そして彼女に振りかかるであろう災難から来る怒りに帰属する。

ゆえに、今、ウィリアムの目の前に広がる情景は――彼という存在にとっての引き金を引き絞るに等しい。

――――『店を守りたい』と語った彼女の、その想いを、踏み躙られて、黙っているのかッ！！　それが、僕という人間かッ！！！

そして、ウィリアムは、全ての思考を放り投げた。凄まじい勢いで、一直線に駆け出す。彼の後ろにいる女が、突如の暴走に、あっけにとられるほど。

彼女を襲う厳しい現実とやらを、力尽くで排他するために行く。

「縛りってのもまた乙な――あッ！？！？」

「散れッ！！」

疾風怒濤。肉薄と同時、早撃ちの如く一刀を抜き放ち、振るう。クロエを取り囲む一人、ロープを手にしていた男の腕が、一刀両断にて切り飛ばされた。続けざまに振り下ろす刃を、背へと突き立てる。血飛沫を散らしながら抜き放ち、紅い雫を払うように刃を振るう。切り伏せた男がうめき声を上げて崩折れる様を、一瞥さえもしない。

膨大なまでの殺意を気取ったか、咄嗟にクロエを離して、咄嗟に飛び退いていたホークが、現れた悪鬼のごとき少年に、視線を向ける。

「……本気でお仲間、か？　クソが。許せん都合の良さだ。一人……二人、か」

ウィリアムと、そして後から続いてきたアルマを、ホークは勘定に数えた。だが、当のアルマといえば明らかに戸惑っている様子だった。それも当然だろう、明確に己の矛先として認識していたウィリアムが、全く予期せぬ行動を取ったのだから。

「仲間じゃないぞ、むしろ切り捨てたいのだがな」
がしがしとアルマは困ったように赤髪を掻きながら、何ともやりにくそうに眉を垂らす。
ウィリアムは白い外套を無造作に脱ぎ捨て、背後のクロエを振り返る。ウィリアムとアルマが、身体でガードする形で、クロエの盾となっているこの状況。
いくらかの距離を置いて、男達が、彼らの動向をうかがっている。数に任せて攻めこまれれば、圧倒的に男達が勝るが、この路地は、十人規模の人数を生かせるほど、広くはなかった。
「――大丈夫か、クロエ！」
「……ちょっとだけ、おそい」
「服可愛いな！」
「……ばか」
服の埃を払いながら、ゆっくりと立ち上がり、深く息を吐くクロエ。
そんな彼女に、ニィと笑ってウィリアムは、一枚の金貨を投げ渡す。それは少女の熱を込めた、すなわちクロエが“探知”し得る金貨だった。都合の良い話でも、的はずれな期待でもなんでもなく――ただ彼女は知っていて、信じていて、起こるべく必然が起きたという、ただそれだけのこと。
そして、ウィリアムはアルマに振り返って言う。
「手を、貸してくれ」
「貸すと思うか」
「女の子が徒党を組んだ男達に襲われているこの残虐的光景を見過ごすのか！？」
「う、うーん」
流石の女もたじろいだ。そして少女、クロエの姿を見下ろし、観察する。どう見てもアルマには、年端も行かない子どもにしか見えなかった。というよりも、クロエとウィリアムを除いたこの場にいる全員が、そのように認識しているだろう。アルマはちゃきりと音

を立て、剣を担いで、神妙な表情を浮かべながら、不承不承頷く。
「――アルマだ。言っておくが、今は協力するが、後で衛兵に突き出すぞ」
「ウィリアムだ。……生き延びられたらな！」
「ちッ、たかが二人だ！　囲い狭めて叩くぞッ！」
ウィリアムが一人を斬り倒し、残存する敵対勢力が十五人。道幅を考慮してか、三人組の小隊が五つと分かち、ウィリアムとアルマ、そしてクロエを取り囲む輪を、少しずつ縮め始めた。輪の外から、ホークが司令塔として機能する。明らかな多勢に無勢の戦況に加え、少女一人を守り通さなければ勝利は成らない、という条件の厳しさ。ウィリアムが改めてそのことを再確認していると――不意にクロエが、ぽつりと、静かな呟きを落とした。
「……二人じゃ、ないよ」
かちゃりと何かの開く音がした。一瞬、集団の意識が扉の側へと向かう、が、そこは一切の変化を見せてはいない。物音は、遙か上方であった。――窓から金髪碧眼の青年が落ちてきた。ちゃりん、と金貨の音ひとつを引き連れて。先刻、ウィリアムが斬り倒した男をクッションにして思いっ切り踏みながら着地する。そのついでに、手近な所にいた男一人に、無造作に短刀の刃を抜き放ち、突き立てた。
「待たせたな！　っつゥかオレの拾ってきた情報がクソの役にも立たねえでやんの畜生め」
「が――ああァあッ！？」
「あ、わり、手ェ滑ってたわ」
突き立てた刃をそのまますると無造作に滑らせて肉を切り、抉る。引き抜くと共に噴き出す血飛沫、悲鳴を上げて倒れる身体。
「――は」
隙だらけだな、と言わんばかり。アルマは、突如として降り立ったエリオの姿に最早驚くこともなく、彼の身体を影にして、一歩を踏み出した。彼の脇をすり抜けるようにして、エリオの手折った小

隊のもう一人を、腹部を一突きにする。
その背を、残る一人が、血走った視線と共に、狙う。振り上げた短剣を、アルマの後頭部目掛けて振るう。何せ、尺の短い剣だ、振りが早い――が、その刃が血に濡れることはなかった。無造作にアルマは、背後の男に向け、蹴りを食わせる。その一撃をまともに受け、後方へ吹き飛ぶ、同時に刃を引きぬきながらアルマが距離を詰め、一閃に切り捨てる。
「きっちり僕らの分もやってきたんだろうな！」
「むろん」
言葉を交わす合間に、流れる様な奇襲で小隊が一つ壊滅する。その最中、ウィリアムは脇目もふらずにクロエの護衛に徹した。彼らの勝利条件は、こちらを全滅させることではなく――この少女一人を捕まえてしまえば、それで良いのだから。
「どぉするよウィル。これ後が続かねえぜ」
「とはいっても、だな」
「片っ端から切り捨て――る、には、儘ならないだろうな。この数だ」
アルマの発言はいちいち物騒だ。無造作に視線をやると、残る十二人が編成を変え、四人組が三隊。一斉にかかられて仕舞えば、それぞれがそれぞれの対応に精一杯であり、そして手負いのエリオやウィリアムではどうしてもガタが来るだろう。
「ペッ――良くみりゃあ手負い二人、女が一人、戦力外が一人じゃねえか。お前ら、油断すんじゃねえぞ、それぞれに集中しろ、馬鹿から死体を晒す羽目になるからな」
「応よ」「あの女対応しなきゃいけねーの？」「一気に行くぞ一気」
左翼、右翼、中央、それぞれに四人ずつの配置。にわかにウィリアムはデジャブを覚えるが、先刻との明確な相違は、真っ向からそれと相対し、戦わなければならない、ということだ。
「しゃあねえ、腹くくるか」
「いざとなったら散開だな……僕が引きつけるか」

「……みんな」
クロエの囁くようなささめき声、その呼びかけに三人が一様に彼女へ意識を向けた。
「……すこし。あと、すこし。もちこたえて、ほしい――おねがい」
見上げて、三人の顔を見渡して、静かに、少女は嘆願する。アルマが一寸眉を潜め、ふむとウィリアムが頷き、エリオが緩やかに肩を竦めてみせた。
「乗ろう」
「言うだろうと思ったけど一応言っておくぜ――本気かよ」
「私でも長くは、辛いな」
「勝算無し、じゃあ、無いんだろ？」
クロエが、頷きを落とす。ウィリアムはそれだけで十分とばかりに、己が敵と向かい合う。剣が、斧が、鈍器が。嵐のごとく襲い来る、それは暴風雨にも勝る暴力の群れ。
「私は――もしかして途方も無い馬鹿に、巻き込まれた、のかッ！」
がきィん！　とけたたましい金属音をかきならし、アルマは、長剣を以て、鈍器と、まともに打ち合う。並の膂力では成し得ない桁外れの芸当を見せながら、あまつさえそのまま、ギンッ！　と火花を散らしながらはじき返してみせた。そこから、本来ならば切り込めるはずが――脇から、一閃の後にどうしても生まれる間隙を縫い、刃が滑りこんでくる。切り返す刃を噛みあわせ、いなして見せながら、防戦は否めず。
「気付くのが遅ェよ見目麗しき淑女様、諦めて――くれッ！」
エリオは軽口を飛ばしながらも、頬をつうと冷や汗が伝っていく。脳天より振り下ろされる斧をすれすれのところで躱し、足元を掬う刃から、バック・ステップで距離を取り逃れる。
「全く僕を気の触れた様に言ってくれる……！」
ウィリアムは幅広の刃を頭頂にかざし、降り落ちる斧の刃を受け止める。ぎりぎりと鍔迫りにまで追い込まれる様な状況に、脇から突っ込んでくる男が短刀片手――“くそ力”を振り絞り、落とされ

た刃を、強引に押し返して、そのまま踏み込む身体を膝ごと打ち込む。元いた場所を短刀の刃が通りぬけて、肝を冷やす。

――それぞれがそれぞれに獅子奮迅の奮闘を見せた。刃を掠めて血を零し、打撲を受けて骨身を痛め、ギリギリの所で致命傷を避けながら、そしてその上で、どうにもならない、手の回らない所が、一つある。

「――おい、ウィリアム、不味いぞ！」

アルマが気づきに声を上げる。彼女の驚嘆すべきは四対一という圧倒的なる劣勢ながらも、内二人を切り伏せしているという点だ。彼女の純然たる剣の技術と、女性離れした力業は、乱戦においても著しく力を発揮し得るらしい。

そして、その視線が捉えていたのは、ノーマークになっていたホークの姿だった。すこぶる不機嫌に表情を歪めながらも、ゆらりと腰から剣を引きぬいて――クロエに迫る。いわば、集団を引き付け役として用いた形か。その目には何処か並ならぬ狂気が潜んでいた。

「ちィ……ああ……クソ、クソが、最初っから脚の一本でも切り落としておけば良かったんだよなァア……！　お前ら、餓鬼ィひっ捕まえたら一気に下がれ」

男達がそれに応えて声を上げ、ホークが、ゆらりと幽鬼じみてその茶色の髪を揺らめかせながら、一歩、一歩と距離を詰める。クロエは、後ずさるが、しかし、逃げ出すことは出来ない。なぜかといえばそれは極めて単純な話――脚を貫かれた傷が、そう易々と完治しているはずが、無いのだ。

「嬢ちゃんッ」

「クロエ！！」

エリオとウィリアムは流石に辛い。傷と疲労という枷を背負わされた上での連戦など、とてもままなる身体ではない。特にエリオは、先刻に強烈な一撃をもろに貰ったせいか、迫る刃を躱し続けるだけでも精一杯だ。同時、ウィリアムは相対する男の、一点の隙を突いて、一閃をするりと割り込ませ――同時、ガキンッ！！　と、高ら

かな金属音が響かせた。真っ向から剣を撃ち合い、彼方の剣を、無理やりにへし折ったのだ。それと同時にすぐさま身を返そうとするが――届かない。

クロエが、ウィリアムの姿を、見返して告げる。

「……だいじょうぶ」

刹那に風が吹き抜けた。衣をはためかせるほどに、烈しく吹き荒び、そしてそれはやがて、緩やかな凪となる。かつり、こつり。足音が、やけにはっきりと聞こえるほどに、静かだった。

「――……まにあった、から」

風に刃の手が一寸留まり、あるいはその狙いを外れさせる。少女の言葉に続いて、足音が、ひとつ、ひとつ、響き、段々と近づき、そして大きな音となる。規則的にゆっくりと、近づく音色。かつり、こつり。その方へ、クロエは静かに視線を、掲げた。

――老婆だった。

身体をローブにすっぽりと包みこみ、コートを羽織らせ、そして暗闇に浮かぶ相貌は、間違いなく老いた女のそれ。顔に刻みこまれた皺が、彼女の生きた年月を明瞭に物語る証として、浮かんでいる。片眼鏡（モノクル）を身につけ、そして彼女の髪は、ほとんどの色が余す所なく抜け落ちている。白い髪。その表情に柔和な笑みを浮かべて、御年幾つになろうかという、老いた女がそこにいた。ゆっくりとした歩みで、楚々とした佇まいは淑女の気品を感じさせる。

彼女は、悠然と――――男達の脇を、死線を、まるで当たり前のように通り過ぎた。

それこそ、風が通り抜けるかのような緩やかさで。

「……な」

ホークが、絶句する。その存在に。

「――あんたは、何だ」

老女は、ゆるりと彼に向き直ると、しじまに微笑んで、向き直る。ゆっくりと、真っ直ぐに、確かに、クロエへと。ウィリアム、エリオ、アルマ――彼らが思わず道を開けてしまうほどに、彼女は、自

然な歩みを見せていた。そして、クロエの目の前で、止まる。少女と並び、比すると、彼女はかなりの長身に思えた。老身にしては不思議なほどに、ぴんと伸びた背筋だった。

彼女らは、静かに向かい合う。

そして微笑を交わした。

「――おかえり、お祖母ちゃん」

「ただいま、クロエ」

闊達とした、声だった。

Ｌｅｖｅｌ１２：『都市の暗がりにお祖母ちゃんが無双する』

「……クレハお祖母ちゃん、です」

クロエの紹介に預かるその老婆――クロエの祖母、クレハは圧倒的な存在感と共に、そこにいた。彼女の存在、ただそれだけが、死地であったはずの、この場の殺伐とした空気を完全に、殺しきっている。刃の向ける先を失ったわけではないという事実にも、関わらずだ。彼女はゆっくりと、ようやく周囲の状況へ気を払うかのように、周りを見渡すと――訥々と言葉を零し始める。

「孫が、お世話になったわね」

そう言って、笑みひとつ。そのまま、至極何気なく――ウィリアムの、エリオの、アルマの頭を、それぞれに撫でた。しゃわがれた手だ。水気なく、瑞々しさもない、枯れた掌。ひどく安心する手だと、ウィリアムは思った。エリオは気恥ずかしげに、そしてアルマはどこか困ったような顔をしていた。眦を垂らす様子がどことなく情けない。なんというか、犬っぽかった。

クレハ老はゆっくりと枯れ枝のような腕を下ろすと、そのまま、ゆるりとした仕草で、立ち尽くす男達に向き直る。彼らは一様に気を取り直したかのように刃を向けながらも、しかし同時に、踏み込みかねていた。あまりにも、目の前の老婆が、奇妙で――そして、得体のしれない存在に、見えたからだった。

「御免なさいね。今夜はもう、店仕舞いの――刻限だわ」

穏やかならぬ男達の様子を見渡すと、彼らに向けて――お客様なら後日お願いするわと、ゆっくりと語りかけた。即ち、大人しく退けと暗に。

落ち着いた口調。案外に、はっきりと良く通る声だった。無意識にホークが一歩、距離を取り、そして――統制を外れた男の一人が、一歩距離を詰めた。

「引っ込んでろ、婆ァッ！！」

斧を振りかざし、老婆に迫る。屈強な男であった。筋骨隆々とは及ばずとも、襤褸けた衣服が歴戦を思わせる戦士だった。馬鹿、とホークがそれを制しかけるが、間に合わない。刃が、クレハへと振り下ろされた。

「若いわね」

一言、そう呟く。果たしてその凶刃が老婆に触れようかという瞬間――男の身体が“ぐるん”と引っ繰り返った。襲い掛かっていたはずの男がひとりでにすっ転び、顔面から石畳にぶっ倒れる。――――その場にいた誰もが、そのようにしか見えなかった。その手から凶器が零れ落ち、床を転がる。

男は、まるで狐狸のたぐいに化かされたかのような表情で、その場に倒れている。命はある。意識も、かろうじてだが、ある。油断していたわけでも、なんでもない。だからこそ、何が起こったのか、誰にもわからなかった。

「なあ、ウィル」

「なんだ」

「見えたか」

「いや全く。アルマは」

「手を、伸ばしたのが、見えた」

――だが、しかし、それだけだったと、彼女は続ける。ただそれだけのことで、大の男が、その場にひっくり返っていた。それは、まるで人の理にそぐわない現象だった。まさしく、今まで見たどんな術式よりも“魔法”のようだと、ウィリアムは思った。

魔法とは、魔術とは、とどのつまりが人外達の理術なのだから。それを理解できないことに、きっと不思議などない。そう考えれば、その瞬間に破落戸の団長、ホークが下した判断を間違いと言い切ることは、決して出来ないのだ。

「……どんな魔法か知らねえが、全員でかかれ!!　一方向から行くな、術が婆さんの周囲に展開されている可能性もある、いざとなりゃ何でもぶん投げてやれッ!!」

否、それはきっと、限りなく正解に近い。まるで得体のしれない存在に対して、ほとんど満点の対応だった。静まっていた空気が、殺伐とした熱気を取り戻す。男達が小隊を崩し、それぞれがそれぞれに老婆を中心として、取り囲んだ。それに対しクレハの周りを狭く囲い、外側を向いてウィリアム、エリオ、アルマが位置した。クロエは彼女のすぐ傍らに、大人しく佇んでいる。

と、不意に老女が柔和に笑む。静かに口を開いた。

「三人は、さがっていなさいな。傷が響くでしょう、男の子」

「いや、だが僕は」

「意地を張るのは良いわね、実に、“らしい”」

言い合う間に、エリオは先んじて引き下がり、距離を取っていた。お手上げの姿勢である。青年と少年の姿を見比べて、クレハは、ふふと小さな含み笑いを漏らした。

「でも、無茶は良くないわね。お嬢さん、見ていて上げて頂戴な」

「……非常に複雑だな」

お嬢さん呼ばわりされたアルマは、剣を下ろして肩を竦める。彼女の元々の目的からすれば、このままウィリアム少年を掻っ攫ってこの場を辞してしまえば良いのだが、果たして眼前の老女がそれを許すだろうか。アルマはずるずるとその場で身構えるウィリアムの手を強引に引き、戦闘の領域から引きずり下ろした。

「待て僕はやれるぞ！　許せん！　クロエの髪を！　許せん！」

「お前は緊張感というものをわきまえたらどうだ」

「全くだァな」

剣を構えた姿勢のままで引きずられるウィリアムの様子を、エリオはからからと笑い飛ばした。そして、祖母は孫へと語りかけた。

「あなたは傍にいなさいな、クロエ。――なんなら手を握っていても構わないけれど」

「……もう、子どもじゃあ、ないもの」

「割に、心配性はなおらないものね」

くすりと微笑んで、クレハは一枚の金貨をクロエの手に握らせる。

――ウィリアムに、そしてエリオに渡されていたそれが、遡って祖母の手には無かったと、そんな可能性が考えられようか。その場所がわかっていたとすれば、当然、クロエの“もうすこし”という言葉にも、意味があった。信じるに足る理由が、あったのだった。

さて、麗しき母娘の再会といったところだが、当然、破落戸は待ってはくれない。老婆の背を狙い、短刀が突き出されていた。クレハは視線をすらもそちらに返さず、掌だけを背後に向ける。掌底が、刃の先端に触れた。

――ズドンッ！！！

何の冗談でもなく、ブラックパウダーを連鎖的に爆裂させたような轟音が、夜の裏路地に響き渡った。掌で、とん、と優しく触れた。それだけで短刀を手に握った男は、軽々と吹き飛んだ。宙を真っ直ぐに切り裂き、そのまま地に叩きつけられる。烈しく地を摩りながら身体は滑り、開けた通りにまでその身は押し出されているだろう。

「真に――若い」

残り九人。同時に、ウィリアムに武器を破壊された男が、素手で老婆の細腕を掴みにかかる。掴んだ。クレハがくいと腕を捻り、それに引きずられたかのように男が地に転がった。向き直ると同時に頭を蹴り退かされて意識を落とす。残り八人。左右から一斉に襲いかかる男らの方向へ、それぞれに掌を突き出す。双方が、全く逆の方向へと吹き飛んだ。何度も石畳をバウンドして、鞠のように跳ねる。残り六人。加熱する混乱に煽られてか、一人の男が斧をクロエに目掛けて振り下ろした。彼は不幸だった。老女の爪先が彼の腰に触れたとき、男は突如脱力したかのように斧を取り落とし、それは足元に落ちた。筆舌に尽くし難い悲鳴。刃が、その脚を切り裂いていた。その場で蹲る。残り五人。脚に地を付いていない状態のクレハを狙い、三人が三方向から迫る。既に我を失いかけているのか、真っ向からの突進を果敢に試みていた。果たして激突しようかという寸前で、老婆の身が“すりぬける”かのように彼らの脇を抜ける。最早止まらぬ彼らは、あえなく激突し、自爆した。残り二人。

ホークとそして残った一人は、じりじりと距離を置きながら、言葉を交わす。
「団長ォ」
「ああ」
「逃げます？」
「逃げよう」
ようやく提案された“限りなく正解に近い判断”よりもなお正しい、紛うことなき“正解”に、彼らは真顔で頷きあった。

「クロエ」
「……うん」
「何者なんだ、君のお祖母ちゃんは」
「……“魔導十哲”」
「というと」
「世界で、十指に数えられる、魔法使いへの名誉、なんだって」
「へー……えっ？」
ウィリアムが愕然とした表情で、少女に向き直る。
「……それが、どれだけのことかは、わからないけれど」
すごい、でしょう？
と――クロエはウィリアムに屈託なく笑いかけた。何の不思議もないかのように、自慢の師を語るような、そんな表情を浮かべて。
「……一つだけ分かることがあるがな」
「なによ」
そして、クロエとウィリアムの傍ら。腕を組み、戦いとも呼びかねる一方的な攻防の一部始終を見終えて、アルマは神妙に呟いた。
その声に、エリオが興味深げに問う。
「あれ、魔法、使ってないぞ」
「何を言ってるのか、ちょっと良くわかんねえッス」
神妙にもなるというものだった。
「……――あ。ありがとう、ございます、ました」

と、不意にクロエが、ぎこちなくもアルマに向けて頭を下げる。無論、顔見知りでもなんでもない彼女が、命を張って守ってくれたことに対してだ。そもそもアルマの存在はこの時、全くのイレギュラーである。祖母の存在は、クロエははじめから想定したが、彼女だけは、その範疇の外なのだ。

「いや――気にしないでいい」

一方、一目散に背を向けて逃げ出したホークと、残る配下の男（モヒカン頭をした彼の名はモルドと言うが、これは全くの余談である）。彼らの逃走に、果たしてクレハは一瞬にして追いついた。とても老婆のそれとは思えぬ神速。常人離れした健脚――という訳ではなく、彼女が“縮地”と呼ばれる技術を用いた事を、分かる人物はこの場に誰もいないだろう。

「実（げ）に、軟弱」

枯れ枝のような老女の手が、逃げ走る彼らの肩にかかる。男達二人は、背後を返り見て――恐怖に目を剥いた。

そんな光景を遠巻きに見たアルマは、ため息を一つ吐いて、言う。

「私も、まだまだ未熟だと知れた――だから、ウィリアム、お前は剣を納めろ」

「僕の怒りの矛先はどこへ！」

「私にでも向けるがいい。引っ張ってやる」

「やめておきます」

ウィリアムは神妙に肩を竦めた。そんなやり取りに、クロエが静かに笑みを見せる。どことなく嬉気（うれしげ）だったのは、気のせいか否か、彼ら二人にはくみ取りかねた。が、それはきっと、ウィリアムが誰のためを思って全速力で空回りしているのか、という辺りに起因しているのだろう。

さておき。

「ところで、お前」

「エリオだ」
「何をやっているんだ」
アルマは首を傾げて尋ねる。呼びかけられた当のエリオは、道端に蹲って、ごそごそと暗闇で不審な行動を取っていた。目を凝らしてよく見ると、そこには倒された男の体がひとつ、転がっている。
「身包み剥いでるだけだけど？」
「……」
なんて無法者どもの集まりなのだとアルマは天を仰いだ。雲ひとつない月の夜だった。

Ｌｅｖｅｌ１３：『都市の暗がりに安息の幕が下りる』

かくして捕らえられた残る悪漢二名は、クレハ老の手によって、背中合わせにぐるぐる巻きに縛りつけられた。エリオは「一歩違えればオレもあっちにいた訳だァな」などと武具の類をかき集めながら嘯いていたが、ウィリアムらは神妙に彼らの姿を見ていた。それは即ち、彼らの処遇をいかなものとするか、という懸念に寄るものである。

「それこそ、ガードにでも突き出せば、それで済むんじゃないか」とはアルマ。とはいえウィリアムにとっては頷きかねる言葉であった。襲われた、当のクロエにとっては尚更のことである。老婆は相変わらず泰然とした態度を崩さなかったが。クレハが問う。

「所属、名前。そうね、ついでに、この小さなお店を態々狙いに来た理由でも――教えて下さるかしらね」

「……“鷹の爪”……荒野（ブライル）の国所属のクランだ。見ての通りの御破算だがな。代表が俺……ホークだ。他の奴らはいいだろ。どうせいちいち覚えてらんねえだろうよ」

縛られた男の一人がどこか投げやりに答える。虚言を吹くような様子は無いが、誠実に答えてどうにか解放してもらおうといった気配も見られない。いわゆる、自棄っぱちなのだろう。共に縛られたモヒカン男はぐったりと頭を落として気絶していた。先刻の逃亡の際、強烈な一撃を貰ってしまったに相違無い。

「――“商店”の依頼、か？」

「さてね。俺らァ流れ流れてこっちに来たんでね、ここの事情は知ったこっちゃねえ。楽な仕事と聞きゃあやらねえ理由も無ェだろ？」

ふんと鼻を鳴らして肩をいからせ、居直る男。ウィリアムとてダメ元の言葉ではあったが、なんともはやといった有様である。「バリーさんの所、かしら」「恐らくは」老婆の問いに、ウィリアムは答える。ふうむと肩を竦めて、クレハはため息を吐いた。

「困ったわねえ」
「へん、何人かもおっ死んじまったろうしな、今更何が怖ェかよ。突き出すなら突き出せ、斬るなら斬れ、火炙りにでも何でもしちまえ。そこの餓鬼共もむかっ腹立ってんだろうぜ！？」
「まあ、僕はその通りなんだがな」
「？」
ウィリアムの言葉に、思わず首をひねるホーク。と、ウィリアムは、親指を立てて少年自身の背後を指さした。そこには鷹の爪団員達総員のくずおれた身体がアルマにひきずられ、山と積まれていた。そしてその男達ひとりひとりを、クロエが看ているといった様子である。
「なにも看てやらなくてもいいんじゃあないか？」
「……だいじょうぶ。代金分は、もらってる、から」
「貴女を襲った輩共だが」
「……でも、明日は、お客さん、かも」
はぁ――と、アルマは不思議そうに首を捻りながらも、おもむろに薬草などを処方するクロエの姿を見守る。職業意識か、あるいは本人の性質なのか。彼女の振る舞い――芯は強くとも何処か世間知らずの気がある――を見るに、あるいは後者の確率が高いのかもしれない。もっとも、クレハに総員が徹底的に叩きのめされた今となっては、男達とて下手に“復讐”などとは言い出せるはずもない。その点では、合理的な処置とも言えるのだろうか。
そんな光景を見ては開いた口が塞がらなくなっていたホークに、そそくさとエリオが歩み寄る。そして彼の耳元で、そっと何事かを囁きかけた。その様子はさながら悪魔のささやきであった。というよりも、確実に、エリオの頭頂部に悪魔の羽が生えていた。その程度には、悪い顔つきをしていた。良からぬことを吹き込んだ、という表現がこれほど似合う所業はない。
「……オイ、本当か、そいつは」
「本当だとしたら納得できっかい。オレは悪くねェ条件だと思うけ

どなァー」

　にやにやとエリオは端正な相貌を歪めていやらしく笑ってみせる。ホークは暫し、苦渋の、苦悩の表情を見せて、唸り声を上げ――その果てに、ようやくといった調子で頷いた。

「というわけで、お嬢ちゃんのお祖母さん、こいつら“同職ギルド”の者に引き渡すってどうッスかね」

「……――そうね。確信がない以上、それが最善手だわ。あいにく長い間、彼らを勾留してはおけないもの」

　商人ギルドと対立関係にある彼らに引き渡してしまえば、商人ギルドの支配下にあるバリー・バルザックは、その動きをいくらか制限されざるを得ないだろう。結果的には、彼ら祖母（おやこ）娘に被害が及ぶ可能性は下がる、といった寸法である。クレハは静かに頷き、承服する。

「了解。そんじゃ、ちょっと行ってきまさァ」

　そう言って、エリオは突然走り出した。さっと路地に入り込んで、見えなくなり、そして程なくして、戻ってきた。――数人の奇妙な者共を引き連れて。髭もじゃの男達やら、普通の人間も一応はいたが、中には一つ目の男といった奇妙な姿まであった。「クレハ祖母さん、御無沙汰しとります」「嬢ちゃん、無事だったかい――良かった良かった」「こっからは俺らの管轄だから任せときんしゃい」などと陽気な安堵混じりの声を口々に掛けながら、綺麗に男達を引き連れていく。嵐が過ぎ去るかのような、あっという間の出来事であった。

「……おい、エリオ、急展開すぎて、ついていけないぞ、僕は。むしろ全員が」

「同職ギルドの方々がさァ、商売敵の醜聞（スキャンダル）を欲しがるのは当然だろ？　んでまあ私兵を抱えてる“商店”に対抗する兵力もあればいいだろ？　というオレの思い付きによって引きとってもらいました」

　つまり、男達が引き連れていった彼らが同職ギルドの者であったらしい。思い返せば確かに、鍛冶や細工などにたずさわる者の気配

がしたように、ウィリアムは思う。
「というか、いつからいたんだよ！　あの人ら！」
「オレが朝から一日声掛けて回ってたんだぜ、見張り立てて貰うようによ、ちょっと自費出したんだぜ、第三者の眼が欲しいからさ、疲れたわ、マジ疲れたわー」
　意気揚々と調子に乗りまくりながら語るエリオを、クレハは柔和な笑みを浮かべたまま見つめている。あるいは彼の浅薄な思考など見通して、その上で先刻の問いに頷いてみせたのかもしれない、ウィリアムなどはそう思わざるをえない、それほどの懐の深さであった。一方のクロエは、半ば呆然としながらも――ああ、だから、いくつもの方向から、視線を感じたんだ、と回想する。そして、何もかもが元通りになったところで、通りに立ち尽くした。
　立ち尽くして、ようやくの思いで、安堵の息を吐いて――ふらりと少女は、意識を落とした。
　慌てて傍らのアルマが咄嗟に抱きとめ、その状態をうかがう。ぱっと見たところ、別段、異常は見られなかった。脈も落ち着いたもので、息もある。緊張状態を強いられ、意地を張り続け、ついに緊張の糸が切れてしまったのだろう。大急ぎで――無論、クレハもだ――駆け寄った三人も、アルマと共に、揃って安堵のため息を吐いた。
「運びますか？」
「いえ、私にさせて頂戴な。私の、孫娘だもの。――今夜は遅いわ、もう空が白んできた。三人とも泊まっていかれる？」
「宜しければ。クロエの容態が気になるので」
「出来ればお願いしてェですハイ」
　と、二人合わせて老婆に礼をしている時、アルマは、少女の身体をそっとクレハに引き渡すと、一歩身を引いた。その場を辞す。
「私は明日も職務がありますので。失礼させて頂きます」
「そう。……悪いわね、お嬢さん。ご老体が甘えてしまって」
「アルマと申します。宜しければお見知りおきを。――滅相も

ありません」
　あれほどのものを、見せられてしまっては。そうは続けずに、アルマは礼を落とす。
「有り難いわね。……覚えておくわ。アルマさん」
　その言葉を聞き届けると、彼女は背を向け、歩み出す。――と、不意に、赤い髪を翻し、振り返った。顔を上げたウィリアムに鋭い視線を投げかけ、下ろしていた剣を掲げ、その矛先をも向ける。それはまがうことなき、敵意だった。
「ウィリアム。此度は彼女に免ずる。――だが、グレイのこと、忘れるな。お前が流れる前に、決着（けじめ）はつけなければならない」
　グレイ。それはウィリアムも覚えている。己が剣を突き立てた者の名だ。彼女の零した、彼女の部下の名だ。罰を許されたとて、免じられたとて、ウィリアムの罪が消えるわけではない。つまり、そういうことなのだろう。少年は静かに頷いた。
「必ず」
「その言葉、確（しか）と」
　ではな、と一言残して、本当に彼女は去っていった。去りゆく彼女の背を見守る最中に、エリオがぽつりと疑惑の声を漏らす。
「――ウィル、あんな約束しちゃっていいんかい。だいたい、どこのどいつを刺そうが、切った張ったの仕事やってりゃ怪我すんのも死ぬのも普通、承知の上だろォが」
「甘いよな。でも、僕らはその甘さに救われたんだからな――“小さい女の子が襲われてるから”なんて理由で手助けしてくれる人が、何人いるってんだ、このご時世」
「そりゃ甘ェわ」
　――だからその流儀に乗るってわけかい？　と、エリオが悪戯気な笑みを浮かべる。その表情は、『お前も根本が人のこと言えねえっつゥか大概だろォよ』と、揶揄するように、どこか愉快げなもの。ウィリアムはその様子に、「借りがあるんだから、返すだけだ」と言って、小さく肩を竦めた。

「……良い子、ね」
ふふとクレハは笑って、一言だけ零した。優しくクロエを抱き上げて、薬屋の扉を開く。クロエが語っていたとおり、これが家主の七日ぶりの――帰宅と相成った。

夢をみた。夢をみていた。燃えていた。炎が燃え盛っていた。逆巻く焔が獲物に群がるかのように己を取り巻く。己の核を取り巻く。己の生を、その半生を過ごしていた店を、否、“家”を炎が取り囲む。己の半身を焼かれるかのごとく。己の命を灼かれるかのように。嗚呼、嗚呼。
――がばっ！！　と勢い良く、布団を跳ね飛ばす勢いでクロエは眼を覚ました。反射的に身体を起こして周囲を見渡す。家は燃えていない。そこは室内だった。が、どうやらクロエ自身の部屋ではない。ならば誰の部屋かというと、答えはすぐに出た。傍らに彼女の祖母、クレハがついていたからだった。そうだ、ここは彼女の部屋だ。たった一週間とはいえ空けていたとは思えないほど、隅々まで掃除の行き届いている一室。
「そそっかしい子だこと。もう少し、寝ていても良いのよ」
寝付きも宜しくなかったのか、硝子越しに窓の外をうかがえば、まだ朝日すらも見えない。クロエはにわかに寒気を覚え、震えをもよおす身体を布団の中に押し込みながら、ちらりとクレハに視線を向けて問う。
「……皆、は？」
「アルマさんは帰られたわ、きちんと礼は言った？」
こくり、とクロエが頷く。
「ウィリアム君とエリオ君には泊まっていって貰ってるわ。……そうねえ」
黒い髪の侍る小さな頭を、枝木のように細い手が撫でる。クロエは眼を瞑りされるがままになりながらも、不思議そうに首を傾げた。その所作は、十九という彼女の実年齢を鑑みれば、いささか幼いも

のだ。あるいは外見相応ではある、ということではあるのだが。
「閨語りに私のお話でもしようと思ったの、だけれども」
「……うん」
この七日、なんでもクレハ老は何ぞかの仕事のために、帝国――この大陸の中央に位置し、周辺諸国を実質的に統括する“世界帝国”に赴いたのだという。クロエとしては、そのたぐいの話は実に興味をそそられる。元々の性質が箱入りに近いわりには、あるいはその反動なのか、見知らぬ土地の、見知らぬ人々の話は、奇妙に心が踊った。布団をかぶったまま、もそもそとクロエは身体を起こす。
「だけれど――私はクロエの話が聞きたいわ。聞かせてくれるかしら、この一週間の事」
クロエは、不意の言葉に、反射的に頷いた。頷いて、そして、どこからどう話したものかと、すこぶる困り果てたかのように目尻を垂らした。
そして結局、初めから話すことにした。ある日、調合に必要な類の薬草を切らしてしまったこと。その日の朝市に見られなかったので、直に調達しに行って、そして紆余曲折あって、ウィリアムを助け、助けられたこと。エリオに攫われかけたこと。なんだかんだで有耶無耶のうちに巻き込んで、その内に一緒にいること。そして、皆で一計を案じ、“一泡”吹かせてやったこと。――言葉にしてみれば、これだけのことだった。そんな、これまでのことを、ぽつぽつと語りながら、クロエは驚いた。クロエ自身が驚いた。なんて荒唐無稽なんだ、と驚愕した。
そんなクロエの語る言葉を、クレハは黙して笑みと共に聞いていた。そして老婆は、皺の刻まれた額に手のひらを当てると、ふと尋ねた。
「彼らは――クロエの何かしら？」
クレハは何気ない調子で問うた。柔和に微笑んで、静かにクロエの答えを待っている。だからクロエは、大いに悩んだ。行きずりというには、深入りに過ぎる。知り合いというには、いささか記憶に

残りすぎる。ならば友人かといえば、何かが決定的に違いすぎた。だいたい、友人というのは、そう何度も死線を共にするだろうか。それはきっと、戦友という奴に当たるのだと思う。結局、クロエの出した答えは、これだった。

「……仲間、だと、おもう」

「仲間」

「……たすけたり、たすけられたり。……それに、一緒にいると、たのしい……かな」

成程とクレハは、満足気に、その答えに頷いた。そして、クロエを見やる。老婆自身が最後に見たそのときよりも、その姿は、少し大きく見えるような、気がした。――恐らく、背丈が伸びたという訳では全く無いだろう、残念ながら。小さく笑ったまま、老婆は自身の両腕（もろうで）を伸ばし、クロエの身体を抱いた。その手の中で、小さく少女の身体が震える。

「……良かったわ。無事で……本当に」

言葉に詰まり、息に詰まる。

「この“家”を守ってくれた事。……嬉しいわ。凄く。でも」

「……」

その矮躯を腕の中に収められたまま、クロエはじっとしていた。こくこくと、頷く。

「私は、クロエの方が、ずっと大切。――本当に、良かった」

「……うん。……ありがと」

そして、孫娘（クロエ）は改めて、おかえり、と言った。祖母（クレハ）が、ただいま、と応えた。

「おぉぉ……おお……おぉ……良かった……本当に良かったなァ……！　ううッ……ううう……ッ」

「僕は盗み聞きはどうかと思うんだけど、そこのところどう思う、エリオ」

「え？　ああ、なにを隠そうだな……オレはこの手の話に弱くって

な……なんというかそう親子愛的な……そういう……ううッ……うう……ぐすっ……」

「聞け！」

仲睦まじいやり取りが部屋の中で交わされている傍ら、エリオは廊下側から扉に耳を押し当てて、中の様子をうかがっていた。というか、ウィリアムの言葉の通り、盗み聞きだった。しかも、かなり堂々と。

「盗賊（シーフ）のオレが盗みをせずしてどうしろと？」

鼻をかみ、涙を袖で拭いながらエリオは言う。悪びれる振りすらもなかった。そして、整った顔立ちもそこはかとなく台無しだった。そんな様子を見て、呆れに肩を落としながらも、ウィリアムとて安堵の色は隠せない。

「そういえば、どうするって言うと」

「あァ」

「エリオ、君は、明日からのアテって何かあるのか」

「同職ギルドへの働きの恩にたかって酒を呑む」

「クズだな……」

自然と真顔で言ってしまう言葉を止められないウィリアムだった。一応は、本当に一応、目の前の男は年上なのだが、彼に払うべき敬意の持ち合わせがなぜか中々引き出されない。不思議なことだ。

「真面目に言うと根無し草だァね。またテキトーにふらふらするさ」

「一緒に行かないか？」

ウィリアムがエリオを見上げると、彼の言葉を遮るかのように、真剣な表情のままで言った。灰色の髪の下、暗い瞳に微かな光が浮かんでいる。小さな希望と、期待の彩りだった。「……あん？」と、エリオは顎に手のひらを当て、首をひねる。

「割とさ――どぉっちでもいいんだよなァー。オレ。そりゃ金とか、そこそこは欲しいけどよ、あんまり要らねえんだよな。盗みやってんのもそもそもが生きるためだし、目的意識が希薄、っつゥの？良い年して年下に言うことでもねーけどさ」

軽やかに笑いながら放たれた、その言葉を聞いて、ウィリアムは頷く。

承服して、その上で。

「もし、良かったら、考えといて欲しいんだよ。……最近気づいたんだ。連れ立つ仲間がいるといないとで、出来るか出来ないか、事が全然変わってくるってことと――」

そいつと気が合うのならば尚更、とウィリアムは続けた。ヒヒ、とエリオは悪辣な笑みを浮かべると、肩を揺らして、ばしばしとウィリアムの肩を叩く。

「オマケに酒が飲めるなら考えといたらァ」

「そいつは手厳し――」

瞬間、ウィリアムが、言葉につまる。相対していたエリオの頭に、老婆の手が掛かっていたからだった。視線を横にずらすと、クレハが、部屋の戸を開けていた。柔らかな微笑を浮かべるそこに他意は無かろう、無かろうが、しかし得も言えぬ圧迫感を感じたのはウィリアムの気のせいだろうか。いや、気のせいではないと思う。これが――年の功か。

「今日は、もう遅いわ、休んでおきなさいな。それと」

「ハイ」

ウィリアムが正座をする。

「気にしてくれたのなら、きっと喜ぶわ――けども、盗み聞きは良くないわね、エリオ君」

「ハイ……」

全力で肝を冷やしながらエリオが答えた。

「それじゃあ、お休みなさい」

ぱたり、と扉が閉ざされた。ウィリアムは神妙に膝を払って立ち上がり、呆然と立ち尽くしたままのエリオの身体を引きずり、寝床に向かう。ずりずりと床に擦りつけられながら、エリオは沈痛に口を開いた。

「祖母ちゃん、超強ェ」

「僕たちは、それを、知っていたはずなのに……」

もう、夜が明けかけていた。

Ｌｅｖｅｌ１４：『宴と後始末』

「初めに星が生まれた。星は天を輝かせ、同時に闇を産み、そして遙か遠き地を照らした。二日目に、火の精霊は太陽を空に浮かべた。二日目、土の精霊が大陸を削りだした。三日目、水の精霊は海を大地の裾野にはべらせた。四日目に風の精霊が、大気を世界中にめぐらせた。五日目、精霊たちは皆の力を合わせ、生命を育んだ。六日目、彼らはこれまでの営みを決して忘れぬよう、しかとこれまでのことを記録した。そして最後の七日目、彼ら四大精霊が休息しているよそで、悪魔はあくせくと働き、世に魔物という存在を産み落とした」

これは、この世界で一般的な宗教である“四大精霊信仰”における創世の記録だ。ただし、愉快な詩人達によって面白おかしく大いに色が付けられたものだが。

この詩は、労働者たちによって長く――それこそ何世代という時を隔ててなお――語り継がれている。というのも、それには理由がある。当然だ。この詩の本意が単純明快で、そして、多くの人間の心を打ったからだ。

即ちこの詩が意味するところは――こうだ。

“休日に働くやつは悪魔だ！　人間よ！　悪魔に生み出された魔物たちよ！　汝ら罪なし！　休め！　呑め！　騒げ！　大いに歌え！　精霊もかく仰せられたのだから！　”

という訳で、ウィリアムらは酒場にいた。いつぞやかにも世話になった『旅の帳亭』の一階である。酒場は例え休日であっても意気揚々と営業中、その商魂の逞しさには精霊さえもひれ伏すだろう。そしてそこでくりひろげられているのは、残虐なまでのどんちゃん騒ぎだった。こんな宴が許されようか。まるで百鬼夜行。悪鬼羅刹。

酒が飛び交い、流言飛語が踊り、罵詈雑言が歌われる。飛ばされる野卑な賛美をいなして踊り子は流麗に舞い、詩人は金糸雀（カナリヤ）のごとく鮮烈な声を張り上げた。客は大よそが同職ギルドに属する男たちなのだろう。陽気に愉快な、痛快なまでの宴会だった。――しかも昼間っから。

「おい、ウィル、全然飲んでねェな!?　呑め！　もっと呑め！　浴びるように呑め！　クロエの嬢ちゃんをちったァ見習ったらどうだ!?　割とイケる口じゃねェのよクロエ」

「……」

「僕はともかくクロエの顔が赤いを通り越して青いんだが。口数が減ってきてるんだが。ただでさえ少ない口数が滅しそうなんだが」

「……きもちわるひ」

エリオの端正な白い顔は、すっかりと酔いに赤くなっていた。なんというか、こう、ありていに言って、ハッスルしていた。陽気極まりない彼は、豪快に酒を飲み干す。人の金で飲む酒ほど美味いものは無い。――とはいえ飲み過ぎは毒である。そしてクロエは、もう、ぐったりであった。テーブルの上に頬を乗せてうな垂れるクロエの背をさすりながら、ウィリアムは忙しなく酒場中を駆け回る酒場の娘に声をかけ、水を頼む。「はいー、少々お待ち下さいっ！」小柄な体躯、おかっぱに切りそろえた髪、小さな顔に鎮座する一つ目。いわゆるチャームポイントである。サイクロプスと、人の間（あい）の子（のこ）か。

「今の子かわいくねー?　やべくね?　ちょっと後で声かけるかなオレ」

「住み込みで働いてる子じゃないか。おばちゃんに怒られるぞ――クロエ！　大丈夫かクロエ！　なんかもう青いすら通り越してるぞ！」

クロエの表情は白から赤に染まり、そしてやがて青くなり、再び白に戻る、という過程を辿っていた。それ即ち、蒼白である。幼い少女にしか見えぬクロエが、はー、はー、と尋常ならざる息を吐い

ている姿は、何とも言えず色っぽい。いや、そうではない。ウィリアムは不埒な考えを振り払いながら、彼女の背をさする作業に暫し従事した。水を持ってきてもらい、礼を言うと、おもむろにクロエに飲ませる。

幾許か彼女の顔色が回復し、ウィリアムはほっと一息吐いた。エリオは「回復したっぽいしまだ呑めんじゃね？」と抜かしていた。きひひと悪辣に笑い、不意に顎で促す。

「いっぺん休んでくりゃどォよ。部屋一個あてがって貰ってんだよね」

ほいとエリオは軽い調子でウィリアムに何かを投げた。部屋の鍵だった。ぱしんと受け止め、一瞬の黙考の後、というか間に、クロエがゆっくりと立ち上がる。ゆらりゆらりと不安定にうつろいで揺らめく身体の有り様は、どこか幽鬼じみていた。

「……ちょっと、だけ……やすみ、たい」

「それじゃあ、ちょっと行ってくる、クロエ、そっちは階段じゃない、壁だ！」

「うぃ、てらっしゃい」

ごつん。という嫌な音がした気がする。重々しい面立ちでウィリアムはクロエの身体を支えると、ニ階に連れ立っていった。エリオはにやりと笑ったままの赤ら顔でそれを見送ると、追加の一杯を注文する。

そして、ついでにと言っては何だが、隣のテーブルの男たちから、軽くその後の進捗の話を聞いたりすることが出来た。先日の『鷹の爪団』の件である。実力そのものは中々悪くない様で使える、些か気性が荒ェが俺らには丁度良い、云々。なァるほどねと緩やかに聞き流しながらエリオがグラスを傾けていると、不意に、音がした。騒音じみた馬鹿騒ぎの中では、かき消されかねないそれだったが、にしても目立つ——足音だ。かつりこつりと甲高く床を叩く。それにエリオは違和感を感じた。

違和感そのものが、エリオのテーブルの対面に座した。

メイドの衣装を身に纏った女であった。白い。まるで、生まれて以来（このかた）、一度も陽の光を浴びていないかのような白さだ。どこの貴族のお抱えだとエリオは眼を丸くした。そして、その美貌に目を見張った。なんだろォなこれ騙されかけてるオレ？　と一瞬考えながら、酔った頭を高速で回転させるエリオ。

「どちら様ッスかね」

「既に忘れ去られているとは心外ですね――全く」

眼前の女、否、恐らくはエリオと同年代――未だ少女の領域であろうか。彼女ははぁと静かにため息を吐くと、駆けつけにエールを一杯注文する。どうやら彼女の言葉によれば、エリオは彼女のことを綺麗さっぱり忘れているらしかった。改めて、エリオは彼女を詳らかに観察する。黒を基調に白いラインのメイド服はロングスカート、二つ結いにされた髪はロングの藍色、エリオを見やる眼は鋭く翡翠色。――そこで何かが引っかかった。引っかかった瞬間に、青年は勘づいた。そして、倒れた。がたん！　と派手な音色を響かせ、椅子ごとひっくり返るエリオ。ずりずりと地を擦って後ずさりながら、彼は彼女を指さした。

「あ――あんたは！　あんたは！　つゥか、なんでここに！　つか、寝てろよ！　四階から落ちただろ、お前！　めちゃくちゃピンピンしてんじゃねェかよ！」

「気付きましたか、御機嫌よう。つくづく阿呆ですね、あなたという方は」

周囲の男が、なんだ捨てた女との痴話喧嘩かと野次や冗句を大いに飛ばしてくる。それらを笑い交じりにいなしながらも、エリオにとっては全くもって冗談ではなかった。思わず酔いも醒めるというものだ。

「――そしてその阿呆にとっちめられたとは、あまつさえ顔すらも見られようとは。私の一生の不覚にして憤懣遣るかたなしと言ったところです」

「あんた、プライベートでもそんな喋り方なのな」

気を取り直して、漸う座り直しながらエリオが言う。とはいえ、その服装を鑑みるに、今の彼女を果たして私的（プライベート）と称して良いのか、はなはだ謎ではあったが――酒を入れてしまった以上、似たようなものだろう。嗚呼と首をひねりながら、彼女は答える。

「性分ですよ。生まれてこのかた奴隷でして」

「そんな感じにも見えねェけど」

「頭に高級が付きますので。申し遅れましたが――“奴隷（ネレイド）の国”のネロと申します」

彼女、ネロはそぉと立ち上がると、どこぞの令嬢が如き礼をしてみせる。

その言葉を聞いて、エリオは得心がいった。いわゆる“高級奴隷”は、通常の奴隷とは全く異なる。先ず以てその高い能力からか、市民と同等に近しい人権を認められているのだから、これはただごとではない。おまけに、奴隷の国の出身と来ている。言葉の響きからすれば、まるで奴隷産業を大きく取り扱う国家であるように聞こえようが、それは半分正しく、半分は間違いだ。

奴隷の国は、奴隷によって創られた国だ。――詳しい話は、またの機会にするとしよう。

「エリオだ。――で、そのネロさんが何の用だい。ツラも隠さねェで」

「クロエさんを探しているのですよ。――嗚呼、嗚呼。危害を加えるつもりはありませんよ。そのお話は、すでに片がつきました」

訝しげな視線を向けるエリオの様子に気づいたのか、速やかにネロは言葉を付け足した。加えて、「仮といえども雇用主様は絶対ですからね」と肩を竦めてみせる。ビールのグラスを傾けながら、目元ばかりを向け、エリオは問う。

「それじゃ半分だぜ。その格好はアレか？　やたらに刺激してた警戒心をどうにかしようってヤツかい？」

「聞きますか」

「ああ」

かたんとグラスをテーブルの上に置きながら、エリオは真顔で問うた。酔いも回り切ってはおらず、その表情も大よそ平静のものに見える。ネロは酒精を一口して間を置くと、無表情に口を開いた。
「実は私の生まれた村では一族以外で初めて顔を見た殿方に」
「ごめんやっぱ聞かなくていいわ」
「――冗談ですよ」
「なんだよ冗談かよ焦らせんなよ」
「以前は本当にそういった風習もあったのですけどね、形骸化したのでしょう。一応、残ってはいますが。申し訳程度に」
へぇ珍しい風習もあったもんだなァ、とエリオは頷くと、おむろに興味本位で彼女に尋ねた。
「どの程度に残ってるのん？」
「好いた殿方にこそ処女（おとめ）を捧げるべきである、といった程度には」
「めちゃくちゃ残ってんじゃねェかよ！　やめろやめろ！　悪しき風習は消しちめえ！」
エリオは一気に捲くし立てると、やけになったように勢い良くグラスを傾ける。ネロはそんな姿を見てか、おかしそうにほのかな笑みを浮かべた。
「で、もう半分はクロエが聞く話なんだな」
「……おはなし？」
その時、宴の騒ぎに紛れて、ウィリアムとクロエが帰ってきていた。驚くべきは順応の早さか。ネロの存在に驚愕を覚えていない辺りが。極々自然にテーブルに座しながら、ウィリアムはりんご酒に口をつけた。クロエは大人しくちびちびと水を飲んでいる。その顔色は先刻と違い、いささか血色良い色を取り戻していた。
「なんだ、もうちょっとゆっくりしてくりゃ良かったんだぜ、つかウィル、あれだァな、そうろ」
「エリオ、君は一回しぬべきだ」
ウィリアムの暴言にひひひははとエリオが下劣に笑う。クロエはテーブルの上に頬をぺったりと伏せさせながら、やおら首を傾げ

ていた。そこがもはや少女の定位置と化していた。
　再びネロが彼らに名乗った所で、そうですね、と彼女が場を取次ぐ。
「クロエさん――そうですね、ウィリアムさん、エリオさんが聞くにも、問題は無いでしょう」
　ゆるりと彼らを見渡し、そう前置いて。
「つい先刻、クレハ様とバリー様が直に話し合いまして、その話が纏まりましたので、お伝えに参りました次第です」
　その言葉に――三人が共々、驚いた。

「非道い有様ね」
「おかげさまでな」
「罰でも当たったのかしら？」
「返し矢というヤツだろうな」
　会話は、軽口の応酬から始まった。そこは“バリー総合商店”、最奥部。クレハは朝っぱらから、単身でそこに乗り込んでいたのだ。もちろん、暴力的行為などは伴わずに、しっかりと約束を取り付けて。
「――それは何のつもりだ、わびの品か？」
　迎える男は“商店”が主、バリー・バルザック。ただし、ベッドに臥せったままの姿だった。茶色い髪も包帯に包まれ、あちこちに怪我や傷の痕跡がうかがえる、痛ましい風体である。とはいえ、大目玉を食わされても、口は効ける。商談は取り付けられる。そして、以前までは商店から薬屋に対しての申し出が全てだったのだが、その逆は――これが、初めてだった。
　ならばこそ、病身でもなんでも引きずって行ってやろうという、心構えで、バリーは面会を許した。商人であるがゆえの、矜持だった。
「わび？　ふふ、おかしなことを言うわね、私たちは互いに疚しい所を抱えながらその実、全き（まった）証明は出来ないわ。そうでしょう？」

だからこれは単なる見舞いの品よ――と、クレハはその老いた相貌を笑みにほころばせながら、ベッド脇のテーブルに、布の巻きつけられた酒瓶を置く。バリーは、ぱちぱちと瞳を瞬かせた。商人であるところの彼にも、見覚えのない酒類だったからだ。「東国――私の祖国のものよ。“冷酒”と言うの」彼女はそう言いながら、ベッド脇の椅子に座する。細枝のような老婆の痩身を乗せたとて、それは軋みもしなかった。

「……食えん婆さんだ。――で、なんだ？　よもや土産話を肴に酒を酌み交わそうなどとは言うまい」

「ご名答だわね」

「このババア私じきじきにでも這いずってぶん殴ってやるそこで待ってろあいたたいでででで」

怒気に満ちた声でバリーはベッドから這い出ようとして、身体のあちこちの骨を軋ませ、肉のあちこちが剥離しそうな感触を感じ、速やかにやめた。その様子をクレハは静かに見守っている。俯瞰するばかりでは、さながら親子のような関係にも見えた――というよりも、事実、親子ほどの歳の差がバリーとクレハの間には存在しているのだが。

バリー、二十九歳、商人。ギルド内での立場悪化の危機。

クレハ、七十一歳、薬師。生涯現役。

「もちろん、嘘よ。きちんと、商売の話をしにきました」

「……」

にこにこと人のよい笑みを浮かべるクレハに恨みがましい視線を向けかけるが、ごほんと咳払いをすると――バリーの瞳が真剣味を取り戻した。

「聞こうか」

その言葉に応えて、クレハは、外套の内側より、紙の束を取り出した。否、バリーはそれが一瞬、紙の束に見えたが、その実、しっかりと一冊に纏められている、ということに気付く。

「教本か。薄っぺらだが」

この時代、未だ印刷は、始まったばかりの技術だ。ゆえに、印刷物のほとんどは宗教書で占められる。それが自然のことだ。老いた手がバリーに促し、彼はそれを手に取り、何気なくぱらぱらと捲る。瞬間――その本がなんなのか、気付き、バリーは、それを取り落としかけた。

「おい、これは」

「私の売り込ませて頂く物。“技術”を売るわ」

それは――“どくけしそう”の調合書だった。

「それを手土産に、友好的にお付き合いしましょう、と早い内に言いに来たかったのだけれども……すっかり遅くなってしまったわね。本当に。もう少しで、手遅れになるところだったわ。――あなたも、私も」

「……――」

バリーは真剣な表情で、その紙の束を捲る。何度も繰り返し見直す。見定め、値踏みするかのように、穴が空いてしまいそうなほど熱のこもった視線を向ける。そして、成程、と頷いた。

これを量産すれば、その販路は、商人ギルドに独占されてしまっても、一向にかまわないのだ。なぜなら、売れれば売れるほど、技術は広まるのだから。無論、長い眼で見れば、ギルドの内部で技術そのものを独占しておくほうが、利益は高まるだろうが――誰もが長期的な視点をもって、商売が出来る商人ばかりというわけではない。否、むしろ商人ギルドに売上、即ちノルマという概念が付き纏う以上、今すぐにでも利益を上げたいギルド所属の商人は、少なくないだろう。

「――面白いッ！！　げほッこほッかはッ」

「傷に響くわ」

叫びを上げては咳き込んでと忙しないバリーの様子を笑いながら、クレハは足を組み、頬杖をつく。その口元に、静かな笑みが乗せられていた。静かに提案を差しかける。

「……率先して、その商品をさばいてくれるかしら？　必要ならば

此方からもいくらか出資しましょう。利益はそちらに委託させて下さいな」

「く、はは、お得意の商人との関係はどうするつもりですかな、クレハ殿？」

「過去の栄光にいつまでも頼っている程、老いてはいないわ」

クレハは不敵に微笑んだ。

バリーが無敵に哄笑する。

「承知、委細承知したッ、休日働きも悪くはない！　今の私ならば酒のひとつでもなんでも付きあおうじゃあないかッ！」

「そうね、若し宜しければ、“ためし”の人材を一人、お貸し頂きたいわ。私の技術のかけらばかりは飲み込んで貰いたいのよ」

じっと老婆が見つめる視線に、ふむ、とバリーは冷静になって熟考した。そして、思い当たる顔――そう、つい先日までは執拗に姿を隠していたはずが、唐突に顔を晒した彼女だ――を、思い返して、ぽんと手を叩いた。

「仮の長期契約を結んだ娘が、まあ、思うところでもあったかは知らんのだが、暇（いとま）を申し出てな。残りの期間を出向させよう。その後は好きにすればいい」

「助かるわ」

ふふ、とクレハは――にこやかに笑んでみせた。すこぶる機嫌も良さそうにして。

――かくして契約は成立したのだが、この後、こっ酷く飲まされたバリー・バルザックが、数日間つぶれっぱなしだったことは、全くの蛇足なので、語らずに置いておくとしよう。

「――と、そういった次第で。長からぬ間やもしれませんが、お世話になります」

ネロは静々と頭を落とし、恭しく礼をする。メイド衣装でのその仕草は、驚く程にさまになっていた。ははあクロエのお祖母ちゃんの遠出してでもやらなければならなかった仕事とはそういった類の

話だったのだな、とウィリアムらはおもむろに納得し、頷く。
「……うん。よろしく、おねがい、します」
もそもそと顔を上げたクロエが、姿勢を改め、ちょこんと小さく頭を下げた。
「なるほど。……となると、僕とエリオは宿を確保しなきゃならないな」
「……『こんなこともあろうかと』って……お祖母ちゃんが、地下室、掃除、してた」
「めちゃくちゃ準備万端じゃねェか婆ちゃん」
かははと飲みっぱなしのエリオが笑う。
ウィリアムは些か申し訳も無いように肩を竦めていた。
「世話になれるのは僕としても有り難いんだけど」
神妙なつぶやきを落としながら、ちまちまとりんご酒を口に含み、嚥下する。芳醇な甘みと、そして控えめの酸味が口腔に広がった。が、飲む酒の味もどこか苦い。ウィリアムはこういったことに、何かと生真面目な性分なのだ。そんな気難しい面をした少年の顔を、クロエがゆらりと見上げる。酔いのさめかけたほろ酔いの表情。
「……皆と、一緒、のが……うれしい、よ？」
「そう、か？」
ふむ、とネロが頷くと、おもむろに彼女はテーブルの上に乗り出した。ウィリアムの傾けるグラスの底を、おもむろに引っ掴む。そのまま手のひらに、にわかに力をこめた。
「ななななんだろう初対面ながら僕は何か悪いことを！？」
「殿方がそれではなりません。だいたい、その飲み方はいかなものですか。かくなる場では思い切ることが肝要です。さぁ、ぐいっと」
グラスの傾きはほとんど垂直になった。喉まで流れ込んだ。ウィリアムは鼻から酒が逆流しそうになる感触を初めて感じた。
「がぼあああああああ！？」
「……う、うぃるーっ！」
ウィリアムの絶叫に悲痛な叫びが重なり、満足気なメイドの吐息

と、酒に濁ったエリオの爆笑が、大騒動の最中になお響き渡っていた。宴会はまだ、終わる気配すらも見せない――。

Ｌｅｖｅｌ１４：『宴と後始末』（後書き）

「クロエ」
「……うん」
「多分、あれだ、僕は冒険者というか、いわゆる根無し草というやつだろ」
「……ウィルも……エリオも、だね」
「だな。だから、こう」
「……いつかは、流れる？」
「それだ。で、その、なんだろうな。あんまり深入りすると、迷惑なんじゃないかと、思っちゃうんだよな。仲間にいて、ほしいのは、確かなんだけど」
「……うん」
「三人でさ、こう、世界を回れたら楽しいと思うんだよ。目的とか抜きでも。でも、クロエにはさ、きちんと帰る家もあるわけでだな」
「……かんがえ、とく」
「え？　いやちょっとまったクロエ、その」
「……そろそろ、もどろ？」
「ハイ」
――――そんな間隙のような閑話。

Ｌｅｖｅｌ１５：『幻想の種』

冒険者に必要とされるものの一つに、嗅覚がある。宝の匂い。力の匂い。厄介事の匂い。例えそれがきな臭くとも、面倒であろうとも、それがゆえに金銭の影は付き纏う。雑多な情報からそういった匂いを嗅ぎ分けて、彼らは受ける依頼を吟味する訳だが――かの酒宴から数日と経たぬ内の事、ウィリアムは酒場『旅の帳亭』にて、思わず訝しげな視線を店主に向けた。

「……エルフ？」

「あァ。なんでも、最近、や、ちょいと前かね。ここらに出来たダンジョンに、迷い込んだ間抜けが、見たんだってさ。まだちっちゃい子どもって言ってたねえ――クロエちゃんと同じくらいじゃあないかい？」

店主の妙齢の女性、というかおばちゃんであるところのイルが答えた。やおらグラスを磨きながら、このくらい、と親指と人差し指の間の距離を示す。いや、流石にそこまで小さくはない。ウィリアムは真顔で首を振る。そしてあいにくながら、子どもでもないと否定するべき当人は、この場にはいなかった。

「そんな馬鹿なことが――無い、こともない、のか？　うーん」

カウンターに座するウィリアムは、神妙につぶやき、唸り声を上げる。安物の硬くなったパンを牛乳にひたして、一口。その傍らで当然のように酒精を傾けていたエリオが、飄々と口をはさんだ。

「エルフなんつってもよ、それこそ詩とかお話の中でしか聞いたことねェよ、オレ」

「僕もだな――あ、いや、記録なんかでも見た覚えはあるけど」

「あたしもなんだがねぇ」

小さくため息を吐いて、イルはことりとグラスを置く。――そう、彼らの言葉通り、この世界においてエルフの存在は一般的ではない。存在した、という記録は散見される。いわく自然と共に生まれ、精

霊と戯れに生き、そして世界に還ると。しかし、確かな証拠は残されていないのだ。ゆえにそれは、幻想の存在に等しい。

「どうも、見つけたやつの頭がどうかしちまったって訳でもないみたいでねえ。そのダンジョンがね、いきなり森の一部が“迷宮化”して出来たモンだってのも事実なのさ」

「迷宮化、っつゥと？」

「仮定の話だがね、ある一点を中心とするだろう？　その中心に近づこうとしても、入り口に戻されちまうんだと」

「ははァん」

それでどうにかならんもんかという依頼は来てるんだがねぇ、とイルは困った様に呟く。困惑は、至極当然だろう。冒険者の側としては、胡散臭すぎるのだ。何ぞに惑わされぬとも限らないのだから、それこそ腕っ節ひとつでどうにかなる仕事を請け負う方が、よほど確実だ。出来るか出来ないか分からない仕事よりは、確実に出来ると分かっている仕事を選ぶ。誰だってそうする。

「よし、やろう」

エリオが酒を吹き出した。何度となく咳き込む。

「お、やってくれるのかい？　それじゃ、頼もうかねえ。こんなに金になりそうな話なのにねえ、食いつきが悪くって参るよ、あたしも」

ウィリアムははっきりと頷いてみせる。若いのは骨があって良いと酒場の主は豪快に笑い、さらさらと羊皮紙に何事かを書きつけていった。と、ようやく落ち着きを取り戻したエリオがウィリアムを見る。狂人を見る眼だ。以前もエリオはこんな眼をしていたことがあったように思うが、それはきっとウィリアムの気のせいではないだろう。

「ウィル、お前、あれだな!?　実はなんも考えてねェだろ!?」

「いやいや。エルフ云々は置いておいても、探索してみる価値はあるんじゃないか？　それに――」

ぴ、と指先を立てる。暗い瞳にほのかな光を浮かべて、にぃ、と

口元には悪童じみた笑みが浮かんでいた。笑うがままに、自信満々に、ウィリアムは言い切ってみせる。

「夢があるだろう！」

「バーカ！　バーカ！」

少年はその依頼に、浪漫の匂いを嗅ぎとったのだった。

ひとしきりエリオがウィリアムを罵り終えた時、イルが、あぁそうだと何かを思い出したかのように振り返って、彼らふたりに問う。

「セプテントリオン、って知ってるかい」

「うん。知ってる」

その仰々しい名を聞いて、ウィリアムは頷く――そして同時に、エルフのくだりを耳に入れたときほどのそれではないが、著しく怪訝そうな表情を浮かべた。そんな様をエリオは一瞥して、首を傾げる。

「オレは聞いたこともねェな。なんだそりゃあ」

「そうだな――“帝国”の周りに、周辺列強の七ヶ国ってあるだろ」

「あァ」

エリオは大人しく頷き、続きを促す。ウィリアムの語るとおり、“帝国”はこの大陸の中心部に鎮座する。そして、その周りをいくつもの国々が取り囲む形となっている。それら周辺諸国の中でも特に力を持った七つの国、これが周辺列強七ヶ国と称された。

「んで、その七ヶ国の協定で、それぞれの国の冒険者ギルド“最強”をかき集めて組織したのが“剣魔七星（セプテントリオン）”。非常時のための少数精鋭部隊、ってとこだったと思う」

「分かったような分からんような、だァな。で、それがどうかしたのかよおばさま」

ついでにもう一杯頼まァ、などとのたまいながら、エリオはおどけた調子で尋ねた。ことりとカウンターに置かれたグラスに、エールをなみなみと注ぎこむ最中、イルは声をひそめて囁く。

「何でも、その内の一人が、この辺りに来てるんだってよう。渡りの商人共がしきりに話してるからさ、気になってねぇ」

注がれた酒をもし口に含んでいたならば、エリオはまたそれを吹き出していたかもしれない。暫し唖然とし、そして自棄を起こしたかのごとく一気にエールを喉に流し込んだ。

「……僕としては、単純な人違い、とでも考えた方が、よほど納得出来るんだけども。この片田舎まで出張ってくる理由も、わからないし」

「まさか戦争起こしにきたわけでもねェだろ？」

「だと良いんだがねぇ」

どうにも近頃は物騒でねえおちおちノーラにも出歩かせられやしないよ、ああノーラってのはうちで働いてくれてる一つ目の子でねぇ――と、こういった具合に、おしゃべりな彼女の長話は延々と続くわけで、今しがた得られた与太話のような情報が、この場で深く鑑みられることはついぞ無かった。娘さん紹介してくださいよおばさまよォと臆面もなく言い切ったエリオに、笑みと共に拳が送られる。物騒さの一端を担っていたと言えなくもないウィリアムは、思わず苦笑いを浮かべるばかりであった。

さて、ウィリアムとしてはいささか恐縮の体なのだが、彼と、そしてエリオは現在、薬屋『黒枝』の地下室を借り受け、仮宿とさせて貰っている身分である。家主であるところのクロエの祖母、クレハには「孫娘の命の恩人よ？　このくらいのことで恐縮するものじゃないわ」と軽やかに笑い飛ばされたが。

そして、住み込みで働くことになったネロの存在もあわせて鑑みれば、随分と賑やかになったものだと言えよう。というか、人数が倍以上になっていた。もう一人の家主と言っても良いクロエにしたって「……家族が、いっぱい、みたいで、良い……かな」とのことで、結局、何だかんだで根無し草二人は、一時的ながらもこの家に居着いてしまっていた。根無し草でもなんでもなかった。それ即ち、準備のために戻ってみれば、一言二言ならず会話も交わされよう。ちょうど客のはけた夕刻のことである。

「また随分な与太に引っかかったものですね」
開口一番、ネロの言葉のナイフが直球で投げつけられた。まるで容赦や遠慮というものを感じられなかった。メイド服なのに。メイドなのに。とはいえその言葉は全くもって正論でしかなく、彼らとしても返す言葉がない。ウィリアムなど、おもむろにその場で正座をしようかと考えたほどだ。
「かれこれ七十年生きてきても、エルフは見なかったわね」
「……おばあちゃん、も？」
クレハの言葉に、クロエは蒼穹の瞳を丸くして驚く。否、本来は驚くことではないのだが、そもそも普通の人間は、七十年もの時を生きない。それほど長い時を生きていれば、エルフの一人や二人、見たことがあるのではないかとウィリアムとエリオもひそやかに期待していたのだが――その淡い希望は、ひとまず潰えたと言える。
「あったかもしれん希望がさっそく吹っ飛んだじゃねェかよ！　ウィル、勢いでの安請け合いはそのうち身を滅ぼすぜ！？」
「正直、すまんかった」
ウィリアムは真顔で謝りながらも、しかし止まる気は無いようだった。方位磁針（コンパス）、水袋、たいまつ、保存食などを速やかに小袋に詰め込んでいく。準備である。少年とて何も本気で信じているという訳ではないだろうが、それでも希望は捨てていないのだろう。常ならば暗い瞳に宿る光から、意志は死んでいないということを見て取れる。そんな様子を見て、クレハはふふとさざめくように笑った。
「けれども、そうね。いるかもしれない――否、私は、いてほしいと思っているわ。そも、いてもおかしくはないわよ？」
「おかしくは――ないでしょうね。然し、いるとすれば、それは不幸です」
果たして彼らに真っ当な生が望めましょうか、とネロは肩を竦める。その言葉に、クロエはカウンターに座したまま、考え込み――はっと気付いた。この世界に、エルフなる、幻想に近しい稀少種族が、仮に存在するとしたら。行き着く先は果たして見世物か、ある

いは悪趣味な金満家の所有物か――少なくとも、決して明るいものではないだろう。クロエは音もなく瞳を伏せる。

「……優しいわね」

老婆の口元が小さく笑みを刻んだ。

「つゥわけでもし仮にエルフが存在するとしてもあのダンジョンはそっとしておくという方向で行かねェ？」

「うーん」

「……でも」

ウィリアムが腕を組み、思考を巡らせかけたところで、ふとクロエの零した声に、意識が向けられる。首をかしげて、少女を待った。伏せた視線をゆっくりとかかげて、クロエがぽつりぽつりと言葉を紡ぎ出す。

「……だれかが、見つけた、のなら――また、だれかが、見つけても、おかしくは……ない？」

そうなった時、その誰かは、見逃してくれるだろうか。ひっそりと人の世を離れて生きる存在を、その存在のあるがままに、しておいて、くれるだろうか。目尻は下がり、蒼い瞳は揺らめく。どこか不安げなクロエの表情が、そう物語っているかのようだった。

「そう、ですね」

「そうなるわね」

「よし、行こう」

「うォーい！　早ェよ！　決断が早ェよ！」

かくしてウィリアムの決意はとどまるところを知らなかった。エリオに向けられるウィリアムの視線の真っ直ぐさよ。全くもってエリオは巻き込まれる形以外の何ものでもなかったが、よくよく考えてみれば先日までの事件に関しても、ほとんどウィリアムの勢いに巻き込まれた形だったという事実を思い出した次第である。はー、とため息も出る。

「まァ行くか……」

「……私も、いって、いい？」

思わず男衆二人が視線をクロエに注いだ。不意打ちのような言葉。彼女の言い出したことが契機なのだから――という責任から来るもの、といった様子でもない。その目にかすかな、しかし確かな好奇と高揚の意志が垣間見える。クレハはそんな様子を見て取ってか、ほとんど間を置かずに答えた。

「構わないわ、ネロさんもいるんですもの。お店は大丈夫」

「と、いうことだそうですよ」

――まさかの承服であった。よもやこんな事を予想して人手を要したのではあるまいなという考えが一瞬、ウィリアムの脳裏を過ぎったが、真相は老女の笑みの向う側である。

「是非無く無事に帰って来なさい。良いわね」

「……うんっ」

祖母と向かい合ったクロエは、威勢よく頷いてみせた。

その一方、ネロがウィリアムとエリオを一瞥して、常と変わらぬ平穏な調子で告げる。

「無事に帰らなければ大変なことになりますね。主にあなた方が――というか大変なことにしますが、私が」

「無事に帰れないのは僕らだけにとどめよう」

「ナチュラルにオレを含めたなァ！？」

彼女の拳の威力を知っているエリオとしては、全くもって気が気でなかった。純粋な戦闘能力ではかるならば、確実にクレハ老に次ぐだろう。是非ともウィリアムにも一度体験しておいてもらいたい、とはエリオの感想だ。本意としてはオレだけあんなモン食らってるのが気に入らねェ、の意となるだろう。

が、彼女は否と断じて言葉を続ける。

「揃って戻って来る様に、ということですよ――肝に銘じて下さいな。一時（いっとき）と言えど、家族の一員として」

ネロは言葉をそう改めて――楚々と礼を落とした。

刻限を示す日の出の鐘、白んだ空を眺めた時――探索を翌日の早

朝と定めていた彼らは、町外れの大森林を前にする。天高く青々と生い茂る木々、蔓や枝は無秩序に伸び、そのくせ入り口を指し示すかのように傾く木々が、森の中への門戸を開く。まるで闇に包まれているかのように、入り口からでは森の奥をうかがうことは出来なかった。僅かな隙間から差し込む光が、せめてもの救いといったところか。

「骨が折れそうだな、こいつァ」

がしがしと金髪をかき乱しながらエリオはため息。クロエはランタンを片手に、ほうと息を吐いた。感嘆のそれである。そしてウィリアムはと言えば、その森を見定めながら——あるひとつの引っかかりを覚えていた。

“剣魔七星（セブテントリオン）”。

己等の力ではどうにもならない、遙か彼方に仰ぐべき怪物、そんな存在の目撃情報。それこそエルフの様な幻想に近しい存在に似た、あまりにも縁遠いもの。その関わりを——僕は、軽視し過ぎたのではないか。そんな疑問が、脳裏をよぎる。思い過ごしだと言うのなら、それで良い。そして、ウィリアムはうだうだと悩み続けることをよしとせず、二人にその旨を話したのだった。

「関わり、か。考えてねェかったな。そもそもエルフなんて与太が信じられるかどうかって話な訳だが、もし、どこぞのお偉方が確かな情報を得て、怪物を動かしたとしたら——どう、だろうなァ」

「……ちょっとだけ、急ぎで、いこうっ」

心配に越したことはない、それが総括となった。各々の言葉に皆が頷きあうと、三人は樹海への一歩を踏み出す。

まるで、木漏れ日に誘われるかのごとく。

Ｌｅｖｅｌ１６：『木洩れ灯に惑う森林』

「暗いな……」

「森そのものが変わってちまってるみてェな感じだなァ、こりゃ」

空は白くとも森は暗い。その迷宮に、三人共々がそのような印象を覚えた。朝早くであるがゆえに未だ陽が上りきっていない、ということもあるのだが、それでも不自然なまでの薄暗さだった。ほとんど月明かりと変わらないのではないかというほどの幽かな木漏れ日。森の探索ということで黒い簡素なローブを着こみ、ブーツを履きこんだクロエが、ランタンに油をさす。周囲を木々に囲われた迷宮を進むためには、確かな灯火が要された。

「……薬草、摘みに、くることが、あるの、だけど」

「うん」

「……こんな……とこ、しらなかった」

ぽつりと呟き、クロエは不思議そうな表情で、きょろきょろと辺りを見渡す。周囲はまさしく迷宮（ダンジョン）と称すべき様相を呈しながら、どこか整然としていた。密集してはいながらも等間隔に木々が並び立つさまは、どこか意図的なものが垣間見える。なんらかの意志の介在とでも言うべき、侵入する者の感覚を損なわせる、いわば――結界。道行きの最中では時々、クロエが道端に屈みこみ、使えそうな草花などを摘み取っていた。

「まァ、知らなかったっつゥか――」

「出来た、んだろうな」

「……かな」

ウィリアムとエリオの間で、クロエがこくりと頷く。仮に何者かの襲撃に遭遇しようとも、身を盾とすることでクロエにまでは届かせまいとする隊列だ。エリオは方位磁針（コンパス）を片手に方角を確認し、ウィリアムはその手を剣にかけ、不測の事態にも対応せんとする構えを取る。

しかし万全の警戒態勢を取ったにも関わらず、行けども行けども、目立った異常は見られなかった。それはそれで歓迎すべきことだが、ウィリアムはそれをむしろ不気味だと思った。なにせ辺りは酷く静かで、音といえば枝葉の節々が風にざわめくくらいのものなのだ。それに加えて、ウィリアムとクロエの足音か。エリオのそれは、流石の盗賊と言うべきか、実に静謐な足運びであったが。そして、だからこそ、奇妙。

異変は、すぐに訪れた。

「ウィル！　右だッ！」

「――ッ！！」

エリオの声に、ウィリアムは咄嗟に振り返る。その目に映ったのは――白き狼。否、本来のそれを遙かに上回る巨躯だった。凶悪なまでに発達した牙、大木も一閃のもとに切り伏せる事が出来そうな爪。ガルムと称される獣牙の魔物がウィリアムに向けて牙を剥いていた。その異形を潜ませていながらに、先ほどの奇妙なまでの無音――それは即ち、襲撃者が、その気配を意識して消していたからに他ならない。

ウィリアムの構える刀身と、草木の影から振るわれた鋭い爪が、互いを打ち合いて火花を散らす。流石に重厚な鋼鉄は断ち切りかねたか。しかしその膂力はウィリアムを圧倒的に上回る。その力のほど、地を踏みしめたウィリアムの身体が土に靴跡を残し、滑らされるまでのそれ。

「クロエ、下がってくれッ！」

「後ろッから支援、頼まァッ」

「……りょう、かいッ」

ウィリアムの言葉に承服する少女がランタンを揺らして一歩飛び退き、少年を目掛けて更なる一閃が振るわれたのは、全くの同時であった。ガキンッ！　刃金の音を響かせ、ウィリアムの身が弾かれると共、エリオが前に飛び出す。方位磁針を懐中に放りこんで短刀を引き抜いた。

「……ぐッ！！」

ウィリアムが歯を食いしばって踏みとどまりながら、吹き飛ばされまいとする。かの化物は、ぐるるると唸り声を上げ、三匹の獲物を睥睨した。狩猟者の視線だ。振り抜いた爪を地に突き立てて、牙をむき出しにしている。小鬼（ゴブリン）など、比較にもならない。ともすればゴブリンチーフにも匹敵し得ようか。低級を軽々と飛び越えて中級を足掛かりとする白狼の魔物（モンスター）。――その白い毛皮に覆われた額に、がしゃりと音を立てて硝子の破砕音が響いた。

それは、後方のクロエが咄嗟に投げつけたフラスコだった。硬質な皮膚にぶつかった結果か、割れて弾けて中身がぶちまけられる。三メートルはあろうかという巨体にべっとりと付着する無色透明の液体。ガルムが――怒りに地を蹴った。その双眸の向う側にクロエを捉えている。立ち塞がるエリオはそのまま轢き潰されてしまいそうな勢いすら感じる。巨躯の躍動に烈風が吹き付け、エリオの金髪が乱れ舞い上がる。虫でも振り払うかのように無造作に払われる鋭爪。それを紙一重にエリオは躱す。衣鎧（クロースアーマー）の生地が、刃に掠めたかのように一抹、宙に舞った。

「はッ、やっちめェッ！」

「……――ッ！！」

クロエが、詠唱を完了した。精霊魔術。属性は“炎”。練り上げられた魔力が尾を引き、緋弾と化してガルムへと飛来する。――ズドンッッ！！　森羅に響き渡る爆音。吹き抜ける爆風が枝葉をざわめかせ、林木を揺らめかせる。しかと着弾した火炎は、ガルムの身にまとわりついていた“油”に引火して、弾け、斯様な発破を引き起こしたのだ。

そもそもクロエは、攻撃的な魔術を得意としないが――使いようによっては、どうにでもなる。

「やったか、ァ！？」

「いや、まだ、だッ！」

「……ッ」

クロエが息を飲んだ。風の吹き抜けた後に刃を構え直したウィリアムが、その向う側に、傷を負ってなお健在な白狼を目に止める。間近のエリオが咄嗟に飛び出した。残り火をその身に纏い、爆発に焦げ跡を残した身の、その額に跳びかかり――短刀の刃を突き立てる。青年の手に伝わる、ガキン、という固い感触。端麗な顔立ちが、慄きに歪んだ。それでも痛みにか、傷に響くのか。ガルムは身を仰け反らせてのたうつ。

「――硬ェッ」

「任せ、ろッ！！」

続いてウィリアムが疾駆する。身を沈めて刃をたずさえ、仰け反る魔獣の脇から割り込んで、その横っ腹へと、幅広の刃を切っ先から突き立てた。そこは、頑強な皮膚の備わっていない――柔（やわ）な部位。ズブリ、という確かな触感がウィリアムの手の中に残った。突き立てた刃を沈ませ、掻っ捌く。血流がほとばしり、溢れ、肉がこぼれる。

迷宮内に響き渡る、けだものの断末魔、雄叫び、最期の咆哮。森が、にわかにさざめく。

戦慄くその身から刃を引き抜くと共に蹴りをくれて、地に叩きつける。流石の巨躯、生命力も尋常のそれではない、暫く小刻みに震えていたが――血の流れはとどまらず、地を紅く濡らし続け、そしてやがて、止まった。

「……どうにか、なったみたいだな」

周囲を見渡し、そして動かざる屍を見下ろし、ぱしんと手のひらを打ち合わせ、一目。血濡れた刃を打ち振るってウィリアムは血払いする。

「ひやひや、だァな」

「クロエ、怪我、無いか？」

「……うん。だいじょうぶ。……魔力も、けっこう、余裕あり」

魔力を抑えて魔術を行使したのか、あるいは最近の短期間のことではあるが――何度も戦闘を経験した影響によって、成長したのか。

それは定かではないが、クロエは落ち着いた調子でそう言うと、ランタンを掲げる。ぱちぱちと瞳を瞬かせて、少女は二人を見上げて、ふと言葉を零した。

「……ちょっと、強く、なって……る？」

はてなと小首を傾げて、投げかけられたクロエの問い。

「僕は実感ないんだけど」

「わかんねェな――いや、でも、うーん」

エリオは腕を組み、首を傾げ、にわかに一考した後、ウィリアムにピ、と指先を向ける。ウィリアムが、なんぞとわずかに仰け反った。薄暗い瞳を不思議そうに白黒とさせる。

「なんだよ」

「ウィル、おまえさ、そもそもガルムとか相手に出来たんかよ」

「無理に決まってるだろ。三人だからどうにかなったけど」

堂々たるお言葉である。

「“たった三人で”か？」

こんなにも、簡単にか？　エリオは指先をウィリアムに突きつけたまま、淡々と言葉を叩きつける。クロエはほうと息を吐いて、しみじみと呟く。

「……成長、したの、かも」

「なのかな」

ウィリアムは無造作に手のひらを握り、開きと駆動させてみせるが、以前との明確な差異などは感じなかった。いや、当然かと思う。例え何かが変わっていたとしても、急激な成長などあるはずはない――その変化は、緩やかな弧を描いていることだろう。

と。

「あァあああああああ！？」

「……！？」

「なんだいきなり！　エリオ！　落ち着けよ！」

神妙に手のひらを見つめていたウィリアムのかたわら、突如としてエリオが驚愕の叫び声を上げた。青年の碧眼は大きく見開かれ、

愕然とした表情で眼を落としている。その視線の先には、懐から取り出したのであろう方位磁針（コンパス）があった。吃驚したクロエが、矮躯をかすかにわななかせながらも、その手の中をそろそろと覗きこもうとする。

「落ち着けッか！　取りあえず見れ！！」

ずいとエリオは、それを二人に突き出して見せつける。

ぐるん、ぐるん。

方位磁針の本針（ほんばり）と逆針（さかばり）が、やたらめったらにその位置を入れ替える。三人はその場を一歩も動いていないにも関わらず、その磁針は無秩序に回転し、あちこちを好き勝手に指し示した。

――誰がどう見たって、壊れてるに決まっていた。

「……物の見事にイカれてるな……」

「パッと見、傷なんかは無ェんだけど」

焦燥にか、エリオは手に冷や汗を滲ませる。すでに、森の奥へ奥へと踏み込んできてしまった身の上だ。絶望的とまでは言えないが、抜き差し決めがたい状況であることに変わりはない。

「……森の磁気に、くるわされた……の、かな」

「磁気……ぜんぜんそんな感じはしないけども」

「……侵入者を惑わすために、迷宮そのものが、そういう力を持つ……のは、珍しく、ないんだって」

おばあちゃんがそう言ってた、と肩をすくめてクロエはうそぶく。もはや使い物にならなくなった方位磁針をエリオは懐にしまい込み、空を見上げた。日はまだ高い。引き返すのならば今のうち――そういった刻限だろう。視線をウィリアムへと改めた。

「どォするよ。大した収穫もねェが、きっちり進退決めといた方がいいぜ」

ウィリアムはガルムの死体から毛皮を毟り、皮を剥ぎ、そしてその肉を採取していた。魔獣はあくまで魔物だが、しかし人間の食料、糧にもなりえるのだ。少年はゆっくりと頷いて、エリオを返り見ると、静かに言う。

「退こう」
「――意外に潔いな。クロエが心配ってェのもあるか？」
きっぱりと言い切るウィリアムの言葉に、ひひとエリオがからかうように言う。恐縮したかのようにクロエが身を小さくして、ランタンを両手にぶらさげたまま、視線を伏せてしまった。その表情はいささかもうかがえない。が、ウィリアムは真剣な表情で首を横に振った。
「さっき、殺した時、あの狼、雄叫びを上げただろう。そのとき、なんというか、木のざわめきみたいなのが聞こえたんだよ」
「あァ。それがどうした――ッて、それって」
「……仲間、を？」
「呼んだ、可能性は、あるんじゃないか」
あらかた、使えるであろうものを剥ぎ取り、袋に詰め終えると、ウィリアムは立ち上がる。一匹ずつでの各個撃破ならば相手取ることも不可能ではなかろうが、それこそガルムの群体などに襲われる事態となれば――ひとたまりもない。即ち地獄だ。エリオはそれを確認するためか、身軽な所作で手近な大木に足をかけ、するすると登っていった。高みから、遠方までを見渡してみせる。
「あァ――――いるな、四匹。ガルムだ。大きさはまちまちだが、どいつも成体だァな、ありゃ」
エリオは再び地に降り立つと、神妙に零した。その言語を聞いた二人と、そしてエリオはそれぞれに頷きあい、大人しく来た道を戻ることにする。そんなものをマトモに相手にするなどありえない、という着地点で、彼らの意見は一致を見た。
「なんか、目印になるよォなもん、あったか？　正直、オレはさっぱりだ。普通の森なら、そこそこ慣れてんだがな」
踵を返しながら、ここはいけねえ、とエリオは忌々しげに辺りを見回す。改めて見れば、奇妙なまでに整然とした迷宮内部は、侵入者に正確な位置を把握させないための物とも思えた。
「……薬草、摘んだ……から。……あと、たどれば、もどれる、は

ず」
「それ、だな。クロエ、大体の道案内、頼む」
「ま、いざとなりゃ、また上から見てみるさ」
「……ん」
こくり、とクロエは首を縦に。そのまま二人を先導せんとする少女の姿は、随分とちいさなものであるにも関わらず、どこか頼りがいのある背中に見えた。さくり、と一歩一歩、土を踏みしめながら、ゆっくりと歩みを進めていく。これまでの道程でも脇目を振ることは無かったから、真っ直ぐに行けば問題はあるまい。誰もがそう考えていた。実際にクロエは道中、何度か目印を発見しては、逐一それをウィリアムとエリオに伝えた。
そして、空の天辺に昇っていた陽が、ほんの少しだけ傾き始めた頃合いである。不意にクロエが、ぴたりと足を止めた。
「ん？　もうちょいってェとこかい」
不意に立ち止まる少女の様子に、エリオが後ろから言葉を投げかける。ゆっくりと振り返ったクロエは、ふるふると首を横に振りたくった。見ればどうやらその表情は、かすかに青ざめている。
「ちょっと顔色悪いぞ、クロエ。陽にやられたか」
「……た、たいへん」
心配そうに眉をひそめるウィリアムの声に、そうではないと遮って、クロエはわなわなと口元を震わせる。その目元にかすかな雫がにじんでいた。一体全体なにごとかと、ウィリアムとエリオに緊張が走った。「あれか、言いづれェことか、ずばり厠か」などとのたまうエリオの首に肘を打ち込みながら、ウィリアムは真顔で向きあう。
「……も、もどって、きてる」
「――――な」
馬鹿な、と、ウィリアムは言葉すらも出なかった。そんな馬鹿なことがあるはずがないと、真っ直ぐな道行きを進んできていたはずが、どこをどうすれば元いた場所に戻ってくるなどということがあ

りえるのかと。ウィリアムは、愕然とした思いを抱く。
「ほ、本当なのか、クロエ、それ」
「……」
半ば泣きそうな表情でクロエはしゃにむに頷いた。先導の役目を担っていた彼女のことだ、少なからず責任を感じているのだろう。エリオが、がしがしと金髪を掻きむしりながら軽い調子で言ってみせる。
「まァー、なんかの間違いか気のせいかもしんねェだろ。もうちょっと先行ってみねェか？　取りあえず」
「だな。――あと、ひとつだけ、クロエに言っておくべきことが、あるんだ」
「……うん」
クロエは、きっ、と瞳を見開いたまま、涙の粒を零さないように堪えていた。頷いて、真顔で見つめてくるウィリアムに相対する。
「正直、クロエですら迷うなら、僕でもエリオでも迷ってる」
「慰めてェんなら普通に慰めろよ！　巻き込むなよ！」
全くもって真っ当なエリオの突っ込みであったが、ウィリアムは困った様に頬を掻くばかりである。素っ頓狂なやり取りではあったが、ともあれ、慰みの言葉をかけようとしているということは、クロエにも伝わった。気落ちしてばかりもいられない。
「……あり、がとう」
と、一言零して、再び一行は歩き出した。涙はすでに乾いていた。そして程なくして、今度こそクロエは卒倒しそうになった。
「く、クロエェー！　大丈夫か！　気を！　気を確かに！」
「……う、うん……あ、天国の、おばあちゃんが……」
「お祖母さんいるのこっちだから！　健在だから！　そっちにはお祖母さんいないから！」
少女の身体が傾き、ぐったりと地に倒れかけるところを、ウィリアムが咄嗟に支える。エリオは、瞳を細めて、いっそ感心したような呟きを漏らした。

「……いやしかし、こりゃマジで、すげえな、こんなこと、あるもんなんだァな、エルフのくだりも信じても良いかもしんねェなこりゃあ――」

そんな風に独白するエリオの視線の先。

――先ほど仕留めたガルムの骸が転がっていた。

Ｌｅｖｅｌ１７：『妖精郷』

これは、まやかしか。惑わされているのか。三人の誰もが目の前の光景を疑ったが、それは確かな現実のようだった。その場に転がるガルムの死体をエリオが見聞してみれば、ウィリアムが剥ぎ取った痕跡があることから、確かに先刻のガルムであると分かる。クロエはウィリアムに身体を支えられながら、漸うと立ち直って自分の足で立つ。と、エリオがふと疑問の声を上げた。

「なァ、ウィル。おばちゃんが言ってたろ。なんだっけな、気づけば入り口に戻されてる、だったか？」

「それだな」

違いないとウィリアムは同意する。森に迷い込んだ街人が、いつの間にか入り口に回帰していたという情報。それもまた、この森が示す不可思議のひとつと考えられたが、しかし、それにしてもとエリオは首をひねった。何か、得心が行かないことがあるかのように。

「今のこの状況――そいつの全く逆だぜ。そもそも出ようとしても出られねェってなァ、想定外だ」

「僕は、奥で何かを守ってると思ったんだよな、それを聞いて。でも、それじゃ、辻褄が合わないことになる」

ウィリアムの推測が正しければ、方位磁針（みちしるべ）を失った彼らは、そのまま入り口へと送り返されなければおかしい。さりとて、実際に起きている現象としては、エリオの言及した通りだ。クロエは、ぐるりと辺りを見回して――不意に、ぽつりと呟いた。

「……侵入の、意志の……有無」

「オレらと、そいつらの違い……ってェわけか」

偶然か、必然か、その差異だ。静謐の森に、クロエの涼やかな声が良く通る。

「……誘い、侵入者を、排除する……仕組み、なのかも、しれない」

なるほど、と二人は首肯する。ありえない話ではなかった。この

迷宮を初めて見たときに受けた印象、それは、この森そのものが変化しているかのようだ、というものだった。その変化に、何らかの意志や目的が介在している可能性は、決してありえない話ではない。その意志が、果たしていかなるものかは定かではないが――彼らにはひとつ、心当たりが存在していた。

ウィリアムが、口火を切る。

「幻想種（エルフ）の持つ防衛機構、そう考えれば、納得は行くな」

魔物をけしかけ、それを撃退された結果。防衛戦のレベルを、引き上げられたのだ。そう考えれば――ふゥむとエリオは頷いて、値踏みするかのように視線を道の先にやった。

「行くしかねェか。仮説が合ってるかどうかはともかく、出ようとして出られなかったことが現実、無駄なことを繰り返してもしょうがねえ」

さっきのガルムの群れを相手にしなきゃなんねェ訳だが――と、エリオは肩を竦めてみせる。おまけに、その先に何が待ち受けているかも知れないのだ。辺りはまだ差し込む木洩れ灯に明るいままだが、じきに陽は傾き、暗闇が落ちるだろう。そうなってしまえば、状況は悪化の一途をたどる。そんな事態に陥るよりも先に、道を切り開くことが先決か――ウィリアムは改めて先鋒に立ち、二人を返り見る。

「行こう。日が落ちる前に片をつけて、少なくとも退路くらいは確保しなきゃあ」

「……うん」

「異義なァし」

頷き合い、彼らは再び歩を進め始める。脱出するためではなく、明確に奥へ奥へと進む意志を持って、誘われるがままに行く。先刻、ガルムの群れが確認出来たかと思われる辺りで、エリオがひょいひょいと樹上からの視界を望んだ、その時だった。クロエがぽつりと、呟きを零す。

「……すごい、ね。……自然が、意志を、持つ、なんて」

「エルフは自然とともに生きる、なんて良く聞いたよな。っても、これじゃあ、まるで――」

「……自然、そのもの……みたい」

彼女もまた同じように感じていたのか、紡がれかけたウィリアムの言葉を、クロエはその通りになぞってみせる。危険な状況にも関わらず、少女の顔に不安の色は薄い。むしろ楽しげなその表情に、ウィリアムは少し、いや、かなり意外に思った。

「――――なァッ!?」

と。

期せずして、エリオの叫び声が上がった。何度目のことか。禔せずに滲み出す驚愕の色に、ウィリアムは戦々恐々とする。少年にも、クロエにも、またか、という思いは抱けなかった。まるで他人ごとではないのだから。

「今度はどうしたんだよ！　もう何が来てもそんなに驚かないからな!?」

こくこく、とクロエはしきりに首を縦に振る。というか、これ以上に驚かされてたまるものか、といった様子であった。とん、と小さな音を立ててエリオが地に降り立つ。その顔色は、とてもではないが平静ならぬそれだ。過ごし良い自然の風が木々の合間を吹き抜けているにも関わらず、エリオの額にはじっとりと汗が滲んでいた。

「あァ、もう、なんだ！　見りゃ分からァよ、行くぞ、別に危なくはねェから！」

危なくは、ない。どういうことだとウィリアムは眉をひそめたが、構わずエリオは靴先を前に向けて歩み出した。少年はクロエに目配せするが、少女は、こくんと頷きを落としてみせるばかりだ。今は彼を信じるしかあるまい、そういう意であろう。先導するエリオに付いて森の迷宮を真っ直ぐに進めば、程なくして彼らは、その光景を眼にすることとなる。

先刻見たガルムの姿は、四匹。しかし、そこにいたのは、四匹どころの話ではなかった。パッと見では、誰もがその数を認識しかね

たほどだ。ゆうにその数、十を上回るだろう。エリオはため息を吐き、クロエの肩が呆けたようにずるりと落ち、ウィリアムは眼を白黒とさせた。まさしく、脱帽である。

そこにあったのは、十を越える――――ガルムの死骸だった。

そのどれもが一閃のもとに切り捨てられ、小さな山のごとく屍が折り重なっている。局地的に、地獄が具現したかのような有様。一体どこの誰が、このような惨状を作り出せるというのか。それも、恐らくは、たったひとりで。ウィリアムは無意識に十字を切っていた。

「これは、どうするか、考え直したほうが、いい、か……？」

「どうもこうもねェだろ――ヤベエのに出くわしたら全速力で回れ右、だ」

「……退けない、のが……つらい、ね」

ぽつりとクロエが呟きを零し、背を返り見る。そこに道が無いわけではないが、しかし、実質的には退路が塞がれているにも等しい。さながら迷い道の入り口。すぐさま退く、というその言葉には賛同しながらも――しかし、ウィリアムにはどうしても疑念が心中に残った。否、その疑いは、ウィリアム以外の二人にも必ず過ぎったことだろう。ただ、あまりにも悲観的で、どうしようもない仮定だったので、見てみぬふりを――してしまったのだ。

もし、此れほどの魔獣を捌いてみせる冒険者がここにいるとするのなら、しっぽを撒いて逃げ出したとて、どうしようもないのではないか、と。

そんな不安を拭い去ろうとするように、三人は適当な推論を交わしながら、ただただ歩いた。

「あれがその、なんだ？　剣魔七星（セブテントリオン）っつゥ奴の仕業だったりすんのかね、ウィルも入り口んとこで言ってたろ」

「僕はあれは単なる杞憂だとも思ってたんだけどな、だいたい、都合が良すぎる――いや、悪すぎるのか」

「っても、他に何がいるってェ話だぜ」

「……エルフさん？」
「アグレッシブなエルフだな……」
そんなエルフはどんなお話にも見たことも聞いたこともないぞ、とウィリアムは嫌そうな顔をした。剣使うってのもイメージでもねえなァとエリオが笑う。「……うーん。……肉、食べなさそう……だしね」真面目な風のクロエの呟きを、そういう問題かとウィリアムがおかしそうに突っ込んだ。一行に不思議と悲観の色はない——当面の食料には困らず、火種も少なからず用意があるのだから、一夜を越すくらいならば、どうにかならないでもない、といった推測がその所以か。暗夜で魔獣に襲われるリスクがあることに、変わりはないが。
と、歩み続ける内に、一直線に連なる木々によって織り成される通路の向う側に、開けた空間が垣間見えた。四方を木々に囲われるがまま、しかし開放感のあるその領域は、小さな広場とも呼ぶことが出来るだろう。
「……わ」
三人が、その領域に足を踏み入れる。むき出しの土の道はそこで途切れて、草木生い茂る地面はさながら芝生の体だ。木陰の隙間、燦々と降りそそぐ陽光は、疎らな木洩れ灯とは比べ物にならないほど眩い。時々に身に心地良い涼風が吹き抜け、草木を揺らがせる。魔物の、その影さえもうかがわせないような、穏やかな——自然の織り成す世界が、そこにあった。
「まァた、えらく毛色の違ェ場所だこと」
エリオはゆっくりと周囲を見渡してみせる。花に寄り添う蝶、草木を寝台にして眠る小さな妖精種。整然と、そして冷厳と自然の脅威を叩きつけてみせるかのような森林の迷宮に比して——なんと幻想的で、そして非現実的な光景か。小鳥のさざめきまでもが耳に届き、エリオは思わず呆れたようなため息をつく。
「いかにも中心部、だなあ。休憩所って訳でもあるまいし」
まるで秘境。その奥にまで脚を進めてみれば、小さな泉さえ湧き

出していた。少しずつ傾く日、赤らむ空が、水面に映り込む。このような場所が、果たして、どれほどの間、人の目を避けて存在し続けられるだろうか。ありえないと、ウィリアムは素直な感慨を抱く。

「……あ、そこ」

ついとクロエの小さな指先が、彼方、泉のかたわらを指し示した。いや。指し示されるまでもなく、その方向に視線を向ければ、ウィリアムとて理解し得た。ただ、ウィリアムも、エリオも――それがあまりに大きすぎて、その存在を、認識することが出来なかったのだ。この世界の、さらに中心に聳えるのだろう、それは遥か高く天を仰ぐ――大樹。

広がる木陰、そして、その樹の根元。ちいさな人影がひとつ、遠目からにも見える。

「……見てみっか？」

「行くだろ！」

「……うん」

各々に頷き合ってみせ、ウィリアムが先導する隊列で歩み出す。案ずるより産むが易し。というか、あまりにも迷いがなかった。暖かな日の下に反して涼やかな木陰から、少しずつ近寄って、その人影との距離を縮めていく。

そしてその正体を、見た。

木陰、大樹の根元に座した人影、それは――幼く見える、少女であった。背から腰までを流れて侍る金色の髪は上質の繊維のように。眠りこけているのか瞳は閉ざされ、その色彩は判然とせず。絹の貫頭衣に白い肌身を包んで、小さな胸を、ゆっくりと規則的に上下させる。そして――――尖った耳。エルフの証左。〝五番目の精霊〟とあだ名される幻想の種。

森林の主が、当たり前のようにそこにいた。

「――オイなんか当たり前みてェにいんぞ」

「迷子の子どもって可能性も――うん、無いな……」

少し遠巻きにその様子を見守る。男ふたりは真顔だった。幻想の

存在が、至極当然のような顔をしてそこに居座っている様子を見て、いっそ驚きの感情が麻痺してしまったかのようだ。一方のクロエといえば――

「……かわいい。……ちっさい、ね」

などという呟きを零していた。クロエ、君も似たようなもんだ。とは流石にウィリアムも言わなかった。というよりも、言えなかった。そして彼らをよそに、中心に存在するかの少女は、かすかな寝息を立てて寝入っている。気楽そのものであった。

「どうする？　……放っておくべき気が、僕としてはひしひしとするんだけども」

「っても、それじゃ問題が解決しねェだろ。一応は仕事なんだぜ」

起こそう。エリオは覚悟を決めた眼で言い切った。鬼の目をしていた。しかし、それは同時に決心の現れでもある。エリオが踏み出すと共に、ウィリアムもまた、一歩を歩み出していた。お前だけにやらせるかよ、といった心の通じ合いがあったかどうかは、果たして定かではない。

彼らが、エルフの少女へと歩み寄る刹那――――劫と突風が吹き荒れた。大樹に生い茂る緑葉が、互いに擦れ合いざわめく響きは、さながら自然の囁きのよう。後ろのクロエが、ふと前髪を押さえながら、空を見上げて――そして、自身の目を思わず疑った。

「――――……な」

凶鳥。

否、鳥ではなかった。それは、人だった。凄まじい速度と、落下を伴い、人の形をした影が、飛来する。その形状がゆえに人と判断するしかないそれは、その手に一振りの刃をたずさえて、前列に立つウィリアムの斜め上空より真っ向から、突貫していた。――目にも留まらぬ強襲、急襲。それは、疾すぎた。少年が刃を手にしたまま、その目を見開き、慄く。

「……ウィル――っ！！」

森羅に、クロエの叫び声が響き渡った。

Ｌｅｖｅｌ１８：『森の女王と渡り鳥』

「やばいッ！！」

エリオの警告――それがクロエの叫びと重なってウィリアムに届く。それとほぼ同時、ウィリアムは気取っていた。誤るはずもないほどの膨大な殺気を。それと共に引き抜いた剣を、天に掲げ、構える。

――バキンッ！！

音さえも置き去りにして落ちた凶刃。激突、重なる金属音、破砕の音色。その衝突の衝撃で、あまりにも呆気無く、ウィリアムの鉄の剣は――砕けた。蜘蛛の巣のような罅が刻まれ、根本から真っ二つに叩き折られる。何の使い物にもならない鉄屑と化す。中空からの一閃が、そのまま振り抜かれた。

「――――ッづ、あああァァァッ！！！」

踏みとどまることすら出来ない。決して小柄ではないウィリアムの身体が、風に吹かれた木の葉のように宙を舞い、空を切り裂いて吹き飛ぶ。飛んだ身体が頭から重力のままに地に叩き付けられ、地を滑りながら何度も草地を転がり、静止する。咄嗟に受け、止めた、はずだ。それは間違いない。にも関わらずウィリアムの身体は、全身に罅割れが走り抜けたかのごとく軋みを上げ――咳き込むと、げほ、と溢れる血液交じりの咳。

最早、咄嗟の防衛本能としか言いようがない。どうして逃げられるなどと思えようか。エリオは反射的に短刀を引き抜きながら相対する。眼前の、脅威と。地に降り立ったそれ――彼、その男は、確かに人間に違いない。

薄汚れた男であった。年の頃は四十に至るか否か、その体躯は常人を遥かに上回る背丈の大男。鬼（オーガ）にも見紛いかねない姿が、エルフの少女を背にして立つ。ぼさぼさに伸びた青黒い髪は背で纏めて括られ、ぎらつく瞳は、獲物を射止めんとするかのごとき獣じみた視

線を発する。顎元に点々と残る無精な髭、衣服はどうやら衣鎧（クロースアーマー）のようだが、しかしあちこちに綻びやほつれが垣間見え、まるで襤褸のような風体。その手には、背丈に見合って長大なる、鋼鉄の大剣があった。

エリオが果たして刃を構え終えるか、そういった瞬間に、男が更なる一撃を横薙ぎに切り込んだ。並大抵ならばまともに構えることも困難だろうその得物を、彼は軽々と振り回す。とても手の中にある短剣で、凌ぎきれるような代物ではない。おまけに、一閃は――凄まじく迅速であった。エリオは、冗談でなく、死を――覚悟する。

「……っぶないっ……！」

どん、と横合いから身体を引きずり倒される。クロエが横合いからエリオにタックルを食わせたのだった。凶悪な刃が頭上を通りすぎていく。

「――退（ひ）け。大人しくな」

男が二人を見下ろして呟く。重々しい声色であった。クロエが、じっと彼の様子をうかがうように、瞳を細めて見つめる。男は微動だにせず、振り切った刃を、ゆらりと肩の上に持ち上げた。クロエは、目をそらさずに、視線を掲げる。その背後から、ざくりと草原を踏み締める足音。

「ちょっとは、待て、よ！！」

疾駆せしウィリアムが、残る二刀の内の一刀――幅広の剣（カッツバルゲル）の刃を、ざくりと地に突き立てるかのごとく振り落とした。クロエ、そしてエリオと、男を分断する形で、合間に割って入る。まるで見当はずれの所に振るわれたかに見える一刀であったが、しかしその一手により、一寸の間が生まれた。否、止まってもらえたと言うべきか。大きく隙を晒さざるをえない、その一見無謀な行動によって。

この男は何者か、かのエルフを狙う者か。ウィリアムが男に向け、険しい視線を叩きつける。

「先ので懲りないのなら――死んでみるか」

「……ここを、まもって……る、の？」

振り上げられた刃の矛先が、ウィリアムへと向けられた瞬間、かすかにぶれる。クロエだった。緩慢に立ち上がりながら、彼女が男へと向けた言葉に――本来ならばそのまま振り下ろされていたであろう一刀が、宙に留まる。ウィリアムは漸うの思いで息を吐き、その場を一歩退いた。男が、ふうむと鼻を鳴らして、後方の少女に鋭く視線を投げつける。

「何故、そう思った」

「んだァな、見るからに怪しいぜこのオッサン」

「そこのお前は黙ってろ」

「ハイ」

起こした身を縮めて、大人しくならざるをえないエリオだった。先刻のウィリアムのやられようを見てなお、まともに戦えようとは、彼とて思うべくもなし。彼女の身をウィリアムとエリオらの影から、そう――唯一、観察の眼を光らせることの出来たクロエが、訥々と声を零し始める。

「……若し、仮に……害意があるなら、その子を連れ去ってる、はず。……私たちに、構うわけもない、し。……見る限り、それが出来る力も……ある、みたい、だから」

「それだけか」

「……ウィル……が、吹き飛んだときも、追い打ちを、かけなかった――なぜなら」

ゆらりと、今、彼女自身の盾の役目に徹しているウィリアムに指先を向ける。そして、ウィリアムと、そしてその男さえも通り越して向う側に視線をやるかのごとく、瞳を細めた。

「……その子を庇う、ため……離れるのを、良しと……しなかった……？」

淡々と声を紡ぐクロエ。そこで途切れる言葉は、即ち回答の提出を示していた。かくり、と小首をかしげる仕草はさながら、いかがなものかと答えを求むるかのように。対する男は、掲げた大剣をそのまま肩から下ろした。かちゃりと音を立て、宙に揺らぐ刃。

――ひうん。

風を切り、音を置き去りにして、ウィリアムの目の前、舌先三寸の手前に、刃が迫っていた。少年は微動だにせず、ただ、暗い光を湛えた相貌が、男の面(おもて)を見定めするかのように見つめている。巻き起こった疾風に、灰色の髪がふわりとかすかに揺らいだ。その頬を、じわりと冷や汗が伝う。――抑え切れない緊張の証左だ。しかし同時に、敵意を押さえ込んだ様は、即ち、クロエの言葉に命を任せているということでもある。

もしそれが、迂闊な言動であったならば、首が飛んでいたに相違無い。

「……話くらいは聞こうか。あのガキに手を出すつもりなら別だがな」

男はくるりと無用心に背を向け、真に刃を下ろした。ウィリアムは安堵のため息を漏らしながら、刃を鞘に収める。と、エリオがその背に、初っ端から遠慮のない言葉を投げ掛けた。

「待てよオッサン。そもあんたが、あの子どものなんなんだ、あまりにも――穏やかじゃあねェぜ」

「あんまりオッサンと言ってくれんな――レイヴンって者(もん)だ」

男は背を向けたまま歩を進め、眠りこけていた少女の近くに歩み寄る。ゆっくりと彼女を見下ろして、別に何をするでもなく、ため息を吐く。見れば少女は、先刻の騒ぎにも関わらず、何も意に介するところが無いかのように、平然と、依然として、眠り続けていた。幼い外見にも関わらずの度量か胆力なのか、あるいは。少しばかりクロエと似た所があるのか、しかしそれにしても、あまりにも、何事も無かったかのようだ。

恐怖を堪え得るというよりは――恐怖を、感じていない。

男、レイヴンはゆっくりと振り返り、がしがしと薄汚れた青髪を掻きむしりながら――漸う、エリオの問いに口を開く。

「このガキの、仮の――――保護者だ」

少しだけ気恥ずかしげに、彼は言った。

一同が、揃って愕然とした。

ぱちり、ぱちり。火種の弾ける音だ。焚き火に捧げられた獣の肉が焼け、油が滴り落ち、一層と燃え上がる。組み木の中心に据えられた炎は、周囲の草花に燃え移るといったことはない。暗闇の森林に一点の光源を生み、ひたすらに燃え盛り続ける。とうに日は傾き、辺りは夜に包まれていた。四人が火を囲い、座する。周囲は、不自然なくらいの静けさを保つ。穏やかな世界だった。

「……なるほどな。外ではちいと騒ぎになってたわけだ、まずったな、思っていたよりも早かったらしい」

四人のうち一人、レイヴンが、ぐいと瓶酒に口を付けながら、零した。さりとて、その表情に酔いの気配は一分すら見られない。

「早い、というと」

ウィリアムはやおら首をひねる。

――あれから三人は、素直に自分達の目的を話した。即ち、突如として迷宮と化した森をどうにかするべくの侵入であり、害意は無い、といった旨である。動機の中に幾許かの好奇が含まれていたことは否定できないが、その点はそっと伏せておいた。雉も鳴かずば撃たれまい。

「いやその前に、あの子どもはなんなんですってェ話が」

「エルフだよ」

レイヴンはこともなげに言い放った。なんだ、知っていたわけじゃあねえのか――とでも言いたげな様子で、実に何気なく。「思い当たる所は無きしにもあらず、ですが」とウィリアムが言い含め、だろうな、とレイヴンは頷いた。しかして彼はゆらりと、この広間の中心、大樹の根元を指差し示した。金髪に、楕円形の尖った耳――葉っぱに良く似ている――を持った少女。彼女はただただ寝入ったままで、微動だにしない。

「見た目ただのガキだが――エルフって生き物は面倒に出来ているらしいな。そもそも時間の感覚が人間とてんで違うんだろうよ、あ

あやって寝っぱなし、それも下手すりゃ数日間なんてザラだ。で――周りの環境を、自分を守るために、無意識につくりかえる」

「……は」

なんだその荒唐無稽は、とは言えなかった。さんざに自分たちの目で、見てきたものだ。体感してきたものだ。ゆえにウィリアムはただただ、感嘆の息を吐く。まあ食え、と兎でも捌いたのだろう。レイブンは串に突き刺して焼いたばかりの獣肉を手渡しながら、肩を竦める。

「日にちを追うごとに変化は顕著になる。一所（ひとところ）に放っておいたらあっという間に大迷宮の出来上がりだ――で、俺はあのガキを連れてその辺をほっつき歩いてる、と」

今回はその変化が早かった、そういうことだ――と、レイヴンは再び酒精を傾けた。億劫そうに見上げた空は、満天の星空だ。雲一つとて無く、遠く輝く月灯がやけに目立つ。

「つまり何が言いたいかというと、だ。――夜が明けたら此処を離れよう。悪いことをしたな。無用な疑いをかけた。ガキがこの地を離れりゃ、この森も元に戻る」

済まなかった。

意外や意外にか、薄汚れた中年の男は、二十と年のかけ離れているだろう彼らに、そう言って、大人しく頭を下げた。思わず三人の側が恐縮してしまうほどである。

「依頼はこなせることになる訳ッスし、万々歳ってェやつですよ」

「僕としては十二分に。一晩の滞在許して貰ってる身なんですし」

串焼きの肉と悪戦苦闘する彼らの傍ら、困った様に眉を下げたクロエが、小さく頭を下げ返して、ゆっくりと立ち上がった。草地を踏みしめて、大樹の根元――エルフの少女の傍に歩み寄らんとする。

「……この子、なんて、名前……です？」

「アウル、だ」

「……アウル、ちゃん」

クロエは少女の近くに屈み込むと、おもむろに手を伸ばした。そ

ろそろと、割れ物を扱うような手つきで。
「……気をつけな。そいつが自然をつくりかえるとは言ったが、同時に自然はエルフを守護する」
「――それは、なんというか」
「化物じみている、か？」
ウィリアムの言いかけたところを、レイヴンが続けた。歯に衣着せぬ物言いは、わざわざウィリアムらが言いふらしはせぬと考えたか、あるいは信じるものもいるまいという思考の上でか。こくり、と少年は静かに頷く。
「凄い、と、思う。……自然そのもの、みたいだ」
「第五の精霊――“森羅の精霊”なんて呼ばれることもあるらしいな」
それはあくまで物語や伝説などに語られるエルフの姿であったが。しかし同時にそれは、決して的外れというわけでも無かった。在り方そのものが、そう、ウィリアムの言葉通り、自然を具現化させたかのようだ。感嘆に、値する。
「……どうにか、ならない……の？」
「ガキじゃあなくなったら、無意識の内に面倒を起こすことは無くなるらしい、な。あくまで防衛機構だから、って見立てらしい。確かじゃないが」
「……となりゃァ、あと十年はこのままスかい」
「あいつ、今五十だよ。俺より十は年上だ」
「あァ！？」
素っ頓狂な声を上げるエリオを、レイヴンは豪快に笑い飛ばしてみせる。本来ならば途方にくれてもおかしくないような話だが、男は――その大人は、実に楽しげに笑ってみせていた。
「……ん」
一方で、クロエの伸ばした手が、少女に届く。そぉっと、その表面を撫でるくらいに淡く触れる。白く、柔い肌だ。ほんの少しばかりの力で、崩れてしまいそうな脆さ、儚ささえ漂わせる。クロエは、

ふにりといたずらに、その頬を指先で、押した。
ごづん。
クロエの頭に何かが落ちてきた。——少女のこぶし大に相当する大きさの木の実であった。脳天に直撃したそれが、鈍い音を立てる。声にならない声を上げて頭を押さえ、ごろごろと転がって悶絶しながらも痛みに堪えるクロエ。ふわふわ揺らぐ黒い髪に草木がひっついて、そこはかとなく儚い様相を呈していた。
「だから言ったろうが」
がははとレイヴンは笑い声を上げる。偶然か否かであるかは定かではないが、先刻までの話を統合してみれば、偶然でないようにも思えるのだから不思議なものである。その光景を目の当たりにしたウィリアムは、ばふぉと盛大になにかを噴いた。
「こいつァ恐ろしいぜェ……って、クロエ、何やってんのん」
視線を向けたエリオが、不思議そうに声を上げ、訝しげな視線をそそぐ。というのも、思い切り痛い目を見たはずのクロエがよろよろと立ち上がると、無謀にも再度、エルフの少女に手を伸ばしていたからだった。ウィリアムは咄嗟に、彼女を制する声を上げかける。指先が、かすかに、ふれた。
エルフの少女——アウル。
眠りこけるがままに彼女のちいさな手が、クロエの指に伸びる。ふれ合う。柔く握り返すように、わずかな力がこもった。クロエは、ふれた場所から、ほのかな体温を感じる。休日のお日様のような、優しい熱。
「……あ」
ふわりと、クロエの顔にほころぶ笑み。
「大丈夫……だった、みたい、か」
ウィリアムは、正直なところ、呆気に取られた。だがしかし、よくよく考えれば、道理だ。まずもって、クロエには害意、悪意の類は無いのだから。眠りに耽る少女とて、この間近であるならば、そのことを気取れるのだろう。ほう、と溢れる安堵の吐息。

クロエはゆっくりとアウルに近づき、寄り添う。覗きこむ表情は、無邪気そのものだった。

「――畏れるのは結構。だが遠ざけすぎるなよ。恐怖は排撃に繋がる。まあ、そうだな、ウィリアム」

男は初めて、名乗った少年の名を呼んだ。真っ直ぐに、少年を見据える瞳。ともすれば気圧されてしまいそうな、強い視線だ。ぎちりと肉に歯を立てながら、ウィリアムは真っ向より向かい合う。

「お前は弱いが」

「ウウッ」

図星であり、事実である。大いに嘆きの声が上がる。

「守るため――目的がはっきりした時の剣は、悪くなかった。ひよっこなりにな」

「本当ですか」

「剣才は今ひとつだが。どこで習得したんだか知らないが、お手本みたいに馬鹿丁寧な剣だ」

「ウウッ」

レイヴンの言葉はいささか容赦がなかった。顔色などに一切の変化は見られないが、もしかしたら酔っているのかもしれない。余さず肉の食われた串を火に捧げ、「オレはどうッスかねェ」と、エリオが横から首を突っ込む。

「お前は確実に女に刺されて死ぬ」

「死ぬな」

「あァ！？」

幸運の女神というものに見放された軽薄な美青年とでも称せようか。当人としては実に不本意の様子だったが、少年からすれば真に納得の見解である。親子ほどの歳の差があろう冒険者ふたりは大いに頷きあう。

そして不意に、やけに静かだなと、ウィリアムが視線をかの樹の根本に渡した。そこには黒と、きんいろの少女が二人。

――揃って眠っていた。クロエにとってはいささか、体力的に厳

しい道行きだったのだろう。疲れ切っていたか、草木にもたれかかるようにして、小さな寝息を立てている。何とも――微笑ましく思う。

ウィリアムとエリオにとっては、彼女ら二人は共に年上なのだが。

「……僕らも、寝るか。明日の早いうちに辞そう」

「オッサンもとっとと場所移してェとこだろうしな」

エリオに至ってはレイヴンの名を知ったにも関わらず、全く変わらぬ調子でオッサン呼ばわりである。意に介した様子なくレイヴンは頷いて、酒精を一口する。

「……ああ。見張りは任せて先に寝ろ、ガキは寝る時間、だ」

此処に至れば遠く彼方にも思える、かの街では遙か鐘の音が聞えようか。礼を落として辞する二人に彼が会釈すれば、眠る少女らに毛布なんぞをかける様が見えた。若いな――と、天を仰ぐ。

「……あのガキが、懐くような奴もいる――か」

世界は広いと男は呟く。周囲は静かだが、しかしそれゆえに完全にはうかがい知れぬ。エルフの少女、アウルならば森の中の全てを把握出来るだろうが、あいにく彼女は眠りの中だ。どれだけ起こそうと踏ん張ろうが、てこでも動かない――むしろ彼女の睡眠を妨げるものは、そのまま敵だとも言える。レイヴンは経験上、そのことを、知っていた。

「……嵐でも来なきゃいいんだがな」

彼は憂いる様に、嘯いた。

Ｌｅｖｅｌ１９：『森羅に相食む刃』

満ちた月の輝く静かな夜は、しかし真夜中に唐突に途切れた。途切れ、させられた。見張りを続けていたレイヴンは、通常ならば見逃してしまいそうにわずかな気配、それを真っ先に感じ取る。――視線、である。続いて、軋むような足音。敵意か、警戒か、その意は汲み取りかねるが、おそらくは偵察か斥候か。レイヴンは大樹の根元で未だ眠っているはずのウィリアムらに、ゆっくりと向き直った。

「起きろ」

囁くような小声だ。しかし、剣を抱えて眠っていたウィリアムは、寝付きが浅かったのか、すぐさまに飛び起きた。続いてエリオが緩慢に目を覚まし、クロエはウィリアムに肩を揺すられ、ぐしぐしと眠たげに瞼をこする。クロエの傍らに眠るエルフの少女――アウルは、依然として一度も目を覚ますことなく、眠り続けていた。しかしレイヴンは構わずに続けた。

「……アウルを連れて、森ん中に身を隠してくれないか」

彼は視線で眠りこける少女を示し、そう言う。

これ以上は無いほどに真剣で、そして真顔だった。

「なにか異変、ですか」

「オレらよりかオッサンが直に守った方が良いんじゃねェか？」

それはエリオにとっての素直な感想である。これはほとんど彼らが流しかけていたことであるが、レイヴンは、十数という魔狼（ガルム）と同時に相対してなお、傷ひとつなく屠ることの出来る強者だ。三人が見た、かの死骸は、彼の剣によるものといった見解に違いない。ゆえに、例えいかなる者が敵として現れようとも、少女を守りながらにレイヴン一人で撃退し得るだろうと、エリオがそう考えたのは、ごくごく自然のことである。

しかしレイヴンは、無言で首を横に降った。

「足音が聞こえた、んだが――その音から推するに重装級だ。この森を探索しようって奴が、そんな装備をするか？」
「……それ、って」
仔細なる情報を聴覚のみによって感知するレイヴンもまた、驚嘆に値することではある、が――クロエは呟きと共に、アウルの寝顔を見下ろす。その存在が知れるのならば、誰に狙われたとておかしくはない少女。あどけない表情はしかし、緊張の走る空気に、どこか似つかわしくない。改めてレイヴンの言葉を待つクロエは、その小さな口唇を、にわかにわななかせた。
レイヴンは、億劫げに肩を竦める。
「っていう考えが出来るのは――――そこのガキが“帝国”に目ェ付けられていて、それゆえに俺が邪魔者になってるってことを知ってるから、だがな」
「となると、“帝国”の重装兵、ですか。……厄介だ」
帝国は、この大陸の中央に位置し、世界最大の軍力を誇る一国家だ。例えばレイヴンが、何度か“帝国”からの襲撃などを受けているのだと考えれば――先刻、ウィリアムらに毅然と刃を向けたことも、決して不自然からぬことか。ウィリアムはいささかに視線を険しくする。
それに、この地域に“帝国”の兵力が滞在している可能性は、十分に考えられる。むしろそのためにこそ、城塞都市『カタラウム』は現存しているのだから。以前、かのゴブリンが巣食っていた迷宮を一挙に掃討したのもまた、帝国の一部隊であったことは記憶に新しい。
真実か虚偽かは定かではないが、しかしどちらにせよ、いくらでもエルフを捕らえせしめんとする理由は考えられるだろう。
「信じるか否かは好きにしてくれ。……ちっちぇえ嬢ちゃん」
「……クロエ、です。――なに……か……？」
半信半疑。その半目を、クロエはゆっくりとレイヴンに向ける。見定めるように、彼の言葉を吟味するがごとく。だが、続けられた

レイヴンの言葉は、少女を信用させるに、十分に足るものであった。
アウルの保護者を自認する彼は。
クロエに、頭を下げた。
「頼む。少しだけの間、守ってやってくれ。アウルを」
「……な」
「任せる。任せてもいいと俺は思っている。人を寄せないそいつが、甘んじた相手なんだ――クロエの嬢ちゃんは」
至極、クロエは慌てた。四十を間近とするような大の男に頭を下げられたような経験は、一度とてない。それも、その頼みは、尋常ならざる重量を以てクロエにのしかかるものだ。戦闘能力と呼べる力をほとんど持たない、少女にとって、あまりに重い。
「おい、オッサン。オレの疑問に答えてねェぜ」
エリオの問いただすような言葉に、レイヴンは顔を上げた。あまりゆっくりもしていられないと判断してか、口を開くことにもはや躊躇いは無い様子で、その問いに答える。
「相手方が単独行動を取るとは考えがたい。仮にだが“帝国”の隊長格がいた時は――俺が全力でも勝てるかどうかなぞ分からん。守りながら戦うなんざ、実質的に不可能だ」
絶句、である。
それはまるで、段階（レベル）の、いや、次元（ランク）さえ幾重にも異なるお話だ。絵空事に等しいお伽話。エリオは頭痛を堪えるかのように額を指先で押さえ、ウィリアムは現実から逃れ得んとするかのように天を仰ぎ、クロエは静かに、レイヴンに向かって頷いた。
「……できるだけを。やります。……やらせて、ください」
真っ直ぐな、クロエの言葉。二人が、目を剥く。
「クロエ――本気か」
「どうにかなるってェ次元の話じゃねェぜ！？」
思わず二人が問いかける言葉は、しかし全くもって無理ないことだ。レイヴンは真っ直ぐな目付きで彼らの様子を静観する。その最中にクロエは、ゆるゆると首を横に振った。その心を撤回するつも

りは無いと、そう言わんばかりに。
「……だって、私は」
アウルちゃんと、言葉のひとつも交わしていない。
そんなままでお別れなんてごめんだと、クロエは静かに、しかし確かに、そう言った。
「……守りつづけるなんて、できない、けれど。……でも、きっと、今一時、くらいなら」
儚げに嘯くクロエは、アウルの身体をゆっくりと背負い込んで――立ち上がる。クロエの矮躯にも関わらず、エルフの少女の小さな身体は、羽のように軽かった。
「……ウィル、エリオ。……力、かして……くれ、る？」
おずおずとクロエは、彼ら二人を見上げる。不安も幾許かは含まれていたが、しかしそこには、確かな信頼があった。仲間を、見る目であった。
しかと頷いてウィリアムが立ち上がり、ため息と共にエリオがそれに続いた。
「まさかレイヴンさんに匹敵するような化物とやれって話じゃない。逃げて撹乱して――なら僕らのお家芸だろう。なんとかなる」
「そいつァ随分な希望系だぜ、ウィル」
「いいんだよ！　もう！　やるしかないだろ!!　クロエ、貸しひとつだからな！」
やけくそ気味だった。よもやクロエを見捨てる選択などあるはずもない。少なくともウィリアムにとっては。よって出来ることといえば、貸しなどと冗句ひとつ飛ばすくらいのことであった。ひひひとエリオはその様子を笑い飛ばしてみせる。
「……うん。……きっと、返す。……何倍か、で」
クロエは、安心したように――そして貸しとの言葉に、どこか嬉しそうに、笑って頷いた。立ち上がり、そして、力強く歩み出す。眠る少女の身体をしっかりと離さないように背負って、二人がそれに続く。

レイヴンは、彼らのやり取りに、大いに――豪胆に、笑った。
「任せたガキども。……否。クロエ。ウィリアム。エリオ」
レイヴンには、何としてでもエルフの少女、アウルを守らなければならないわけがあった。いかなる手を尽くしてでも、他に手が無いのならば人の手に委ねてでも、守らなければならなかった。ゆえに、託す。
「……いってきます。……レイヴン、さん」
「ご武運、を」
「生きろよォ。オレらじゃガキの面倒見切れねェ」
三人と、少女一人して、彼らは森の奥へと踏み込んでゆく。レイヴンもまたその言葉に呼応するように、傍らに大剣を携えながら、彼らに背を向け立ち上がる。
「大将は引き付ける。どんと構えてろ」
そう告げて、周囲に注意を巡らせる。これが取り越し苦労で済んでくれたのならば、他愛のない笑い話で終わらせることが出来た、のだが、世の中、そうは行かない。良い予感にせよ、悪い予感にせよ――強者の勘というものは、いやになるほど、的中するのだ。程なくして、それは来た。

初め、それは風かと思われた。

吹きつける突風が如きそれは、然し矢のように一直線に、レイヴンを襲った。真正面から。そしてレイヴンは、その一閃に対応しかねた。刹那にも対応し得よう男が、その一閃に対応しかねた。刹那にも対応し得よう男が、その隙間を縫うかのような一撃を受けたのは、しかし油断か慢心がゆえのものではない。
――即ち、敵の疾風迅雷が為である。
かすかな金属の音が、森の中に響き渡る。
「……避ける――か」
凛と突き刺さるような声。一撃を受けながら、しかしそれは掠めた程度。咄嗟にその場から翻った男の巨体は、後方に滑りながら踏

みとどまり、携えた大剣をしかと構えてみせる。レイブンの見据えた眼前に、その姿はあった。

フルプレートならざる、プレートアーマー。金の輪郭をあしらわれた紅のマント。見れば布地には、永劫を示す尾を食む竜が縫いこまれていた。晒す相貌は女のそれ。白金（プラチナブロンド）のセミロングヘア。碧の双眸。その手に握られたるは月の輝を返す銀の刃。――年経れども若かりし少女の面影を残す外面は、しかし確かに女のそれであった。

彼女に続き、数人の兵がなだれこんでくる。フルプレートを装備した兵達は、その差異をうかがわせない。それぞれがそれぞれに、長剣か槍かを武器として携えていた。元は騎兵なのかもしれないが、森の中を騎乗のままでは踏み入りかねたのだろう。

「ち、ぞろぞろと来やがって。本当にここの事が知れちまってたみたいだな」

「……お前たち、散開だ。見付け次第にエルフの少女を保護。生きて、傷も出来る限りは付けてくれるな」

最前に立つ彼女が、恐らくは隊長格。斥候によって前もって手に入れた情報との違和から、状況を判断してか、すぐさま部下であろう兵達に指示を送り、それに応えて彼らは迷宮内へと踏み入る。レイヴンはその様子を、見守るしかない。追撃を許すほど、目の前の女は甘くないと――レイヴンは、知っていた。

「……全く、大失態だ」

レイヴンは億劫げに、その女を見た。初見の者を見る目のそれではない。否、それどころかむしろ、見慣れたような、あるいは見飽きたような様子をすら、感じられる。

かつての仲間。

そして今の敵。

――彼女の外套に見られる竜の紋章は、即ち帝国の証。ゆらりと矛先を彼女に向けて、レイヴンは刃を掲げる。女は、静かに告ぐ。

「剣魔七星（セプテントリオン）が一、“刀渡り”のレイヴン。貴方個人にも、組織にも、敵対する意志は無いわ。然し」

「くだらん言葉ばかり吐いてくれるな、レイチェル。俺はお前を斬り倒して、つっつとガキどもの所に行かねばならん」
「……刃向かうのならば“帝王第三親衛隊”の名の下に、斬り伏せる」
さながら旧友の名を呼ぶがごとく、レイヴンは彼女の名を呼んだ。レイチェル。その名に女はぴくりとわずかな反応を示すが、しかし前言と同様に、淡々と――冷淡なまでに淡白に、レイヴンにその言葉を向ける。掲げた銀の剣、その細身の刃には、尋常ならざる魔力が集約するかのように、光が集まっていた。その一刀ならば、レイヴンの構えし大剣とも、容易に打ち合えよう。
「無理な若作りはやめておけ。後で反動が来るぞ」
「――ブチ殺すぞ蛮族ッ！！」
「来いよオラッ！！」
沸騰である。冷静な女の表情に、怒りが募った。あるいはそれが、わずかに垣間見せた地なのか。レイヴンは笑みと共に応ずる。振り抜かれた銀の刃は迅速にして甚大なる威力を秘めたる魔剣。応える大剣はさながら鉄塊にさえ等しい。莫大な腕力と重量を乗せた踏み込み、そしてその体躯を活かしての、剣さばき。互いの剣がぶつかりあう。その結果は、全くの、互角であった。幾度も、幾重も、互いがぶつかりあう支点、中心に弾ける火花。切り上げ、切り下ろし、繰り出される刺突を受け止め、あるいは捌く。果てに渾身の一撃がかち合う先――刃音（はね）を境にして、男女は全く逆方向に吹き飛ばされる。さながら正逆の磁石が撃ちあったかのよう。
ゆっくりと互いは自らの身体を引きずり起こしながら、立ち上がる。当然のように、その刃を向け合う。
「……何が、気に入らない？」
「こちとらガキのお守りやってる理由がある。それだけだ」
ゆえに渡せんと吐き捨てる。さりとてアウルの行方は今や、ここにはいない彼らに委ねられていた。我ながら博打に出たものだとレイヴンとて思うが、これしか手がなかったということもまた事実。

今この状況が、レイヴンの打てる最善手だ。ゆえに今ここで、最善を尽くすのみ。レイヴンは刃を無造作に掲げた。彼は一定した構えと呼べる構えを持たない。外見と相違しない、粗野な剣だ。

「……そう。ならば矢張り、彼女に伸ばす手は緩められないわ」

――許せとは言わない、と。レイチェルは苦虫を潰したような表情で、身を低く沈め、剣先をレイヴンから逸らさずに向け続ける。

「構わん。払いのけるだけだ」

向き合う剣は大よそ互角。しかしそれは膠着状態にあらず。いざ切り結べば、悪手に及ばずとも正着ならざる一手が、すぐさま雌雄を分かつという地獄。

――――両者の剣は互角でありながら、全くその質を異とするものであった。

剣は、大別して三種に分かたれる。その一つ目が、己の体躯を活かした剣である。鍛え上げた体躯を存分に躍動させ、腕力を、そして脚力を奮い立たせ、刃を振り抜く。レイヴンの剣は、これに属した。彼とて単なる脳筋というわけではないが、しかし、それでも彼の剣は、肉体の占める割合が大きい。圧倒的な鍛錬と莫大な修練の量が、レイヴンの剣を織り成していた。

轟と唸りを上げ、レイヴンは一閃を振り落とした。これ即ち、剛剣。これに対して、力ではなく技を以て勝負を制さんとするが、柔剣。技は型に通じ、型とは即ち必勝の法則である。たゆまぬ人智の思索によりて必勝の法則に至る剣、これは即ち技であると同時に――思考。思考し続ける剣。例えばこれは、いかに足掻いても若い男に力で勝ることの出来ない、老人や女性に好まれるものと言えた。

だが、レイチェルのそれは、どちらでもない。

「――はッ！！」

レイヴンの一閃。尋常ならざる威力を秘めた大剣の一撃。それに応えるには、レイチェルの細腕はあまりに華奢で、そして振り抜く銀の剣、その細身は、絶望的なほどに柔(やわ)だ。どう見てもそのはずが、しかし結果は、あまりに異常。がきんッ！　と跳ね上がる金属音。

女のか細き剣が、刃鳴散らし、レイヴンの剛剣と五分――否、それ以上に撃ちあってみせる。

「……ッ！！」

十二分に錬成された銀は、剣の素材とするならばあるいは不適切かもしれないが――しかし、魔力を伝達させる素材としては、極めて有用である。レイチェルの手にする、銀の光を纏った刃。これが意味するところは、ひとつ。

魔剣。

即ち魔力を以て必要な力を補強し、不足を覆い、あるいは覆してみせる。レイチェルの剣は、その形が行き着いた、果てだった。ゆえに華奢な右腕は怪物じみた腕力を発揮し、か細い足は風神が如き迅速をなす。

然しそれにも押されぬレイヴンは、即座に転身。プレートアーマーの防御などを一切に意に介さない男の剣が、胸元へと叩き付けられんとする。切り裂くまでもなく、その鎧を一閃のもとに問答無用、叩き潰し得る。その刃に、レイチェルの剣閃が、真っ向から打ち据えられた。振り切ると同時にまた、互い相食むかと、思われた――その時だった。

「レイヴン、獲ったぞ！！」

「――なッ」

レイチェルの剣に纏われし甚大なる魔力が、瞬時、異様な膨らみを見せた。ひうん、と風を切り振るわれる刃。しまった、とレイヴンが思った時には、すでに遅い。

――ズドンッッ！！！

起爆。森羅に吹き抜ける爆風を引き連れながら、レイヴンに襲いかかる魔力の奔流。剣に纏った魔力を、切り結んだ際に解放し、発破を引き起こしたのだ。魔剣ゆえに可能とする荒業。それだけならば、しかし耐え切れぬものではない。レイチェルの魔力量が、そもそも常人と比して桁違いであっても、しかし一度の爆発程度のものならば、レイヴンには堪え得る。

しかし尋常ならざる魔力は、嵐のような炸裂の波を、巻き起こす。それ即ち、一度でなしに弾ける魔力が――連爆す。微かな隙に一度目の魔力解放をまともに撃ち込まれたレイヴンは、そのまま飲み込まれざるをえない。吹き荒れる暴風に煽られながら、レイヴンの体躯は滅茶苦茶に揉まれて――遙か彼方、森の木々の間を風切り、枝々をへし折りながら、吹き飛ぶ。

「ぐ――――あッ！！！」

ぎちりと歯を食いしばりながらボロ屑の様な体で、しかし大剣ばかりは手放さずに、レイヴンは風に揺れ、宙にたゆたう。さりとて、すぐさまに体勢を立て直さんとした、その瞬間だった。――レイチェルが爆風の吹き荒れる最中、風を切りながら、中空のレイヴンの身に追い縋る。地を蹴り、空さえも蹴り抜いてひたすらに跳躍せし細身を加速させ、レイチェルは銀の刃を天に掲げた。暗闇に灯る光が、今にも爆ぜんと激しく燃え盛る。

レイヴンが、身構えながらも、瞳を見開いた。

「――ちィ」

「終い、だ――ッ！！！」

刃が振り下ろされると同時に、迸る白き魔力。

高く高く、夜の闇を切り裂いて、光の柱が天に上った。

Ｌｅｖｅｌ２０：『うまれいずるところ』

闇夜の森をかき分けて踏み込む。背にはもはや、剣戟も聞こえない。聞こえる音は、アウルの小さな寝息か、暗闇にさざめく鳥の鳴き声くらいのものか。先刻までいた広場からある程度の距離を置き、暗闇に潜むことが出来たか――そういったところで三人は立ち止まり、そして真っ先にウィリアムが口を開いた。これからの方策のためだった。

「多分だけど、僕らに数の利は無いだろうな。逃げまわってもジリ貧にならざるをえない、と思う。クロエの体力的にも限界がある」

「……火を灯していけば、誘導、できない……かな。……時間かせぎには、なる、と、おもう」

クロエにしても無策に、無責任に請け負ったわけではなかった。無論、無力な彼女ひとりならばどうにもならなかっただろう。だが、決して不可能だとも思わなかった。例え“帝国”の兵であるとはいえ、少数でのゲリラ戦に長けた戦力が多いとは考えがたい。

いくら訓練を積んでいるとはいえ、彼らは兵、即ち軍の一部だ。位の高い騎士であるならば騎乗戦闘の訓練に長い年月を割かれるであろうし、白兵戦は密集陣形での戦が主だ。不用意に群体から離れてしまえば、弓矢の的にされるが必然。

一方でエリオは、全く逆のことを考えていた。

「火、灯りか。――使えるぜそいつァ。クロエ。ひとつ提案があんだが」

「……なに？」

クロエが、かくりと首をかしげる。ウィリアムが興味を示したように、暗中、エリオに視線を向けた。静かな夜に、エリオは語る。

「誘いこむ。ウィルの言うとおり、ジリ貧になる可能性を考えりゃ、その前に攻めるが肝要――つまり必然的にクロエが一番危険だってェことになるが」

「やる」
「はやいな！！」
真っ直ぐに、クロエの青い瞳が見返す。ノータイムでの返答はクロエの決心の堅固を示していたか。その思い切りっぷりは思わずウィリアムが突っ込みを入れてしまうほどであった。
つまりそういった経緯で、クロエとアウルは、陣形の中央に位置されることとなった。その周囲に火を灯した松明を設置し、いかにもな誘導、標（しるべ）とする。月光ばかりを明るみとする、暗黒に包まれた森の中では、さして大きくはない灯火でさえもやけに目立った。
そしてウィリアムは、暗闇に潜むこととなった。少年は即ち、要（かなめ）である。直接的に相手方の戦力を削りとるためには、白兵戦を挑みかかる戦力が必要であった。――しかし問題は、装備と、あるいは練度の差だ。少々は経験を積んだ、そして地の利がこちらにあるとは言っても、真向勝負で敵うかどうかは、きわどい。なんと言っても、ウィリアムは未だ齢十五の少年剣士でしかないのだ。
この陣形が意味するところは即ち、各々の役目を定め、それぞれの穴を埋めること。なればこそ、明らかに目に付く問題を、放ったままにするはずはない。どうにもならないことならばともかく、今この場には、守るべき対象であるところのアウル、そしてクロエとウィリアム、加えてもう一人、エリオがいるのだから。
「――さ、てェ、と」
エリオは“森の人”と呼ばれる小さな民族の出身である。とある中小国家に存在する森林地帯、その守り人の一族であった。彼が森歩きに慣れ親しみ、あるいは隠密行動に秀でる由縁は、そういった彼の起源にあると言っても良いだろう。
純粋な戦闘能力においてはウィリアムに後れを取るが、夜目が効き、破壊工作を得意とする彼は、他者の裏を突くことならば、一切の追随を許さない。ゆえに――――現在、配された陣形で、エリオが遂行する機能、それは戦況の把握、そして状況の撹乱。
樹上に陣取ったエリオは、遠目にクロエとアウルの姿を確かめれ

ば、周囲に視線を渡す。暗闇に冴える碧眼が、猫の瞳のように大きく見開かれていた。その双眸が、不意ににわかに細められる。何かを見とめたエリオの瞳。

――しろがねの光を返す全身鎧。フルプレートアーマーの兵が二人。ローブに身を包んだ、魔術師であろう姿も見受けられる。それを一個の小隊としているのか。魔術師が灯しているのだろう、その周囲には蒼白い魂魄の様な光が漂っている。そろそろ、クロエ達の居場所を示す光が、彼らの視界に捉えられる――そういった距離であろう。自然、彼らの行く先は標に向く。注意がそちらに向けば、当然、周囲への警戒はそぞろだ。

ゆえにエリオは、スローイングナイフをその手に構えた。この暗中にどれほど狙いを効かせられるものかと不安の種は無いでもなかったが、幸いなことに、敵方もまた標を手にしてくれているのだ。細めた瞳が、標的の魔術師を射抜く。猛禽にも似る視線。

――ひゅん。

風を切り、凄まじい速度で正確無比に飛ぶ短刀。進行方向が一定に定まっている以上、例えそれが動く対象であるとて狙いは容易。銀の切先が、とすん、と人体に呆気無く突き刺さる。路傍に崩れ落ち、無謬に零れ出す紅が土を濡らした。樹上からその光景をエリオは眺める。遠景に見るその様相は、どこかひどく滑稽で、空虚で、現実味が薄かった。突如として後衛が倒れ伏した所に、兵の二人は慌てた様子を見せる。

ふ、と糸が切れるように消え失せる、彼らの周囲を漂っていた灯火。術師が倒れ伏してしまったせいだろう。もはや頼る光が無い以上、彼らの寄る辺は、クロエらの傍らにある導きの灯のほかあるまい。

だからこそ、それが罠となりうる。

唐突に突然に、戸惑いながらも一歩を踏み出した一人が、つんのめった。フルプレートの兵が、前のめりに思い切り倒れこむ。がしゃりと響く金属音。高みからエリオが見下ろす光景そのは、やけに

間の抜けたものであった。――クロエのいる場所を標、最終地点として定めるならば、その周囲に仕掛けをひとつとて施さない理由があるだろうか。木々の幹に結ばれ、橋渡したロープが、兵の脚を掬ったのだ。

「――なんとかなるもんだァな」

あるいはこれも無意識に、エルフの少女の救いの手が差し伸べられているのか。彼女の防衛機構がいかような働きをもたらしているのか、定かではない以上、知る由もなかった。ひとりごちながら、エリオは静かに幹を伝い地に降り立つ。

ちょうど、転げた兵の不意を打つ形でウィリアムが飛び出した時のことだった。刃の煌きが宙に踊る。振りかぶられた刃は、真っ直ぐに振り下ろされ、そして――可動部となる兜と鎧の隙間に、滑りこまされた。予期せぬ急襲にか、残された一人の動きが硬直する。どう見ても、倒れた彼は致命傷だろう。首筋から溢れ出して地を、そして刃を濡らす血液の量がそれを表していた。エリオは思わず息を吐く。感嘆を隠せない、といった様子だ。

この暗闇の中、正確に急所を突きせしめた技術も含まれるが――何より、その剣の躊躇の無さは、賞賛に値した。先刻、レイヴンがウィリアムの剣を評したあの言葉は、その辺りに由来するのだろう。少なくとも、冒険者（ならずもの）の法に照らすのならば、賞賛すべきことだ。まともな人間ならば、否、まともならずとも、人に容赦なく刃を振るうことは、容易なことではない。魔物を殺すことに遠慮はなくとも、人殺とは、この暗黒の時代でも――決して軽いことではない。

法の上での罪の如何ではない。同じ人の形をした者を殺す、ということに対する、罪悪。嫌悪。それは拭いがたく付き纏う。これまででエリオが分かったことは、ウィリアムは決して、無慈悲で残虐な戦士ではない、ということだ。熟練というには遠く、まだまだ若いが、生への執着は強い。だが、それだけでは、説明がつかない。

――ウィリアムの心的な強靭さは、彼の年齢を鑑みれば、不自然ですらあった。

少年は無言で血を払うとともに、身を翻すと、すぐさま残る一人へ斬りかかった。不意打ちならばともかく、真っ向からの切り込み。プレートアーマーという彼方の装備を鑑みれば、まるで無謀な行為。それでも鎧と鎧の隙間を縫うような刃は、しかと捌かざるを得ない。兵は咄嗟の反応を示し、幅広の剣を振るうウィリアムを身体ごと弾き飛ばす。得物は槍。鎧の重量も乗せた一振るいは、凄まじい威力を持ち合わせていた。槍の間合いを取らんとしたのか、そのまま一端距離を置こうと彼は身を引く。

退いた身に、するりと刃が付け入る。足音も無く、静かに寄り添ったエリオが、背後から刃を突き立てたのだった。全身鎧も合わせれば、総重量にして百キログラムを越えるのではないかという体躯が、地に崩折れる。——生々しい、肉に刃を突き立てた感覚が、エリオの手の中に残る。

「エリオ、まだ——いるか」

闇の向こう側からの問いかけ。ウィリアムの声だった。エリオは静かに首を横に振る。

「わかんねェな。けど、これだけじゃねえと思っておいたほうがいいだろォよ」

そっか、とウィリアムは頷いて答え、不意にクロエの方へ視線を向ける。と、少女はちいさな手を精一杯に高く掲げて、こっちは大丈夫、というサインを送ってきた。ほう、と少年は安堵の吐息をひとつする。

瞬間、だった。

近くはないが、しかし遠くもない。彼方から響く爆音。決して無視すべきではない、驚異的な炸裂音が——此方にまで、届いた。木々の緑葉一枚一枚を揺らめかせ、生み出される甚大なさざめきが周囲を席巻する。そのまま一度ならずとて、二度に三度と連なるように弾ける轟音。クロエの蒼い瞳が、まんまるに見開かれていた。

——程近くに立ち上る光の柱。周囲の木々を薙ぎ払い、尽く枝葉を魔力の奔流が打ち払う。遙か暗闇を切り裂き、天まで打ち上

がる聖白の魔力は、さながら極大の火柱にも似ていた。まるで森の一角が切り開かれたかのように、一帯を更地と化す。

「なん……だ、ありゃ」

「新手、いや、あれが――頭首、かッ」

ウィリアムらには区別がつくはずもない。それがレイヴンか、あるいは彼が対敵する者の力なのか。レイヴンがウィリアムらと相対したそのとき、力の全てを出し切っていたとは、とても考えられないからだ。しかし、その事実もじきに知れる――光が晴れた先、その向こう側に、男が地に伏し、そして一人の女が、彼の前に立ちふさがっているということに。

「ふ……む。まだ見つかっていない、か。む？」

プラチナブロンドの女、レイチェルが、その視線を鋭く周囲に走らせる。倒れ伏す男、レイヴンは半ば意識の外――すでに仕留めたという認識か。初めに見とめたのは、地に伏している兵達の姿だ。その様子を、彼女は大いに訝しんだ。なぜならば斥候兵は、ウィリアム、クロエ、エリオ――この三人を、認知出来ていなかったからだ。ならばこそ、先刻の兵達の警戒が薄かったことにも納得がいくだろう。レイチェルは瞳を細める。クロエはその目に、射すくめられたかのように――その場に、へたりこんでしまう。その傍ら、眠り続けるはエルフの少女。

「護衛がいた、か。良いわ。早いところ包囲して――」

瞬間。

レイチェルの瞳が、ひときわ大きく見開かれた。その色彩に乗せられた感情は、間違いない、驚愕一色。果たして、驚異的な戦闘能力を保持する彼女が、一体何者を驚きの対象としたのか。その双眸は少年に向けられ、真っ直ぐな視線を一身に受け止めさせられていた。ウィリアム。灰色の頭髪。暗闇とすら称される黒き眼（まなこ）。携えるは一振りの刃。

「――ウィリアム王子ッッ！」

「……えっ」

「あァ！？」

エリオと、そしてクロエの視線までもがウィリアムに向けられ、驚きの声が上がった。クロエなど目の色を白黒とさせ、ぱちぱちと瞼を瞬かせている。当の少年は――その呼び名に、まっこと渋い表情を浮かべて、肩を竦めるばかりだ。

「……やめてくれ。二十番目のガキだぞ、僕は。継承権なんぞ無きに等しい」

それも――物心ついてから、当て所なくふらついてきたような身だ、と。

ウィリアムは、レイチェルの言葉を確かに認めながら、静かに首を横に振った。

Ｌｅｖｅｌ２１：『暗闇の彷徨』

「国の者たちが探し続けてついに数年、見つからず仕舞いが、斯様な場にあろうとは――大きくなられた御姿、しかし見間違えようはずもなし！」

ウィリアムは眉をひそめて、レイチェルの言葉を聞いていた。厄介だ、と少年は思う。否――厄介でしか、なかった。当然だった。自ずから逃げ出した家なのだから。自らの意思で、飛び出した国なのだから。愉快な気持ちになるはずも、なかった。

「ウィル、マジで？　マジ王子？」

「不本意ながら、本当だ」

「金ねェの」

「全く」

「ぜんぜん意味ねェなあ」

「無いなあ……」

だからこそ、エリオの実に軽々しい反応が、ウィリアムにとってはありがたくもあった。ひひとエリオは軽い調子で笑い飛ばして、ひょいと肩をすくめてみせた。と、クロエがウィリアムの表情をうかがうようにして、覗き込む。見上げる視線だ。

「……ウィル」

「うん」

「……家に、かえる……？」

クロエの瞳がにわかに波立った。恐れにも近しい問いかけ。彼女の覚えた危惧は、家族というものを大いに信ずる身がゆえにだろう。彼女と祖母の間に育まれた絆は、通常のそれよりも、あるいは遙かに深い。

「そのつもりは、ないよ」

そう、ウィリアムにそんなつもりはなかった。レイチェルに真っ向から返す視線は、半ば睨みつけるようなそれだ。――自ら生きる

ためだった。生かされるのではなく生きるために、家を――国を出た己が、よもや望みもせぬ場所に戻るものかと真っ直ぐに拒絶の意志を叩きつける。

ほう、と溢れるのはクロエの安堵に似た吐息。しかし同時に、ウィリアムは自身の家を好んでいない、ということでもあった。その事実にクロエは少しだけ、寂しそうな表情を浮かべた。

「――そう。なら、実力を行使せざるをえないわ」

「……くそ」

親衛部隊長。ウィリアムがあるいは幼少の時代までしか“帝国”に在していなかったとして、その面子を、その名を事細かに把握していなかったとしても――その実力は、知っていた。その実力の程は、知っていた。そして、思い知らされた。レイヴンの身が倒れ伏しているという、絶望的な事実を突きつけられて。

「ご覚悟を」

そう言って、ウィリアムに刃先が向けられる。きっと彼女に、傷つける意志はないだろう。ただ徹底的に、抗うウィリアムのあらゆる手を、武器をもぎとって、屈させるつもりなのだろう。この意志を貫き通すには、ウィリアムには圧倒的に、力が足りなかった。ぎちりとウィリアムは言葉なきままに歯噛みする。

「普通、とっくに血縁から無かったことになるもんじゃねェかと思うんだがなァ」

肩をすくめながら、エリオは不審げに瞳を細める。しかしどうやら、レイチェルは聞く耳を持たない様子であった。エリオは億劫げに刃を掲げて、そしてクロエは――どうにもできない。どうにもできない、けれどもしかし、祈るように手を結んだ。

果たして天への祈りが届いたかどうか、それは定かではないが。

「――オイ、お前の相手は俺だろ。パワーバランスって物を考えろ」

ゆらりと幽鬼のように、レイヴンが立ち上がった。がしがしと頭を掻きむしりながら、爆発を引き起こすほどの魔力を叩き付けられたにも関わらず、罅一つ刻まれずに健在な大剣を肩に掲げて、身を

起こす。まるで襤褸の風体のような男が、鋭利な視線を女へと向けた。レイチェルは、いささかの驚きを隠せないようにゆっくりと男へ向き直る。

「よくも、生きているものだ。アレを食って」

「あれくらいで死ぬか。傭兵の売りは継戦能力だ。お前らがうだうだ話してる内に回復しちまった」

ふんと鼻を鳴らすレイヴンは、ゆらりゆらりと揺らぎかける身を引きずるように、しかと地を踏みしめて立つ。流石に無傷とは行かない。否、十分に効き過ぎるほどに、先ほどの一撃はレイヴンの身を蝕んでいた。彼の言葉も、明確に虚勢であると知れるであろう。だが、それゆえに異常だった。

それだけの傷を負いながらなお立ち上がり、戦うことが出来る。そのことが異常なのだ。

「……なぜだ？」

「ああ？」

「何が――そうまでさせる！　貴様とて知っているはず！　王は、あの勇者は、決して彼女を悪いようにはしないわ！」

レイチェルが一寸、エルフの少女、アウルに視線を向けた。彼女の口ぶりはまるで、レイヴンもまた、その者を知っているかのような語り口だった。こきこきと音を鳴らして、面倒くさそうに首を回しながら、レイヴンは応える。

「約束の為だ」

「――な」

「悪い様にするとか、しないとか、そんなことは知らん。譲れぬ約束があるのだ。あまり――傭兵（ギース）の国の男をなめてくれるな」

傲岸不遜。ともすれば傲慢に、薄汚れた男はきっぱりと言い切った。いささかならずレイチェルは、その白い美貌を驚愕に歪ませる。その周囲、気がつく内に彼女の配下たる兵が集まっていた。そのことに気を取り直しながらもしかし、心のぶれ、揺らぎまでは拭いきれない。

「――王子を捕らえる事を最優先と。エルフの少女の保護は、私が、こいつを打ち倒したその時で、構わない」

レイチェルは、静かな声で命令を下す。表面上は確かに冷静だった。剣に纏わる魔力にも、揺らぎも歪みも迷いも、その全てはうかがえない。相対するレイヴンが、くははと笑い飛ばした。

「それじゃあ、とわに無理な話だ――倒せる、ものか」

そううそぶきながら、レイヴンは一瞬、ウィリアムに双眸を向けた。険しい視線だ。眇めるようなそれは、一種の警告の意か。つまり自分の身は自分で守れと、そういうことだろう。――ウィリアムは辺りを見渡して戦況を把握し、そして予見する。囲われた状況、不意を打てる場ではなく、なれば実力差は目に明らか。フルプレート兵と、魔術師の組み合わせが一小隊。

ウィリアムは、ふと口を開いた。

「エリオ、クロエ」

「……うん」

「あァ――って、お前まさかッ」

エリオが真っ先にその空気を気取ったか。そして、そのまさかだった。瞬間に、クロエがその瞳を見開くと同時。ウィリアムは一息に言い捨てて、その身を翻した。

「アウルを頼んだッ！」

僕を狙いとするのならば、狙えば良い。何はともあれ一手に引きつけられるのならば、それが最善だ――そう考えたウィリアムは一人、その身を更なる深き闇に沈めた。一拍の間を置いて、配下の兵達がウィリアムを追う。クロエやエリオには目もくれない。確かに今は、眼前にレイチェルの様な、圧倒的な戦闘能力を誇る人物が立ちふさがっている状況――よもや逃げ出せようはずもないが。

レイヴンとレイチェルが、再度として相対する。最早エリオとクロエには、手の出しようもない領域だ。エリオは、ぐったりと肩を落として、嘆息する。

「――あンの馬鹿」

「……ウィル……」

不安げなクロエの呟きが、溢れる。祈るように、否、真実――助けを願うかのように、クロエのちいさな手が、ぎゅっとアウルの白い掌を握りしめた。

――少女の身体が、ぴくりと小さく震えた。

一人だった。

暗路を一人、ウィリアムはひたすらに行く。出来る限り兵の気配を避けて、歩みを進める。灯りもない。月光も木々の合間をすり抜けはすまい。頼るものも寄る辺もなく、ただ一人。物心ついたころからずっと一人でいたことを、不意に思い出す。長い間、ウィリアムは孤独だった。一人で、誰と手を取り合うこともなく生きていた。ウィリアムとて、ずっと一人でいたことに大した理由があったわけじゃない。家を出て国を逃げ出した、ただの一人の何者でもない薄汚れた子どもに、手を差し伸べる人間はいなかったのだという――ありふれた、ただそれだけのお話だった。酷く長い時間をそうやって生きていたせいか、一人には慣れている。ウィリアムは、そう思っていた。

しかし皮肉なものだ。一人でいた期間が長かっただけ、一人ではないということの暖かみを知っただけに今、この暗闇の孤独は――ウィリアムには割合、予想以上に堪えた。

「……こんなだったっけな、僕は」

初めの記憶は、逃亡。逃走の過去。仮にも、例え二十番目の子であろうとも、かの帝王の子息であることには相違無い。逃げ出したウィリアムには長い間、追っ手がかけられた。帝国の兵に追われ続ける日々。民間に知れ渡った様子はなく、ある程度の情報規制が敷かれていたのかもしれないが――それでも穏やかならぬ日々を幼いウィリアムが過ごしたことは、想像に難くない。おかげで、忍び隠れる術は随分と磨かれたものだが。

生きるために、慣れぬ接客商売もした。あるいは戦場跡を行き、

武具をかき集めることを覚えた。破損したくず鉄であろうとも、小銭くらいにはなった。良からぬ仕事にも手を染めた。真に食い詰めた日には、盗みを働いた覚えも無いではなかった。悪童そのものと言わざるをえない。

――それでも良かった。“帝国”の閉塞的な離宮での生活を思い出せば、世界を生きるということはこれほどに自由なのだと、ウィリアムは知った。それこそが、ウィリアムが国を脱出するに至った由縁だった。その実感が、ウィリアムの性根を腐らせなかった。

地位を、金を――即ち“力”を求めながらも、後悔しないように生きるための“力”を求めるのだと、ウィリアムは冒険者に身をやつした。

そして、知った。

ウィリアムにも、仲間と呼べる、戦友（とも）が出来たのだと。

知ってしまった。

「……弱くなったのかね」

ウィリアム自身は、そんなことはないと思う。だが、まるで手足をもがれたかのような心許なさは、どうしても拭えない。その感触は、違和感のようにウィリアムを付き纏った。別れが決まった訳でもないというのに。そうなるかもしれない、という、ただの悲観的観測でしかないにも関わらず。それに戻ることが出来たとして、どうしても――ウィリアムのせいで余計な被害を与えてしまったのではないか、という気持ちは、無きにしもあらずだった。

さくり、さくりと小さな足音を立てながら、暗闇の森に潜む最中。不意に暗闇の向こう側、光が瞬いた。

――劫。

それはさながら森を焼き払う燎原の火。暗闇を引き裂いてウィリアムを取り囲む炎。いつの間に――いや、周到に用意され、追い込まれていたのか。かなり大規模な焔の災害が、ウィリアムへ今にも襲いかからんとしていた。それこそ陣でも敷かなければ起こし得ないのではないかという程の、大魔術。これ程の力量を持つ魔術師が、

相手方にいたのか、ウィリアムは周りへ視線を巡らせる。
「――ウィリアム殿」
ローブに身を包んだ男の姿が、一つあった。その周囲を守護するように、フルプレート兵が三人、取り囲んでいる。ごうごうとウィリアムを取り囲う炎の向こう側で、フードの下、男は冷厳な口ぶりで告げる。
「どうか投降を。私めとて殺すつもりはありませぬ」
ぎちり、と剣を握りしめる手に力がこもる。焔に照らされるウィリアムの額は、焦燥に汗ばんでいた。どうにか、どうにかしなければならない。だが、これではどうしようもない。例えこの炎を突っ切ったとして、どれだけ逃げ切れることだろうか。炎の勢いは次第に強まりながら、ウィリアムに迫り来る。それはさながら業火の結界。
詰み、か。ウィリアムは小さく肩を竦める。
「害は貴方様に留まらず。――“彼ら”に及ぶとも知れませねば」
静かな声が、酷薄な言葉を突きつける。クロエ。エリオ。その名がウィリアムの頭に浮かぶ。本当にそうか。疑問が浮かぶが、しかし炎が迫り来る中、冷静な思考を働かせられるほどに、ウィリアムは老練ではなかった。
これでお終いになるわけじゃない。今は、期をうかがおう。そう考える。そう考えて、ウィリアムは、自身をごまかしながら、両手を掲げ――かけて、止まった。
不意に、声が聞こえたのだ。
『待つのだわ』
聞いたことのない、声だった。一度たりとて聞き覚えのない、おそらくは少女であろう声。鈴を転がすような音色。幼さの中に、かすかな威厳が滲む。ウィリアムは思わず視線を掲げ、目の前の魔術師らの様子をうかがうが――何も動じた様子はない。そして、周囲に、彼ら以外の姿は見つけられない。そう、その声は、ウィリアムの頭の中に、直接に語りかけられていたのだった。

『貴方の見ているその火。良くできた幻術だわ。信じなさい。よくよく考えて。ここまで大規模な炎の魔術を、この短期間に行使できるかしら。あいつらの反対側に突っ切って。闇にまぎれるのだわ』

一息に言葉が叩き付けられる。僕は幻聴を聞いているのか、極限状態に陥ってあらぬ声を聞いてしまっているのか、そう考えた方がウィリアムにとってはよほど自然であったが――だが少年は、もはや藁にもすがる気持ちであったのだ。“下手くそな欺瞞（おしまいじゃない）”と言い聞かせたところで、そんなもので誤魔化し切れるはずもない。

ウィリアムは、猛然と走りだした。燃え盛る炎へ、真っ直ぐに突っ込む。

魔術師が目を剥いていたが、ウィリアムの知ったことではない。なんということか。ウィリアムが炎の結界から抜けだした瞬間、燎原の火は完全に消え失せてしまった。視界の内から、消失する。そんなものは、初めから無かったかのように。――幻術。

『精神系の幻術じゃないわね。感覚系を改変してみせたのだわ。幻術と――わかった、かしら』

「……あ、ああ」

『返事はしなくて良いのだわ。頭の中で答えてくれればそれで伝わる』

呆気に取られて呆けた声を漏らすウィリアムを、少女の声はぴしゃりとたしなめる。走る脚を止めぬがままに森林をわけいり、暗闇に潜みながら、ウィリアムは剣を抜いた。

『左右から挟撃だわ。ぐるりと迂回してやれば背後を突ける』

ウィリアムは――ただものならぬ何者かの言葉を、大人しく受け止める。果たして何者かはうかがい知れぬが、しかし、ウィリアムを助けようとする者であることは確かな様子だった。忍足にて気配を殺し、走りだしながら転身――『北東十歩に標的よ』――真っ直ぐに身を跳躍す。狙いは先刻の作戦時と変わらない。どうしても生まれざるを得ない鎧の継ぎ目。背後から真っ逆さま、中空から刃をさながら突き立てるがごとく――首筋に、突き落とす。

ずしゃり、と肉に刃が埋まり、弾ける血飛沫。一人。
『目の前にもう一人。たたんでやりなさいな』
振り落とした刃を、ウィリアムは右手に掲げる。全力で、何の技もなく、刀身を思い切りヘルメットに叩きつけた。鎧と兜をつなぎ止めていたリベットがはじけ飛び、恐怖に歪んだ表情が露となる。
――間を置かず、空っぽの左拳を握りしめる。
力のかぎり、押しこむかのように男の顔面に叩きつける拳。一度、二度、三度。その感触は、それほど堅いものではなかった。肉の歪む気色の悪い感覚が、ウィリアムの手に伝わる。骨が軋みを上げながらも、拳には赤い色が付着していた。男はゆらりと倒れこんで、がしゃりと地に沈む。
『後ろだわ、飛びなさい、足払いよ、槍持ちだわね』
言葉のとおり、ウィリアムは飛んだ。瞬間、足元を払う一閃が空を切る。そのまま脚を、長柄に叩き落す。踏み締める感触と同時、振り返れば――振り切った刃を翻し、槍の柄に思いっ切り叩きつけた。
へし折る。呵責なき武器破壊。躊躇なく人の身を斬りつけるウィリアムは、無機物を破壊することに――それ以上に迷いがない。胴と腰の隙間に、切り上げざまの刃をねじ込む。ずぶりと、腹の肉を引き裂く感触が刃先に残った。がつんとプレートアーマーの胴を蹴りつけ、その身を蹴り倒しながら、ウィリアムは息を吐く。
『やるじゃない、思ったより。どれだけ頼りないかと思えば、なのだわ』
「誰なんだ、あんたは」
どこに向けるでもなく言葉を吐きながら、ウィリアムは肩を落とす。意外にも声は、あっさりと正直に聞こえた。
『わたしはアウル』
「な」
『クロエちゃんの願いに応えてあげたのだわ。貴方を助けてってね。良き友情だわ。愛情かしら。何にせよ――ここはわたしの庭。荒ら

すやからはことごとく許さないのだけどもね』

ふふとほほえむ声が――アウルの声が、ウィリアムの脳に、直接に届いた。唖然とする。唖然としながら、ウィリアムは、ふと彼方に視線を向けた。

「あ、あああああッ！」

男の悲鳴であった。若い男だった。散らばったローブの切れ端から推察するに、先程の魔術師のそれだろうかとうかがい知れる。――なんたることか。ウィリアムとて同情を禁じ得ない光景が、そこにあった。

男は、食われていた。生きたままに貪られていた。何匹もの魔獣ガルムの牙を突き立てられ、その身を掠め取られ――血となり肉となっていた。骨さえも余さず、食いつくされる。

『憐れだわね、ふふ、全く可哀想。可哀想に！』

少女の悪戯めいた声。無邪気さゆえの残酷か。人間の常識を当てはめることが、そもそも的外れなのかもしれない。そう思わせるほどにエルフの少女は楽しげに、そう言った。

「……ありがとう、アウル、助かった」

『礼は直接言うが良いのだわ。否、違うわね、クロエちゃんに言うのだわ。そしてクロエちゃんを安心させてあげなさいな』

くふふと愉快げな笑い声。彼女は、いたくクロエのことを気に入っているのだろうか。レイヴンの言葉を信じるのならば、齢は五十を重ねるということだったが、全くそうとは感じられない。……それこそ、人と重ねて考える方が、偏屈か。ウィリアムは、思わずおかしげに息を吐きながら――いくつもの骸を背に、ゆっくりと歩き出した。

仲間の元に、帰るのだ。

Ｌｅｖｅｌ２２：『あるべきはあるがままに』

レイチェル・シュナイデ。妙齢にして玲瓏なる美貌の女剣士。すらりとした長身を無骨な白銀鎧（プレートメイル）に包みこむ様は、どこか妖しげなる姿態。かつては“姫将軍”と讃えられた某国の英雄。その彼女は今、“帝国”に属する兵――王の牙、親衛部隊が長として、レイヴンへと刃を向けていた。その由縁はしかし定かではないが、確かであることは、エルフの少女、アウルの保護を目的としていること。そしてそれが、国命に寄るところである、ということだ。“帝国”のために。その一命を背負う彼女の双眸に、揺らぎはない。だがしかし、わずかばかりの迷い、そして焦りが、垣間見えた。ウィリアムを逃してしまうその可能性を、脳裏に過ぎらせてのことだろうか。

そもそも、今回の遠征に際して配された兵は、“帝国”本国の兵ではない。帝国くんだりから兵を引っ張ってきては、あまりに費用がかさみ過ぎる。いわば、各地方に派遣として配された兵だ。その練度には、いささかの不安が残らざるをえないのだ。

対するレイヴンには、一片の躊躇さえ無い。薄汚れ、莫大な魔力の波に浚われて、それでいてなお立ち上がり、立ち続け、相対する。いかなる肩書きを名乗るでもなく、ただ静かに刃を掲げて、そこにたたずむばかりだ。一人の男がそこにいる、ただそれだけのこと。

刹那、レイチェルの身は流星と化した。闇を切り裂く銀の煌き。集約せし魔力の浄き奔流。レイヴンへと一直線にかく迫る様はまさしく迅雷。牙銀（ガギン）ッ！　と撃ち合う鋼鉄の響鳴。レイヴンは極々自然に、己へと迫り来る刃に応える。一見して、緩慢。ともすれば、鈍重。されどもその大剣は、女の身が振るいたる繚乱の剣閃にしかと追いつき、食らいつき、受け止めてみせる。続けざまに咲き誇る火花。剣戟の最中に、男は、にやりとその貌（かお）に笑みをのせる。

「――なぜ笑える！」

女の激情に、刃は揺らがない。その剣は苛烈でありながらに冷徹

だ。ならばなぜレイヴンは、その太刀を受け止めることが出来るのか。手負いの身にも関わらず。その手がいささかも緩みを感じさせないのは、果たしていかなる魔術か。魔だの幻だの妖だのといった言葉には全くもって縁遠い、眼前の粗野な男に、そのような惑いさえ、抱いてしまう。レイチェルが、そのような誤解を感じてしまったせいか、あるいは――それよりも、ずっと前から、陥れられていたのか。恐らく、気づいた時には、手遅れだった。

「苦境に笑えないなら、そんなもんは、偽だ」

ガヅンッ!! さながら鉄塊が打ち込まれるかのような刃。レイヴンは大剣を振り回して、大いに攻勢へと転ずる。身体能力向上の呪、剣に施された“強化”の術式、そしてレイチェルの身に備わった、それそのものを放出し、力として振るうことの出来る“魔力”――それらを全て塗り潰すかたちで、レイヴンの剛剣が迫り来る。

それは、なぜか。ひどく簡単なことだ。魔力を身体運動の補助強化に回すということは、即ち燃料の様なもので、油を注げば注ぐほど火は強く燃え上がるが、結果として油はどんどん燃え尽きてしまう。

――レイヴンが疾くなったのではない。レイチェルの方が、自分では気付けないほど微細に、緩慢に、遅くなっていたのだ。魔力で足りない力を補うという剣の形は、一見合理的な、そしてともすれば万能に見えるが、それは全くの誤解だ。当然のこと。魔力も精神力も、人が無尽蔵に持ち合わせるはずはない。長期戦になればなるだけ不利になるのだから、いわば諸刃の剣。特に――

レイヴンの様な、生き汚い男が相手であるならば、それは尚更のことだった。レイチェルは、決して彼の実力を見誤ったわけではない。ただ、その一点を、そのしぶとさを、見逃してしまっていた。

拮抗した戦いであるならば、それは命取り。継戦能力――戦い続けること。戦力を維持し続けること、いくら傷を刻まれたとて、死の淵に追いやられたとて、それが常態であるこのように、戦場に立つこと。

それは、彼のずば抜けた轟剣を差し置いても特筆すべき――レイヴンの特性であった。

「あの王様ん所に伝えて来い」

まるで遠い友人を語るかのように、レイヴンはレイチェルにうそぶく。掲げた刃が、天空より落ちんと迫る。その向こう側、開けた森の空には、満ち月が輝いていた。

「お心遣いは結構。だが――気に入らねえ、とな」

喰らいつく刃が、レイチェルの刀身の向こう側からなお、力尽くに振り切られる。一撃、必殺。一閃がレイチェルの銀を叩き折り、挙句にその鎧に、蜘蛛の巣のような罅割れを刻み込んだ。堅固な装甲が、まるで硝子の様な扱い。

「――ッ、あぁぁぁぁっ！！」

その勢いで、派手にレイチェルの身体が地面を摩りながら、吹き飛んだ。土に汚れる白金の髪、白い肌、欠けた鎧に肌着替わりのチェインメイルが露となる。薄紅色の口唇より紅の血筋が伝い落ち、雪のような首筋、その肌をにわかに濡らしていく。上体を引きずるように起こしながらも、その痩躯に叩き込まれた衝撃は、甚大だ。女の体は、ひきつけを起こしたかのように小刻みな痙攣を覚えていた。よもや戦闘を再開出来る状態ではない。

「……首の突っ込みようもねえなァ」

そのひとしきりを見届けるは、エリオ。ぽつりと溢れる呟きに、クロエもまた頷きを落とした。まるで別次元の、大よそ拮抗した実力者同士の戦い。そしてその決着。果たして彼らの言葉には意味の汲み取りかねるそれも多かったが、しかしなにか――譲れぬもののための戦いであったこと、それは少女にも、理解できた。

ともすれば、エルフの少女のことさえも、あるいは二の次であるかのような。

「全く、ひとの身を好き勝手にどうのこうのと、わたしの身柄はわたしにあるべきなのだわ」

「……うん」

確かにそれもまた道理か。聞こえた言葉に何気ない調子でクロエが首を縦に振る、そのときだった。エリオが目を剥いていた。驚愕の表情で視線を下に落としている。なにごとか。クロエもまた、視線が自然に声のする側へと向いた。

金色の、少女がいた。立ち上がり、彼方に視線をやり、眠たげに瞼をこする。口元に手のひらを添えながら、ひとつ、大きなあくびをした。いかにも寝起きの有様。

エルフの少女、アウルの稀少な起床シーンであった。

「――えっ」

「……えっ」

「うん？」

何か不思議なことがあろうことかと、少女は極々自然に首をかしげた。はちみつのような金色の長やかなる艶めいた髪、蒼穹に近しい青の瞳。葉っぱのようなかたちの耳朶。小柄な娘の外見は、ともすればクロエとそう変わらないか、あるいは彼女と比してなおちいさな、矮躯であるやもしれない。

「い、いつのまに起きてたァ！？」

「つい先刻（さっき）。貴女があまり助けを乞うのだもの。起こされてしまったのだわ」

アウルはお軽い調子でエリオに向かいひらひらとちいさな手を振ると、ゆらあり、クロエへと視線を向ける。じろじろと、まじまじと、覗き込むかのような不躾な瞳。ついには内面までをも見透かされてしまいそうな、超然とした双眸。「……お、おはよう、ございます」そうまで見回され、あまり居心地の宜しくないクロエが、どこか惚けた返答をしてしまったことを、いったい誰が責められるというのだろうか。のんきに挨拶の言葉を吐くクロエに、アウルは――くふふ、と悪戯気に微笑んだ。

「ああ、そうだわ」

思い出した、というようにアウルは瞳を緩やかに眇め、少女を見つめたまま、囁きかける。クロエは、不思議そうに、ぱちぱちと瞳

を瞬かせた。何事かと青い瞳、その水面が漣のように波打っては返す。

「彼は――――死んでしまったわ」

「……え、」

二の句が、告げない。クロエは、ぱくぱくと開いたままの口を開閉させながら、しかし声は言葉にならなかった。無意味に吐息が出入するばかりだ。辺りが暗闇であることと、一切の関わりすらなく、比喩でもなんでもなく――目の前が、真っ暗になった。まごうことなくクロエには、そのように感じられた。くらりと、感じるめまいに、額を押さえる。何も見えない、何も聞こえない――ただただ、アウルの言葉を受け入れかねるかのように、現実を認めまいとするかのように、瞳が瞬く。

そこにエリオが割って入った。深刻な面持ちだ。

「おいそこの。えェと、アウルちゃん、か？」

「アウルで良いのだわ」

「んじゃアウル。今の、マジかよ」

「もちろん――嘘だわ」

「おいコラ」

こいつ一回引っ叩いてやろォかとエリオは真剣に考えるところであったが、流石に少女か、あるいは一歩間違えれば幼女の領域に踏み入った彼女の頭をはたくのは気が引けた。仮に突っ込みでも、または躾であってもだ。躾はおっさん（レイヴン）に任せりゃァいいだろ、というわけでエリオはレイヴンに陳情を申し立てた。

「ようやっと起きたかクソガキ」

「随分な言葉だわね」

「つゥかマトモな躾しろよ！　仮にも保護者なんだろうが！　見てみろあのクロエの沈みっぷり！　今にもこの世が滅びそうじゃねェか！　あの婆ちゃんにしてこの子ありみてェな感じで魔王化寸前だぞ！！」

エリオの言葉はいささか誇張が含まれていたが、と言いたいとこ

ろではあったが、あながち間違いではなかった。その身を丸めるように屈みこんで、土にひたすらのの字を刻み付けるクロエの悲惨なる様相は筆舌に尽くしがたく憐れみを誘う。魔力ならざるどす黒いオーラを背負っているかにも見えるその姿は、この世の負という負を、呪という呪を抱え込んでいた。というか、沈みすぎだった。その様子を見て、アウルは大いに微笑んだ。悪戯気に。

いたずら好きにもほどがある。

「――あなた、が」

不意に、蚊の鳴くような声。か細くかすれた、吐息にも近しい声色。けほ、こほ、と咳き込む音が数度響く。溢れるはかすかな血の色。レイチェルの白い手が、赤く濡れる。彼女の眼前にいくらか距離を置き、金色の少女は堂々と立ちはだかると、腰に手を当て――名乗りを、上げた。

「アウル、だわ。好きに呼ばえ」

レイチェルは静かに、碧翠の瞳を掲げた。青き双眸、見下ろす視線と重なるそれ。しぼり出すように、声は溢れた。

「アウル様。――王命により私は命ぜられた。あなたを保護するように。いかな人の目に煩わせることなく、いかな人の手に委ねることなく、あなたという存在へ、恒久の平穏を約束するために」

――ふぅむ、とエリオはいささか意外に思った。彼女の言葉をその言葉通りなぞるのならば、“帝国”とやらは、エルフの少女の存在を欲しているということになるが、なんらかの目的あってのことではない、ということになる。純粋な、そのままの意味での保護だ。それが正直なものならば、少なくともレイヴンの手によるものよりかは、いくばくか真っ当な生活が約束されることだろう。少なくとも、一所（ひとところ）に居着くこと無く流れ流れるような生き様には成り果てるまい。

もっとも、信じるに足るには、いささか情報が少なすぎた。要するに、信じがたいものがあるのだ。

だが、その言葉に対するアウルの答えは、エリオの想像を遙か斜

め上に上回っていくものであった。絹のローブ一枚という姿のアウルは、腰に手を当てたまま、威風堂々と、レイチェルに向けて言い放つ。

「平穏なんてものはくそっくらえだわ――あるべきは、あるがままに。“不自然”に生き延びるなどまっぴらごめん」

自然体のままに悠久を生きる少女は――当たり前の様な顔をして、そこにいた。

つまりそういった経緯で、ウィリアムが戻ってきたころには、全てが片付いてしまった後であった。勝敗は、そして大勢は決した。打ち破られたレイチェルの傍ら、生き残りであろう数人の兵が付き添うばかりだ。レイヴンはその様子を、無造作に眺める。掲げた刃を肩に持ち上げたまま、その矛先を向けるでもなく、止めを刺そうとする様子もない。小さくため息を吐き出すと、億劫げにレイチェルへと言い捨てる。

「拠点帰還の術符の持ち合わせくらいあるだろ――とっとと行っちまえ」

その言葉にか、女の隣に居る魔術師が、懐を探りては何事かをレイチェルに問うた。彼女は静かに頷くと、襤褸の体を引きずるように起こす。力及ばずして伏した身は、無念であると同時に決して屈してはいないかのように、彼方へと視線を返した。その目は――がさりと、木々をかき分けて戻り来たウィリアムの姿を、しかと見止めていた。

「ウィリアム、王子」

「見ての通りだ。僕に大人しく帰るつもりはない、あと王子はやめてほしい」

大体、そんな必要も無いだろう、というのがウィリアムの本音でもあった。しかしそれにも関わらず、彼女は納得しかねる様子だった。訝しげなウィリアムの視線。ウィリアムにはそんな彼女の態度が、酷く奇妙に映るのだ。その理由にも、思い当たるところはない。

レイチェル自身の感情的な問題とは考えがたい、だろう。少なくともウィリアムの記憶に、彼女個人との因縁などは存在していないのだから。

「此処であなたを見つけた以上、私はこのことを王に告げなければならない。いずれ追っ手がかかるわ」

――どうかご覚悟を。

その言葉を聞くのは、二度目だ。警告か、忠告か。どちらとも取れる一言を残して、彼女は――彼女とその兵達は、一陣の一纏まりの光となって、彼方へと飛んだ。何事も無かったかのように消え失せ、静寂が戻る。切り開かれた森に、取り残された者達は佇んでいた。

「……相変わらずのくそ真面目だな、忠義だのなんだの――俺らには、幸いしたが」

その光を見届けたレイヴンは、肩をすくめてうそぶいた。その言葉の意味を汲み取れるものは、きっとこの場にはいるまい。

一方でウィリアムは、彼女の忠言めいた言葉を、思い返していた。果たしてどういった意図があってのことか――それさえも不鮮明で、不明瞭。ウィリアムの心中に、どこかもやもやとしたものが、否が応にも残る。ただ一つ、ウィリアムに問題が浮上したということだけは確かだったが。

「一人で突っ走んじゃねェよ、てっきりもう死んだかと思ったぜ」

「脚はあるぞ」

「直属でないとはいえ“帝国”所属の兵に渡れるなら、そこそこだな。悪くない」

「わたしの助けがあればこそ、当然だわ」

「おまえら！」

好き勝手言いやがって！　ぷんすかとウィリアムは憤慨することしきりであったが、幼い身にも関わらず尊大に振舞ってみせるエルフの少女の健在なる姿を、ウィリアムはこの時、初めて見た。寝入った彼女の姿も健在といえば健在であることに違いはないのだが、

受ける印象は全く別のものなのだから、ウィリアムがそう感じても無理はない。

「ああ、そうそう、クロエちゃんは任せるのだわ、ウィリアムくん」

「へ？」

高く涼やかなアウルの声は、まごうことなき少女のそれだ。大人びたかに見える口振りと共に、彼女は顎先で、いずこかを示した。それに従い示す先をウィリアムの視線が追いかける。——クロエであった。なぜか、うずくまっていた。小さくなって、膝を抱えて、何事か意味の取れないうろごとをぽつぽつと呟いては零している。どことなく傷ましいその様相を見ては、どうしたものかと迷う。それは、レイチェルの言葉が真実ならばと仮定した場合に発生する、問題のことだった。

ウィリアムになんらかの追っ手が差し向けられるという状況を想定するならば、居候の身である少年、彼の家主であるところのクレハやクロエらが迷惑を被ることは、自明の理。それが、問題だ。それだけは、何としても避けたい。ひとところに居着くなどもっての外、ならば家を出、町を出、また世界に流れる他はない。そのことに抵抗が無いわけではないが、仕方のないことと思えば、ウィリアムも構いはしない。元より流浪、放浪、あるいは放蕩——言ってしまえば浮浪にさえ近しい身だ。

などと、ウィリアムはそう考えた。そして同時に、クロエは、ウィリアムがそのように考えるということを見越していたのだろうか、それがゆえにこれほどにまで思い悩んだ様相を見せ、頭を抱えこんでいるのだろうか。僕はどうするべきか。きちんと話し合いの場を持つべきか。うむ、迷ってはいたが、迷っていてもどうにもならない。——ウィリアムの思考がそのように流れて、そして彼女の肩に手を伸ばそうとしたのと、クロエがゆっくりと振り返ったのは、全く同時のことであった。

半ば反射的に、クロエの矮躯がウィリアムへと飛びかかった。

少年が、尻餅をつく。——というか、押し倒されていた。

「――ウィル、ういるっ」
「ちょ、ま、クロエッ、なに、なんだ!?」
「ういる、生きて、いきて、てっ」
「落ち着け！　落ち着いて！　お願いします！」
互いの鼻梁がふれ合うのではないかというほどの至近に存在を感じるウィリアムは大いに焦ったが、クロエにすればどこ吹く風である。絶望の淵から希望へと唐突に打ち上げられたのだから致し方ない。舌足らずに意味の判然としない言葉をぽろぽろと漏らす有様、蒼い眼に海の真珠の如き玉の雫、その表情は泣いているのか笑っているのかも判然としがたい。
「若えなあー」
「若いのだわー」
「あんたら悪意しか感じねェよ！　特にそこのエルフ！　俗すぎんだよ！」
げらげら笑うレイヴンの傍らにアウルが微笑んでいた。エリオの突っ込みが走る。しかしその表情に安堵の色が拭い去れないのはご愛嬌、といったところか。

「ええと、なんだ、その――ありがとう」
「……――お、かえ、りっ」

Ｌｅｖｅｌ２３：『別れ、そして』

「結局のところ、人に似ていることが面倒なのよね」
アウルは、まるで当たり前のように――そう言った。
全て、一夜ばかりが全ての大騒動が一段落したところで、未だ暗闇の空を見上げながら、彼女が何の気なしに零した呟きであった。
ウィリアムらも、レイヴンもまた寝付くことなく、夜を過ごしていた。夜明けの時を、待ちわびていた。それはさながら、森林の帝たる目の前の人物（エルフ）に敬意を払うが如く。
火を、炎というものを、人はその手に扱うようになった。だが、依然として夜の闇はそこにある。それを決して見くびる事なかれ、と。――ウィリアムにしては戦闘からの昂奮が覚めやらぬのやもしれぬし、クロエに至っては自分の早とちりからあのような醜態を晒してしまったことに対しておもむろに膝を頭をと抱えこんでいるに過ぎないことではあるのだが。
穴があれば入りたいし、暗闇があればうずくまりたい。羞恥に顔まで赤らむクロエが、灯りのために魔法を行使することを厭うた、その心情をどうか察して貰えれば、それ以上のことはなかった。
「面倒、つぅと」
億劫げに木の根に凭れかかったエリオが、闇の向こう側にいる――アウルの、いるはずであろう場所に向けて、疑問を投げ掛けた。本当にいるのかどうか、それはエリオには確かめようもなかった。明かり一つとて存在しない暗夜、彼にとって一寸先、手の届かぬ場所は正しく、闇。
「わたしはそこのウィリアムくんを助けた。どうしてかわからないけれど、それはできる。わたしにとってこの森は庭のよう。全ては掌中、手に取るようにわかる――木々のざわめき。葉の一枚一枚のゆらぎ。地に根付いた生命（いのち）の胎動」
はァん、とエリオはかすかに首を傾げたが――アウルの、その言

葉に、ウィリアムは静かに頷く。
「そうでもなけりゃ、ありえない……なあ。確かに」
全て認めざるを得ないことではあった。実際に経験、体験していないエリオやクロエにとって、聞いただけではいささか信じかねるほどに、それは超常的なことだが。
ウィリアムは、知った。そして、理解した。目の前の、少女のかたちをしたそれは、人とは全く異なる、幻想の名付けられるに相応しき生き物なのだと。言葉や理性ではなく、半ば感覚で、理解させられた——あるいは、悟ったのだ。
「俺にしてみれば、そんなこたあどうでもいいからつっつと育てと言いたい所なんだがな」
「寝る子は育つ、とは、限らないようだわね」
「オイ、俺は何年と育つために寝ているのだなと勘違いし続けてきていたのか」
「馬鹿ね」
アウルの嘲笑うような声。一目見れば親子以上に歳の差があるような彼ら、レイヴンとアウル。守り守られる関係であるはずの二人のやり取りは、尖っているというか、なんというか、そう、偏っていた。そもそもの発端が、なにがなんなのか分からない内に巻き込まれたウィリアムらに、『なにかあるなら今のうちに言っておけ、早朝には発つからな』というレイヴンの言葉があって、今の状況に至っているのが——ご覧の有様である。まるで取り留めのない会話であった。
「……すごい、けど。……だから、ねらわれた……？」
沈痛に相貌を伏せていたクロエが、ゆらりと視線をかかげる。灯のない闇に、青い輝きが一点。天然の暗幕の向こう側からでは、決して見つからないような、かすかな光。
「すごい、なんてことでも、ないのだわ。わたしからしてみれば、なんでもない。ただの差異。こんなものは単なる少数派（マイノリティ）。多数派に取り込まれるか、あるいは消えるか」

「要するに、稀少（レア）なんだな。保護だの保証だのを考える気持ちは分からんでもないが。――竜（ドラゴン）だかも幻想種に分類分けされるが、それでも割とままある“災害”だ」

なにせやつらはでかいから隠れにくい――と、まるでレイヴンは見てきたかのように語る。否、実際に見たことがある、のかもしれない。あるいは刃を交わしたことさえあろうか。絶対にありえない、とは言いがたい。

「生きる時間が違うのだから、放っておいてほしいのだわ――隠棲しようにも出来たものじゃなし」

「……猫と、ひとの時間が、ちがうような、もの？」

「おおよそ似たようなものだわね、きっと」

「身も蓋もねェな！」

「その例だと僕らが犬猫なわけか……」

深刻な面持ち、真剣な言葉で何を語らっているのかという状況ではあるが、本人らとしては至って真剣なのだから、致し方のないことではある。アウルに至っては「わたしは猫だかの方が良いわよ、野良社会で太く短く生きてやるのだわ」などと言い出す始末。とはいえども、あるいはその文言は、先刻レイチェルに向けて言い放った言葉を考えれば――ある種、自然ではあった。

「しかし、アレだァな。一人いると実はもっと、どっかに隠れてんじゃねェかって思わないでも無ェなァ」

「……アウルちゃんの、いうみたいに……隠れて、くらしたり？」

「妖精が人知れず生きる理想郷、みたいな感じか。伝承ではよくある」

彼らの言葉に、ありえなくもないわね、と首肯しながら、しかしそれは前置き。

「それこそ無いものとする方が良いのだわ――それがきっと、望むところだもの」

小さなかぶりを振る。アウルのその表情は、どこか憂いを含んだかに見えた。

「さて」

その時。静かに、そして重々しく、レイヴンが立ち上がった。気づけばかすかに明るんだ空、陽はその姿を覗かせるかどうか――しかしそれで十分だと言うかのように、視線でアウルを促す。少女が立ち上がると同時、さくりと土を踏む音。裸足だった。ちいさくため息を吐くと、彼女はゆっくりと暗がりの中から、背を、三人の姿を返り見る。その傍ら、レイヴンは視線を細め、彼らを見渡した。

「俺らは、行かせてもらう。それと、ウィリアム」

「なんです、というか、僕に、ですか」

「同行ってんなら、エリオ、お前もだな――気をつけろよ」

レイヴンが示すは、二人への警告。自分を置いていかれたことに、彼らの隣で少なからざる衝撃を覚えたクロエだったが、これは仕方のないことであろう。クロエを除いたのは、彼の観察眼なりに、彼女が正確には冒険者ではないということを悟ったのだろう

男は、彼なりの流儀か思想に従ってか、ウィリアムの事情などを詮索することはしなかったが――元より今回のことはレイヴンらの事情に彼らを巻き込んでしまった形であるがゆえか――今後いかなる厄介ごとがウィリアムに振りかかるか、そのことについては容易に想像がつくことだ。ゆえの、危険の示唆。

例えば、この都市『カタラウム』は、“帝国”の属領とも言える街なのだ。

「オレねェ。どーすっかねェ」

緩々と立ち上がるエリオは、頭の後ろで手を組んだまま、飄々と天を仰ぐ。元より根無し草、半ばウィリアムと共犯的な関係を結んでいるとはいえ、ウィリアムの個人的な厄介までをも被る羽目になるのならば、少なくとも表面的には有益な関係とは言いがたいだろう。元より冒険者同士の盟約に、必然など無いのだ。そのことはエリオも、そしてもちろんのこと、ウィリアムも――承知しているこ

とだった。その様子を、戸惑いながらもクロエが見守る。
「一応。僕にも考えが無いわけでも、ないので」
「だろうな。ま、念のために言っておいた、だけのことだ」
あるいは、旅立つべきかというウィリアムの抱いていた逡巡、思考も含めて見透かした、その上で言ったかのように。くははと笑い飛ばして、ゆっくりと背を向けた。「それじゃあな」「それじゃあね」男と少女の、声が重なる。緩慢に遠のく二人の身。
ひとつの声が少女の脚を止めた。
「……アウル、ちゃ――アウルっ」
朝焼けの森に響くクロエの声。
ゆっくりとアウルは振り返った。
「アウル“ちゃん”でも良いのだわ――なにかしら」
齢五十を経る精霊。少女と呼ぶべきか、その名に能わざるか。されども少女の形をしたその姿は、子ども扱いのような言葉に薄く微笑んで、言葉を待つ。
「……――いつか。ひとと一緒に、生きられる、ときが……くる、かな……？」
ぽつぽつと切れ切れに、一言一句に想いを、力を込めて、言葉を選び、クロエは吐き出す。
その言葉に、アウルは――頷きも、首を振りもしなかった。否定も、肯定もせずに、ただ笑うばかりに、留めた。
「そのときには、きっとあなたが、そしてわたしもいないとき。――残念なことだわ」
そう言って、彼女は再び前を見た。もう、止まらない。止まらずに振り返らずに、真っ直ぐと歩み出す。そして、もう止めもしなかった。ただただ、見送るばかり。どっと疲れが来たかのように、そこで止まる。
だから見送りの言葉は、たった一つしかなかった。
『いつか、また』
それは誰かの言葉で、そしてひとりひとりの言葉だったのだろう。

返事は、彼方に腕を上げ、手を振り返す姿が見えたかのような、気がする、それぱかりだった。そして、それだけで十二分だった。

波乱の夜は幕を下ろし、這々の体で森を抜けだした三人の物語は、だから此処からはいささか事後処理の様相を呈する。なにせ一度や二度ならず全滅の危機に陥ったのだから、致し方のないことだろう。残念ながら彼らに、拠点へと帰還する魔法の道具といった便利なものの持ち合わせはない。否、本来ならば持ち合わせるべきなのだろうが、そんな金銭的な余裕があるはずもない。

しかし、何はともあれ。

「金入ったんだから重畳だろォよ」

酒場『旅の帳亭』であった。クレハ老に孫娘の無事を伝え、その身を送り届け、無断に一拍してしまったことを懇切丁寧に詫びた後、一足先に依頼の達成を報告しにやってきたのだ。そして待つこと数時間、視察師団による問題の解決が確認されたらしく、二人の目の前に出されたのがご覧の金袋である。——二〇〇金貨は詰まっているだろうか。問題そのものが中々の大規模だったとはいえ、結構な金額である。

「あれだ、僕は毎度思うんだけど、こんなお金ぽんと出してどうやって儲けが出るんだろう、冒険者ギルドって」

「そこはお店の秘密に触っちゃうからねえ」

他言厳禁さ、と酒場の店主のおばちゃん、イルはうそぶいた。何はともあれ、説明を求めているわけでもない。現在、目の前に金がある、ということが現実であった。三人で五十ずつ、残りは居候の身分ということで家に金を入れさせて貰うとする、といったところが妥当だろうか——とウィリアムが考えていたところで、不意にエリオの声。

「なぁ、ウィル。あ、おばちゃん、エール頼まァ」

「あーいよ。そうだ、エルフってのは本当だったのかい？」

おばちゃんよォそれを聞くにはちィと銭が足りねェんじゃねえか

い銭がよォ、しょうがないねえあんたってやつは今日は奢りにしといたげんよ、等と軽やかな会話が交わされている一方、ウィリアムは緩やかに首を傾げた。――いや、何について聞かれるかなど、すでに分かっていたのかもしれない。眠気に沈んだ頭がやけに冴えるのを、ウィリアムは感じた。

「……なんだろう」

「お嬢さんを僕にくださいとばあちゃんに言いに行くのはいつにすんだよォおい」

「そうじゃなくてだな！！」

がたん！！　とテーブルに拳を打ちつけて全力で突っ込みに回るウィリアム。聞くべきことはそうじゃないだろう！　と大いに憤怒する少年であったが、エリオはウィリアムを指さしながらげらげらと笑っていた。念の為に付け加えておくが、素面である。ひとしきり腹を抱えて笑った後で、はー……、と息を吐きながら、届けられたエールに口を付けて、エリオの一言。

「これからどうするつもりなンだよ、プリンス」

「家を出るに決まってるだろ」

「早ェな」

いや、やっぱりそうか、そうするよなァ――と、エリオは天を仰いで呟きを零す。ほとんど睡眠を与えていないせいで霞のかかったような頭、そんな状態での判断ではあるが、しかしウィリアムに間違った判断であるという意識は、無かった。

「クロエもそうだし、クレハのばあちゃんもいい人だからよォ。まァあの鉄拳冷血女はともかく、止めるんじゃねェかと思うぜ、オレは」

「だからこそ、だろう」

この話をするためにクロエを先に送り届けたのでは、決して無いと、果たしてウィリアムに言い切れるだろうか。その自信は、少年にはなかった。――というか鉄拳冷血女て。あまりにもあまりだろ。という言葉は、今は置いておくことにしたようだ。

ウィリアムはエリオに、言い切る。
「エリオまで面倒事に付き合わせるつもりはない。僕だけでも出てくよ。そこは揺るぎない」

Ｌｅｖｅｌ２３：『別れ、そして』（後書き）

「こんなに喋ったのは、久しぶりだわ」
「起きたのも久方だろうが」
「そうね。違う。まるで違うわ」
「ああ」
「あの人はいつも、わたしとひとの溝を埋めるのに終始していたわ。わたしの時間をいじくりまわして人にちかづける。ひととして生きる。まったく大それたこと。わるくはなかったけれど」
「――本当によく喋るな」
「気分が良いのだわ。察して頂戴。たのしみ。いつか、いつか――ふふっ」
「若作りはそろそろやめたらどうだ。その喋り方とか」
「キャラ作りじゃないのだわ！？」
――傭兵と幻想、その取り留めのない閑話。

Ｌｅｖｅｌ２４：『始まりへと至る道』

迷いなく断じるウィリアムの、その少年の決意は、固いようだった。ダークブラウンの双眸が、真っ直ぐとエリオへ向けられている。ハ――と息を吐いて、エリオは指先でテーブルをこつこつと叩きながら言う。

「ウィル、一個忘れてることがあんじゃねェかい」

「なんだろう」

「アルマとの約束」

「――――あ」

それを聞いた瞬間、ウィリアムはぽかんと口を開いた後に、あー、と天をおもむろに仰ぎ、ああ、と手を打ち合わせ、漸くと言ったように得心が行った様子を見せる。あまりにもうろ覚えであった。これもまた一期一会のその日暮らし、刹那的に生きる冒険者がゆえの逃れられぬ性と言ったところだろうか。

バリー総合商店私兵部隊長。女剣士アルマ。彼女との約束、であった。

そして、その辺りのくだり――決着を着ける旨――をはっきりと思い出したウィリアムは、大いに後悔した。今ここで、その約束を想起してしまったことを。そして過去に軽はずみな約束を取り付けてしまった自分を。とはいえその時は、彼女の言葉に応えることが“筋”というものだと、ウィリアムは考えていたのだ。果たして過去に舞い戻ったとして、彼はやはり同じ選択をするだろう。

「そうだ……そうだった……やってしまった……ということはあれだろ、アルマと剣戟やってる即ち僕がこの街出てくってことになっちゃうんだな」

ウィリアムの身としては、手紙でも残して知られぬ内に夜逃げする心積もりだったのだが、そうは行きそうにない、という事実が明らかになってしまったということになる。少年にとっては憂慮すべ

きことである。ぐぬぬと頭を押さえて唸るウィリアムに、エリオは何気なく言う。

「ブッチしちゃおうぜもう」

無責任此処に極まれり。

その言葉に、ウィリアムは渋い表情を浮かべた。

「それはちょっとな……」

いかにも切れがない様子で言いよどむ。がしがしと灰色の髪を掻きむしり、ッとにどうしたもんかな、とウィリアムは大いに頭を抱えた。その様子を、苦悩を――エリオはひひひといかにも気楽に笑い飛ばした。他人事のように、否、身内だからこその適当さ加減か。エリオはエールのグラスを静かに傾けて、それをごとりと机上に置きながら、何の気なしにうそぶく。

「じゃあこうしようぜ――実際に困ってから対応するってのはどォよ」

「現実逃避じゃねえか！」

「おうよ」

思わずがたんと立ち上がるウィリアムに、にやりとエリオは親指を突き立ててみせる。良い笑顔であった。無闇に良い笑顔を浮かべて、応える。「良いんだよ世話になれる内ァならせて貰おうぜ」とは、眠気と酒気の入り交じったエリオの脳髄から吐き出された戯言である。

とはいえ、明日の命さえも不安定な冒険者という立場からすれば、安定して存在する拠点は喉から手が出るほど欲しいものではあるのだが。その観点から言えば、エリオの言葉は幾許かの真実を含む。

「ま、アレもだめコレもだめって訳にゃいかねェだろ。どっかで妥協しなきゃなんねェってのは変わらん」

などと訳知り顔で、エリオは再びエールを喉に流し込んだ。白く整った顔立ちに、不思議と酔いに赤らんだ気配は見られなかった。確かに、その通りだ。腕を組みながら、ウィリアムは大人しく首を縦に振る。

「なんなり話付けて来いよ。オレはちょいとあることないことおばちゃんに土産話しなきゃなんねェし」

お前さんたち出てくんかい、と穏やかな調子で語りかけてくるイルに、これでもえらく長く居着いたもんじゃねェかなあとエリオが答える。視線がゆっくりとウィリアムに向けられると、少年は小さく会釈し、頭を下げた。

「ちょっと色々あったんで。お世話んなったのに、唐突で――申し訳もない」

恐縮した様子の彼に、妙齢の彼女は恰幅良い身体を張って、大いに笑った。細やかなことなど一息に吹き飛ばしてしまいそうな、豪快な笑い声だった。力強い。

「なあに、面倒な仕事を片付けておいてくれたからね、上客さ」

いつかまた来な――という風にあっけらかんと、しかし朗々と。彼女のその言葉に、ウィリアムもまた、ほのかに笑みを表情にほころばせる。少年はそのまま、テーブルの木目に手を突いて立ち上がれば、その場を辞す構えとなる。

「おや、一杯くらい飲(や)っていかないのかい？」

「いえ、十分頂きましたんで――」

ありがたい、と真摯にウィリアムは零して、背を向ける。ウィルの分までオレが飲むから安心しろよォおばちゃん、とはエリオのお言葉。言うたね、と笑うイル。売り言葉に買い言葉か。エリオはゆっくりと腕を掲げて、別れる背を見送りながら、あァそうだと、ウィリアムの後ろ姿に一声、投げ掛ける。

「出てく時ンなったら言えよ。オレもついてくから」

「それは一番先に言えよエリオォオオオオ！！！」

「面倒だろォが付き合わねえ訳もねェだろ、第一だな――」

元より根無し草の無目的、お前ら“二人”の破天荒に振り回されんのは嫌いじゃねェのよ。

背を返り見たウィリアムが凄まじい勢いでずっこけかける様を見やりながら、エリオはひゃははと諧謔的に笑った。

さて、それからの状況を、端的に言おう。

白昼堂々、ウィリアムは襲撃を受けていた。

厳密には白昼堂々とは言いがたい、薄暗く影の落ちる路地ではあるが――後をつけられていたのか、あるいは薬屋に戻るまでのルートに、何者かが張りこんでいたのか。少年とて、全く警戒していなかったわけではないが、ただでさえ休養も満足に取れていない状態――加えて、相手方の動きが早すぎた。先日の騒動から一日と経過していないというのに、この有様。果たしていかなる魔法を用いて情報を伝達したのかは定かではないが、ともかく現在、ウィリアムの首筋には、背後から銀色の刃が突きつけられていた。血管に触れる冷たい刀身。ウィリアムの額に、知らず冷や汗が伝った。

「ご同行願います」

低く、くぐもった声だった。男のそれか。目深に黄衣（ローブ）のフードを被りこんだその姿に、ウィリアムは視線すらをも向けられない。意図せず肩をすくめて、ため息を吐いた。

「用件は」

「申しかねますな」

聞いて教えてもらえるはずもない。そんなことは勿論のこと、試すまでもなく少年も心得ている。ゆえにこれは、ただの時間稼ぎに過ぎない。決断までの引き伸ばし、せめてもの思索の猶予を得ること。恐らくウィリアムの背後についた一人、その一人を打ち倒すことは決して不可能では無いだろうが、しかし単独での行動とも思い難い。ウィリアムというただの個人を捕らえる目的、そしてその利益は、かの帝国に絡んだ事項以外にあるまい。そしてその事が真っ先に通達されるのは、この地に居座るどこぞの王侯貴族か――ごつん。

ウィリアムが思考の淵に至る最中、ひどく嫌な音が響いた。からんと音を立て、刃が地に落ちる。気づけば背後に刺客の気配はなくなっていた。咄嗟にウィリアムは背後を返り見る。

細く鋭利な目付き。乱雑に切り揃えられた茶髪。いかにも破落戸といった顔付きに、しかし装備は手入れの行き届いたクロースアーマー。二十と、その半ばに届くかどうかといった年頃の男。中々に様になった姿のその男に、ウィリアムは見覚えがあった。

「お――おぉ、えーと」

「あぁ？　んだ、あの時の、灰髪の餓鬼じゃねえか」

「誰だっけ」

「テメエ」

男の細い視線がぎろりと狭まる。どうやら目付きが宜しくないのは元々であるらしかった。どうやら彼が、ウィリアムを狙った刺客の首根っこを引っ掴み、背後から引きずり倒し、地に叩きつけたらしい。流れるような仕事ぶりである。ケッ、と粗野に唾棄した男は、じろりとウィリアムの姿を覗き込む。

「……まさか本気で忘れたとか言わねえだろうな」

「残念なことに僕はむかついた相手の顔は覚えてる。……ホークか」

然り、然りだよと男は笑って大いに頷いた。

――ほんの数週間ほど前のことか。事件の加害者であると同時に、結果的には被害者となってしまった、ひとつの集団が存在した。十数人の人員、主に破落戸やチンピラによって構成されたならず者の集まり、それは“鷹の爪”と名付けられた小規模のクランであった。男はその長。ホークである。

「って、あれだ、どうして僕は助けられてんだ」

大いに首をひねるウィリアム。男と少年は、利害の不一致の結果とはいえども、かつては敵対した間柄である。憎みあうほどに互いのことを知っていた訳ではないため、大したわだかまりは存在していないが――しかし、違和感は感じざるをえない。

「お前らのおかげ様だよ。というか、お前らのせいだ」

「というと」

「有事にはギルドの私兵、平時には治安維持」

治安維持、クソったれ極まりねえ俺らが治安維持だとよ――と、

ホークは自嘲気味に笑った。その言葉に、なるほどとウィリアムは首肯する。“同職ギルド”の手に引き渡された彼らには、そのような処遇が下されていたのかと、漸く得心が行った様子である。なんとも今更、今頃の話ではあるのだが。

「衣食と寝床は保証され、週の末には酒が飲める。全く笑える話だぜ――餓鬼」

「ウィリアムだ」

「良い街だな、此処は」

――俺らみてえなクソったれを受け入れる場所があるんだからな、と。

そんな本当に何気ない言葉に、ウィリアムはなんだか、ひどく気が抜けた気持ちになった。ぶっきらぼうに吐き捨てるようなホークの言葉に含まれていた、幾許かの真実味が由縁か。そんな男の傍らに駆け寄ってくるいかにもチンピラ風情といった男が一人。「なんすかソイツ」「曲者だ」「縛っときますか」「頼んだ、ついでに連れてってくれ」「縛り方はどうするッスかねえ～」「どうでもいいだろうがそんなもん！！」などといった愉快な会話を経て、改めてホークはウィリアムへと向き直る。

「と、そういうわけだ――あまり構えてくれるなよ」

「ははあ。……クロエの判断もあながち間違いじゃなかったってことか」

明日はお客様かもしれないから。何気なく零したのであろう、過去の少女の言葉が、不思議とウィリアムの脳裏に浮かび上がった。ほうと息を零して、ウィリアムは静かに頷く。

「まあ無理もないがな――って物分り良いなお前……」

物分りのいい餓鬼は好かねえなあ、などとホークはおかしそうに瞳を眇めた。

「相変わらずトラブル続きみてえだし」

「僕も大いに困ってる」

「今回はたまたま通りかかったから良かったが、目の届かない所ま

ではどうにもならん。そいつは勝手にどうにかしろよ――それでは、善良な市民」

異様なまでに似合わない丁寧な言葉遣いで、ホークは背を向けた。ありがとう、とウィリアムは笑って返す。少年自身は一介の冒険者であるがゆえに、市民権などを持ちあわせていようはずもないのだが、それはまた別のお話である。背を向けた男は、振り返るまでもないと言うように、歩み出しながら言う。

「言っといてくんねえか」

「何を」

「あの薬屋ん子にだ。“許さなくていい。だが、すまなかった”と」

「そういうのは、自分で言うべきだ」

「――こいつァ手厳しい」

意外そうなホークの声。その口の端には、不思議と笑みが浮かんでいた。いや、そうだな、その通りだ――と男は腕を掲げて別れを告げると、己の職務に戻った。そしてウィリアムもまた、帰路に着く。

――出来るだけ大通りを歩くようにするか。そう考えながら、出来る限りの急ぎ足で行く。彼ら警邏の努力を無に帰してしまうのは、ウィリアムとて望むところではなかった。にわかに陽が傾きかけた空、漸う辿り着くは薬屋の前。さて、とウィリアムは首をひねる。

どうしたものか。

この際、単刀直入に切り出してしまえば簡単な話だ。それでこの事項には片がつく。立つ鳥跡を濁さず、綺麗に痕跡を消し去ってこっそりと旅立つという選択肢も、無いではなかったが――あいにく、少年一人の手で消し去ることが出来るほど、この街に残したウィリアムの足跡は、少なくはなかった。

ままよ。

結局のところ、ウィリアムが選んだ決断は、身投げであった。考えはまったくもってまとまっていないし、その選択も定まったわけではない。即ち、なるようになれ、というある種投げっぱなしな精

神に寄るところが大きい。ぐいと木造の扉を引けば、ちりん、と小さな鈴の音が響いた。店番に立つは、メイドの姿。二つ結いの藍髪も相まって、やけに目立つ。――ネロだった。

「いらっしゃいませ――嗚呼、ウィリアムさんですか。お帰りなさいませ。クロエさんなら部屋でお休みになられていますよ」

やけに丁寧な言葉遣いは一日ぶりながら、ウィリアムにはどこか懐かしく聞こえた。もうちょっとこう、普通で頼めないか、とウィリアムが言ったのは果たしていつの日のことだったか。生まれてこのかたの性分でして、と返されたものである。同時に、こうも言い含められたのだが。――お構い無く、丁寧なのは言葉遣いばかりですから。

言葉の内容はどこにやったのか。

「ただいま――うぃ、わかった」

そういったウィリアムが、ぐるりと周りを見渡してから問う。

「クレハさんは？」

「何でもお昼前から御用事だそうですよ、夜には戻ると仰っておりましたが――しかし、まあ、ボロ雑巾のていですね。これで成果なしなら笑うしかないですね、全く。あはは」

「あんたが笑ってどうする！！」

そう、ご覧の有様である。抑揚のない声で笑ってみせてはいるが、彼女の表情そのものは不動を保ち続けているためか、ひどく不気味な様相であった。声を張り上げたウィリアムが思わず気を抜くと、どっとその身に疲労が押し寄せてきたかのように、肩を落とす。なんというか、ぐったりである。頭脳も肉体も疲労困憊であった――が、今のうちに伝えておくべきことはいくつか存在していた。

「それで、実利はいかばかり？」

「甲斐はあったよ、いや、十分すぎるくらいだな。二〇〇金貨、後で等分して幾らか渡すよ」

家賃としていくらかを収めるにしても、それでも十二分に過ぎる額であろう。それは重畳、とネロは無表情のままに頷く。

「お祖母様がお帰りになられましたら、お伝えしておきますよ。この後、お休みになられるのでしょう」
「うん。頼む」
ともすれば慇懃無礼ですらネロという人間だが、しかし流石に気が回る。伊達に長く奴隷をやっているわけではあるまい。真っ直ぐにウィリアムを見据えるその目は、少年の体調のほども、しっかりと理解しているのだろう。ありがとう、と言いながら、ウィリアムは内心――参ったな、と思った。なるようになれと飛び込んだ結果が、決断の先送りである。なんともうまくない。気を紛らわすように、ウィリアムは一つ問うた。
「そういえば、クロエの様子は？　大丈夫そうだったか」
「元気でしたよ。調べ物と言って、書斎から何冊か持って行かれましたし。一緒に置いていた私の私物も持って行かれてしまいましたが」
――エルフ、などというものが、存在していたのですね。
どこか感慨深く、そして嘆息するかのように、ネロは呟いた。その面（おもて）に、明確な表情の色はうかがえない。喜ぶでもなく、憂いるでもなく。しかし、その表情は――決して何も感じていないというものでは、なかった。
彼女の伝えるクロエの様子にも、そしてネロのそんな様子にも、どこか安堵したような息を零しながら、ウィリアムは言葉を続けた。もっともこれは、純粋な好奇心に過ぎないのだが。
「私物って、ネロさん、そんなの持ってたのか」
そのことについては、至極意外そうに――ウィリアムは瞳を丸くする。私物、それも、書物とは。まだ活版印刷技術というものが行き渡っていないこの世界に、本はそれほど安い代物ではない。そもそもこの衣装こそ私物なのですけれどね、と、いかにも心外だというようにネロは息を吐いて、小さく首肯してみせた。
「ええ、愛読書です。本とは言っても簡単な形式（もの）ですよ。嵩張らないものを何冊か」

「どんなの？」
「『初歩から学ぶ暗殺術』などなど」
「なんてものを……」
「大丈夫ですよ。冗談の類ではありません。先祖代々に伝わる由緒正しき技術相伝の書でして」
「なお悪いわ！！」
クロエが美少女暗殺者になったら一体誰がどうしてくれるというのなら。いや、ならないだろうが。ウィリアムは首を振り、頭の中から余計な想像を取り払いながら、不意に――思い浮かんだことがあった。
ネロに頼めることがひとつ、あったということを、思い出したのだ。
「ネロさん、アルマって知ってるか」
「商店私兵隊のアルマさんでしたら」
同年代の女性はあまりおりませんでしたから、良く覚えておりますよ、と幽かに懐かしむような響きを残して、ネロはうそぶく。翡翠の瞳が水面に波立つかのごとく、ほのかに揺れた。
「仲良かったのか」
「仲睦まじくとは行きません。浴場で共湯する程度です」
「めちゃくちゃ仲いいなあ！？」
「冗談ですよ」
一貫して無表情で通しているネロは、果たしてその言葉が冗談なのか本気なのか、その判断は極めて困難である。とはいえ彼女の過去の振る舞いを鑑みるならば、冗談と考えておくべきが妥当ではあるだろうが。ともあれ知り合いということは、ウィリアムにとっては好都合である。明日にでも手紙を渡しに行ってくれないかという頼みに、彼女は快諾してみせた。
――さて、とウィリアムは一息つく。これで今出来ること、やるべきことは一通り済んだだろう。最終的な結果、到達地点（たびだち）は定まっているにしても、それまでの筋道はよくよく考えなければならない。

そう思いながらウィリアムが、ふらふらと自らの寝床たる地下室に足先を向けた、その時だった。

「後程にクロエさんと浴場にでもいかがでしょう」

「真顔で言われても困るよ！！」

Ｌｅｖｅｌ２５：『決意へと至る由縁』

暗い部屋は未だ夜半。明かりもなく、起きているものの姿もない。だが、小さな寝息はかすかに聞こえていた。なぜならば彼女は、自分でも気づかぬ内に机に突っ伏して眠りこけていたからだった。

――彼女。クロエである。

自室の椅子に座し、机に向かい、羊皮紙をにらめっこしていたつもりが、物の見事に、机に頬をむにりとくっつける形で寝入っていた。なんたる不覚か。涎を垂らしてでもいないものかと少女はしきりに口元を部屋着（ルーフ）の袖でぬぐい去るが、別段どうという異変も無かった。緩々と頭を起こして、そこでようやく身体に感じる暖かさに気づく。クロエの肩から毛布がかけられていたのだった。そのまま、ふと背後を見やると――ネロの姿が目に入った。まるで気配も感じさせずに、彼女がそこに存在していることに、クロエは驚きを禁じえない。

「おや――申し訳ありません。起こしてしまいましたか」

表情を変えずに軽く小首をかしげる姿に、ああ、彼女がこれを被せてくれたのかと得心が行く。クロエにしても、自分でも身体がそこはかとなく汗ばんでいることが分かった。なんというか、こう、気になるのである。就寝前は色々と脳みそが振りきれていたために意識にも留めなかったが、せめて身体くらいは拭いておかねばなるまい――などと少女は真剣に考えた。極めて、深刻に。

「……ううん。きにしない、で」

「――はい、お身体を冷やしませんよう、お気をつけ下さい」

恭しく頭を一度下げてから、ちらりとネロは机の上へと視線を落とす。そこに広げられた紙片を見て取れば、ふむと頷き一つ。軽く視線を下げると、クロエに視線を合わせて覗き込むかのように、見据えた。

「お役に立てそうでしょうか」

「……うん。――今、お祖母ちゃん、だいじょうぶ……かな」
彼女によって被せられた毛布にもそもそと包まりながら、クロエはゆっくりとネロに向かって視線をかかげた。御祖母様ならまだ起きていらっしゃるかと、とネロは思案げに紅い唇に指先をあてがいながらうそぶく。
「小さな事でしたらお伝えしておきますが」
言葉に、クロエは小さくふるふると、首を横に振った。大切なことだから、と。ネロはそれ以上を詮索することなく首肯すると、ネロは机上に、かちゃりと音を立て、一包みの袋を置いた。その響きにはクロエとて決して馴染みのない音色ではない。硬貨の響きである。
「ウィリアムさんから、報酬の取り分だそうですよ。今は死んでらっしゃいますけども」
残虐なる言い草だが、抑揚に乏しい声音のネロが発すれば、実に何気なく聞き流してしまいそうなことが恐ろしい。だが、ウィリアムの実際といえば、彼女の言葉通りに死んだように眠っているため、大した問題ではなかった。それよりもクロエの気になる点は、その袋の重みである。しばしば店番を勤める身のクロエからすれば、目算である程度の分量はわからなくもない、のだが。
「……ちょっと、おおい……よう、な？」
はてな、と首をひねる。クロエの取り分ということだから、三等分にされているはずなのだが、それにしては随分と多いような――気が、した。いくら報酬に色を付けられていたとしても、である。
それなのですがとネロは、にわかに困ったかのように、細い眉をたわめる。
「居候の身分ということで家賃にと四等分にされまして」
「……うん」
「それで御祖母様に申しましたら、クロエさんにと」
「……む、むぅ」
思わずへの字口になるクロエ。なんとも複雑そうな表情になって、

ぐりぐりとこめかみを親指で押さえ、神妙に呻き声を漏らす。なんというか――見透かされているような、気分に、なってしまったのだ。

金貨の袋を上下左右から神妙に見回した後、ひとまずクロエの中では、半分はウィルに返しておこう――ということに心が決まった。結果としてはふりだしに戻ってしまうわけなのだが。

「わかった。……ありがと、う」

こくりと小さく頭を下げるクロエに、お構いなさらずとネロは言い含める。丁寧ながらもともすれば無感情な言葉の色は、しかし聞くものを不快にさせない。空気のように希薄でもなければ、水というほどに明瞭でもない。物言わねどもしっかりとそこに存在する――大地か。もっとも、クロエから見ても華奢な彼女に相応しい形容かどうかといえば、やはり首を傾げてしまうが。

――とはいえクロエほどに華奢でもなければ頼りない風貌でもない。余談だが、クロエの方が年上である。ネロ。職業奴隷。身分奴隷。十八歳。

「お伝えしたいことは、以上ですので、では――」

お休みなさいませと、そう言いかけたところで、ふと留まる。ゆっくりと、目の前のクロエの姿を、見下ろす。幾ばくか生気を取り戻したようではあるが、いかにもくたびれた様相の少女。普段は後頭部で結われている黒髪ははらりとほどけて、背に無秩序にはべる。机に突っ伏して寝ていたせいであろう、白い肌に木目は残らずともほのかに紅く痕が残る。汗ばんだ肌へ、かすかに衣服が張り付いてもいようか。

「――お身体、お拭き致しましょうか」

「……う、ん。……おねがい」

閑話休題。

場面割愛。

時間経過。

それではお休みなさいませと改めて夜半の挨拶を取り交わしたと

ころで、しかし今更に眠気の訪れを感じられるわけでもなかった。つまりそういうわけで、クロエは、クレハの部屋の前に立ち尽くしていたのである。逡巡はほんの一瞬、こつこつと小さな手が戸を叩く。

「クロエ、ね。入っていらっしゃいな」

部屋の中から、落ち着いた声。——長年と暮らしていたにも関わらず、否、ずっと祖母と二人で暮らしていたからこそであろう、クロエは大いに驚いた。投げかけるつもりだった声が思わず引っ込み、ぱくぱくと口唇を開け閉めさせてしまうほどである。足音と、ノックの音、それだけで来訪者が誰かを判断したのだろう。かちゃりと戸を開けば、部屋に灯る微かな光、机上に広げられた羊皮紙、そして向けられた老女の柔和な笑み。どこか人を安堵させるそれ。ゆっくりと合わせられる視線。年老いた嫗（おうな）は、しかし腰の一つも曲がっておらず、その目線はクロエのそれよりもずっと高い。

「まずは——お疲れ様、かしら。面白いものも見られた様」

「……うん」

こくん、と頷く。——城塞都市カタラウムには少なからず人外と呼べる者が存在する。人にあらざる者共たちが、人間の生きる社会の中で暮らし、生きている。生まれてこの方、町の外——他の国というものを見たことがないクロエにとって、その光景はさほど違和感を抱かないものだった。そして同時に、知った。

その光景は並々ならざる努力の上に成り立っていたのだと。

人には人の。そうではない者にはまた別の、流儀、規範、社会というものが存在する。にも関わらず、人ならざる者が人間に交わり生きるということ。それは、数の上で、それのみで圧倒的に多数である人間の社会に合わせて——即ち自分を曲げ、変えることによって——ようやく成立することだった。

「……見て、きた、よ。……すごく——」

遠い、存在だった。

手の届かぬほどに、人間とはあまりにもかけ離れた。

人とは異なる時を生きる者。
エルフ。
「クロエ。……私はね、一度もエルフを見たことはない。けれども、いるかもしれないし、いて欲しいとも思うわ。――それに憑かれた人を、知っているから」
「……憑かれ？」
「そう」
嫗は穏やかに頷いてみせる。きしりと椅子が軋みを上げた。お座りなさいな、とクレハの誘う声に応えながら、クロエはベッドの上に腰掛け、ゆっくりと続く言葉を待った。
「人になじまぬもの、なじめぬもの。植物のように穏やかな時を刻むもの。大樹のごとく人々を見守るもの。――それを変えようとした人」
しがない昔話ね、とクレハは懐かしむ様にうそぶき、にわかに天を仰いだ。
「……でも、それを、変えるのは――……たくさん、困ることは、あるとおもうけれど」
「然り。その困ることっていうのは、人の都合、だものね」
あるべきは、あるがままに。いつかの彼女の言葉が、少女の脳裏に去来する。
見つめる真っ直ぐな瞳を、クレハは至極、穏やかに受け止めた。
――さて、と彼女はクロエと向き合ったまま、手を膝に置く。
「大切な――お話なのでしょう？」
老婆の表情は、幽かに微笑んだかに見えた。淡いそれに、クロエは首肯すると共、唾を飲む。すでに、迷いはなかった。
「――私、旅に出る」
決心を吐き出す。後ろめたさも躊躇もなく、まっすぐに言葉を向ける。クレハは――驚かない、わけでは、なかった。驚かない、はずもなかった。けれども、きっと半ば――予想していたことだった。予想が出来た、ことだった。

「突然ね。……いえ、突然でもないのかしら。思えば――」
箱入りに育ててしまったことはきっと過保護にも余りある、そのことに問題があるのだと、クレハは考えていた。貴方の望むがままに生きろと向けたその言葉に、迷いもなく「お祖母ちゃんみたいに、人を助けたい」と答えた彼女は、果たして何年と時を遡ることか。長い時を隔てて一人前と言える技術を身につけ、そして彼女は知った。
この世界に存在する生命を、その多様なるを。
人が伸ばす手の届く距離は、限りあるものなのだと。
「――理由（わけ）を聞かせてくれるかしら」
「……人だけじゃ、なかった。……ううん、なんというか――人は、あわせてもらって、たんだ。……それが無いと、途端に立ちいかない」
訥々と言葉を選びながら紡がれる。まっすぐに向き合ったまま、視線を交わし、言葉を交わす。息を継ぐクロエに、クレハは緩慢に頷き、促す。ゆっくりと開く、口唇。「……私は――」
「私は世界を知りたい」
クレハがにわかに視線を細める。どこか眩しげに。
「……共に生きられるか、そう聞いて、あの子（エルフ）は、それはきっと、ずっと先と、答えた。……私には、返す言葉が、なかった。……だから」
「――ええ」
静かにクレハ老は、微笑む。答える。ある種、覚悟の一つでも決まったかのように。孫娘の言葉に。
止めることを、考えないわけでは、なかった。考えないはずはなかった。その可能性が脳裏に過ぎらないわけもなかった。けれどもそれは無意味なのだと、半ば以上に悟った。止めることは、出来る。実際問題、出来るかどうかで言えば、それはむしろ容易なことだろ

う。けれども――

「……私は、ほしい。――――“そんなことはない”って、言い切れるだけの、ものが」

無意味なのだ。

いくら止めたところで、押しとどめたところで――真っ向から向けられるクロエの双眸、その蒼穹に浮かぶ真っ直ぐな光――比類なき動機（モチベーション）の火を消すことなど、誰にだって出来やしないのだから。

クレハは、ふふとおかしげに息を零す。その様子に、クロエもまた気勢を削がれたかのように、とすんと肩を落として、ばったりと後ろ向きにベッドに倒れ込んだ。さながら緊張の糸が途切れてしまったかのような姿である。転がったままゆっくりと祖母に視線を向け、クロエはぽつりと呟く。

「……おばあちゃん」

「なにかしら」

「……私、親不孝者、かなー……」

「クロエのお母さん程じゃあないわ」

あの子は今頃どうしているのだか――と笑って、ゆっくりと立ち上がり、クロエの隣に腰を沈めた。緩や、視線を落とせば、映り込むのはふわり、笑みに緩んだ娘の表情。全くと肩を竦めて、老女は微笑む。微笑。

「しっかりね」

「……うん」

「元気に戻りなさいな」

「……もちろん」

「何かと大変よ――旅っていうのは」

「……わかる、かな」

ある程度の想像がつくくらいには。否、想像を絶するほどに、とも言うべきか。しゃわがれた老婆の手のひらが、くしゃりとクロエの頭を撫でつけた。「一体誰に似たのかしらね」呟く声に、クロエのさざめくような笑いが返ってくる。なんでもないことのように、

当然のごとく。それはクレハからすれば、思わず呆気に取られてしまうような、言葉だったのだけれども。

「……私も、お母さんも、そうなら。……きっと、おばあちゃんから、似たんだ」

かくして一夜明けた朝方、ウィリアムは一通の手紙を受け取ることと相成った。「その場で御返事頂けましたゆえ」とのことで、ネロから手渡された一通。その封を切ってみれば、『今宵、十夜の鐘が鳴る刻限、南門にて』とある。アルマらしい――と、思った。いっそ男らしいとすら感じる、簡潔極まりない手紙である。南門という場所がどこなのかウィリアムにはわからなかったが、しかし前もって確かめておけば良いことだろう。走り書きの文字にざっと目を通して、地下室を出る。店内を見回せば、クロエとエリオはすでに出た後のようだった。ネロとクレハ、各々と挨拶を交わしてウィリアムは薬屋を辞す。

「よォ。遅ェかったな」

「……ウィルも……朝、市？」

ものの見事にウィリアムはずっこけかけた。エリオとクロエがそこにいた。

「ああ、でもまあ必需品の買い足しは要るか……」

何にせよアルマとの約束を済ませば、その足で町を出れば良いかと、そう考えれば渡りに船といった所であった。ウィリアムが首肯する。

「オレはちィと同職ギルドさんちに頼んだもんがあってね、そいつ取りにかなきゃなんねェんだわ」

ちょうど良い寸法の弓があるってんでなァー、と朗々と語るエリオ。先日での酒場のくだりから延々と飲むに連れて勢いで契約してしまったのではないか――という疑惑じみた視線がエリオに向けられたことは、決して不思議なことではない。なぜならその視線はウィリアムと、そしてクロエのそれだからだった。つまり、そういう

印象値なのだ。
「――かさばるから持ってなかったってェだけでオレの本職は弓手だぜ。いやホントに。信じろ。オレを信じろ」
「……ほんとう？」
「ということにしておこう」
「オイ、仕方ないからそうしておいてやるみてェな雰囲気はやめろ」
そのやり取りにか、くすりとおかしげな笑みを口元に浮かべるクロエ。彼女は一度二人を返り見れば、丈長（ブリオー）のワンピースの裾を引いて、先導するように歩みだす。
「……いこ？」
「うん」
「応ォー」
……正直なところ。
三人足並み揃えるもこれっきり、というのも、無いよなあ――と、ウィリアムは天を仰いで、考えた。
全てが丸く収まるような、先日にエリオが語った、妥協をせずに済むような、選択を。

Ｌｅｖｅｌ２６：『旅のお供に道連れを』

「――ウィルは」
「うん」
至極賑やかな、市場であった。城塞都市カタラウム、その中央広場。そしてこの広場に面して連なる通り（ストリート）に、朝早くから人と人がごった返す。有象無象の区別なく、それが流れの商人であろうとも構うことは一切ない。否――客が何者かなど、そして売り手が何者かなど、究極的には関係が無いのだった。商品が真物で、それを前提とするならば、後は金が全てだ。
揃わぬものは無いのではないかという市場にただ一つ、“奴隷”という商品の影は見られなかったが――それはまた、別の物語だ。諸々の生薬の材料、その仕入れ分にポーチを一杯にさせたクロエは、通りを共に歩むウィリアムを見上げた。
「……旅に、いちばん、必要な、ものって……なんだと、おもう？」
「……うーん」
一番っていうと、難しいな――と、うそぶきながら、ウィリアムは小さく首をひねる。そうしながらも、左右を見渡し歩みをすすめる最中、ふと唐突に足を止めた。通りに並んだ商人の一人に歩み寄り、なんぞかを所望する。
「……それ、は？」
その様子に、後ろから控えめにクロエが覗きこんでくる。手のひらの中で金貨の枚数を数えながら、ウィリアムは彼女に向き直る。
「一番かはわからないけど、僕は大切なもんだと、思う」
「……？」
「――――油」
大真面目である。極めて真剣な表情で、ウィリアムはそういった。少女の瞳が、ぱちぱちと瞬く。どこか不思議そうであり、あるいは興味深げでもある表情だ。金貨と商品を受け渡しあい、少年はその

手に油袋をぶらさげる。ワイングラス数杯分、といったところか。
「正直、値は張る――けど、用途が広いんだ。照らす範囲も松明なんかよか広いし」
単に火をつけるにも必須だし獣肉なんかも油引いて焼けば大体はなんとか食えるんじゃないかな――とウィリアムは指折り数える。何とも大雑把な思索ではあるが、強ち間違いでもない。そして何より、沸き立った油をぶちまけてやれば、物理的手段が通用しない魔物であっても、幾ばくかの効果が得られる可能性がある。これは着目すべき点であろう。
「……夜には、やっぱり、大事？」
「だなあ。クロエには光明（トーチライト）の魔法があるけど、それも人に寄るもんだし、それに費やす魔力を惜しんだって惜しくはない、と思う」
「……たしかに、高いし……ね。……“マナの水”……」
クロエはにわかに憂いを含んだ表情で、ぽつりと呟く。
マナの水。その名の通り、魔素（マナ）と呼ばれる物質を多く含む水である。この物質は自然界に存在するが、例えば大気の様にどこにでもあるようなものではない。服用者の魔力回復を促す、天然の道具（アイテム）――これが実に高価だ。
土地の条件にもよるが、そもそも水が安からぬのだ。この街にも公衆浴場というものが存在する以上、公的な場においては上下水道が整えられているわけだが、それが一般の家々にまで行き届いているかといえば否である。無いわけでもないが、しかし水浴びに遠慮無く使えるほど潤沢でもない。
マナの水の源泉が近場に存在するか、そういった条件によって地域差はあるが、安くとも、ワイングラス一杯分につき金貨一〇枚は下らない。これは一般的な植物油の五倍程度の価格だ。
「美容、っていうのか？　香水だのに使うみたいだけど、僕はよくわからん――クロエは、そういうのは？」
「……作り方は、しってる、けど……私は、あんまり」
「ふーむ」

確かに、幼気なクロエに似つかわしくはないか――とはウィリアムの思考だ。とはいえ、その少女が如し容貌ゆえに忘れがちなことではあるが、クロエは年頃の女性である。十九の齢である。一言に若いとは言い切れないかもしれない、旦那と子がいても決しておかしくはない、そういう年代だ。箱入りに育ち、マイペースに隔世じみた生を刻んではいるが、果たしてクロエ自身は幼く見られることを煩わしく思うのではないか――と、ウィリアムは思う。

「……使うときは――いざという、とき」

「何知識だよ！」

「……おばあちゃんが、いってた」

「オォウ……」

色々と余計な思考が吹っ飛んだ。何教えてるんだクレハさん、いやむしろ何考えてるんだクレハさん。若き少年にとって、老年の彼女が何を考えているかなどとは全く及びもつかないところである。

「あー。でもあれだな」

「……どうか……した、の？」

クロエの問いかけに、バツが悪そうにがしがしと灰色の髪を掻きむしるウィリアム。

「僕なんかはともかく、人によったら香水とかが大切かも」

「……？　……あー……うん……」

一瞬、疑問符を浮かべたクロエの表情が、ぽんと納得に手を打つ。

――長き旅の道筋ならば、湯浴みなどもっての外、清涼な水にさえ触れられぬことなど決して珍しくはあるまい。水の属性に分類される魔術師の力に頼るのならば、話は別だが――否が応にも身体は汚れ、申し訳程度の対処は出来るだろうが、それでも抜本的な改善は望めないことが多い。その上、手間である。――となればその場凌ぎとして、最も手軽なのが香水だ。

クロエは、途方もなく神妙な表情で口元を掌で覆い、頷く。

「……考えて、おかなきゃ」

「えっ」

「……？」

かくり、とちいさな頭が傾ぐ。ひとつに結われた黒髪が、ゆらりと揺れた。

――加えてウィリアムが保存食などを買い足しながら、やがて商人の列が途切れるまでの通りに至る。「エリオも用事済んだろうし――そろそろ戻ろうか」と、クロエを返り見ながらの、少年の問い掛け。

「……うん」

こくりと頷きながら、クロエはウィリアムを見上げた。

真っ直ぐな、曇りのない蒼穹が、ウィリアムの双眸を見つめる。

「……ウィル。……おぼえて、る？」

「何をだろう」

「……かんがえとく、って、いったこと」

はてなとウィリアムの脳裏に浮かぶ疑問符。ほんの少し前に交わした言葉だ。「香水でも見てくか」と、ウィリアムは何気なく、本当に何の気なしにそう言った。だからこそ――彼は、驚愕した。戦慄したと、言い換えても良い。

「……ううん」

クロエは静かに首を横に振る。

「……世界をまわる、こと」

彼女の視線は、定まったまま、揺らがない。

――覚えていないわけもない。あの日に、“わけあり”の彼女が背負いこんでいた面倒事が、全て片付いたあの日に、交わした言葉だった。たわむれのようだったと、思い返せば悔やんでしまうような言葉だった。しかしウィリアムにとっては、本心から出てきた言葉以外の何物でもなかったからこそ、悔やむのだ。自分がこそ、面倒な背景を背負いこんでいたということを。

「クロエ、僕は」

「……わかって、る」

狙われてることは、私も知っていると、ウィリアムの言葉を聞く

よりも早く、クロエは答えた。真っ直ぐに視線を逸らさぬまま、明言する。少年は――二の句が告げない。知っているのならば、わかっているのならば、当然のように承知しているはずだ。それによって起こり得る面倒も、被る災厄も。全て身の危険に直結せざるをえない事実。

クロエは決して愚かではない。むしろ聡明だと言っても良いだろう。以前、レイヴンとの邂逅の折に見せた洞察力などは、その顕著な例である。いわば、相手の背景にあるものを察する能力に長けているのだ。

「……知ってる。……承知の、上」

「それなら」

ゆえに、ウィリアムが言いかけた言葉の内容を汲み取ることなど、造作もない。彼の性格を鑑みれば、なおさらのことだった。ならばこそ、合理的な思考の流れならば、断るほかない選択肢だった。命を懸けて日々を生きるからこそ、命というものを優先する冒険者ならば。

しかしこの時、クロエは冒険者でさえなく。

「……いこう。いっしょ、に」

真っ直ぐで、そして頑なな、ただの一人の少女だった。

うーあー、と呻き声を上げながらがしがしと頭を掻きむしるウィリアム。それは頭を抱えるにも似た姿である。クロエから向けられる迷いのない瞳が何とも辛い。やましさが無くとも目を逸らしてしまいそうになる、そういう真っ直ぐさだ。

「クロエ――クロエには、家も家族もある」

「うん。……帰る場所、だから」

……ぜったい、帰ってくるんだと、クロエは笑った。聞くにつけ、クレハ曰く、店の方はクロエが不在であっても何とか回るらしく、それは都合の良いことに、ネロという存在があってのものだった。

「……ウィルは、いろいろ……抱えすぎる、から」

「元より僕が運んできたような厄介だ」

「……でも、私のときも……そうだった、もの」
「それを言われると痛いな……」
そのことについては、ウィリアムにとって自分から勝手に首を突っ込んだも同然のことだが、それゆえに言い訳が効かない。ならばこそ今回のことで、例えばクロエが彼女自身の意志で首を突っ込むことを、否定は出来ないのだ。それでは道理が通らない。額を掌で押さえるウィリアムに、屈託なく少女は告げる。
「……私は、ほしいものが、ある。それに――」
きっと、楽しい、よ。
含羞(はにか)むように、その表情をほころばせるクロエ。それは、いつかウィリアム自身が彼女に向けた言葉でもあった。だからウィリアムが返せた言葉は、「一日、僕にも考える時間をくれ――」という時間稼ぎに過ぎないものでしかなかった。しかしそれでも、クロエは笑みと共に承知する。
二人が歩む先は中央広場。その南門側に位置する大時計台。それが前もってエリオと定めておいた合流の際の目印であった。艶やかな金髪、鮮やかな碧眼。眉目秀麗と言っても過言ではない青年の姿は、遠目でも良く目立つ。エリオはすでにそこにいた。もっとも、口を開けばたちまちに口の軽い軟派な男が一人出来上がるばかりなのだが。彼の姿を見とめたウィリアムとクロエが、ひょいと人混みの中から片腕を掲げたその時だった。
面を突き合わせ、開口一番、エリオは言った。
「ウィル、おまえ指名手配食らってるみてェだわ」
「ああ!?」
「……わあ」
愕然、というべき反応である。
「手配っつっても、この辺の貴族様だか御領主様だか――つまりその周りくれェみたいだけどな」
「世間を騒がせるつもりはない、か」
「……にしても、どこで、聞いてくるの……そういう、の」

感心したような、呆れたような口振り。見上げるクロエの半目に、エリオはひひひと笑い返す。「人の口に戸は立てらんねェ――まァそういうこったァな」そう言って肩をすくめれば、さてとエリオはウィリアムに向き直る。

「どーォすんべ」

「……そうだな」

ウィリアムは瞳を眇め、腕を組み、数瞬、思索する。その様子をじっと見守るクロエ。

「出立は出来るだけ早める、か」

「庇護がある内は、ってのも考えられっけど。まァそうなるか」

「……長く、なるだけ、むずかしい……かな」

「――言っとくけど、さっきのこと、決めたわけじゃないからなクロエ……！」

「だいじょうぶ。……勝手についてく、だけ」

「あァそういう流れかァ」

ひひと引き攣った笑いを吐き出すエリオ。もうどうにでもなれと、ウィリアムは半ばやけっぱちに双手をかかげた。世の冒険者には、遥か昔から伝わる素晴らしき文言が存在しているのだ――“旅は道連れ”と。

城塞都市カタラウムは、大陸の南東に位置する小さな都市だ。それがゆえにか、南と東には特に街道が整備されていない。しかしそのことを差し置いても、南門の異様は際立つ。まず南門は、門と呼ばれてはいるが、原則的に開かない。一応の見張りが置かれてはいるが、閉ざされたままの開かずの門。それは数年と遡る――かつて魔物の大攻勢を受け、そして封鎖されてからの名残だった。何せ大陸の隅っこに位置する城塞都市。門の改修に着手すべきだと議題にはあがるが、必要性は低く、どうしても後回しにされてしまいがちなのが現状である。

――依然と聳える不動の門。銀月を冠する夜空の下、一人の女剣

士、アルマは静寂と共にたたずんでいた。薄手のチュニック、鋼鉄のリングメイル、青白のサーコート。短く切り揃えられた赤髪が、肩を撫でるようにゆらゆらと風にたなびく。

「……ハ」

ゆっくりと見上げる空、高き月、溢れる吐息は色も無し。彼方の時計台は十の刻を指し示していた。腰にさげた剣の柄を握るアルマの手に、知らず知らずのうちに力がこもる。

程なくして、かつりかつりと、石畳を叩く響きが聞こえた。灰色の髪、薄暗い瞳。布の服に外套（クロースアーマー マント）を羽織る、軽装の少年。塔にともる灯り、そして空に輝く月光。暗中を照らすはそれらばかりの薄闇の中、その姿は紛うことない。ウィリアムだった。

「待たせた」

「……久しいな」

ゆっくりと向き直るアルマ。久方振りであるにも関わらず大して語る言葉などなく、濃紺の視線がウィリアムを射止めるばかり。彼女は間もなく言葉を続けた。

「――――殺す気で、来い」

かつて交わした刃はいわば偽。他の目的のために、あくまでも手段として剣を抜いたに過ぎなかった。少なくともウィリアムとしては。そこに相手を打倒せんとする意志は希薄であり、また、その必要も存在しなかった。勝利条件は彼女を打ち倒すことではなく、別の所にあった。――それゆえだろう、彼女のその言葉は。

今、この場に、約束を果たすという第一義はあれど、究極的には達成すべき目的など無い。刀交わすことこそがこの邂逅の意味であり、意義。ならばそれ以上の言葉は不要とでも言うように、アルマは白銀の長剣（ロングソード）を抜剣する。

ウィリアムは、それに応じた。外套を背に流し、鞘より引き抜く。鋼鉄によって形作られた幅広（カッツバルゲル）の刃。

月下、輝きを返す刃。両者、相対す。

「――――行くぞアルマ！！」

「来い、ウィリアムッ！」

駆け出す少年、掲げる刃。円を描いて振り下ろされる肉厚の刃が銀刃と打ち合い――繚乱と火花を咲かせた。

Ｌｅｖｅｌ２６：『旅のお供に道連れを』（後書き）

「ウィリアム君は――そう、行ったのね」
「はい、つい先程」
「わかったわ。……何かあれば、これを渡しておいてくれるかしら」
「……これは」
「きっと荒れるわ。今日は」
「何か、確信でも」
「直感よ」
「――は」
「……ふふ、冗談よ。直感は、半分ね」
「承知致しました。……失礼ながら、お聞きしてもよろしいでしょうか」
「なにかしら？」
「クレハ様。貴方は何をお考えに」
「娘の幸せよ」
――主従の談話は夜半に流れる。

Ｌｅｖｅｌ２７：『月下の剣士』

剣戟。幾度と無く繰り返される刃の音色。さながら鋼の激突に引きずられるかの如く。剣こそが真であり、身体などその付随物に過ぎないとでも言うかのような剣乱（けんらん）の花宴。

その主導権は――ウィリアムの手にあった。緩まない攻めの手がアルマの反撃を許さず、刃の軌跡を刻み続ける。その由縁は一つ。ウィリアムの未熟にこそあった。ウィリアムの乾坤一擲では、アルマの堅固な防壁を打ち崩すことは、出来ないからだ。

「こなッ、くそッ……！」

「いの武者、めッ！」

にわかに冷や汗を浮かべながらも剣を振るうウィリアム、その一方でアルマの表情には、かすかな笑みが浮かんでいた。幅広（カッツバルゲル）の刃の一撃、一撃を受け止めながら、微動だにしない。繊細な銀の剣は恐らく魔術による補助がなされているのだろう、その外見に似合わぬ頑強さを見せた。銀という材質は鉄や鋼、あるいはクロムやチタンといった他の鉱物よりも、遙かに魔力を伝達し易い性質を持つのだ。それゆえにかの銀剣は、無骨な刃に打ち合える強度と――そして、細やかに流れるかのような剣さばきを発揮し得る、一流の得物足りえるのだ。

無論、それだけでは不足。使い手の力量、即ちアルマの膂力があってこそ成り立つ芸当。愚直ではあれ苛烈なウィリアムの乱撃は、生温いそれではない。だからこそ、すんでで捌き、弾き、あるいは流す、そういった剣技（パリイング）が冴える。現に消耗する労力は、ウィリアムの方が、遙かに大きい。

「……さす、がにッ」

再び打ち合わせられる刃。ウィリアムはその衝撃に抗わず、後方に飛び退り着地。幾ばくかの距離を離して息一つ吐く。少なからず消耗があるとはいえ、しかし息が上がるほどではない。そして此処

までの交錯は、ウィリアムにとって、決して無意味な徒労というわけではなかった。ひとつ、ウィリアムにも知れたことがある。否、思い知らされたとでも言うべきか。

「――退いたな」

すぐさまに切り返すアルマ。ニ、と女の顔に浮かぶ、笑み。激突に圧されすらせず、彼女は地を蹴った。剣先を地に向けたまま、視線ばかりがウィリアムを真っ直ぐに見据えている。次の一手が何処から飛来するか、少年には察知しがたい変幻自在の構えだった。切り上げか、薙ぎ払うか。ウィリアムが果たしてどう待ち構えるかによって、その一閃は姿を変える。戦慄を隠しえないウィリアムに、しかし二択の選択は容赦なく突きつけられた。

迫り来る女の銀が、弧を描く。

「――――ッ！！」

剣を握る両手。刃を垂直に地へ落とすかのごとくウィリアムは肩先に手を置き、身構える。頭の片隅に弾ける死。甲高い激突音。アルマの振るう胴薙ぎを遮り、刃と刃は十字を形作った。鋭きのあまり、勢いのままに零れた欠片が空に散る。――ただの一合、たった一合でこれだった。

ウィリアムの思い知らされたもの。即ち、明確な実力差。あの時、ウィリアムは専守防衛のスタイルに徹していた。しかし、今は違う。打算も小細工もあったものではない、ひたすらに剣の撃ち合い。眼前の相手に打ち克つ為に、かざす真剣。そして――届かない。真っ向勝負では、とても届かないような力の差。天と地ほど、ではない。ゾウとアリほどでもない。だが、大人と子どもくらいの違いはある。

アルマの口唇が三日月を刻む。矢張り以前とは、異なる。殊更に愉快気に、彼女は剣を振るう。二合目。襲い来る死の予感。生への渇望、衝動。それに任せて振るう剣が、ウィリアムに向けられた牙を食い止める。そして同時に悟る。これでは、勝てないと。決して届かないと。

食い止めた、刃と刃。目と鼻の先、凶刃を傍らに二人はその面を

突き合わせる。ぎちりという軋みをその手に感じながら、ウィリアムはその力を拮抗させる。アルマは、それに応えた。重なる刃が、しかし等量の力で抗い、そして止まる。傍目には、止まったように、見えた。水面下では危うい均衡がせめぎ合っている、それに一切関わらず。

「……楽しそうだな、アルマッ」

「愉しくはないか。ウィリアム」

「僕は――怖い、な……！」

重なる剣は、遠目には微動だにしない。しかし間近に見るウィリアムからすれば、微細な震えを伴い、今にも安定を失わんとする、危険極まりない刃の邂逅。ウィリアムの険しい表情に比して、緊張感を付きまとわせながらもアルマには楽しげな色が見え隠れする。弱者をいたぶるそれでは、ない。

「きっと、いずれ、分かるッ！」

「どうして、そんなことが言える……！！」

均衡（バランス）が、崩れた。

弾ける剣花。刃の音色、同時に弾かれ吹き飛ぶ身。さながらそれは磁力の反発のようだ。されど双身は磁石にあらず。離れたならば、引かれ合う。引かれ合うとしか表現しがたいほどに真っ直ぐに、互いに踏み込み刃を突きつける。

「剣とは、盾。役目。一人で出来ることなど高が知れる」

アルマは諳うように言を紡ぐ。ウィリアムは、間を置かずに口を開いた。放つ言葉は決まってる。そんなことは当然、当然ゆえに心得ていると。その役目を果たすことにこそ剣の価値を見出すと。だから、彼女の言葉は、あまりにも――かけ離れていた。

「だから私は楽しいよ」

翻る円。月下に走る一閃。

「益なく害なく理さえ無く、ただただ刃を振るうのみ、何と――久しい事か！」

アルマに去来したもの。それは感謝か、あるいは歓喜なのか。ウ

ィリアムは、知れず思いを胸に抱く。――狂っている、と。否、決して狂ってはいない。彼女は正気そのものだ。ならばそれは、逸しているのか。あるいは、決して珍しからぬことなのか。いずれにせよ、圧倒された、そのことだけは、事実だった。

刃に生じた迷いが、気勢を殺す。アルマの剣尖が、胸元へと伸びる。

「……ッ！！」

届けば、切り裂く。傷口を広げるかの如く、刃先が横薙ぎに滑った。弾ける鮮血、溢れる紅が、ぱたた、と零れ落ちて石畳を濡らす。ウィリアムが――咄嗟に飛び退いていなければ、こうはいかなかっただろう。少年の身は今頃地に臥せり、溜池のような血溜まりを生していたはずだ。ならばこれは、ウィリアムの僥倖に違いなかった。

「これで手仕舞いか、ウィリアムッ」

「……バカ言え」

少年の傷は浅い。薄く胸元の布を赤く染めるがのみ。ならば問題は無いとばかりに刃を正眼に構え、相対する。自然に熱くなる理性を冷静になれとなだめすかしながら――アルマの立ち姿を、真っ直ぐに見据える。少年のそれと然程変わらないか、あるいはそれよりも少し高いか。女性としてはかなりの長身を誇る彼女の陰影（シルエット）は、何よりそのリーチにおいて隙がない。すらりと伸びた細腕に長剣が合わされば、その尺は随分と長くなる。これもまた、ウィリアムにしては不利な材料だが――やってやれないことはない。

ウィリアムは力強く、地を踏みしめた。

「これ、しきッ！！」

その答えに、アルマは笑う。静かに笑んで、刃を掲げる。

「……上等」

銀が、不吉な輝きを帯びていた。

――エリオという人間は、つくづく付き合いの良い性質である。酒を好み、酒場の空気を愛し、そしてその空間を形成する人々を何

よりも好んだ。だから、ほんの別れの挨拶から寄りかかる程度だったつもりが、ご覧の有様である。酔い潰れているわけではないが、いささか酒気に赤らんだ面を風に晒しながら、エリオは夜の街を歩む。

穏やかな夜であった。しばしば通りを歩む兵装に身を包んだ人々は、夜の警護を請け負った者達であろう。まことに頭の下がる話だ。彼らを横目にエリオが向かう先は、今まさにアルマと刃を交わしているであろう、ウィリアムの許であった。どうせなのだから決闘の行く末を見届けてやろう、観客の一つも無くして決闘は締まるまい——と、そういった心積もりなのである。よもや死人も出はすまいと気楽に構え、青年が歩を進めるその時、不意に気取る。

果たしていずこからかの視線。

「……ァあ？」

アルコールに浸された脳髄が、冷水を打ちかけられたかのように、さっと正気を取り戻す。否、視線を感じる程度のことならば、大したことではない。当然だ。しかしあまりにも、注視されすぎている。さして万全な状態ではないエリオでも感じ取ることの出来る、その視線はあまりに、露骨に過ぎた。

——尾行か。心中呟きながらも、エリオは首を捻る。ウィリアムならば、不思議ではない。かの少年が指名手配されたという旨は、恐らくお偉いさん方に仕える者から、商店だの商店だのを経由して、巷間に広まったことなのだろう。それは不確かだが、無視することは出来ない程度には存在感のある情報だ。彼が尾行されているというのならば、エリオとて納得が行く。

しかし、なぜ。

「……考えたってなァ」

エリオは整った蜂蜜色の髪を、億劫げに掻き分ける。考えても分かるものではない、ならば実際に確かめるほか、確かな術は無いかのように思われた。しかし、エリオ自ら相手方に働きかけるには、多大なリスクが付き纏う。それは恐らく悪手。ならば取るべき最善

手は――あえて隙を晒し、油断させること。弛緩した、その間隙を突くこと。

ゆえにエリオは何気なく、周囲にいかなる警戒も払っていないかのように歩み出した。通りを過ぎり、そして彼方に南門が何とか見え用かという場所に出る。周囲は閑散として、街の中心付近に見られた活気は、僅かばかりさえうかがえない。視線は依然として感じられるまま。

その静寂の中、風切り音がエリオに向けて飛来した。

「――ッ」

彼の足元、そのすぐ手前、暗闇の石畳に何かが突き立つ。矢だ。果たして何者か、しかしその意図は明白だった。エリオの身を狙い矢を射ったのか、あるいは――この先に進むなという、警告の意。しかし、そのような警告を向けられる覚えはエリオにはない。もちろんその身を狙われるような覚えもないが――知らぬ間に恨みを買ったか、あるいは何かが舞台裏で進行しているのか。

知ったことではないと、エリオは迷いなく前進する。射角からして前方、南門側の高所に射手はいるはずだ、とあたりをつける。恐らく先ほどからの視線もそこから向けられたものだろう――そうまとめれば、エリオの歩みはやがて疾走となった。

警告を無視したことからか、もしくは元よりそのつもりか。

疾駆に応じてエリオに目掛け、次から次へと射られる矢。弛まぬ攻めの手が織りなす、それはさながら五月雨のごとし。ただでさえ夜には人通りの途絶える区画ゆえか、強矢（すねや）は一片の迷いすら無く放たれ、真っ直ぐと向かい来る。

それの正しく一歩手前、事前に飛来する角度を察知しているかのようにエリオは躱す。交わして、交わして、交わして――すんでエリオの身を掠めていく鋼鉄の矢、その存在感を確かめながらも、躱す。避けながら身を低く沈め、まるで獣のようにエリオはストリートを駆け抜けた。

そして、至る。

「そこか、ァ――」

彼方から剣戟の刃音が届く南門の手前に、しかしエリオの視線は空へと向いた。否、空ではない。空に浮かぶ灯、その大本は天に向かいそびえ立つ塔。闇夜に潜み、月を背に負うその影は、かくも高みにあった。その手には長大なイチイ木のロングボウ。エリオはニヤリと笑ったまま――バックパックから、ずるりと鈎縄を引きずりだした。暗中、ほんの微かな灯火を頼りに一振るい。ガキン、と硬質な音が鳴り響く。

鏃をエリオに向け続けるその影も、その迷いのなさには――些か、驚きを隠し得ぬかに見えた。矢先が手の中、かすかに揺らぐ。

一矢が、弓弦から解き放たれる。

「ヒュウッ」

「……！！」

息を呑む音が、確かに響いた。塔の石壁に引っ掛かった鉤爪が、ただの一つの道しるべ。極めて身軽なその肉体を宙に翻らせ、向かい来る高速の鏃（たがね）と擦れ違い、エリオは塔上へと一直線に飛翔する。翔ぶが如く――跳んだ。

風にはためく金の髪。今にも墜落してしまいそうな浮遊感。その感覚に身を委ね、エリオは落ちる。暗闇の射手目掛け、その体ごと、衝突する。

「――ハ」

獲物を捉えんとするかのような、声にならない吐息。エリオの伸ばした腕が、存外に細いその手首を掴み上げる。握り、捻り、躊躇なくねじる。その身体を、塔上、床に叩きつけるように組み伏せる。木造の弓が、からりと乾いた音を立てて転がった。

「……ッ、ぁ、く……」

漏れるか細い呻き声。うつぶせに組み伏せたその身の背に、エリオは容赦なく膝を乗せ、下界を見下ろす。そこから見えたのは――ウィリアム。そして彼に相対する女剣士。アルマ。彼らの、決闘であった。こいつァ渡りに船かとエリオは瞳を瞬かせ、そして身を伏

せる射手へと問うた。
「何のつもりだ、あんた。街中でいきなり人を撃つもんじゃーねェぜ」
その振る舞いからすれば、傍若無人なるはエリオと言っても間違いの無いところだが、しかし吐く言葉ばかりは正論だ。は、と繊細な息を吐きながら、しばし身をよじらせていた矮躯は、しかしやがて諦めたかのように口を開く。
「……警告。した、でしょーに」
「あァ――されたような気もすんな」
「あんた、ってのはッ！」
「うるせー！　危ねェことに変わりァ無ェだろが！」
「ぐぬ……」
本当に音が立つのではないかという程に、手折れた射手は歯を食いしばった。その声色は高く、そして弾むような音色。エリオは改めて、その影を見下ろす。白い膝丈のコット、男物のベージュの半ズボン、といったにわかに少年じみた服装。しかしその相貌は、紛れもなく少女のそれだった。色素が薄いのか橙に近しい茶髪は大雑把に中途半端な長さで切られており、乱れた毛先はあちこちを指している。強気な茜色の瞳が、真っ向からエリオを睨みつけていた。
そして、何よりも。
「ちっせェー」
「ち、ちっちゃいとか言うなッ！　おいッ！」
ひひひとエリオはいかにも意地悪く笑い声を上げる。彼が言うように、少女は――否、すでに童女とも称すべきか。クロエ以上に幼さを思わせるその姿は、その身の丈、エリオの歩幅二歩分にも達さないだろう。小さな人の類か（ハーフリング）、とエリオは当たりをつけた。その体格からも予測される上、そして何よりの証左――靴というものを身につけていない素足が物語っていた。
「からかわねェから吐いとけよ。何のつもりだ？」
「……アルマに、たのまれた。危ないから、人を近づけないように

見張りをって」
「お前があぶねェな……」
「ふつうの人ならはじめの一矢か二矢か、そこで退くはず――それが全力で来て、真っ当な市民とは思えないよ！？」
「いや普通に立っとけ！　止めろ！」
「だって、わたし、なめられるし」
「だろうなァ――でも、それが仕事だろうが」
仕置き代りとばかりにエリオの掌が、少女の小さな頭をスパァンと叩く。小気味よい音が響いた。ハー、と息を吐いてエリオは肩をすくめる。
「オレはあいつ――ウィリアムの仲間だからさ、イイんだよ。気にすんな。どうせあの女だって気にしねェ」
「……わかった。わかったから、離してほしいんだけど」
「離したらぶん殴るだろ」
「うん」
「正直で宜しい。離してやらァ」
彼女の身体の上からエリオが退くと同時、青年の顔面に小さな拳が埋まった。
当然の帰結である。
見張り台に始まるは、見物人の場外乱闘か。
「痛ェ！？」
「ばかだ」
「オレの心遣いに弁えるとか無ェの！？」
「断る！」
――喧しかった。

刃の交錯は果たして幾度を数えたか。重なる剣閃は何合目に至ったとて、しかしウィリアムの剣が彼女に届き得ることはない。アルマの刃が少年の身に、幾度と無く刀傷を積み重ねているにも関わらず、だ。

されども深く沈むかのように暗い瞳は、決して諦めたわけではない。少年の瞳は、真っ直ぐに薄暗い光を湛え、アルマの姿を見据えていた。機をうかがっていることは、アルマにも知れる。何かを狙っているのだということは、彼女にさえ明瞭。それは本来ならば愚直と称するに相応しいが、むしろアルマにとっては、心昂らせる要素の一つと言っても良かった。

ゆえに彼女の指先が、ついと銀剣の刃をなぞる。柄の元から剣先までを辿り、その隅々にまで魔力を伝達させる。――風が吹き荒れた。逆巻く疾風が剣先を覆い、かくて刃は空を纏う。気配がはっきりと変じたことは、ウィリアムにも気取ることが出来た。

「……全力じゃ、なかったんだな」

「瞬間最大風速の様なものだ。あまり持たないが――」

――疾いぞ。

彼女の唇がそう零した時、刃はすでにウィリアムの頭上へと迫り来ていた。振り落ちる剣を目掛け、咄嗟に掲げた幅広の刃が一閃を途絶えさせる。そして、驚愕せざるを得ない。疾い、しかしそれだけではなく――重い。剣を握る手が、痺れるように震えた。押されているような圧迫感を、護りの手にも如実に感じられる剣。風圧。それが剣先に凝縮され、ウィリアムへと叩きつけてられているのだ。とても真っ当には受け止められない凶刃。衝撃の瞬間に空に散る風刃が、ウィリアムの身を裂いて肌を刻む。溢れる紅に衣が濡れる。

「――ぐッ！！」

咄嗟に、地と水平に刃を振るい、弾く。捌きはするが、防戦一方。これでは以前と変わり無い、実質上の敗退を強いられよう。だからウィリアムには、決め手が必要だった。必要だが――ウィリアムには、他の誰にも使えないような特殊な技術、そんな持ち合わせはない。魔法も、あるいは精霊の術の心得さえも無い。あるのはほんの少しの勇気と、欠片ばかりの剣技。決して十分とは言いがたい。しかしそれでも、やるしかない。

弾いた剣が、しかし間を置かずに再来す。降り落ちる剣閃と風圧

に、灰髪が忙しなくはためいた。受け止めせしめんとするウィリアムの剣は、その勢いがままに女の刃を跳ね上げんとする。――その勢いを乗せて、しかし押し切れぬ。アルマの剣の強靭がゆえに、逆に圧迫されるほど。刃を滑らせ、ウィリアムは一歩退く。すかさず繰り出された突剣を、袈裟にウィリアムは切り落とす。アルマの刃先が地を向いた。至近。ならば次に放たれる剣は、ウィリアムの想定内。

想定出来るからこそ、脅威。

地にかざされた刃は、しかし一拍で指向性を持った剣閃を生み出す凶器。変幻自在の刃――それは、二度目。この究極の二択は、二度目だった。しかしそこには、繰り返す意味がある。繰り返されるだけの、効き目があるからこそ。現にウィリアムにとっては、困窮せざるを得ない状況。

切り上げには地と水平に、横薙ぎには地と垂直に、刃を構える必要があった。そうでなければ、風切りの刃は完全に防ぎ切ることは困難。否、真っ向から防御した所で、凌ぎ切ることが出来るかどうかさえ不明瞭。それでも防がなければ、ウィリアムの戦闘不能は必至。ゆえに少年は防御行動に出ざるを得ない、それが必然。

ウィリアムが見せる、一瞬の逡巡。吐息の間をおいて、ウィリアムは剣を水平に構える。一瞬。躊躇、戸惑いはほんの刹那に過ぎなかった。その極々僅かな時間が――アルマの付け入る隙となる。

「――終いだッ！！」

横薙ぎ。疾風の剣が風を切り、ウィリアムの身へ至らんとする。まともにその肉体を刻めば、あるいは致命傷にもなろうかという兇刃。

同時。

それは、全くの同時だった。

「――ッらァァアアアッッッ！！」

猛り、吠える。がむしゃらに、踏み出す。攻勢のために、踏み込む。

自衛行動に出ざるを得ない、それが自然――それこそが、狙い。即ち、盲点。

元より防御など一切に意識の範疇に含んでいないウィリアムは、水平に構えた剣を、真っ直ぐに突き出した。この至近距離にあって、それはアルマの一閃にも匹敵しようかというほど迅速。加えて繰り出される剣先は、アルマの軽装鎧を容易に貫きえる強靭な刃。

血走ったウィリアムの視線。見開かれたアルマの瞳。交錯は刃と共に、重なって通りすぎる。まさにアルマの剣（ロングソード）がウィリアムの胴を割らんというその時、ウィリアムの剣（カッツバルゲル）が、アルマの腹へと、突き立った。

「なッ……！！」

ついに――少年の剣が、女の身へと届いた。深々とその身を貫かれたわけでは無くとも、しかしアルマは浅からぬ傷を背負わざるを得ない。走り抜ける痛み、止めどない流血。唐突に意識させられた死の予兆が、アルマの剣を振るう手の力を、緩めた。振り抜くことは出来ず、ウィリアムの身に食い込む片刃が、しかし明らかな傷跡を残す。それでもこれは、必要経費。

“やってやれないことはない”――そう、しかるべき代償と引き換えにするならば。

「……これ、で……ッ」

ウィリアムの握る剣が、血を滴らせた。咄嗟にアルマが退く。わずかに見えた光明、希望。それに縋るように、ウィリアムは真っ直ぐと向ける視線を絶やさない。絶やさない、つもりだった。

その視線が不意に、ぐらりと揺らいだ。

「対等、にッ……――？」

アルマは、ゆっくりとウィリアムに焦点を定めた。視線を落とし、見下ろす。そう、見下ろされた。――ウィリアムの身体は夥しい流血の果てに、揺らぎ、崩れ、ぐったりと地に倒れ伏していた。高揚のためか、本人さえも気づかぬ内に。

反撃の機会をうかがう最中、アルマに負わされた傷は、決して浅

いものではなかった。ならばこの帰結は、長期戦を挑んだがゆえの必然。

立ち上がれないわけではない。指の先一つ動かないわけでもない。剣を握れないわけじゃない。それでもウィリアムに、最早勝機は無かった。柄を握り締める掌が、にわかに震える。その体躯は、血溜まりに沈んだままだ。

「意気は、買おう」

アルマは、空の左手を自身の腹に伸ばす。刃先の突き立った痕跡。鋭利な裂け目は紅を流し、延々と肌着を赤く染め続ける。その傷を、痛みを確かめるかのように、彼女は掌を傷痕に重ねた。

「僕、は……アル、マ」

「なんだ」

「……知って、たのか……これ」

ひゅん、と刃を一振るいして血を払うアルマ。見下ろしたウィリアムに向ける、無言の首肯。見上げた少年は、ぎちりと歯を食いしばったまま、地に伏せる。

地に臥せったままの掌が、しかし突如として、地に突き立てられた。ウィリアムの上体が、引きずられるかのように起こされる。

「……ちく、しょう……ッッ！！」

彼女か天か。吐き出される苦鳴は、果たしてどこへと向けられたものか。その様を見てか、アルマは静かに視線を切る。

「早い内に、手当てを受けろ。その出血量だ――――死ぬぞ」

「――その必要はありませんな」

夜に、耳障りな声が響いた。否、それを耳障りだと感じたのは、ウィリアムであるからこそか。地に突き立てた掌が、拳の形に、固く握りしめられる。掲げた視線の先に、それはいた。

石畳を叩く音は、蹄の響き。それが幾重にも重なった。馬上に跨る男が、四人。両サイド、重装鎧に身を包んだ姿が、三人ずつ。総

勢十名を数える小隊。――騎士か。一目にウィリアムは悟る。騎乗戦闘の心得あるものは、ことごとく騎士身分の生まれであるといっても過言では無い。ウィリアムの視線が鋭く狭められる。

「……武官殿。斯様な所を何用か？」

アルマは静かに視線ばかりをやる。ほのかに汗の浮いた相貌に、しかし幾ばくかの凛々しさが垣間見えた。男を見る目にどこか怪訝な色合いが見え隠れするのは、決して気のせいではない。騎士とはその大方がその地の領主か貴族かのお抱え――ゆえに彼らの私事について働きかけるのが常だ。下町くんだりに出向いては治安維持などに努める、などといったことはほとんど皆無。

つまりがアルマにとって、彼らは厄介事の報せのようなものなのだ。

彼女の言葉に、彼らの視線は一斉にアルマへと注がれた。騎士の一人――中央の者が一歩、代表としてか前に出る。先刻に制止の言葉を投げ掛けた、若い男であった。

「さる情報筋によれば、御尋ね者がこの地に留まっていると、そういった旨でな。お引渡しを願えませんかな、アルマ殿」

「そのことは私の管轄外だ。好きにしてくれ」

「では」

間を挟まずにアルマは即断する。同時に視線を落とし、そこに伏しているであろうウィリアムの姿を一瞥した。言葉ばかりは迷い無くとも、事態は把握しかねたとしても、幕切れがこれとはあまりにも呆気無い。ゆえにほんの手助けくらいならば出来ると、果たして少年が少しばかりは動けようかと――その目に見て確かめようとした、その時だった。アルマは瞳を見開いた。仰天、である。

驚愕は、アルマのみならない。依然として倒れ伏していたウィリアムとて同様。加えて成り行きを見守る騎士達すら、予想だにしない。――丈は踝にまで至らんかというローブに身を包んだ、小さな少女。一つ結び（ポニーテール）の黒髪が、やけに目立つ。

クロエが、いた。

「――な」
なぜ。
ウィリアムの口腔がぱくぱくと無意味に開閉しながら、言葉を紡ぎさえしない。生まれ出るは疑問の海。彼女は知らないはずだった。少なくともこのような場で、アルマと切り結ぶことは、彼女の認知の外のはず。また、その事は人伝に、例えばネロから聞き知っていたとしても、この場所までは分からぬはず。ならば、なぜ。
「……エリオ。つけて……きちゃ、った」
開いた口が塞がらない、とはこのことだ。ウィリアムの抱いた疑惑を綺麗に掬い上げ、答える言葉に、絶句する。エリオはこの場所を知っている、知ってはいるが、しかし何のために。というか、なにやってるんだ――と言う暇さえなく、元より手当てのためか。ウィリアムの開いた口に、クロエは薬草を詰め込んだ。
ぎゅっぎゅ。
「もぐあ!?」
「……ちょっと、は、なおる……はず」
「治るか!?　……あれ、ちょっと楽だ」
「……ん」
少女は満足気に表情をほころばせる。そして、ゆっくりと立ち上がった。
「本当に。存外、破天荒だ。あなたは」
呆れ返ったように、かすかに汗の浮いた額を掌で押さえるアルマ。同時――ウィリアムを“回収”するためだろう、少年の身に迫っていた付き人の兵が、あまりにあまりな展開に、その足を止める。
「ルーファン殿」
「構わん」
ルーファンと呼ばれた代表の騎士が、鎧の男に言い付ける。その男の手の中には、一本の槍があった。しかしそのやり取りに応じてか、クロエが、立ち塞がる。ウィリアムへの行く手を、遮る。
「行け――構うな」

一瞥の視線を向ける男に、しかし騎士は躊躇なく繰り返した。些細な障害など無きも同然、排して何を構うかとばかりに、ルーファンは言い切る。一時の逡巡。

「退いてくれは、しまいか」

「……できない。……今、守れるのは、私だけ、だから」

少女は、退かない。一切の後退を己に許さずに。

男は静かに首を振った。矛先はクロエへ、静かに槍は掲げられる。ウィリアムの脳天に、凄まじい勢いで――血が昇った。力を振り絞るように、少年は立つ。

切先が、落ちる。

その時、まさにクロエの矮躯を貫きせしめんというその瞬間、剣の刃が、男の胴を一突きに貫いた。呻きも叫びさえも聞こえない、迅速の剣。届かぬ凶刃に、クロエは瞳を見開く。槍の刃は、クロエの手前で静止していた。

――ウィリアムの手が、槍の柄を握りしめて止め。

――アルマの剣が、男の身を一太刀に貫いている。

「危なっかしすぎるぞ、クロエ。――何の公算も無しに」

「……ごめ、ん。……でも」

……放っては、おけないもの、と。クロエは囁くように呟いた。仕様の無いとウィリアムは肩を竦めれば、地に取り落とした刃を拾い上げる。残るは九人。さてどうしたものかと視線を流す。

「アルマ殿、これは、これはいかなるッ！！」

ルーファンが、慄きに喚く。アルマは突き立てた剣を引き抜き、凛と吐き捨てた。

「人の戦に首を突っ込む、そこまでは許そう。だが――善良なる市民に手を出すなど、言語道断。――――疾く去ね」

Ｌｅｖｅｌ２７：『月下の剣士』（後書き）

【コット】

中世から近世にかけて西欧で用いられたチュニック型の衣服。
緩やかで、丈が長い。女性ものなら床に引きずるほどの長さも珍しくなかったが、ここでは膝丈とする。

【歩幅二歩分】

設定上、エリオの仔細な身長の数値は１７４ｃｍ。歩幅を６５ｃｍとするなら、１３０ｃｍ以下という数値になる。
ちなみにクロエは１４０ｃｍに届くくらい、ウィリアムは１６５ｃｍ、アルマも１６５ｃｍ付近。

Ｌｅｖｅｌ２８：『光遠き地へ』

「我らは都市城伯直属の兵ぞ、これに刃向かうは即ち反逆行為と心得ての、事か！」

「私は、私の契約履行を第一とする。その他の事項は全てこれに優先しない。変わらんだろう。貴様らも」

アルマは倒れ伏した一人の男を尻目に、そう言い切った。地に下げた刃からは、点々と紅血が滴り落ちる。彼女はその場から動かず、騎士の男、ルーファンに向けていた視線を、ほんの一瞬だけウィリアムに差し向け、顎で示す。それはこのような状況に放り込まれたウィリアムと、そして自ずから飛び込んだクロエにとって、ひとつの天啓であり、救いの手でもあった。

行くならば行け、と。

「……バカッ、それじゃ、お前が」

九人。ウィリアムとクロエ、そしてアルマを取り囲む人数が、九人だ。この人数差ですらいかんともしがたい、この場からウィリアムとクロエが退けば、残るはアルマただ一人。これはどう考えても、どうにかなるような戦力差ではない。ウィリアムが声を荒らげたことも不思議ではなかった。しかしアルマはひょいと肩を竦めるばかりだ。

「……そうとは、限らない、よ。……私たちの側にも、分散、しなきゃ」

「然りだ」

アルマはおもむろに首肯する。むしろ人数比で言うならば、ウィリアムの側に多くの人間が動くのは必然。この場において彼らの任は、ウィリアムを捕らえることであり、それ以外は全て二次的なものに過ぎないのだ。アルマはルーファンに向き直り、小さく息を吐く。

「それに」

彼女が薄い唇を、開いた、途端。風を切り裂く音が、鳴り渡った。空をかき分け、天より落ちる。それは一閃。弦より解き放たれた矢。一直線に飛来するそれは、真っ向から、ルーファンに並ぶ騎士、その馬の鼻先を、その顔面を縫いつけるかのように突き立ち、貫く。悲鳴のような嘶きが、空に響き渡った。

「なッ！？」

「――ひとりでは、無いのでな」

慌てふためく一人の騎士。それも当然だ。脳天、一矢の貫く傷口から止めど無く血流を溢れさせる馬の様子は、正しく暴れ馬。強靭な生命力を誇るがゆえに、ただの一矢に息絶えるといったことはないが、それでも傷は深い。血を見て興奮状態に至った馬が、騎乗者の存在など意にも介さず遮二無二に暴れ回ったとて、それは仕方のないことだろう。落馬。石畳に全身鎧に包んだ身体が落ち、派手な金属音が鳴り響く。それに重なる、蹄鉄の響鳴。無作為に地を踏み鳴らす馬の蹄は、しかし地に伏した男にとっては凶器に等しい。脳天を踏み砕かれれば、それで終わる――実質的な戦闘不能。

「……これ、は」

少年には覚えがあった。その身をもって覚えていた。あの夜、アルマと渡り合う最中、どこからともなく己を狙撃してきた射手のことである。果たしてその姿は定かではないが、しかしとなれば、アルマの仲間がいる、そのことは確かであろう。そのことを気取ったウィリアムは咄嗟にクロエに目配せして、そして頷き合う。

「行くなら行け。見ての通りだ。私“たち”ふたり。死ぬと思うか」

刃をその手に携えたまま、アルマはふんと小さく鼻を鳴らした。心配をするなら自分の心配をするんだな、とでも言いたげな姿である。しかし、ウィリアムにとっては、それが何よりもありがたい。

「クロエ、行こうッ！」

「……うんっ」

二人は無防備に背を向けた。本来ならば絶対に許されないその動きも、しかし混乱の局地に至ったこの状況では、容易なこと。走り

だす前に、彼らは背後を返り見る。
「――恩に着るッ！」
「……あり、がとう。……たすけて、くれて」
クロエは睫を申し訳なさ気に垂らし、ささやくかのように。ウィリアムは笑って言う。
アルマは笑いもせず、掌をひらりと揺らし、呆れたような吐息を漏らすばかりだった。
本来ならば関わることもない厄介事に、一人の少女を助けたがために、巻き込まれる次第となったわけだが――それを構う様子はなく。むしろ、斯様な事態を引き寄せた自身の甘さをこそ自嘲するように。しかし、それがこそ自分の性分なのだろうなと、どこか心の中で、アルマは自認していた。
やがてアルマは、おもむろに対敵へと剣を向ける。
「――さぁ、どうする？　疾くせねば彼らを逃してしまうが」
「……ぐッ」
アルマの挑発に、ルーファンはギリと歯を食いしばった。しかし、それがかえって冷静な判断を促してしまったか。男は重装鎧に身を包む、残る五人にアルマを足止めしておくことを命じ――同時に、機動力足りえる残り三騎はウィリアムを追跡する算段となった。伏した二人は自然、捨て置かれることと相成る。アルマを忌々しげに一瞥しながらも、すり抜けるように駆け抜けていく三騎――最早それらには構わず、女はゆっくりと刃を掲げた。
五人。数の上の優位は崩れない。それでもアルマを囲う彼らは、確実に気圧されていた。いわば戦うまでもなく、敗北しているも同然。
「退かぬなら、お相手しよう。準備はいいか――リプル」
その言葉は目の前の彼らではなく、どこか高く、天の彼方に向けたものだった。果たしてその声に応じたかは定かではないが、凶器たる矢は雨のように降り注いだ。同時、アルマが振るう風の剣を前にして――結果など、語るべくもない。

ウィリアムとクロエが駆け出した矢先から、通りの真ん中、ちょうど二人の進行方向を遮るかのように立ちはだかる、一つの影があった。夜にも冴える、金髪碧眼。――エリオである。

「よォ。災難だったなァ」

「だったじゃねえよ！　めちゃくちゃ真っ最中だよ！」

「まァ、すげえ蹄の音してッしな――」

走る脚を止めないままに駆け抜ければ、二人に並走する形でエリオが行く。駆け出す。そして当然のことだが、人の足では、馬脚から逃げ切れようはずもない。ただでさえクロエの足並みに合わせているのだ。エリオとウィリアムの身体能力は微差としても、彼らと同等の身体能力を、かような矮躯たるクロエに要求するには、いささか無理があるというものである。

「どうすンよ、北門まで突っきっか？」

「それが常套、だけど。――クロエ、持ちそうか」

俯き加減に足を運ぶ隣のクロエに向かい、ウィリアムが問いかけた。少女はゆっくりと顔を上げる。常は真っ白の頬が汗ばんでほのかに赤い。

「う――ん……は、わたし、は、だい、じょ……ぶ……」

大丈夫じゃなかった。

小刻みの呼吸は荒く、目に見えて明らかに平常のそれではない。今すぐとは言わずとも、すでに息切れは目の前であろう。元より彼女はウィリアムとは違い、狙われるべき対象ではないのだが、しかしウィリアムに手を貸している人物であるということも事実。そして先刻の振る舞いを見るに、容赦というものの存在する相手ではないらしい。となれば、ここでクロエがその脚を止めてしまえば、命の保証は――無い。

「よし」

ウィリアムは腹を決めた。

「何がだ」

エリオが問うまでもなく、ウィリアムは半ばへばっているクロエの矮躯を、その腕の中に収める。
「ふんぬッ」
「……？！」
そして力と気合を込めれば、彼女の身体を脇に抱え、持ち上げ、再び一目散に走り出した。――なんたることか。甘酸っぱさもへったくれも、欠片ほどさえ感じられない持ち運び方式である。
「そォいうことな。――お前ってェのは」
エリオは、何か言いたげな視線をウィリアムに向ける。少年はその目に、首をかしげるばかりである。最早何も言うまいとエリオは肩を竦めて、地を蹴った。南門。大通り。この道を駆け抜ければ、やがて十字路に連なる彼方の中央広場に至るだろう。果たして逃げ切れるか、ペースを上げるウィリアムの傍ら、慌てたようにわたつくクロエの姿がある。というか、捕まえられているのだが。
「……う、ウィル、重っ」
「重くない、むしろ軽い。僕は大丈夫だ」
「――……」
そういう問題ではないような気もするが、クロエとしては言うべき言葉が封殺された形である。となればクロエに出来ることは、出来うる限り大人しくしていることである。不用意に暴れたりすることは、ウィリアムの疾走を妨げることに繋がる。そう悟ってか、借りてきた猫のように腕の中で大人しくなるクロエ。――人には、適材適所というものがあるのだ。
とはいえども。
いくら走る脚を早めたとて、早馬に敵うはずはない。それが道理。激しく刻まれる足音は、ウィリアムらのすぐ後ろに迫っていた。
「ウィル、もう無理だ、迎え撃つしか、ねェッ！」
「もうちょっと、だめだ、ここは、挟み撃ちだけは、避けたいッ」
「……中央、広場ッ」
遮二無二に走り抜けるウィリアムの荷物と成り果てた状態で、ク

ロエがふいと視線を掲げて口を開く。一見、広場で敵を相手取ることは、四方から攻撃を受けるという極めて不利な事態を招くように思える。だが、現状のような少数兵力のぶつかり合いならば、決してそうは限らない。いずれ行き止まりに行き着くとしても、それでも逃げ道は残しておいたほうが良い。それが道理――ならば、彼女の言葉もまた自然である。

幸いなことに、すでに広場は目の前。堂々たる鐘塔がそこにそびえ立っているのだから、眼にも明瞭。最早間近に感じられる蹄の音。ウィリアムとエリオは石畳を滑るように踏み締めると、そのまま踏み切り、背後へ向き直る。対敵へと相対し、迎え撃つために。

――ぐしゃっ。

肉を殴り付けるような、鈍い響き。それは彼らが向き直ると同時に聞こえた。そこに広がるのは荒唐無稽な光景。目を疑い、耳を疑い、そして正気を――疑うほど。身構えていたからこそ、脳髄への衝撃は強い。ウィリアムに抱えられたまま、どこか間の抜けた姿のクロエばかりが、わなわなと声を震わせた。

「……ネ、ネロさん」

「――御機嫌よう。皆々様」

メイド衣装の奴隷が、ウィリアムらと交差するように横合いから現れたかと思うと、彼らに向かってきていた騎兵一騎の横っ腹を、飛び込みざまに全力で蹴り飛ばしていた。まるで理解に苦しむ状況だが、しかしこれが見たままの出来事である。驚くべきことに馬は宙を舞い、吹き飛び、そして地に叩き付けられた。ならば、騎乗者はどうなったか。――騎士鎧を纏うその身、生きてはいるだろうが、しかし重装だからこそ、落下の衝撃は強大だろう。少なくともその意識は無事では済むまい。

ただの蹴撃一閃が、馬の一頭を蹴り飛ばす。それは果たしてどれほどの修練の果てに至る領域か。

「パねェな……」

瞳を眇めて彼方を見やるエリオは、やっとの思いで現実を消化し、

その一言を呟く。人の身に向けるそれではないからか、いつかエリオを打った拳の力を遥かに上回っているのではないか、という想像は――恐らく、誤りではないだろう。ウィリアムはゆっくりと息を吐き出し、そして改めて前に向き直る。すでに、背を省みる理由はなくなった。

「……ありがてえ、助かった。よく、ここ分かったな」

「手紙を見ましたからね」

「……ちょっと待て！　僕が見たとき手紙の封は切られてなかったぞ！」

「最初からあの封に入ってたとは限りません。時として思い込みは視野を狭めますよ、ウィリアムさん」

「この女郎！？」

「そんなことより」

ウィリアムの訴えは一言で切って捨てられた。なんと無碍なる扱いか。仕様であると言わんばかりにネロは意に介する事無く一礼すれば、懐から何ぞかを取り出した。一通の、封である。彼女は膝を屈めると、抱え込まれたままのクロエへ、そっと差し出す。

「……これ、は……？」

「皆様へ、御手紙です。おばあさまより」

「……嗚呼」

クロエはその言葉に、瞳を細め、そして全てを察したかのように静かに笑った。差し出されたそれを、しっかりとその小さな手で、受け止める。それを確かめると、ネロは更に一通、封を取り出した。それを――ウィリアムへ。

「ウィリアムさん、あなたへの一通だそうです」

「……僕に、か？」

大人しく受け取ったそれを、ウィリアムは興味深げにあらゆる角度から見回してみるが、特にどうということはない。ただの手紙である。「他になんか言われてねェんかい」と、エリオもまた不思議げに首を傾げた。

「いえ、特には――――ああ、一つだけ」
「サクッと頼むぜ、こちとらあんまりのんびりしてられねんだ。ひやひやして仕様がねェ」
肝が冷える、とエリオはがしがしと金色の髪を掻きむしって、うそぶく。いかにも気が気でないという様子で、その場をぐるぐると回るように歩みを止めずにいた。出来るものならばすぐにでも先に行きたい所だが、しかしエリオが駆け出さずにいるのは、その足を止めるに足る事情や用があるのだと――信じ、そして同時に、心得ているからだった。
ネロはただ、淡々と告げる。
「『望むままにいきなさいな』――と」
「……ハン」
「確かに、受け取ったと、伝えておいてほしい」
「……ネロ、さん。……また、いずれ」
ウィリアムは封を懐へしまい込み、クロエは抱え上げられたままで、小さく頭を下げる。エリオは肩を竦めて鼻を鳴らすばかりである。その言葉は、ある種、エリオにとって――何よりもの難題であるように思えたからやもしれぬ。しかし、いずれにせよ、確かに伝えたと言うようにネロは瀟洒に礼を落とせば――前に向かって走りだす彼らへ、告げる。
「――――良い旅を」
言われなくとも、とエリオ。是非もなしとウィリアム。ありがとう、とクロエ。
ネロに見送られながら、やがて遠ざかるその姿は闇に陰り、そしてついには見えなくなる。しかしその暗闇の向こう側からは、未だにどこか見守るような視線が感じられたか。それに後押しされるかのように、ウィリアムとエリオは一心に駆ける。
とはいえ、ウィリアムはクロエの重みを背負い込んでいる――むしろ彼女は軽いが――しかしそれは、確かな人間一人分の重みだ。決して軽々な物ではない。どうしても、気はそちらに向かざるをえ

ない。ゆえに、周囲に警戒を張り巡らせたエリオが、最初にその存在に気づいたのも、また当然の流れであろう。

「あいつァ――」

ゆっくりと狭められたエリオの瞳が、暗幕の向こう側、一人の男を見とめた。いかにも柄の宜しくない風体はこの夜中、相手を警戒させるに足る姿。決して珍しくもない、乱暴に切り刻まれたかのようなブラウンの髪が夜風に揺らぐ。腰には剣を一振りさげて、ぎろりと睨みつけるような視線が、三者へと向けられている。

「よう」

「――ホークッ！」

その姿を見据えたウィリアムが、彼の名を呼ばう。なぜ、そこにいる。なぜ、立ちふさがる。なぜ、一人で――いる。いくつもの疑問が浮かんでは消え、クロエはその瞳をにわかに慄くかのように揺らがせた。

「なかなか面白い格好で逃走劇やらかしてんじゃねえか、まあ、それを止めるのが、俺の仕事なんだが」

「……邪魔立て、するならッ」

最早、迷いもなく。駆け抜けながら、相対する。距離が狭まる。空手が刃の柄を握り、抜き放たんとして、そこで、止まる。否、制止されたと言うべきか。

「待った」

エリオがウィリアムの動きを遮るかのように手を伸ばし、そして疾走の速度を緩めすらせず、脇をすり抜けるかのように、駆ける。容易。――奇妙なほど容易に、ウィリアム、エリオ、クロエ、彼らは――現同職ギルド所属、自警団の男、ホークと、すれ違った。あまりにも、呆気無く。

すれ違う刹那、ホークは朗々と、語る。

「仕事だ――仕事だが、これがどうもな。御領主様に恩を売っとけって事らしいが、どうにも騎士が出張ってくるってのがな。手柄は持っていかれるのが目に見えてる。まあ、体よく協力の姿勢を示す

ために使われたってことなんだろうな」
わざとらしいくらいに、男は語る。言葉を紡ぎながら、刃さえも抜かない。その柄に手をかけることすらせずに、彼らを見逃す。視線で追いかけすらも、せずに。――そう。真にウィリアムらを捕らえる算段をつけるためならば、わざわざ一人で出張ってくる理由は無いのだ。しかしホークには、殺気どころか敵意さえも、無い。
「演技なら、もう少し上手く、だァな」
おかしげに、エリオはひひと笑った。反面、クロエは安堵の吐息を零す。
「勘違いするんじゃねえよ。借りを無理やり返しに来ただけだ――」
かははとかすれた声を上げて、ホークは笑う。笑って、背を向けたまま、彼は言った。
「済まなかったな、嬢ちゃん。貸し借り無しだ。だが、まあ、許す必要も――」
「……ゆるしてる、よ。……私の、大切なものは、ちゃんと、のこってる」
言われるまでもなく。クロエは訥々とその言葉に返して、そればかりだった。しかし、それで十分だった。ホークは天を仰ぐと、ひどくおかしげに笑い飛ばして――じゃあな餓鬼ども、と言い捨てる。丁寧な言葉遣いよりかは、よほど似合っていた。
ウィリアムは剣を持たない空手を掲げ、ひらりと揺らがす。それぼかりを別離の言葉の代替として、走る、走る、ひたすらに先へ。北へ。行く先、そしてやがて行き着く先、夜闇の向こう側に見える。大陸南東に位置するこの城塞都市にとって、交通の要所となる出入口――北門。
「ウィル、クロエ。どーォやら……やられたみてェだぜ」
ひ、と引き攣ったような笑い声を漏らしながら、やがてその門に至る間近で、止まった。止まったというよりは、止まらざるを得なかった、と言うべきか。それに釣られるようにウィリアムもまた脚を踏み切り、クロエの身をそっと下ろす。――騎士の男。ルーファ

ンが、待ち構えていた。兜から見え隠れする金色の髪は嫌みたらしく揺らぎ、規則的に蹄の音が鳴り響く。まさに、門前。

そして足音は――背後からも。残る一騎が、来る。まさに秒読み。挟み撃ち、だ。恐れていた事態が、しかし確実に近づいてきていた。

「止まれ――賊」

蒼い瞳が、三人を睥睨する。見下すような眼であった。というよりは、恐らく事実――見下しているのだろう。落ち着きを取り戻した、厳かな響きが、その声には込められている。

「ウィリアム殿。貴殿が大人しく従えば、無用な危害は加えぬ」

その言葉を受けて、ウィリアムがエリオとクロエに視線を配った。互いに頷き合う。

「しからば――」

ルーファンが言葉を紡ぐ最中、ウィリアムは無言で一直線に駆け出した。眇めた瞳が、ぎょっと見開かれる。その些細な変化を、少年は意に介する様子さえ無く。殆どゼロ距離の接近。ウィリアムは地を蹴り飛ばすと、空を翔け――そして強引に、馬上へとよじ登った。

「なッ、あッ!?」

「ごちゃごちゃとうるせえ、退けッ!」

ウィリアムはそのまま、鎧に纏われていないルーファンの首根っこを引っつかむ。馬から引きずり下ろすように、男の身へ膝をめり込ませ、宙に投げ出し――そして、石畳へと叩き落す。呵責無く叩きつける。さながら彼の身を下敷きにするがごとく、少年自身の体重も乗せ、同時に馬乗りになった姿勢。

「ちょ、待ッ」

「――邪魔、だッッ!!!!」

ガツ、ンッッ!!!

刃を引き抜きすらもせず、鞘に収まったままのウィリアムの剣が、男の顔面に叩き付けられた。一切の容赦のない組み討ち。

将を射んとせば先ず馬を射よ。戦術としてこれは定石だ。定石は、

有効であるからこそ、定石に成り得る。しかしウィリアムは、純粋な実力そのものが、未熟。なら、どうするか。事は単純。――定石を覆せば良い。

「ヒューウ」

「……ふぁ」

二者の感嘆じみた吐息。一撃を脳天に炸裂させられ、意識を保っていられる人間など、通常はいるはずもない。幸いなことに、目の前の男は尋常であったようだ。顔が潰れてピクピクと痙攣する男に一瞥さえもせず、やおらウィリアムは立ち上がる。

「……グズグズしてたら、追いつかれるな。行こう」

「つか、そーいやァよ、行くって、どこへだよ」

「例えばだな、僕の手に剣があるだろ」

「あァ」

「この剣を立てて、倒れた方向に行くってのはどうだろう」

「爆発しろ！」

「……それも、たのしそう、かな」

「こいつらは……本当に……もう……！」

「行こうぜ！」

ニィ、とウィリアムが笑って言う。クロエは自分の足で立ち、静かに頷く。エリオは肩をすくめ、深い息を吐き――行くかァ、と首肯した。

彼らは、走り出す。

この広大なる世界へと通ずる門へ、その向こう側へ――“光遠き地”へ。

ぱちり、ぱちり、火の粉の散る音。焚き火は即ち灯火にして獣よけ、三人がそれを囲っていた。ウィリアム、エリオ、クロエ。小規模とはいえ一つの町を横断――それも全速力に近しい疾走で――した結果、体力と言える体力は、ほとんど残されていなかったのだ。

ゆえに街道沿いから少し離れた平原、キャンプを敷くのは至極、当然の行為と言えた。いずれにせよ月の明るむ夜半、行軍も満足には行くまい。

　のんびりとしていて良いのかという考えもあるだろうが、しかしウィリアムとしては、まず追っ手が来ることは無いだろうと考えていた。この世界は、広い。少なくとも、たった三人の人間が紛れるには、十分すぎるほどに。そんな世界を、明確な目的も持たず彷徨う三人の集団（パーティー）。これを捜索する手間は、果たしていかばかりか。計り知れぬほどと言っても過言ではあるまい。

「そういえばよ」

　不意にエリオが切り出した。はてなとクロエが首をかしげる。毛布を膝にかけた彼女の姿をウィリアムは一瞥する。出来るだけ早い内に休んだ方が良いと言い含めたが、しかし一時的な興奮状態のせいか、眠気が飛んでしまっている様子である。宣告の事態を鑑みれば、無理もないことか。

「手紙渡されたじゃねェか。見とこうぜ、せっかくだし」

「……あ」

　ぽむ、とクロエが手を合わせた。そういえば、とウィリアムはうそぶく。思わず失念してしまっていたかのような様子である。懐を探れば、特に損ないもせず、一枚の封がしっかり手の中に収められていた。ウィリアム宛と指定された一通。果たして何が書かれているのか、思い出せば途端に気になってくるものだが――。

「大事なことだったら泣くに泣けないしな」

「……ん」

　こくりとクロエは首を縦に振ると、先刻手渡された封を切り、中から一枚の羊皮紙を取り出す。それを火の灯りのもとに広げれば、それぞれが目を通すことの出来る形となる。

　紙面に並ぶ、丁寧な文字。

『御機嫌よう、ウィリアムくん、エリオくん、クロエ。ご無事でい

ますか、怪我はしていませんか？
いえ、きっと怪我はするでしょう。これからもたくさんの傷を負うことになるだろうと思います。それが旅というものですからね。けれどもわたしは、親心として、せめてもの息災を願いたいと思います。
まずは、ウィリアムくんへ。
命を大事に。
次に、エリオくんへ。
きっと苦労をなさるわね……。
ウィリアムくんは元より、クロエもあれで無茶をする子だから、宜しければ見ていてあげて頂戴な。二人は、思い切った所がある分、人と相容れないところがあるから、緩衝材になってあげられるのは、きっと貴方しかいないでしょう。
次に、クロエへ。
薬の技は、錆びつかせないようにするのよ。……といっても、実のところ、心配はしていません。きっとウィリアムくんなんかは無茶をするでしょうから、あなたの技もきっと必要になることでしょう。少しでもわたしの伝えた技が役立つのならば、甲斐があるというもの。
最後に、三人へ。
今回は厄介事に巻き込まれてしまいましたね。穏やかならぬことですが、ほとぼりのさめた頃、きっとまた訪れて頂戴な。クロエはきちんと、無事に帰ってくるように。何年先でも構わないけれど、せめてあなたがおばあちゃんになってしまわない内にね。
それじゃあ、良い旅を。――また会う日を願って』

――僕の扱い酷くないか。そんな煩悶を抱かざるをえないウィリアム。とはいえ、あながち的はずれな忠告でもないだろう。命を大事にとは、ウィリアムにとっていささか耳が痛い。しかも、自覚しているにも関わらず、改善されるところがない。最早根っから

の勢い任せと言っても良いだろう。
「普通の手紙だったな。よかったよかった」
「クレハさんをなんだと思ってるんだ……というか僕の扱い……」
「だってなァ。世界最高峰の魔法使いだぜ」
ひょいと肩を竦めてひひと笑うエリオ。確かに彼の言葉通りなのだが、どうにもウィリアムにはそういった印象が希薄である。常の振る舞いからして、『優しそうな普通のおばあさん』という印象が拭えないのだ。そもそもあの高齢まで生き長らえる人、そのものが珍しくはあるのだが。
「ウィルのはあれじゃねェ。そっちの手紙に書いてんじゃね」
「あー……」
その可能性も無くはないか、と首をひねりながら、ふと気づけば、クロエの視線がウィリアムの手の中にある封に注がれていた。——物凄く興味津々な様子である。その意識をそらすためにか、不意にウィリアムは彼女へと問いかける。
「クロエ、それ、どうする？」
「……んー……」
しまっとく、と呟いて、クロエはバックパックの奥深くにそれをしまいこんだ。何か他人に見られて困ることが書かれているのならばともかく、単なる気遣いの手紙なのだから、それもまた良しだろう。ウィリアムは頷いて——ピ、と己に充てられた封を開けた。ばさ、と眼前に羊皮紙を広げる。

『この手紙をウィリアムくんへ宛てたわけは、言うまでもありません。しがないいたずら心です』

一行目に記された一文に、ウィリアムはずっこけかけた。座っているのにこけかけたし、おまけに心のへし折れる音が聞こえたような気がした。茶目っ気溢れすぎだろ婆ちゃん！！　と全力でツッコミを入れたくなるところを、拳を握りしめてこらえる。

『それじゃあ、つかぬことを記していきましょう。わたしは今年で七十一にもなるのだけれど、クロエは十九になったところです。もう本人に聞いているでしょうか。聞いていなければ、そうね、見えないと思ったでしょう。わたしがクロエと一緒に暮らすにあたって、なにかを間違えたせいなのかもしれません。けれども、それはここには書かないことにします。

巷の娘は、十五、六で嫁ぎ、近く子を生む。きっとウィリアムくんも知っていることでしょう。いうなれば、クロエがいわゆる行き遅れであることに、多少の罪悪感を感じているのです。いえ、きっと馬鹿馬鹿しいことね。クロエがそれを望むように口にしたことも、あるいはそれを求めた節も、わたしは知る由がありません。

以上が前置きで、ここからが本題。

単刀直入に記しましょう。この際だからウィリアムくんがお嫁さんに貰ってくれればとわたしは大いに思っています。クロエの気持ちを無視して、とお思いになるかもしれませんが、少なくともわたしが、親の目で見る限り、悪いようには思っていないことでしょう。

旅中、一考をお願いしても構わないかしら。——娘に仲良い男友達が出来たと聞き受け、舞い上がる老婆心より』

ウィリアムは全文を読み終えると、静かにその手の中で握りつぶした。

なんでだよ！　そもそも定住も定職も何も無いだろうが僕は！　そんなのに娘託すなよ！　などと吐き出しかけた叫び声も一通りまとめて握りつぶしたところで、そっと手紙を焚き火にくべようとする。

クロエの瞳が驚愕に真ん丸に見開かれていた。。

「……な、なに、書いてあった……の？」

「これは話せない。話したら僕以外にまで飛び火する可能性がある。だから、言えない」

ウィリアムは流れるように嘘をついた。
蛮族は約束を守るが、しかし嘘をつくことはたまにある。
「まァ見せろよ」
まさに羊皮紙に炎が灯らんとした瞬間、エリオの掌がウィリアムの手の中にある羊皮紙をかすめとった。盗賊の本領発揮である。ほんの一瞬の間に行われた窃盗（スティール）、その鮮やかさたるや、暫し羊皮紙が手の中からなくなっていたことを気づけないほどである。――あ、とウィリアムの口が間抜けた半開きとなった。
「ははァん」
エリオは流し読みでその紙面に目を通した。
迷わずクロエに手渡す。
「……ウィル。……ひとりで、抱えるのは……よく、ない、よ」
「ちょ、待ッ」
焦るウィリアムに、はっきりとクロエは明言する。真剣な表情で。極めて真面目な言葉で。ウィリアムの伸ばした手は、届かなかった。
「……ぁ」
ぼんっ。
音がした。爆発音である。
クロエの頭の中が爆発した音であった。
その表情は、りんごのように赤く染まっていた。顔が、手のひらが、指先が、果たして羞恥にか、わなわなと震える。
エリオが二人の反応を見てか、腹を抱えて転げるようにげらげらと笑った。こいつ絶対ぶっ殺す、とウィリアムは真顔で思った。
「……う、うぃる」
「ハイ」
「……なかった、ことに……」
「ハイ」
自分の顔までも熱くなるのを感じ取ってか、ウィリアムは大いに頭を抱えた。クロエは毛布に包まると、速やかに隅っこで丸くなる。ひとしきり笑い終えたエリオが、ふと、というようにウィリアムへ

と向き直った。
「んでよォ」
「なんだ」
「実際どう考えてんの？」
「剣を抜け！！」
「ひゃはは」
天高く星は光りぬ、されど光はかくも遠く。
響き渡る叫び声、笑い声は、果たしていつまで続いた事か――。

Ｌｅｖｅｌ２８：『光遠き地へ』（後書き）

後に手紙は、そっと焚き火にくべられた。

第一部終了時点設定総括

【メインキャラクター】

前衛特化型剣士：ウィリアム

この物語の一応主人公。戦闘能力がシャバいが、少しずつ成長中。思慮を巡らせた上で思いついた策を投げ捨てる。猪突猛進ながら仲間思いの十五歳の少年。

王家出身だが、物心ついた頃から絶賛家出中。本名はウィリアム・ウィンズ。

一六五センチと、男の戦士としては些か頼りない体格。灰色の髪はこの世界に多くなく、目立つ。

ちなみに魔法の才能はからっきし。

技能：〈生存術〉（虫を食ってでも長らえる生き汚さ）、〈危険感知〉（予知じみた第六感によって危険を察知する）

中衛万能型盗賊：エリオ

森に生きたとある部族の生き残り――にはとても見えない、軽々しい十七歳の青年。金髪碧眼が鮮やか。

種族的には純度百パーセントの人間。短刀と弓の扱いを得意とする、典型的な盗賊。

手先が器用で、口が回り、そして容姿端麗と、その言動さえ取り払えば驚きのパーフェクト超人。

かなり無目的に、かつ無軌道に生きている節がある。一七四センチの長身。笑い方が、うさんくさい。

技能：〈盗賊〉（スリ、ピッキング、その他盗賊必須技能）、〈身軽〉（運動に有利）、〈美貌〉（相手への印象値上昇）

後衛回復型魔術師：クロエ

世界的な魔術師の一人娘、もとい孫娘。この世界には珍しい黒髪を一つ結び。蒼い瞳は珍しくない。伏し目がち。

一四一センチ、十四、五にも満たない少女に見える容貌だが、十九歳。嫁いでいたとしてもおかしくはない。

精霊魔術の使い手だが、それ以上に薬師という側面が色濃い。

魔術属性は大別すれば〈火〉だが、細分化すれば得意とする魔術は〈熱〉。

口下手だが、年上らしく博識、かつ冷静。ただし自己を省みない事例が多々。

自身より他者を優先する、世の荒波に巻き込まれていないからこその人格であると言える。

技能：〈分析〉（観察能力に長ける）、〈博識：植物〉（植物に関する正確な知識）、〈調合〉（薬草から薬を煎じる）

【サブキャラクター】

イル：冒険者組合の仕事を斡旋する役割も請け負う酒場“旅の帳亭”の女主人。恰幅がよろしい。

バリー：総合商店を営む、商人ギルド所属のおじさん。基本的に損得勘定で動く。本名はバリー・バルザック。

アルマ：バリーの私兵団の長。自警団的な役割もつとめる。ちょー強い剣士。

リプル：ハーフリングの射手。アルマの相棒的存在。

ネロ：“奴隷の国（ネレイド）”という特殊環境下で育った高級奴隷。上等な使用人のようなもの。クソ強い拳士。

ホーク：“鷹の爪”という名のクランの長。現在は一時解体され、武具等を取り扱う同職ギルドの傘下にある。

クレハ：クロエの祖母。“魔道十哲（アウトサイダー）”という狂人番付に名を並べられる世界的魔術師。御年七十一歳。

レイヴン：“剣魔七星（セブテントリオン）”という組織に名を連ねる、冒険者にして傭兵。一個大隊を相手取れるのではないかというほど強い。

アウル：世界に何人いるとも知れない“森の王（エルフ）”のひとり。外見は人間の少女に近いが、全く人と異なる生態を持つ。

レイチェル：帝国の女将軍。帝国第三部隊“帝王親衛隊”大隊長。妙齢の美女。洒落にならないくらい強い魔法剣士。本名はレイチェル・シュナイデ。

ルーファン：かわいそうな人。

【設定用語】

〈商人ギルド〉

商人によって結成された組合。世界規模で広がる商人同士の繋がり。
後述の同職ギルドが地域単位での繋がりであることを考えれば、対照的。
目的はそのものずばり“利潤追求”。金が神。

〈同職ギルド〉
各々の職業別に結成された組合。目的は“利益”と“技術”の追求、共有。
商人ギルドと対立しているように見えるが、共存も不可能というわけではない。

〈冒険者ギルド〉
同職ギルドの中でも特に、冒険者への依頼を処理する組合。
他の同職ギルドと異なる点は、自然発生的な組織ではないということ。
国ごとに異なる形態で運営される組織。国に属する冒険者ギルドは、戦争に兵として駆りだされる場合がある。
この存在によって、一部の国家における貴族や領主たちは王に刃向かうことが困難となっている。

〈魔道十哲〉
十の魔術師の名が並ぶ狂人番付。
厳密には組織ではない。良くも悪くも有名な人たち。
一つの基準は『人の身で至れる筈のない領域、即ち“魔道”に至った者』。
アウトサイダーとも読まれる。

〈剣魔七星〉
読みは“セプテントリオン”。七つの国の冒険者、その頂点の七

人によって構成される少数実行部隊。
いわば一つの同盟と、その象徴的役割を担っているとも言える。
その証左として、常に厳戒態勢というわけではない。

〈帝国〉
大陸の中心的国家。他を圧倒する軍事力を有し、他国が束になっても到底敵わないほど。
積極的な侵略行為は行っていないが、周辺国家にとっては存在そのものが脅威以外の何物でもない。
歴史は浅くとも紆余曲折を経て成立した国であり、その成り立ちは後々に明らかとする。

第一部終了時点設定総括（後書き）

追記予定。

Ｌｅｖｅｌ２９：『旅路の一歩』

この世界にも、地図というものが存在する。例えば城塞都市『カタラウム』は大陸南東、その沿岸近くに位置し、この都市を街道沿いに北西へ北上、道なりに進めば大陸の中心、“帝国”へと至る――この程度の大まかな情報が記された地図は、一般の庶民でも入手することが出来た。もちろん、些か正確性に欠けるところはあるが、それでも持っているに越したことはない。言ってしまえば、その日暮らしの冒険者にとって細かな距離など大した差異ではなく、大体の方角と高低差さえ記されていればそれで良いのだ。

「――にしても随分とボロくねェか、地図」

「良いだろう別に！　金貨があるなら飯買うだろ！」

「……すごい、年季……」

街道沿いを少し横にそれて歩む、三者三様の珍道中。あの街を発ってから丸々三日間程、柔らかな土に繁る草原、野宿だの宿駅だのを辿りながら何ぞの足止めを食うこともなくひたすらの歩き詰め――しかしここに至り、休憩以外の意図によって三人の脚が止まった。いまだ太陽は天高くたたずむ日中のことである。

眼前、北の方角には道無き道、彼方にそびえるは高き山々。街道は西へと続いているが、あえて道筋を外れるという選択も無いではない――が。ぼろぼろに煤け、所々に穴があき、端々に切れ目が刻まれた一枚の地図。珍しいものを見るような目で、広げられたそれをクロエが覗きこむ最中、ウィリアムはいかにも似合わぬ羽ペンを片手に天を仰ぐ。

「まァーず。わざわざこっちから“帝国”に行ってやる理由も無ェだろ」

「ああ」

ちょいちょい、とエリオの細長い指先が、地図の中心を指差し示す。こくこくと頷いてみせるクロエ。そのことは一行（パーティー）の確定事項で

ある。
「ッたって、東に行くってェのもな」
「なんも無いな」
「……無いね……」
クロエの、ひどく神妙な呟きが後に残った。いや、何も無いわけではないだろう。東の道無き道を行けば、自然、大陸の東沿岸際に至る。その近郊を当たれば、小さな漁村が少なからず点在しているだろう、という想像はつくのだが、載っていないのだ。地図に。そして、そこからの広がりが無い――
「となると、西、か。真っ直ぐ行くと、“麦穂（イースト）の国”に行き着くな」
「まァ、はっきりと場所を定める理由も無ェが、ひとまずの目的地としては良いんじゃねェか。補給なりなんなりしてまた発てばいいわけで」
「……当面は、そんなところ……かな」
「問題ない、はず。近隣でも、他の国の属領で面倒は起こさない――と、僕は思う。たぶん」
広げた地図をくしゃりと丸めながら、小さく肩を竦めるウィリアム。かの城塞都市でのことは、“帝国”から遥か離れた遠方であったとはいえ、あくまでも“帝国”に属する領地であったからこそ可能であったという推察だ。
「……だからこその、初動の迅速さ……だろう、ね。……場所を構わない、なら、急ぐわけも……なし」
ウィリアムの所在が知れ、追手がかかり、その手が回るまでの動きが――あまりにも早すぎた。高位の魔術師などが行使し得る、遠隔連絡術式を用いてのことだろうが、そもそもその様な大規模魔法をわざわざ使ってまで急ぐ程のことか、とも思う。少なくともウィリアムにとって、自身の身柄に然程の価値があるとは、思えない。
しかし、事実は事実。ウィリアムが首肯し、立ち上がろうとした瞬間だった。その所作を咄嗟に遮り阻む、エリオの声。
「ちょっと待った――ひとつ、明らかにしとこォぜ」

「何をだ」
「個人的な物でもなんでも――オレらの目的、必要とするもの、旅の理由、その辺をだ」
「金」
即答である。
のんびりと膝に手を突き、立ち上がりながらそうのたまうウィリアムの言葉は、あまりにも即物的に過ぎた。そしてそのあまりにエリオはずっこけた。良い感じに金色の頭から草原に埋まる。何とも間の抜けた光景である。
「いやまあ金はついでなんだけど。ともかく要る。後ろ盾の類も何もない以上」
「ウィル、お前それ元々持ってたクセに自分で投げ捨ててんじゃねェか」
「後ろ盾は後ろ盾だけど、首輪つけられて後ろからリードで引っ張られてるようなもんだ。そりゃあ捨てる」
「あー。そォいうもんか」
「……首輪……リード……」
「クロエさんは何を考えてらっしゃるの!?」
至極、真顔である。遠くを見ている様な視線をどこかへとそそぐクロエの姿に、訝しげな瞳を向けるウィリアム。荒らげた声に、かくりと少女は小首を傾げるばかりである。あァ、とエリオがふと何かを思い出したかのように、言葉を付け加える。
「オレ、別に目的とか無ェから。ヨロ」
「言い出しておいてそれかよ！」
エリオの潜在的気質がダメ人間であるなどということは全く以て今更な事実であり、議論の余地はない。美しく、そして整っているのは顔だけである。うるせェなーオレは無目的な若者代表なんだよ、などと言ってはばからない青年。それがエリオという男であった。
――それゆえに、ウィリアムの蛮行などに振り回された挙句の果てにもついていける、奇跡的な付き合いの良さを有しているのかもし

れない。
「……個人的、知的好奇心の、充足……」
「知的レベルが蛮族から知識人に……」
「要するに何かワクワクするもん見て回りてェ、と」
「噛み砕きすぎだろ！」
「……うん」
「いいの！？」
問題ないらしい。
こくり、とクロエはウィリアムに向かってうなずいていた。となると、と少年は小さく首を振る。
「最終目標は世界一周、ってところか」
「ついでに武者修業にもなんだろ。丁度良いんじゃねェ？」
「……強くなれば、懇意にしてくれる、人も……いる、かな」
「厄介事も増えるだろォけどな」
ひょいと肩を竦めてうそぶくエリオ。
力というものは、人を惹きつける。良きにつけ、悪しきにつけ。その力がわかりやすく利益をもたらす類のものであったとしたら、尚更だ。どうなるにせよ、うまい話ばかりではない——クロエは難しそうな顔をして唇を引き結ぶ。一方でウィリアムは気楽そうに、ニィと悪童じみた笑みを浮かべるばかりである。
「まあ、まずは——身近な一歩から、だ」
そういって、ウィリアムはゆっくりと歩みだす。ひょいひょいと軽い歩調でエリオが並び立ち、ぱたぱたとその後ろにクロエが続いた。
命を張った、そのくせ酷く気の長い旅は、恐らくこの時になってようやく、明確な指針を——定められたのだろう。
さてそうなれば、歩みのしるべとすべきは、果たしていかなるか。まず中継の拠点とするには、いずれにせよ人が住む地でなければならない。では、人が暮らすために何よりも必要とされるものは、何か。——水である。川か、湖か。水源となり得るもの、それさえ見

つけることが出来れば、さほど遠くない場所に、人の存在を求めることが出来るだろう。地図にその存在が記されていないような小さな村となれば、尚のこと。

「……水浴み、出来るところ、あるかな」

「せめて祈っておこう……」

額に眉を寄せるクロエの表情は、極めて深刻なそれであった。旅慣れしない内は致し方のないことである。そのうち慣れらァよ、とエリオが気軽にうそぶく。――慣れるのは良いことなのか、悪いことなのか。いささか判断に苦しむウィリアムが出来るのは、まさしく天に祈ることのみであった。

水場を求めて歩み続けること、およそ二日と半日。その過程で川の所在を知り得た彼らは、北西へと続く街道からそれて、真っ直ぐに西へ。日は沈み、月が顔を出す段に至って、漸く三人は川のせせらぎを耳にすることが出来た。彼らは同時に、足を止める。

人が倒れていたからであった。――というか、どこからどう見ても、行き倒れであった。

「……どうしよう」

「ってェかまず、生きてんのか？」

「……ん」

伏した人の形を前にして、ひとまずその正体を確かめんと、クロエがその手に持つランタンを近づけた。そばかすの目立つ、赤毛を三つ編みにした少女。女性用のローブなどではなく、だぼっとしたズボンを身につけているためか、どこか少年のような印象を思わせる旅装束。年の功は、ウィリアムとそう変わらないか。暗闇に薄ぼんやりと浮かぶ肌は健康的な色合いで、灯に照らされて、少女は俯せのまま、ひくひくと睫を震わせていた。

「息はある、か」

視線を落とし、少女の様子を見て取ったウィリアムが、ほうと息を吐く。

「……どう、しよ、っか」

「放っておくにも忍びないし、取りあえず起こ、ってなにやってんの!?　エリオなにやってんの!?」
「え?」
別に何もしてねェけど?　と言わんばかりに――あるいは当然のごとく。屈みこんだエリオは少女にその身を寄せ、堂々と懐をまさぐっていた。手癖の悪さはまさに一級品と言えよう。しかも、いささか田舎臭さの目立つ風貌とはいえ、女人である。良からぬ行いをしているようにしか見えない。エリオの外見をもってしても、余裕で黒だ。
「金目のもんのひとつでもってェね」
「……さすがに、ちょっとひどい……」
などと、少女の頭越しに、呑気な言葉を交わす最中。
ひっ、という引き攣った音が、不意に聞こえた。エリオの漏らす調子良い笑い声のそれとは異なる、かすかに上擦った声。ウィリアムが視線を落とす先、少女が、目を覚ましていた。瞳を真ん丸に見開いて、驚愕にわなわなと口唇を震わせる。
少女からすれば、目覚めたばかりであるにも関わらず、眼前に三人の人間という状況。不審に思われても無理はないか。エリオはがしがしと億劫げに金色の髪をかき乱す。ふーむと頷くと、先立ってウィリアムが口火を切った。膝を屈め、少女に視線を合わせる。
「あー、君、だいじょ」
「……お、お助け、を、い、い、命だけは、勘弁してくだせえ――!!」
――命乞いから入られた。
敵意は無いと説得し、危害を加える意図もないと宥めすかすこと暫し。まずもってして、どうしてこんな所で行き倒れていたのかとウィリアムが問うくだりになって、少女は突然に「ああっ!?」と叫び声を上げた。びくんっ、とクロエの掲げる灯が跳ね上がるように揺れる。

「なんだどうした！　落ち着け！」
「忙しい娘さんだァなー」
どこ吹く風の様子で着々とキャンプを敷設するエリオ。調度良い区切りの上に、周囲は最早、天然の光など星ばかりとしか言いようのない真っ暗闇。これ以上の進行は危険である上に、明日にも差し支えるだろうという判断である。クロエはその小さな素足を晒し、川の清流に浸している。そもそも基礎的な体力が伴っていない以上、休養も彼女にとっては必要なつとめとなるのだった。クロエはちらりと、ウィリアムと少女を返り見て、その様子をうかがうように、ぱちぱちと瞳を瞬かせる。
「えーっと、その、なんで倒れてたかって話ッスよね。……襲われたんス」
「……おそ、われ、た？」
「です」
クロエの不思議げな言葉に、少女は大仰に首を縦に振る。ウィリアムが小さく首を傾げる。襲われたとすれば、今まさに、彼女が無事であるということが、不思議だったのだ。例えば魔物に襲われたとするのならば、生きているはずもない。しかも軽く周囲を見渡した限りでは、魔物の存在は見受けられない。
魔物とて、住家がある。洞穴、森林、天然の建築物。どんな形をしているにせよ、そこに多くの魔物が生きる限り、そこは人間にとって――“迷宮（ダンジョン）”と呼ぶに値する。しかしそれらしき物は、近場には見当たりそうになかった。
「襲われた、というと」
「賊ッス。気づいた時には囲まれてて、どうにも」
人か、とウィリアムはうそぶいて、肩をすくめる。
気の利く慰めの言葉を思いついたわけでもないが、ウィリアムは少女に視線を戻す。――と、少女は何やらもじもじと、物も言いづらそうに、身体を小さくしていた。
「どうかしたんかい。配達物でも奪われたとか。僕らが力になれる

かはわかんないけど」
「ウィル、お前はまァた金にもならなさそォな話を、ついさっき定めた金ってェ目標は――あ、クロエ、火、頼まァ」
「……ん。わかった」
エリオの言葉に、クロエは水辺から生白い素足を引き上げると、積まれた薪に歩み寄る。第一印象としては怪しくはあるが、暖かみの――というよりはむしろ、なんとも気の抜ける印象を与える光景ではあるか。少女は意を決してか、一世一代と言わんばかりの気迫をもって、ウィリアムに詰め寄った。
「私は商人ス。で、賊がマヌケなおかげで、品は無事だったんスけど」
「うん」
――ぐぎゅるるる、と少女の腹が鳴った。
「……食料全部とられたので、わけてほしいッス。――無料とは言わないッス」
「残り、どんくらいあったっけか」
「……一週間分、くらいは……あった、よ」
「まあ、多分持つんじゃねェー？」
彼らの言葉に応じて、ウィリアムは、そっと頷いた。
話の流れを掴んでか、少女の顔がぱぁっと明るくなる。夜の暗闇にも関わらず、心なしか眩いような気さえする。
「ありがてえ……！　このアドナ、恩に着させてもらうッス……！」
勢い良く、その頭を下げる少女、アドナ。
三つ編みの髪がそれにつられ、ゆらゆらと揺れる。
「……それ、じゃあ……ご飯、に、する？」
かくり、と小首を傾げるクロエ。薪にともる火は天に燃え、明かりは野生を遠ざける。決して確実ではないが、少々の安全は確保されたか、というところでの、少女の申し出。それにウィリアムが頷きかけたところで――ちょいと待ったと、エリオが手のひらを突き出して制した。

「……ど、どうか、したんっスか」
「隠れてっけど、周りに結構いやがる。人だァな。こりゃあ」
灯が見えた――と、エリオは静かに呟く。驚嘆すべきその視力は、暗幕を通してでも発揮されるようだった。生憎なことに、ウィリアムには視認することが出来なかったが、しかし気配くらいのものなら、感じられる。
「この辺で張って、襲ってる可能性もある――か」
「……どう……する？」
炎の影、ゆらりとクロエの瞳がウィリアムを見上げる。打って出るか、それとも迎え撃つか。判断を委ね、張り詰めた空気を感じ取ってか、アドナはにわかにその表情を引き締めた。
「そう、だな。……クロエ」
呼びかけに、少女はこくりと頷く。
ウィリアムは大真面目な顔をして、言い放った。
「夕餉の準備、頼んだ」
「……わかった。……磐石に、しとく」
「それでいいんスか！？」
「じゃ、ちょっとオレとウィルで行ってくらァ」
「ほんとに大丈夫なんスか！？」
ウィリアムは剣を、エリオは弓を。それぞれ片手に立ち上がる姿は、あまりに平然と。さほど年も変わらない少年二人、アドナの目にはいかように映ったか。少なくとも、それほど頼りがいのある姿には見えなかったかもしれない。先刻までの、どこか穏やかなやり取りを挟んでいれば、尚更であったか。
「しょっぺえ物盗りくれェならなんとかなんだろォよ」
ひひと何気なく笑ってエリオは言い切る。その様子は、常と何ら変りないほど。
だからか、余計にそれは、異様に見えた。
「大丈夫だ、アドナさん。速攻で行ってくる――空腹は、僕もだ」

剣を握るウィリアムは、ニィと口元を歪めて、笑みを浮かべる。
――飢えた獣のそれに似ていた。

Ｌｅｖｅｌ３０：『悪逆の返礼』

さていざ勇ましく刃を構え、敵陣へと突撃せんという体勢を整えたウィリアムは――しかし一つ、気がかりなことを口にした。それは彼の垣間見せる蛮勇とは裏腹、いささかの冷静さを孕んだ言葉であった。

「向こうから攻めに出ない、となると僕らじゃあどうにもならんってことも無いんだろうけど――直接出ていくと、良くないな。クロエとアドナさんを置いてくことになる」

「がら空きだァな。とはいえ、オレらのどっちか一人じゃあちとキツいだろ。守るも攻めるも」

相手は魔物ではない。人間離れした力を振るわれる危険は無いのだが、しかしだからこそ、全く別種の危険性が存在する。人間とは、思考する生物である。相手方もまた人間であるということは、それ即ち――敵もまた考えているのだ、ということ。全くの考えなしならば、これほどありがたいことは無い。中途半端に力を持つものは、それに頼りがちな傾向がある。この点は、ウィリアムらにとって何よりつけ込むべき隙となり得るのだが――相手方が、弱者である場合。己等の力量を心得えており、そして無闇に突っ込むことは避けている時。

敵方が万策を凝らして、こちらの隙を窺っているのだとしたら。

「……私、だと、難しい……かな。アドナさん……は？」

クロエはかくりと首を傾げて、傍らの少女に問う。クロエ自身は魔法の術を心得ているが、しかしそれを何度も放つことが出来るほどの魔力を持ち合わせるわけではない。魔法とは強力な物だが、しかし有限の力なのだ。少なくとも、人間がそれを振るう以上。

アドナは真剣極まりない表情で、ふるふると首を横に振った。赤髪の三つ編みがゆらゆらと揺れる。

「魔法も武器も一切に心得てないッスねー。あ、ハンマーあるッス

よ！　工作用スけど」
「……とのこと、です」
「うーん。……とはいえこのまま身を潜めるのも、つらそうなんだよな」
「なんでッスか？」
　はてなと首を捻るアドナ。荒事を起こさずにその場をやり過ごせるのならば、それはそれで良いのではないか、という様子が表情に見え隠れする。
「ほら、さっき、『囲まれた』っていっただろう」
「ッスよ。十人は下らなかったスね」
「数で負けてる以上、持久戦は不利なんだよ。無論、僕らを延々追いかけてくる訳でもないだろうし、他の獲物がいりゃあそっちにシフトするだろうけど」
　剣の柄をその手に握ったまま、ウィリアムは小さく肩を竦めてみせる。
「じゃあ、無理ってわけでも無いんじゃないスか？」
「狙われてるのに息を潜めてるのって、面倒くさいしむかつくだろ」
「まァな」
「この人たち蛮人ス……どうにかなんないんスかクロエさん」
「……？」
「『なにかおかしなことでも？』みたいな顔しないでくださいッスよ！」
「そもそも奪われた側だろ。アドナさんは」
「まあ、そうスけど。――命まではとられずに済んだわけで」
　この場合、ウィリアムやエリオらの思考がそれほど異端というわけでも、常識はずれというわけでもない。クロエの場合は、彼らに付き合ってこんなところまで来てしまっている以上、そんな彼らの価値観に慣れてしまっている所があるだろう。だが――アドナの思考もまた、常人の範疇である。
　ウィリアムはただ単に、自らの命を重んずるという点において、

少々ネジが外れているのだ。特に自己の意志を貫くためならば、生命を賭けることを気にもかけない。

しかしそんな少年も、自分以外の仲間が被る危険までは見過ごせない。だからこそか、彼はエリオによって張られたテントを一瞥。そして、こんな提案を打ち出した。

「まず、僕らが突っ込むだろ。で、相手の別働隊なんかが動く可能性がある」

「……うん」

「で、ここに隠れておいてもらう、くらいでどうにか」

「ウィル、そいつじゃちぃと弱いぜ。見つかったら、のリカバリが効かねェだろ」

「むう」

「ほとんど一八（イチバチ）ッスね……さすがに乗りづらいッス」

「……でも。隠れるのは、手としては、あり……」

「ンだな。もう一捻り、ってェとこか」

「――それだ！」

一頻り――輪になっての談合の末。出された結論に全員が納得した、その上で。

漸う、ウィリアムとエリオの二人して、敵陣に乗り込むことと相成った。

ウィリアムが前陣を進み、いくらかの距離を刻んで後、付き添うような形でエリオが往く。広々と地平線の彼方まで見通すことが出来るような平原は、しかしその実、真っ平らな地形というわけではない。川が上流から下流に流れるという自然な現象を見ても分かる、それは自然の理。そしてウィリアムらが感じている視線は――彼らを見下ろす、それであった。高所から感じられる、人の気配。こと戦局という面に限れば、すでに不利な要素の一端を掴まされている、という状況。篝火を目印にする、ということは却って危険だった。ゆえにウィリアムの所業は――極めて無謀に見えた。

片手に松明、片手に刃。あまりにも無防備な姿で、ウィリアムは

真っ向から敵陣のど真ん中へと飛び込んだのだ。
それも、ただひとりで。
「ああ？　……ガキ一人、か？」
薄汚れた身なり、風貌の男たちが複数名。焚き火を囲い、見やる先は下流の方角、暗闇の向こう側。傍らに張られたテントは寝床として、恐らくは複数人が交代制で休憩を取っているのか。
ウィリアムらを見張っていた彼らのことだ、その動きについては前もって知れたのだろうが——しかし少年一人で乗り込んでくるとは思わなかったのだろう。男の一人が、どこか戸惑った声を上げる。何の気無く草の原を踏みしめて立つウィリアムの姿は、ただの少年にしか見えないからこそ、かえって男たちの警戒を煽ったかに見えた。それに対するウィリアムがざっと辺りを見回してみれば、優に四人は数えられるという状況。この暗闇の中であればこそ、実質の数はそれ以上か。ウィリアムは無言で——腰に佩く刃を抜剣する。
「……オイオイ」
男たちの乾いた笑いが辺りに響いた。まさか勝てるとでも思っているのかと、何人もの男たちが周囲に散開し、ウィリアムを囲い込む。六人。少年は小さく肩をすくめ、ゆらりと天に向け、その剣先を掲げた。幅広の刃が松明の灯を照り返して輝く。それが——合図となった。
ひうんという鋭い音色とともに、空を引き裂く風音（かざね）。
ぞぶりと男の一人の身に突き立つ、一矢。突き立った角度からしてそれは、間違いなく下方より男を狙って放たれたもの。弾ける鮮血は傷口より迸り、新緑の草原を紅と濡らす。瞬間、男たちの気配が見るからにざわりと沸き立った。走り抜ける緊張、ウィリアムは驚愕を一片さえ見せずに出方を待つ。ウィリアムには、周囲の彼らの心境が——手に取るように分かった。彼らの眼前に堂々と位置する少年は、あからさまな囮。元より方策を手にして乗り込んできた。彼らを狙う射手は、闇に紛れて一方的に攻撃を続けるばかり——そのような状況に置かれたとして。

誰が無闇にその敵意を、眼前の少年に向けたままでいようか。いかなる間抜けだとしても、次の瞬間に自らが二の矢に射抜かれる可能性を、考えずにいられるだろうか。

ウィリアムは一歩を踏み込むと同時、手近な標的目掛けて横一線に刃を振り抜く。

「――……！」

いまだ仲間が撃ちぬかれたという衝撃から、完全に解き放たれたわけではない。にも関わらず、賊の男は一歩を退いた。ひゅんと振るわれた刃が、逃れ損ねた腕を刻む。飛沫散らす切り傷は、しかし――浅い。

「ちィッ……！」

男の一人、今しがた刃を躱しせしめた男が周囲の皆を見渡すと同時、ウィリアムらの反対側へと顎を差し向ける。一旦は引き上げるぞという号令代わりか。これはウィリアムらの想定の範囲内のことである。アドナを襲った男たちに、さほどウィリアムら一行へと固執するような理由は無い。

彼らの仕事は、狩りだ。それも生かさず殺さずに、弱者を狙うという形での。その牙をもってして掌に食らいついてくる、ともすれば首筋へと牙を突き立てんとする“狂犬”以外の何者でもない二人――ウィリアムとエリオは、狙い目としては極めて不適切だからだ。

「……ハ」

ウィリアムは刃を握りしめたままに、彼らの姿を睨めつけた。彼らが引き上げることそのものについては、一向に構わない。しかしウィリアムは気になった。一目散に逃走してしまわないこと、逃走の意図をはっきりと仲間内に示さないこと、それでいてじりじりと少しずつ隊列を下げているということ。そのわけは――こちらを引き付けるためか、あるいは。

時間稼ぎ、か。

誰にともなく自分にしか聞こえないような声音で、ウィリアムは独りごちた。不意に思い返される。それは――ウィリアムも使った

手だ。かつてアルマを相手取ったその時と、同様に。少年自身が、彼女（アルマ）の敷いた隊列とほとんど同様の手を用いているのだから、気づかぬはずもなかった。おかしな偶然もあるものだとウィリアムは思う。

強いて違いをあげるのならば、その必死さか。命ひとつ賭けずして――人を騙せるはずもない。

しかしそれを理解した上でも、ウィリアムは追い縋ることを止めない。

――せいぜい乗ってやろうじゃないか、僕らにしてもきっちり退いてくれなきゃ困るんだ。

心中ひとりごち、かざした剣を振るう。切り抜ける一閃はしかし、逃げる彼らの背を掠めるばかりだった。

一方で、そのころ。

不幸な男がいた。食にあぐねて賊の生業に手を出した、若い男であった。現在まで属している血盟（クラン）にしても、その一員になって日の浅い青年である。“荒野（ブライル）の国”に属するその血盟は、略奪行為を主として活動する、大規模な組織である。その下っ端にすぎないその男は、極めて不幸であった。略奪という侵略行為に馴染む、慣れるということが出来ない――という点において、いちじるしく。

その男は、危険な役割を負うこととなった。腕利きだったからではない。若く、そして使い潰しの効く下っ端人員であるからだ。仲間が囮となって獲物を引きつけている内に、敵陣へと乗り込んで人質に値する人物をさらってくる。言葉にすれば単純だが、果たしていかなる罠が仕掛けられていることか、危険極まりない役割であることは聞いただけでもわかるというもの。

「ウルク、テントの中を確認しな。辺りの警戒は俺らがする」

同様の役割を負ったのは、三人である。男――ウルク以外の二人は、彼よりもいくらか仕事に馴染んだ先達であった。放置されたまま残されている焚き火にテント。辺りは静まり返り、まるでとっく

のとうに誰も彼もが逃げ出してしまったのではないかという状況で、やはり目につくものはテントであった。あの中に籠城を決め込み、潜んでいるのではないかと。まずもって始めはそこから手をつけておくべき、と思われる場所だった。ウルクは大人しく頷いて、テントを確認する。入り口をかき分けて身を前のめりに乗り出し、ランタンの灯でもって真っ暗なテントの内側を照らすのだ。

それが間違いであった。

途端に男は、顔面に熱した鉄板を押し当てられたような感触を、まともに受け止めてしまった。

「――あっ、がっ！！」

ウルクは顔面を押さえて地を転げた。それほどの痛みである。反射的に目を閉じる、瞼に包み隠される瞳。暗闇に覆われた視界は何も映さない。だから男には、わからなかった。テントの内側に潜んでいた少女が、その掌上に生み出した紅の火球を、男の顔面に押し付けたのだということが。

「……」

クロエの相貌は、まるで造り上げたかのような無表情を象っていた。しかし男を見下ろすその瞳に、かすかな憐憫の情が抑えられずに見え隠れする。同時、異様な悲鳴をあげるウルクの容態に、当然付き添いの男たちも気づく。なんだどうした何があった何がいた悪魔でも目にしたか落ち着け――と矢継ぎ早に男へと向けられる言葉。彼らがウルクの掌を退かせてみれば、分かるだろう。炎に焼け爛れたその顔面。その凄惨な様子に、一様に目を見開く。注意を引きつけられざるをえないような有様。

ゆえに気づかない、気付けない。背後から忍び寄る、三つ編みの少女の存在に。確かにクロエは、テントの内側に潜んでいた。

だが、その一人だけとは限らない。目ぼしい潜伏場所があるからといって、他の場所に隠れていないとは――限らないのだ。

ぐしゃっ！！

凶器などマトモにその手に取ったことはあるまい、尋常ならざる

様子で目を見開き、息を荒らげるアドナ。彼女は全力を振り絞って男の一人、その脳天目掛けて鉄槌を振り下ろした。奏でられたる凄惨な響きは、頭部の砕ける音色。

もんどり打つようにばったりと倒れ伏す男の体。たった一人だけ無傷のままで残された最後の男は、しかし敵陣のど真ん中で孤立しているという現状に――驚愕を隠しえない。敵方の一人であるアドナはただの少女であるとしても、しかしもう一人の潜伏者、クロエは――男にとって全くの正体不明。その姿すらも知り得ていないのだ。そしてある程度は仕事に慣れている、その男が選んだ選択肢は、極めて明瞭なものであった。

即ち、あくなき逃走である。

「て、ちょッ」

躊躇いのなさゆえか。戸惑いをあらわにするアドナを意にも介さない。

声なき声を引き連れて、そして仲間を置き去りにしてその身を切って返す。その動きに迷いはない。あっさりと取り残された男、ウルクは不運であった。アドナによって頭を砕かれた男など、まだマシであろう。気絶した結果として、この絶望的状況を知らないままでいられるのだから。

果たして川の上流へと男が走り去った先、その影と入れ違いに現れる姿があった。闇夜に目立つ碧眼。エリオはあっさりとすれ違う男を見逃して、掲げた掌を少女二人にひらひらと振る。

そう――元よりエリオはウィリアムに加勢した後、警戒のためにクロエらの居所へと戻る手はずだった。実際に矢の脅威が存在している必要はなく、敵方に脅威と思っておいてもらえばそれでいいのだ、というのがウィリアムの考えである。言うなれば、数に劣るウィリアムらが一考した、擬似的に数を多く思わせる作戦と言えよう。

「よォ、無事だったみてェだな。クロエはどォなん」

「……ん。……だいじょう、ぶ」

テントの内側に潜んでいたクロエが這い出て無事な姿を見せれば、

こくりと青年に頷いてみせる。闇中にあってなお暗き黒髪は、暗闇に紛れるにも最適であったか。

「……生きた心地がしねェっす。てか、逃しちゃっていいんスか？」

「いーんだよ、一人が逃げて帰りゃあ失敗だって分かるだろ。ウィルの引き際にもならァ」

「……どう、しよっか」

エリオの言葉に得心したように首を振るアドナの傍ら、クロエはかくりと首をかしげた。見下ろす先にはくずおれた男たちが二人。脳天から血を流して、気絶しているのだろうかぴくぴくと小刻みに痙攣する男。もう一人は、顔面の火傷に悶え苦しむ栗毛の男、ウルクであった。呻き声にも似た苦悶の悲鳴がなんとも聞き苦しい。おまけに、ウルクにとって頭上で繰り広げられるこの会話は、彼のこの先の運命を決定づけるにも等しいものである。心身ともにズタボロであるといっても差し支えはない。真に――救いようがないほど、不運であった。

「そっちの死んでるのは、んー、面倒くせェな、川にでも流しとこォぜ」

「死んでないッス、気絶してるだけッス。わたすを人殺しにしないでほしいス」

「まァ気にすんなよ、人のひとりやふたり大したこっちゃねェよ」

「結構すごいこと言ってるッスよ!?」

「……けど、確かに、ふたりだと……面倒、かな」

「ンだろ」

「その辺に縛って放逐しておけばいいんじゃないスかね……」

哀れ、気絶した男の命運は彼自身の関知せぬところで確定してしまったようだ。命運を共にするはずであった先達の男の投げっぱなしな扱いに、ウルクは心中で涙を禁じえない。現実としては、涙すらも流れぬほどの激痛との戦いに忙しいのだが。とはいえ、僅かばかりの希望も同時に生まれた。どうやら彼らは、無闇に人を殺めるつもりは無いようだ、と。一人の男から危なっかしい発言が零れた

ような気がしないでもないが、その点についてウルクは積極的に聞こえない振りをした。

「取りあえず縛っとっかァ。そこのあんた、聞こえてっかい」

エリオはキャンプに放置したままであった道具類からロープを引きずりだし、その手に取る。声をかけられたウルクは、うずくまるような姿勢ながらも必死に頷いて、ああとかううとか胡乱な声を紡ぎ出す。首肯の言葉を吐き出したいのだが、どうやらうまく声にならないような様子であった。

「まァ選べよ。情報喋るか死ぬか。大人しくあることないこと吐き出したら仲間の元に帰れんでも無ェぜ」

「情報、スか？」

「こっからはウィルとの見立てだが。こんなとこで略奪かましてる奴らだ、流れの賊かもしれんが、そうでないなら――拠点（アジト）でも持ってんじゃねェのってね」

「……奪ったのを、貯めてる可能性も……ある、かも……？」

「そゆこと」

「案外あくどいスね……」

しみじみとアドナが言葉を零す一方で、エリオは手際良くウルクともう一人の男の身を縛り付けていく。その有様はさながら簀巻きである。しかしウルクは、最早そのことも気にならないかのような様子であった。茫然自失とでも言うべきか。嗚呼と男は絶望に息を吐く。やはりウルクは、不運であった。

エリオからすれば一切あずかり知らぬことだが――選択肢のいずれを選ぶにせよ、男には死しか残されていなかったのだから。

Ｌｅｖｅｌ３１：『吉兆か、凶兆か』

無事にウィリアムが帰還を果たしたのは、哀れな男ふたりが縛り付けられた後のことであった。とはいえ、自業自得とでもいうべきか。その内のひとりは無残にも土肌に寝かされ放逐され、そしてもうひとりの男は現在、消沈した表情で地面に座り込んだまま、ただただじっとうつむくばかりである。少しばかり焼け焦げたような傷痕が残るその顔は、水に濡れた布でもあてがわれていたのか、わずかに水滴が滴り落ちる。

その傍ら、クロエが鋳物の金属鍋を火にかけていた。おそらくは蒸留していた水を煮立たせているのだろう。

「クロエさん、これ、どうするんス？」

「……スープに、するの。……パンが、堅すぎる、から」

「ああ、なるほど。ふやかす用スね」

答えるアドナに、こくりと何気なしに頷くクロエ。一つ結びの黒髪がふわりと夜天に揺らいだ。なんとも気の抜けるような、穏やかな――光景である。そんな様子を見て取ってか、ほうと安堵したような息をウィリアムはひそかに吐き出す。

「ンで、だ」

おもむろにエリオが口を開いた。鋭く細められた視線がゆっくりとウルクに向けられ、そしてウィリアムを横目で見やる。「どォしたもんかね」と肩をすくめるばかりだ。というのも彼――ウルクが、先刻からずっと黙り（だんま）であるからだ。エリオからしてみれば、全て素直に吐けば良いじゃあないかという状況でしかない、のだが――。

「どうしても言えないわけがある、ってことかな。あるいは、情報を持ってない、っていう可能性もある」

「にしたってゼロって事は無ェだろうよ。――あァ、嘘で切り抜けようってのは考えない方が良いぜ。そこに転がってる奴を叩き起こして聞きゃすぐに分かることだ」

エリオは遠見に縛り付けられている男の居所を顎で示す。ウルクの頬を、ひたりと冷や汗が一筋伝っていった。しかし、無言は一向に途切れない。ひたすらに継続される沈黙。その様子に、仕方がないと言うようにウィリアムは首を横に振り、静かに金属が擦れる音色を響かせる。

刃を鞘より引き抜いた音だった。同時に、少年は大真面目な口調で言い放つ。

「殺そう。で、そこの転がってるやつに聞こう」

「あー……そうすっか。同胞一匹死体にしときゃちったァ口も滑るだろ」

酷く軽い口振りだった。さながらそれが日常であるかのように。その言葉は、緊張感の欠けたこの空気の最中でさえ違和感なく溶けこんでいく。本来――ウルクの思考が正常に働いていたならば、導きだすことが出来たかもしれない。彼らの論理のほころびを。ウルクを殺してしまったら、もう一人の男が口にする証言を確かめるすべは、何一つ残らないのだということに――気づけたかもしれない。もっともその指摘が出来たとて、ほとんど無意味に過ぎないのだが。

例え正確な情報が得られずとも、ウィリアムやエリオからすれば、彼ら山賊に固執する大した理由は存在しないのだから。

ひうん、と剣が空を切る。天に掲げられる刃。くろがねは月の光を返して輝く。その煌きが、ウルクの相貌を照らし出した。

「――まて、待てッ！　待ってくれ、話す、話すから！」

沈黙を破って放たれた声は、必死な声音が含まれていた。命を天秤にかけられた極限状態において、冷静を保っているのは極めて困難なことである。その言葉にウィリアムは、ニィと悪童じみた笑みを浮かべた。

「よかった。僕も、殺したいわけじゃ、ない」

「ウィル。その片手にある包みはどこでどォしてきたんだ」

「向こうのテントでアドナさんのを返してもらってきた」

「モノは言いようだァな」
ウィリアムが剣を握る右の手のひら、その反対の手が掴んでいるもの。少年のこぶし大よりは一回り大きいかという麻袋を指さし示し、ひひと悪辣な笑いを零すエリオ。そのやり取りに食いつくようにか、アドナがにわかに瞳を輝かせた。果たして見覚えがあるのか、空腹が限界に至っているのか。おそらくは、どちらもだった。
「取り返してきてくれたンすか！？」
「アドナさんのかはわからないけど。やたらナッツが詰まってる」
「違いねェっす！」
ありがてえッス、としきりに頭を下げる彼女をそっと宥めつつ、ようようウィリアムはウルクへと向き直る。年の頃は二十前後か。くすんだ栗色の髪、そしてその目は鬼気迫る血走った色をしていた。当然であった。どこか呼吸も落ち着きがないようにうかがえる。少年はそおと刃を鞘に納めて、ゆっくりと見極めるように男を見据えた。
「あなたの所属。それと、組織の規模なんかは？」
ウィリアムの問い掛けに、ウルクはかすかに逡巡した。しかし、少年の手はいまだ剣の柄にかかったままである。果たしていつその刃が再び抜き放たれようか、それは人の及び知らぬところである。全てを諦めたように、ウルクは顔を上げた。
「……“荒野の国（ブライル）”所属……“屍肉漁り（ヴァルチャー）”。五十人以上の、クラン」
クラン。組合（ギルド）よりも小規模で、しかし部隊（パーティ）よりも大規模な集団。血で繋がる氏族か、あるいは流血に同盟する血盟か。いずれにせよ五十人単位で動くひとつの組織、これはかなり大規模なクランと言えよう。少なくともウィリアムにとっては、狙いをつけるに事足りる獲物。もしくは――手に余るほどの、強大な存在。果たしていずれなるか。エリオがやけに楽しげなにやにや笑いを浮かべるそばで、ウィリアムは静かにその言葉を吟味する。
「荒野の国……ああ、そうか」
ウィリアムは地図を思い返す。現在地から西南にかけて広がるは

“麦穂の国（イースト）”領。そして国家に支配されていない無所属地域を隔て、わずかに北上すれば、そこは“荒野の国（ブライル）”の領地であった。決してウィリアムも聞いたことがないような土地ではない。かつて、“鷹の爪”の長であるホークが上げた国の名でもある。

「結構な規模みてェだな――となると、拠点もあンだろ」

エリオの言葉に、ウルクは頷く。彼の語るところによれば、“屍肉漁り（アルチャー）”の拠点の所在は、国境の無国籍地帯。天然の峡谷を真っ直ぐに突き抜けた先に存在する洞穴、それを改造することによって大勢の人員を受け入れる拠点を作り出しているのだという。

「それを総本山、として。いくつかの小隊に分けて、各地での略奪を行う……ってところ、かな」

果たして手を出せるような代物なのかと確かめるように腕組み、ウィリアムが思索する。その様を認めてか、ふいに視線を向けたクロエが、ぽつりと。

何気ない一言を零した。

「……守りやすそうな、立地。……言って、困ることでも、なさそう……だけど」

その言葉に――違和感が、浮き彫りにされる。なぜ斯様な言葉を語ることを渋ったか。それこそ命の如何といった瀬戸際に至るまで。小規模な拠点であるのならば、情報の漏洩はそのまま仲間の危険に直結するかもしれないが――彼の語った内容では、とてもそうとは思えない。むしろ情報が漏れたとしても構わない、困らない、その類とクロエには思われた。

だからこその違和感、不自然。やおらウィリアムとエリオが視線をそそぐ。男は、ぱくぱくと口唇を開閉させる。きっとその咽喉はからからに乾いているだろうか。

「……掟だ」

紡がれるのは掠れた声。

「掟破り。仲間を売れば、即ち死だ」

「僕なら嘘吐き通すが。命投げ売ってまで正直にいることないだろ」

ウィリアムの言葉に、ウルクは首を振る。縄に縛り付けにされているにも関わらず、その腕は、その手は、その身は――かすかな震えを帯びていた。果たしてそれは怯えにか、全身をわななかせて男は声をしぼるように吐き出す。

「……お頭には、妙な力があるんだ。魔法の剣じゃないかって噂されてる。虚言を吐いた者のみを切るんだと――ああ、くそっ！　だめなんだよ！　俺ももう、戻ったって殺されるに決まってる！」

ほとばしるは悲痛な声、まるで頭を抱えるかのように身を丸める男。しかしそれも、戒められたままであるがゆえに儘ならない。成程とエリオは得心がいったように頷く。彼がそれほどにまで口を割ることを理由は、それか。その様子を見やり、顎元に指先を添えたまま、ウィリアムは思案げにしていた。その瞳の奥には、眼前のウルクとは対照的に――なにか輝くものがある。

「聞いたか、エリオ」

「あァ？　なんのことだよ」

「魔法の剣ってことは、“魔導器（アーティファクト）”だろう！？　ぶんどろう！！」

「……え、ちょっと待てよ、それ、凄ェんじゃねェか？！　売り払えばちょっとした財産になンだろ、眉唾かもしんねェけど――いや、ここまでビビるくれェならありえるかもな」

――清々しいほど助ける気が無いッスね。

ほとんど無意識に零れてしまったアドナの言葉であった。彼個人の事情よりも“魔導器”という存在に心奪われる若干二名、という現状。しかし無理のないことでもある。武具そのものが魔法の力をそなえる“魔導器”は、“属性付与（エンチャント）”などによって補助された武器とは、根本的に全く異なる物なのだ。その価値は、通常の武具よりも遥かに跳ね上がってしかるべきものである。

「……ウィル、ウィル。そのひと、しにかけてる……」

そっと口をはさむクロエに、ウィリアムがぱちぱちと瞳を瞬かせる。クロエの白く小さな指が指し示す先、ウルクが白く燃え尽きたような表情でうなだれていた。

「なんだ、どうした、あれか。ご飯食べてなくて死にそうとかか。せっかく情報くれたんだから、そんくらい僕はいいと思う」
「違ェよ！　最後の晩餐になるじゃねェか！」
「いや……いいんだ……多分、運が悪かったんだ……俺は……ハハ……」
　疲れたような笑みを漏らしながら、男は肩を落とす。ほんのかすかに空は明るみを見せていたが、彼の表情はこれ以上はないのではないかというほどに暗い。まさにこの世の終わりを予感させるそれである。
「まァアレだな。オレらも人助けとか出来る身じゃねェし」
「戻らなきゃいいんじゃないか？」
　何気なく、極々当たり前のように――ウィリアムは言い放った。クランの元に戻れば、殺される。それならば、とっとと逃げ出してしまえば良いのではないか。そうすれば殺されるはずもない。なるほど、少年らしい極めて単純な発想であり、思考の流れである。
「ばッ――そんなこと、出来るわけが、無いッ」
「かな」
「俺には、持ち合わせも何も無い、ってのに！」
「でも、そうしなきゃ、死ぬ。というか――殺される。なら」
　――それなら、身一つでも行くしかないだろう！？
　それはどこか自棄っぱちで、捨て鉢で、そして捨て身でしかない選択肢に見えた。少なくとも懸命に考えれば、取るべきではない選択に思われた。しかし、ひとつだけ気付かされたことがあった。まだ――手詰まりではなかった、と。何も出来ないままに死を待つだけの身ではなかった、と。
　その点さえ鑑みれば、ウルクは決して不運ばかりの男ではなかった。
「……考えたことも、なかったよ。身一つ、なんて。死と隣り合わせ、じゃないか」
「ここでいっぺん死んだようなもんだろ、どォーにでもならァ。骨

埋めるとこなんざ腐るほどある、テキトーに行こォぜ」
「……気楽に生きてるな、あんたは」
「お褒めの言葉どォも」
「褒められてないスよ、それ」

かくして一夜明け、近隣の農村の所在を知るというウルクが道案内をつとめることとなった。この区域付近を活動場所のひとつとして定めたクランに所属する――正確には、所属していた――彼が、それなりに地理に聡いということは極々自然な話であろう。例え彼が新参の身であるとはいえども――己等の獲物を知らぬはずはない。

足の向く先は西南。“麦穂の国（イースト）”領にそろそろ踏み入っただろうか、そんな頃合いのことである。

「私（わたす）は、もうちょっと先の町に行くつもりだったんスけども――悪くないスね。この時期スから」

「……時期……？」

かくり、と首をかしげるクロエ。彼女がその意図を掴めなかったのは、生まれてこのかた都市の暮らしが長かったということも相まってだろうか。

「収穫期だ。……あまり胸くそのいい話じゃないが、俺らのような奴らには狙いどきだったんだろう」

仮定の言葉となってしまうのは、おそらく、直に村々への襲撃などを行った経験が無いからだろう。

そう言いながら先頭を歩むウルクの表情に、もはや暗澹とした様子は見られなかった。吹っ切れた、というよりもむしろ、開き直ったのかもしれない。少なくとも、ほのかに焼け爛れたような痕跡を残してしまっている顔――その傷を残したクロエに対して、薄暗い感情を抱いているような気配も無い。

夏期も近づく温暖な気候、秋播きの作物が収穫を迎えようという時期であると――つまり、そういうことである。

「となると、収穫祝いのころなわけで――穏便に迎えてくれそうだ

な！」

「ならいいんだがねェ」

ひょいと肩をすくめてみせるエリオ。その調子は全く以ていつものそれと変わらないが、ウィリアムはどこか意気揚々としていた。儲け話のひとつふたつが転がり込んできたという、現在の好機あってのことだろう。

歩みを進める中、ふいとクロエが呟くように問いの言葉を投げかけた。

「“麦穂”の国……って、いうくらい、だから……すごいの、かな」

水源は確保され、気候は穏やか。周囲の治安を鑑みても、“城塞都市”周辺に比して見受けられる魔物はずいぶんと少ない。平らな地形が広く点在し、耕作地に困るといったことはあるまい。まさに農作には理想的な場所――そう見える。緩々と周囲を見渡す少女に、しかしアドナは呆気無く返した。

「収穫量は普通みたいスよ。とはいえ安定はしてるみたいッスし――ただ、すごいのは別のとこッス」

「っつゥと」

「王都のパンっす」

――雁首揃えて首をひねる総員。「結構有名なんスけどね」と首をひねるアドナ。ゆらゆらと赤の三つ編みが困惑を表すかのように揺らいだ。それぞれにそれぞれの知るに至らぬ理由が、しっかりと存在していたのだが――こほんと咳払いして、歩みを進めながらもアドナはおもむろに語りだす。

「ちょっと高いんスけどね」

「そりゃあ僕は知らんわけだ……」

「保存もあんまり効かないみたいッスし」

「ほっつきまわってて食えるもんじゃねェわけだ」

「……おいしい、の？」

「ふわふわだったりサクサクだったり」

「なにそれ、すげェ」

「職人によるけど。すごいッス」
「……想像、つかない、なあ……」
「製法は国を上げて秘匿されてるとかなんとか」
「そりゃ、すごいよ。その内、戦争でも起きるんじゃないか」
ウルクが背を返り見、冗談めかした口調で笑って零す。アドナもまた、穏やかな笑みを浮かべてそれに答えた。こんな言葉と共に。
「いやあ、わりと冗談じゃなさそうな感じスよ」――ほのかにウルクの血の気が引いていた。
「商いに扱えるようになりゃ戦争する必要も無ェだろ、しっかりしろよ旅商ォ」
ひひとおかしげに笑い飛ばしてみせるエリオ。そしてそのかたわら、遠くを仰ぎ見るかのように瞳を細めるウィリアムが――不意に、おおと感嘆の声を上げた。
「見えた――村だ、村！　このまま下ってけば行き着ける」
橋の向こう側、川のせせらぎ。眼下に見やるは人の息づく気配。教会を中心として建ち並ぶ民家、広大なる耕作地は畝に分かたれ、小麦の穂はひときわ細やかにその峰をしならせていた。休閑地に戯れるは羊毛を刈り取られた羊の群れ。所々に空へ向かって吐き出される煙はおそらく大元を鍛冶屋とするのだろう。遠く彼方に目立ってそびえる立派なお屋敷は領主のそれに相違あるまい。
――そのような景色へと徐々に近づいていけば、明らかともなる村の入口。アーチを描く門を目印として、鎧に身を包んだ門兵が間所を守っていた。ひとまず一行を代表する形でウィリアムが前に出て、旅人として滞在を申し出でせんとした、その時だった。
「……貴様。賊――……か……？」
「違う！！　旅人！　です！」
全力で大いなる勘違いを受ける一行だが、しかし元より“冒険者”と“賊”の間に大した違いなどない。旅芸人とも旅商ともつかないあまりにも無秩序な集団であるウィリアムたちは、賊の類であると判ぜられるにいささかの迷いも抱かせない様相であるからだ。ゆ

えにこの場合――門兵の側に落ち度は存在するまい。
「……す、すまない。所望は滞在か？　然し、あまり長期の滞在は勧めんぞ」
かすかに少年の剣幕に押されたような調子で、しかし門兵の男は一歩も退かず、ウィリアムに答える。
「……なにか……あるの、です？」
ウィリアムの後ろから顔を出すクロエに、門兵の警戒がかすかに緩む。いくら無秩序な集団といえども、彼女のような幼い風貌の少女が賊紛いの凶事に身をやつしているとは思い難いのだろう。もちろんそれは全くの先入観でしかなく、よくある話に過ぎないのだが。
ああ、と男は神妙に頷く。続く言葉に、ウィリアムたちは、大いに脱力した。
ウルクは、やはりかというような表情を隠せなかったが。
「不当な嫌疑を済まなかった。――この時期は賊の襲撃が危惧されるのでな。巻き込まれる前に、出たほうがいい」

Ｌｅｖｅｌ３１：『吉兆か、凶兆か』（後書き）

【休閑地】
休ませている耕作地の意。
この農村では三圃制を採用している。

Ｌｅｖｅｌ３２：『聖像』

「まさか、焼き討ちされるって訳でも無い――でしょう」
門兵の言葉に肩をすくめるウィリアム。警告はありがたいが、果たして内情はいかほどのものか、それを探る意味合いも含めてか。疑惑の視線を受けて、男は気まずそうに視線を逸らしながらも、静かに続けた。
「ああ。奴らが行うのは継続的な略奪だ。そんな無茶苦茶はしないだろうが、万が一のことが無いとは言えない。……詳しくは長に聞いてほしい。この村には宿が無いが……見えるだろう。あの教会だ」
鉄甲に包まれた男の指先が指し示す先、そこには村の中心たる教会があった。堂々たる装いである。その傍らに、鐘塔がいかにも明瞭な目印のように、厳然と立ち並んでいる。
「あそこの司祭様がこの村――レーヌ村の指導者（リーダー）でもある。数日の滞在ならば歓迎してくれるだろう」
親切にもそう教えてくれる男にウィリアムたちは礼を告げて、門をくぐる。通り抜けた向こう側に広がるは、間近に見る――穏やかな農村の風景であった。麦穂の色彩は鮮やかに、家畜の鳴き声は賑やかしく。村を囲い込むように流れる川のせせらぎ、それが思わせるほのかな涼やかさ。日も高ければ、農地に働く村人たちの姿もちらほらと垣間見えよう。
さて、いざ村内におけるウィリアムらに向けられた視線といえば――

「警戒されてんなァー」
決して、暖かい類のものではなかった。にわかに不信の入り交じる、注意の色合い。とはいえ、敵意と称するほどのものでもない。門の番をひとつくぐり抜けているのだから、必要以上の警戒は不要といったところか。しかし彼らからすれば――ウィリアムたちは、見ず知らずの流れ者。気をつけるに越したことはない、そういうこ

とだろう。
「情勢の、せい……かな」
「村ッスからね。よそ者の扱いはこんなもんスよ」
むしろ悪くない方ッスかねー、とアドナは軽い調子で語る。彼女の言葉が示す通り、寄越される視線は冷たいものばかりではない。例えば、腰に剣を佩くウィリアムに対する、子どもの好奇の輝きなど。そして子どもがそっと母親に窘められているといった具合だ。なんとも微笑ましい光景である。
「……僕の存在が教育上よろしくないものにされてしまった……」
がっくりと肩を落とすウィリアムを、よしよしと慰めるように支えるクロエ。その隣、エリオはいかにも飄々として言い放つのだ。
「農民に生まれりゃ大抵が農民に死ぬからなァ。珍しいんさ」
町ならばまだしも、農村に生まれたものは、多くがその土地に育つ。育った土地に生き、やがて郷里に骨を埋める——とはいえ。
家族に生まれた子の一人が、冒険者として村を出る。そういった事例が、ほとんどないというわけでは決して無い。そういった境遇（ことと）は、多からずとも必ず発生するものである。
「口減らしで冒険者にして送り出されるとかあっけど。まァそういうのは抜きで」
「サラーッと無茶苦茶言うッスね……」
呆れたような声音を上げるアドナ。とはいえども、少なくともこの村に、そのような暗い影は見当たらなかった。表面上は——そう、賊の脅威に晒されているという事情すら、微塵もうかがわせないほどに。
肥沃な大地に実る、大地と水と陽光の恵み。そこに人々は、希望を見出して——生きているのだろう。
「豊かで。良いところ、だな。……ここを」
襲うことになってたんだな、俺は——と。黙りこくっていたウルクは、不意にぽつりと呟いた。その瞳の内側には、憧憬じみたものがかすかに垣間見えるか。進める歩みすら、力が抜けて落ちてしま

ったかのようにゆっくりとしていた。その様子にウィリアムは、ニッと笑ってみせる。
「後悔、してるかい」
「俺に悪党は向いてないらしい」
ふんとウルクは鼻を鳴らす。どこか照れ隠しのような仕草。
火傷を負った顔面では、様にもならなかったが。
「……どうにか、力に、なれれば、いい……のに」
「僕らが潰せば結果的には助けになるぜ！」
「つっても相手はでけえし。話聞いてからだろォよ」
「……君らの方が、いくらか悪党に向いてるよ」
――ああ、こんな感じでクロエさんも慣らされたんスね。そろそろ驚愕すら覚えなくなってきたアドナがしみじみと漏らした呟きは、鑑みられることなく虚空に消え去るばかり。
「……私も、元々。……そういうところ、ある……から」
小さく困ったような笑みを浮かべる黒髪の少女は、しかしそれを楽しんでいるようでもあった。
――そうして一行の歩む先、その所在が明らかであればよもや迷うはずもなく。橋渡す川辺、堂々たる佇まいの教会は、しかしそれほど大きな建築物ではない。村の墓地、耕作地、そして教会。その全てを合わせてようやく、他の村民の領地がふたつかみっつ分といったところだろう。果たして清貧をもって良しとするのか、それは定かなところではないが――ウィリアムが入り口に提げられたベルを鳴らせば「お入り下さい――」と、扉の向こう側から聞こえる声。
この準備の良さは、そして無防備さはいかなるや、もしや罠でも仕掛けられてようか――などと考えるほど、ウィリアムたちもひねくれてはいない。きぃと木の扉を軋ませれば、広がる内装は冷厳なる聖堂。されどあしらわれたステンドグラスは色鮮やかに、暖かな陽の光を取り入れて内部を照らし出す。決して大仰ではないが、静かな威厳がそこにあった。見上げてみれば星空のように高い天井、仰ぎみたクロエがふぁと慄きの声をふいに漏らしてしまうほど。

その奥に控えるは老いさらばえた男。しわの刻まれた表情に柔和な笑みを浮かべて、法衣に身を包んだ禿頭の老人はゆったりとたたずむ。小さな、しかし確かな存在感。そして――それ以上に殊更。際立って己を主張する物体が、聖堂の内装には存在していた。

聖像（イコン）。

それは、女神を刻み記した偶像であった。

湖畔に舞い踊るはふくよかと呼称されよう一歩手前の豊満な肉体、その身体を覆い隠すはたっぷりと豊かにたくわえられたブロンドのロングストレート、そして一枚の白布ばかり。ともすれば扇情的ですらあるような情景が描かれた浮き彫りの壁画は、しかしその清らかな美しさゆえに、極めて繊細な均衡の上で神の聖性を保ち続けることを可能としていた。

「……驚かれましたかな。旅のお方」

柔らかに語りかける老人の言葉は、ほのかに枯れたような音。されども湛えられた一抹の力強さをうかがわせる、そんな声だった。事実、痩せた男の体躯は腰も背骨もそれほどに曲がってはいないようだ。コツン、コツン。杖をつく音色を鳴り響かせ、緩慢にウィリアムたちへと歩み寄る老司祭。

「来訪を予期してお出でで」

「いやなに。使いの者が知らせてくれた、それだけのこと」

一瞬の驚きに目を見開いたウィリアムに、翁は人の良い笑みを浮かべて答える。一行が村へと近づいていたときからか――外側への警戒は怠っていない、ということだろう。数日の滞在を、というウィリアムらの申し出に、彼は心よく頷いてみせた。

「小屋が併設されていたろう。ここから繋がっているゆえ、自由にお使いなされ。二部屋は空いていよう」

指先に示される先を見やれば、聖堂から扉一枚にて区切られている様子が垣間見えた。有難いと礼を落とすと同時――もうひとつ。彼らには言及すべき頼みごとがある。

「後ほど。この村の事情（こと）、お聞かせ願っても宜しいか」

ウィリアムのその申し出に、ふうむと老翁は白い髭を鷹揚に撫でつける。身体そのものは少年よりもずっと小さなそれであるにも関わらず、重ねた年の功がゆえか、そこには奇妙な威圧感が存在していた。彼はゆっくりと口を開いて、答える。

「では。そうじゃのう――この村の、成り立ちから」

「いやァ、そういうのは別にいいんで」

「堂々と言いすぎッスよ！？」

「……私は、ちょっと、聞きたい……」

ぽつりと零されたクロエの言葉に、当の老司祭こそが驚愕に眼を丸くした。おそらくは冗句のつもりだったのだろう。よもや年寄りの長話に――特にウィリアムたちのような若者たちが――進んで付き合おうとは思うまい、と彼自身も考えていたに相違あるまい。少女は視線をじっと持ち上げ、見つめる。子どものように純粋な好奇に揺らぐ蒼。

ほっほ、と司祭は軽やかに笑って言う。

「少し長くなるが。それで良いならば、来なさい」

その言葉に、ひょいと軽く肩を竦めるのはエリオ。

「ウィル、任せた」

「なんかやることあるのん」

「いやぜんぜん。その辺ぶらついてくらァ」

「テキトーすぎだろ！！」

ウィリアムの突っ込みを、ひゃははと軽やかに笑い飛ばすばかり。

青年は、あまりにもいつもどおりであった。

「わたすも、その、辞させてもらうッス――羊毛（ウール）を仕入れたいんスよ」

「おお、この村の羊の毛は繊細での。私からも勧めよう」

おずおずと小さく挙手して申し出るはアドナ。多少の失敬はどこ吹く風と受け流す老体には、年長と、そして指導者としての風格がにわかならず存在していた。若衆の扱いなぞ手馴れたものであろう、微笑ましげな表情すら浮かべている始末であるのだから。

結果として辞するは二人、残るは三人。「俺は、個人的に頼みたい事が一つあるので」そう言って場を離れなかったのはウルクである。しかし司祭は、「先に仰せなされよ」と穏やかに告げる。

それを聞いたからか。ウルクはおもむろに司祭の眼前へと座り込んだ。一体これは何事か。ウィリアムも、クロエも――この場の全員がその不可解さに、驚きを禁じえない。ウルクはそのまま滑りこむように、額が大理石の床に擦りつけられんばかりの勢いで、長に向かって頭を下げた。

「司祭殿。俺を。俺を、この村に受け入れては貰えないかッ！！」

――振り絞るようなウルクの声が、静謐の堂内に響き渡った。シンと周囲が沈みわたり、静寂が広がる。いまだ一抹の困惑に囚われながらも、しかし司祭はゆっくりと語りかける。

「顔を、あげなさい」

一心に頭を下げたウルクの心情は果たしていかなるものか。ゆっくりと栗毛頭が持ち上げられる。二十の大の男は、安住を求め欲したのだろう――この平穏に。実りをなしとげる豊穣の地に。いずれにしても、ウルクという男が――ウィリアムらの中にいては、いささか異物的であることを察していたのか。真っ直ぐとウルクに向き合い、翁は言葉を続ける。

「おぬしには、足りない物がある」

「――それ、はッ」

「信頼よ。信頼は、頭をさげて得られるものではない」

はっとしたようになるウルクに、そっと微笑みかける老人。しわの目立つ相貌に浮かぶその表情は、おそらくはその慈悲によるところなのだろう。

「働きなされ。その働きぶりを見て鑑みよう。幸いに働き手は十分ではないのだから」

そう言って神父は静かに踵を返し、奥の扉の向こう側へと引いていく。なぜ。ウルクが疑問を隠せずに、その扉を睨みつけるかのように見つめていると――程なくして老人は、彼らの元へと帰ってき

た。その片手に、何の変哲もない木桶を手にして。
——さあ、まずは水汲みからじゃ。
木桶をウルクに差し出しながら、指導者の眼は静かにそう語りかけていた。

「……これで……いいの、かな……」
「いいんじゃないかなあ、多分。どうにでもなるよ」
彼らの傍ら。ウィリアムとクロエの間に流れる、気の抜けるような弛緩した空気。
「何にせよ、僕らが助けになれば尚のこと都合が良い——ということにもなったわけだし」
ニッ、と笑みを浮かべてみせるウィリアムに、こくりとクロエは頷いてみせる。その隣を早速とウルクが駆けてゆく——すれ違いざま、彼らにそっと礼を言って。ふたりが笑みをもって応えると、ほぼ同時。
「それでは、改めて——お話をいたそうか」
こほんと咳払いする老司祭。背筋をぴんと伸ばして、にわかに緊張を覚えるウィリアムとクロエ。
そう。本題は、これからだった。

入会地、という場所が農村には存在する。これはどういうものかというと、平たく言ってしまえば、農民たちの共有地である。放牧地足りえる野原、薪を集めるために必要な山林。土地によっては湖や沼が伴うこともしばしばあるだろう。それが何なのかといえば——本当に目的も何もなしに飛び出してきたエリオは、堂々と入会地に侵入していた。
放蕩もここに極まれりといったところか。村の様子を見まわるのならばいざ知らず、しかし森生まれの森育ちであるがゆえに、土地の森に惹かれることはもはや致し方のないことなのかもしれない。
さくり、さくり。小さく音を立てて落ち葉を踏みしめ、エリオは

何の気なしに山林を行く。とはいえ、山というほどのものでもない。ほとんどその勾配を感じさせない、緩やかな坂が暫し続いている――といった程度のものだ。緑豊かに連綿と立ち並ぶ木々、その合間を抜けてエリオは向かう。どこへ行くかなど言うまでもない。頂上である。もちろん、そこに目的など存在するはずもなかった。エリオはそういう青年である。

「――おォ」

少し早足に、駆け抜けるように。行き着く果ての天辺には、ちいさな湖畔がその中心に鎮座していた。鮮やかに陽光を照り返す水面、そんな心和ませる風景にエリオは感嘆の声を上げる。

吹き抜ける涼風。穏やかな鳥の声。さしこむ日差し。やっぱ森はこういうもんさなァ――と、エリオは誰にともなくうそぶく。おそらくその脳裏には、かつてエルフと邂逅した幻林が回想されているのだろう。あれは幻想的だったが、しかし剣呑に過ぎた。緩やかさが足りていない。

そもそも自然のあり方を、たったひとりの人間の尺度で定められようはずもないが――それはともかく。

「……ァん？」

漸うと一息吐いていたエリオは、ふと目の前の光景に違和感を覚えた。ごしごしと瞼をこする。違和感。あるべきでないもの、あるはずのないものが、そこに存在しているかのような錯覚。

否。錯覚では、なかった。

――湖畔の岸辺。

ちっぽけな白布の一枚を身に羽織る姿。一目見て分かる豊満な体付きは、まるで豊穣を齎さんとせんがばかりに。たっぷりとたくわえられ、そして背をはべる、お日様のような色彩のブロンドロング。それはさながら天女のごとき美貌。

エリオは彼女にゆっくりと歩み寄っていく。よもや逸れの村娘でもあるまいにと近づき、そして鼻水が出そうになるほど驚愕した。

「……あァ！？」

この際、有り体に言ってしまおう。
巨乳のブロンド美少女が大の字に寝そべり、涎を垂らしてぐーすかぴーと眠りこけていた。

Ｌｅｖｅｌ３３：『豊穣の歩み、衰亡の足音』

一体どうしろと言うのだろうか。――意図せずエリオの脳裏に思わず浮かんだ言葉がそれである。無理はない。否、どこぞの村娘が昼間っからこんな所で何をやっているんだと蹴り起こせばそれで良いのかもしれないが、それはそれであまりにも無体であった。――それにしても、とエリオはその女に視線を向ける。

デカい。決して一部分ばかりの話ではない。その身体がそもそもエリオを遥かに上回るほどの大きさ、巨躯と言っても差し支えないそれであった。そうそう見られる代物ではない。それがエリオにとってただならぬものを感じさせる由縁だろうか。などと一定距離を保ちながら、寝息を立てる金髪巨乳美少女（仮称）の観察を続けている――この場合、エリオ自身も中々に不審人物であるのは疑いないことである――と。

ふとして何の気無く、娘は寝返りをうった。それだけならば、なんのことはない。注視していたとしても見逃しておかしくはないような、瑣末な仕草であった。だがこの場合、そうとは限らない。なぜならば彼女が横たわって佇むは水辺、湖の岸辺――ごろり、と転がる先は即ち。

水面。

ざぱぁん！　と派手な水音を立て、人体がひとつ水中に転げ落ちた。

「……は？」

何が起こったと理解しかねる一瞬、瞳を丸くするエリオ。それを、空中に弾けて散りゆく水しぶきを目にして悟る。こぽこぽと水辺に気泡が浮かび上がり、もがくようにばしゃばしゃと跳ね回る雫。思考より先に自然に身体が動き出した。

「ちぃ、バカか……ッ！」

思わず悪態すらも溢れよう。跳ね飛ぶように水辺に駆け寄ったエ

リオが、水中へと手を伸ばす。げほごほと飲み込んでしまったのであろう水を吐き出しながら、当て所なくふらふらと宙に揺れる女の手が、まさにわらをも掴むといった風情でエリオの手のひらをつかんだ。――ぐい、と一挙にかけられる力。体重。

「ぎィ……っ！！」

そのまま己さえ湖に引きずり込まれかねない重みに、歯を食いしばって青年は堪える。伸ばした片手のみならず、両の手で掴んでたぐり寄せ、一気に力任せに引きずり上げ――

――そしてエリオの目の前には、噴水のごとくぴゅーぴゅーと水を吹き出しながら目を回す娘が転がっているという次第である。

全くもって余分な力を使ってしまったものである。ぜーはーと息を吐くエリオも、思わずそんな感慨を抱かざるを得ない。そしてより一層、果たしてどうしたものかという感情は強まるのだった。どうしたものか。ずぶ濡れの女一人を放っておいて退散。ひどく響きが悪いことしきりだが、しかしエリオにすればさして問題でもないように思える。

が。

「――……お宅の娘さん助けましたっつゥのも悪くねェか」

どこぞの家のものかはわからないが。それでも何らかの謝礼か、あるいはその点に関しては期待出来ずとも、滞在中の信頼くらいならば得られるだろうか。そう考えてエリオは独りごちる、その時。ぱちりと娘が瞳を開き、瞬かせた。湖面の様に透き通った色彩。はん、とエリオは鼻を鳴らして視線を狭める。

「漸う起きたかよ」

無論、先刻の珍事がある以上、寝っぱなしだったというわけでもないが――しかし似たようなものである。寝起きに皮肉な言葉が浴びせられるのは決して喜ばしくは無いだろうが、しかし青年からすれば苦言の一つでも残したいといった雰囲気である。

女はしとどに濡れそぼった衣服や艶髪をおもむろに撫で梳き、そしてエリオの存在を認め、ぱちぱちと瞼を瞬きして――ぽつりと、

一言零した。
「よごされた……」
「ちげェエエエよ！　バカッ！　タコ！」
「誰がタコだあ！？　ぼくが誰だと思ってる！」
「知らねェよ！　そんなもん！　むしろ聞かせてもらいてェわ！」
「ええ！？　不信心にもほどがあるでしょう！？」
「うるせー！　寝こけて転げ落ちて溺れてる女に言われたかねェ！」
――喧々諤々。極まって低レベルな言い争いを繰り広げた果てに、ぜえぜえと互いが息を繰り返す。疲労感に浸った脳みそがようやく冷めてきたのか、大女はかくりと首をかしげて、エリオを見下ろした。そう、彼が見下ろされるほどの巨躯である。布切れのような衣服に張り付いた白い肌が、なんとも艶かしい。彼女を引きずり上げたエリオの労苦はいかばかりか、それが鑑みられても罰は当たるまい。
「にしても。知らないかあ。ふうん。この土地の子じゃあ、ないみたいねえ」
「しがねェ流れもんだよ」
簡潔に答えながら、同時にエリオは違和感を覚えた。彼女の物言いに、だ。引っかかる言葉が多すぎた。どう考えたって、普通の村娘のそれではない。エリオの心中の困惑をよそに、女はぽんと何気なくてのひらを打ち合わせた。得心が行った――と言わんばかりに。
「なるほどねえ。それなら知らないわけだ――ぼくはフィアーノ」
にこりと娘――フィアーノは微笑む。水滴を滴らせる、いっぱいに伸びたブロンドのロング。巨躯が目立って陰りはしても豊満な体躯。さりとてその若々しさは裏若き天女と称しても遜色ない。それを間近にして、エリオは一寸見覚えがあるような気がした。それもつい最近。否、最近どころか今しがた見てきたかのような御姿の記憶、それは――
「この土地の、神さまだよ」
――かの教会の、壁画にこそ存在していた。

彼女の言葉に起因するがごとく、エリオはそのことを認識する。
「エリオだ」と名乗り返して、そしてその上で視線をかかげる。訝しむようなそれだった。
「……うさんくせェな」
「そうかい？」
ぺたりぺたりと草の原を素足で歩みながら、フィアーノはエリオを省みる。——至極、当然のこと。眼前に神を名乗るものがいて、はいそうですかと軽々に信じられるはずはない。エリオが信仰している神でもない以上、それは尚更のことであった。
「大体だ。神さま本人が、わざわざこんな所で日向ぼっこと洒落こんでっかよ——理由（わけ）が無ェし、わからねェ」
どこか険しさの入り交じるエリオの視線を、娘は何気ない笑みでもって受け流す。その身を屈ませ、生える草のひとつを無造作に摘み取った。土によごれたそれを、白い手のひらの中に握りこむ。
「……何ぞ」
「ほい」
言いながら、フィアーノはその手を開く。——開かれたその掌中には、種があった。驚愕。思わずエリオが瞳を見開くその間際に、娘が同じ動作を繰り返す。すると種は、一輪を咲かせる白い花へと転じた。——魔法だ。それも、並々ならぬ段階まで極まり切った魔法。
「“豊かさ”とは、滞りなく行きわたること。命の循環。実りのめぐり。生命の輪廻。ぼくはそれを司る。豊穣にして肥沃——ひらたく言えば、農耕の神さまってところだねえ」
もっとも、ぼくの力はこの土地に限ったことだけれど——と。彼女は朗々と語った。滞りなく、謳うかのように。その面立ちに見られる表情は、余裕か。あるいは慈愛か。親子以上の歳の差を隔てた人の子を見つめる——母性のそれか。エリオには見分けもつかぬ。ただ理解できたのは、眼前のそれが人とかけ離れた存在であるということのみだ。

生命を癒すくらいならば、人の手でも届くだろう。人の振るう魔法でも、なし得るだろう。だが、時を飛び越えて生命を育むことなど、ありえない。それは人知を超えている――遥か遠くまで。

「……取りあえず、まァ、なんだ。納得する。すまねェかった」

全知全能にして万能である創世の神、などと言われたわけではない。あり得るだろう。端くれといえども、神というものの実在は。そもそもが収穫祭等々、祭事とはとかく神にまつろわる催しである。ゆえにエリオの疑惑の半分は、晴れた。――そして、疑問の残り半分はいまだ取り残されたままだった。

なにを構うまいとエリオの言葉を聞いて、にっこりと首肯するフィアーノ。そんな彼女を見上げ、エリオはやおら口を開く。

「……まさか収穫がてらの物見遊山って訳でも無ェだろ」

「おおむね合ってるかなあ」

「あァ……！？」

「だいたいは、ねえ」

――どういうこった、とエリオが口にするまでもなく。遮るかのように、あるいは彼の疑問を先取って汲み取るかのごとく。ゆらりと振り返り、棚引くブロンド。その唇が囀る言の葉。

「この地はねえ、私掠の矛先になっててねえ。知ってる？」

「あァ」

「まあ、それはぼくにはどうでもいいのだけれど」

いいのかよ。

心中ツッコミを入れたくなったが、しかしわざわざ話を途切れさせることもない。エリオはぐっとこらえながら、頷いて彼女の話の続きを促す。

「実際、益が無いこともないんだよねえ。私掠団とか、そーゆーのがうろうろしてりゃ、弱い魔物は減ってくれるんだ。際限なく無茶苦茶やる魔物の脅威よりかは、マシかなあ。だって、話が通じるんだから」

「そいつァあんたにとってか、人にとっての話か？」

「どっちも。みんなは命をとられずにすむ、ぼくは土地を踏み荒らされずにすむ」

はァん、とエリオは得心する。要は、基本的に神という生き物――生き物と称すべきかは果たして定かではないが――は、人間に対してあまり干渉をしないのだろうか。もっともフィアーノがどのような存在であるかは定かではなく、その上にあくまで彼女個人の考えである、という可能性もあるのだが。

「でもねえ。ちょーっといただけないことがあってねえ。このぼくの化身（わけみ）を使って降りてきたってわけ」

エリオには分からない事項がいくつも混ざり合っていて、なんとも判然としがたい言葉だが――頭の中で処理していけば、自らが聞かなければならない、知っておくべきことは理解し得た。

「いただけないこと、っつゥと」

エリオが投げ掛けたその問いに、フィアーノは露骨に表情をしかめた。むすっと唇を一文字に引き結び、仏頂面で胸を張る。なんとも分かりやすい土地神である。怒りを露にしながらもどこか穏やかなままな彼女は、言い放った。

「あのやろうどもが。畑やきやがった」

人間臭いほどに、苦々しく。

「――それは、なにか、おかしい気がする」

本当に何気なく、ぽつりとウィリアムは呟きを零した。長い長い老司祭の話も漸く佳境、昨今のこの村の情勢といった話に至る段。クロエが不思議そうに首をかしげて、黒い瞳がウィリアムの表情を注視する。少年は顎元に手のひらをあてがったまま、違和感の元を探り当てんとするかのように瞳を狭めていた。

教会、礼拝堂。農耕神フィアーノ。その聖像を背にして、男――名をサノバクという老いた神父は、ふむと老いの色濃い面立ちに皺を寄せ、少年と向き合う。

「……私たちは武力を持たない。表立って反抗した家族のひとつは、

殺されてしまった。……見せしめにされてしまった。私の、ぬかりだ」

老いた翁の枯れた声は、苦く。そして重い。益が一切存在しないわけではない。しかし同時に、重すぎる足かせを引きずらされるようなもの。

「そこだ。――武力を持たないといっても、立派な領主の屋敷があるじゃないか」

零されるウィリアムの言葉に。――あ、とクロエが思わずといったように口を開く。そう言われれば、気づく。気づかざるを得ないことだった。それを聞いてサノバクの表情は、やはり依然として変わらず、硬いままである。

「……騎士、が……いる、はず……？」

クロエの言葉に、ウィリアムは頷く。

一つ村を治めるものとして、武力を擁していない――そんなはずがない。

「まさにだ。治安維持にしたって賊にしたって、そいつはこの土地を治めてる領主が、どうにかするのが――仕事だろう。賊に好き勝手やらせていいわけがない」

ウィリアムは神妙に言い放つ。無論、目の前の司祭が悪いわけではないが、しかし言いたくもなる。理不尽で、不条理な話だ。私憤を滾らせるのならば、それで十分な理由になり得る。ウィリアムは、直情径行を冷静という表面で包み込んだような少年だった。

「――別頭の、重大な任があるのだと。領主殿は説明なさった」

対する老司祭は、冷静に言葉を返しながらも、やはり思うところがあるのだろう。言葉の節々ににじむ苦渋は、隠しようもない。そして彼の言葉から察するに、彼自身――ウィリアムが今至った疑問に、当然たどりつき、そして直談判に至ったのだろう。

「……どうか堪えてくれと。餓えて倒れぬよう、出来る限りの減税は施して下さった。しかし儘ならぬ」

枯れ木のような手が、拳を形作るかのように握りしめられていた。

力強さは見受けられない。しかしそこには、やるせないような感情のきしみが見受けられる。

――――ただ賊を壊滅させておしまい、というわけにもいかないか。

人間がはびこっているからこそ、魔物がこの地に遠のいているのだとするならば。

賊を壊滅させると、自然――長い時間を隔てると共に、今度は魔物の脅威に晒されることとなる。もちろんそれを知ったことではないと切り捨てる選択肢も存在するが、ウィリアムにはそこまで外道を走ることは出来ない。どこか、半端なのだ。クロエなど、尚更のことだろう。

「僕からうかがいたい。その任、というのは。余程の期間を要するものか」

「なんでも――国をあげた命のようで。全国各地から広く、人手を募っていると」

「……国を、あげて。……見通しがたたない、こと……です？」

老司祭は静かに頷く。国命とあったが、そのように大きな募集が存在している以上、決して機密事項といった話ではないのだろう。彼はあっさりと、何気なくそのことを口にした。

それは場違いにも、そして状況にもそぐわぬが――ひどくウィリアムの気持ちを高揚させた。

否が応にも。

「“麦穂（イースト）の国”首都付近。攻略の目処が立たない、巨大迷宮が確認されたのだと」

Ｌｅｖｅｌ３４：『紅月に蠢く悪意』

「……迷宮」

「然り。……詳しい情報は私の耳に入らぬが」

ウィリアムの呟きに、重々しく老司祭は首肯する。

迷宮。すなわち、魔物の巣窟。それも、国家をあげて攻略にかからなければならないほどの、大規模。ウィリアムにしてもクロエにしても、常人の発想ではとてもではないが、及びもつかない領域の話だ。常軌を――逸している。クロエは少年の様子をうかがうように、ちらりと視線を向け――無論とでも言うかのように、ウィリアムは彼女を見やり、頷き返した。ぜひとも自らの足で赴かねばなるまい。それは富を求める者ならば、当然の思考であった。

とはいえども現状とは切り離して考えるべきことだろう。ウィリアムは緩々と首を横に振り、有難いと会釈する。現状の把握としては、ここまでで得られた情報ですでに十二分という判断であろう。親切にも食事の誘いを持ちかけてくれた老司祭の言葉は丁重に辞し、ひとたび部屋で体を休めることにした。

――というのも、時はすでに夕刻を通り過ぎていたからだった。日はかたむき、陰る光。雲間より覗く空は赤く染まり、さながら緋天。そう遠くなく響き渡る鐘塔の鐘の音が、夜の訪れを村内のことごとくへと知らせていた。

先夜は満足に睡眠時間を確保することも出来なかったためか、疲労もいちじるしい。肉体をひきずり鞭打つことが仕事であるウィリアムならばまだしも、クロエは――ということは、今更くどくどと繰り返す必要もないだろう。

幸いにして一行へと宛てがわれた一室は、休息をとるに一切の問題が存在しない代物であった。掃除は欠かしていないのだろう、埃がつもっているといった様子は見られない――質素ではあるが、清潔感の保たれた部屋であった。元より客室としてしつらえられた部

屋なのか、これといって目に留まる家具の類は存在していない。が、簡易なベッドが四つと並んでいるため不足は無いと言えよう。

部屋に踏み入り、そしてその様子を丹念に見渡したクロエは――ほう、と感嘆したような息を吐いた。やおら今後の方針について切りだそうとしていたウィリアムは、不意の少女の仕草に何事ぞと視線をそそぐ。それに応じてかクロエは、ちいさく唇を開いた。

「……ウィル」

「うん」

「……ベッドがあるって、ありがたいこと、なんだね……」

「ああ……」

これ以上は無いというほどに切実な、少女の言葉だった。――かの城塞都市を離れてからの数日、野宿続きの日々。屋根があるところで眠ることに慣れていたクロエには、ひどく堪えよう。ぐったりとその矮躯を寝床に沈みこませる有様は、そこはかとなしに微笑ましいものがある光景と言えた。靴を脱ぎ捨て、無防備に小さな素足を晒す姿を見やりながら、ウィリアムは空いたベッドに腰を落ち着け、方策を巡らす。今、己の達成したいことはなにか。そして、そのためになすべきことはなにか――まずはその取っ掛かりを、考える。

ウィリアムはおもむろに視線をかかげ、「クロエ」と呼びかける。一人であれこれと無い知恵をひねるよりは、話し合ったほうがいくらか有意義であろうと。

しかし、返事はなかった。

――数瞬、沈黙と空白の間。ウィリアムは立ち上がり、向かいのベッドの傍らに歩みよる。かつり、こつりと足音ひとつ。視線を落として見下ろせば、ぐったりと倒れ伏す少女の姿が見られた。

というか、くたばっていた。

「あー……まあ、いいか」

がしがしと灰髪を掻きむしり、そのまま背を向ける――間際。がばあっ、と急いたように勢い良くクロエが身を跳ね起こした。ぱち

ぱちと瞼をしばたかせ、ぐしぐしと目元をこする。背を向けたところのウィリアムが顔ばかりを向き直れば、そんな様子をさらす少女と視線がかち合った。数秒の間、重なる視線。

「……お、おきてる……よ？」

「寝てたろう」

「うん……」

神妙な表情で頷きを返すクロエ。申し訳なさげにかくりと頭を落とす姿に、ウィリアムは小さく、照れ隠しのように肩をすくめて見せる。

「まあ、みんなが戻ってきてから話せばいいんだ。休んでて良いよ――荷物とかは僕が見とく」

アドナなんかはともかく、エリオに至ってはその所在すら不明瞭という有様である。というか、戻ってくるのだろうか。日も沈み暗闇が満ちれば帰ってくるであろうと考えるのが極々自然だが――ということを考えれば、今の時間を自由なものとしても、別段に不都合はあるまい。

「……ん……あり、がと」

そう言って、後ろ髪を一つ結びにしていた紐をほどき、傍らに。灯りを消す間も要さず、程なくして穏やかな寝息立つ室内。ウィリアム少年としては穏やかならぬことこの上ないがそれはともかくとして、果たして自らの思考を意識的にそらすためか、あるいはまとめるべき事項は整理しておくことが先決との判断か。ウィリアムは頭の中の羊皮紙に、特筆すべき事柄を書き出し、連ねていく。

――賊の存在。これは定期的に村から収穫、その一部を簒奪する、れっきとしたならず者である。そしてこの破落戸は、結果的な話でありながらも、危険な魔物をある程度は遠ざける効果を有している。闇雲に払いのけるばかりでは禍根が残る可能性がある。そして、本来その役割を果たすべき領内の騎士たちは、動ける状態にない。加えて武力を持っていないため、賊に対する抑止の存在も無い。反逆した例は過去にあるが、その者は殺され、畑を焼かれてしまった。

ここまで考えて、薄々と感づくことがある。――いささか、相手にとって都合が良すぎないか。もはやこれは、偶然で済まされる範疇をはるかに超えているのではないか。何らかの作為を、ウィリアムは感じざるを得ない――と、不意に。

こんこん、と扉をノックする音が響いた。思考の淵から意識を引き上げられ、ウィリアムは顔を上げる。立ち上がろうとした刹那、その手はこちらの返答を待たずに戸を開き、その身を室内へと踏み入れた。

「よォ。話済んだみてェね」

どうということはなく、それはエリオの姿であった。彼をあわせて、三人。「只今戻ったッス」と小さく手を上げる娘の姿はアドナ。その表情はこころもち明るい。何か良いことでもあったのかと問い掛けた時――ウィリアムは、目を見開いた。

三人目。

視界に入る前、ウルクという男の姿かと思われたそれは、しかし全くそんなことはなく、ウィリアムにとって未知の女性であった。それも、大層な大女であった。巨女と称してすでに差し支えはあるまい。

「ど――どなたさまだそこの人はエリオ。驚きのあまりに歯茎から何かがこぼれかけたぞ」

「この土地の神さまだってよ」

「めちゃくちゃ人じゃねえか！　どこが神さまだよ！」

アーアー聞こえないというかもう説明が面倒くせェ、という顔をしてエリオはその耳を塞いだ。青年のかたわら、アドナが言葉なく苦笑いを浮かべている。おそらくはウィリアムと似たような反応を示してしまったからなのかもしれない――が、それは置いておくにしても。当の本人、神さまとの紹介を受けたブロンドの女、フィアーノはふんぞり返って一室に脚を踏み入れた。

「まったく。失敬だあねえ。ぼくがわざわざ人のかたちを選んだんだよ、少しは感謝というもの――あだぁっ！？」

ごちん、といういい感じの音色が鳴り響いた。
フィアーノが、その額を入り口のところで豪快にぶつけた音であった。――大きすぎたのだ。体格等々、諸々を鑑みて豊かにも程があるといった様相である。その脳天は天井にも届かんばかりという勢い、それは凄絶と呼ばうに一切の迷いを持ち得ない。痛ましげにさすさすと金糸が伝う額をさすりながら、身を屈めて彼女はその姿をあらわとする。なんとも間の抜けた姿であった。
――これ、本当に神さまなの？
――神さまみてェだけど。
非常に釈然としない表情を突き合わせながら、目と目で語り合うウィリアムとエリオ。青年はやれやれと大いに肩をすくめ、ウィリアムはいぶかしむような視線を思わず向けてしまう始末である。
「これだから流れもんは困るなあ。ま、だからこそぼくにも好都合なんだけどねえ」
そんなウィリアムの様子をさして意に介することなく、ずしんずしんとフィアーノは無造作に少年へと歩み寄り、見下ろす。白い布切れ一枚に身を包んだばかりのような、ともすれば無頓着にも見えよう姿。――そこで合点がいく。勿論のことかの司祭は、この土地の神に関することをウィリアムとクロエにも語っていた。かの聖像に顕された神。それと眼前の女は、よくよく見れば――うりふたつだ。
彼女の態度のせいで、神性といったものを感じ取ることは困難ではあるものの。
ウィリアムは、絶対的な主神の存在に対しては懐疑的だ。しかし例えば精霊や、民間信仰のようなものに対して、それほど強い不信感を抱いているわけではない。いてもおかしくはない――程度には、考えている人間である。
しかし、それにしても。
「……好都合？」
訝しむようなそれであった彼女を観察する視線が、不思議げに細

められる。
　神さまなどという底知れぬ存在が、どうして一介の流れ者でしかないエリオについてきているのか。そして、彼の案内によってウィリアムの元を訪れているのか。このような場所で、一堂に会してしまっているのか。疑問はそれこそ山積みであった、が。
「ぼくはこの土地の神さまだからねえ。この土地を耕す、富ます、ゆたかにする人を――危険に駆立てるわけにはいかないのさ」
　それは、つまり。
　たった一言で、ウィリアムは彼女の意図を概ね察する。さほど賢明ではなくとも悟ることが出来るほどに、明瞭な意志。
　フィアーノは少年の険しい表情の変化を気にもせずに、周囲――ウィリアムを、エリオを、アドナを。そして、寝ぼけ眼のまま身体を起こすクロエを。彼らの姿を見渡して、そして言葉を続ける。
「きみたち全員。ちょいと命を張ってきてくれないかい。ぼくのために。ぼくの大地のために」
　にっこりと無邪気に、フィアーノは満面の笑みを見せた。

　すでに刻限は夜半に差し掛かろうかという頃合だが、老司祭からウルクへの言いつけは中々に容赦が無かった。『村の外れの一軒だ、そこに今あるだけの水を持っていってくれたまえ。それが終われば今日はこれまでとしよう』――と、老いた彼は柔和な笑みを浮かべて青年にあっさりと言ってくれたものである。両手に余るのではないかという巨大な木桶に一杯に汲み上げられた水、しかもそれを二つ分。すこぶる重労働である。年頃の男性であるウルクといえども、いかにも骨が折れる仕事だが。
　ウルクは何も文句を言わずに従った。今彼が示すことの出来るものは、誠意のみ。即ち、働くことだ。役に立つことだ。役目を果たすこと。それこそが、村の一員たりうるということだ。おそらくはかの司祭にしても、無為に重労働を課しているというよりは、その意志を試しているという面が強いのだろう。

かくしてウルクは、くすんだ栗色の髪を汗に濡らしても、しかし漸う――村はずれの一軒、という示された場所へとたどり着いた。言葉からすればなんとも曖昧なのだが、村に馴染んでいないウルクですら、一目見ればその言葉が表す家はすぐにわかった。

寄り添うように建ち並ぶ家屋、中心を教会として、彼方に領主の館。その内、どの地帯にも属さない孤立した場所に――ぽつん、と古ぼけた一軒家。家畜の影もなく、周りには耕作地さえ存在していない。無論だが、水車小屋というわけでもなかった。

本当に人が住んでいるのか。もしかして老司祭にいっぱい食わされたのではないか――という拭いきれない疑惑を抱きながら、ウルクはどすんと地に木桶を置き、こんこんとその家の戸を叩く。

驚いたことに。

「どなた」

さして間を置かず、応答はすぐに返ってきた。

「司祭殿の使いの者です」

答えて、ぐいと額から滴る汗を腕でぬぐい去る。かちゃりと戸が開かれ、その向こう側にいたのは――まず二十歳には至らないであろうという少女が、一人。そのことに、ウルクは今まで以上に驚愕した。思わず目を丸くする。こざっぱりと短く切られた、透き通るように青い髪。そして、驚いたように真ん丸になってしまっている碧眼。

――そんな顔をしたいのは俺なのだけれど、そう言いかけて気づく。すなわち、火傷の痕がはっきりと顔面に残ってしまっている、己の人相の悪さが原因であると。

「……すみません。斯様なていで」

「――いいえ。気にせず。入って」

娘は年頃の風貌に似合わず、きびきびと答え、ウルクを家内に迎え入れる。床を引きずってしまいそうなローブの丈を決してすり合わせないように、滑るように歩み――彼女はウルクを奥の部屋へと案内した。

奇妙な、一室であった。

ウルクの目から見ればまるで用途不明の物体や、古びれた書物が所狭しと積み上げられ、そして部屋の床の中央には、とても言葉では表しがたい不可解な紋様が描かれ、あるいは刻まれているという有様。魔法陣とでも呼ぶべきか。例えばクロエなどが目にすれば、一目で判断出来るだろう。――これは魔術師の工房だ。

「中央に。水を。お願いします」

てきぱきと少女は指示を向け、ウルクはそれに大人しく従う。ずしりと床を軋ませ、安置される木桶がふたつ。娘はどうやら、彼女自身のなすべきことを察しているらしい。そうでなければ、ウルクの手荷物である木桶の中身が水であると、断言できるはずもない。

「これは――なに、を？」

ウルクの向ける不思議そうな視線を受けてか、少女は機敏に振り返る。

「飲水の確保。それが私の仕事です」

迷いなく言い切る彼女のその言葉は、ひどく感情の色が薄かった。表立って現出していない、というよりは――無機的。人形のごとく変わらない表情は、しかし瞬くことによって生者であることを最小限に示していた。

「飲み水……」

通常、生水というものは安易に口に出来るものではない。それがこの世界の常識というものだ。何らかの処理を施さない限りは、腹を壊したって誰にも文句は言えないような所業である。衛生的な観点から見れば、飲料としては酒類の方がよほど優れている。――そして同時に、欠点も存在していた。どうということはない。ワインの類は基本的に高級品、安価な酒といえばホップやエールが槍玉にあがるが――これらの醸造には当然、小麦が必要となるのだ。

貴重な食料となる小麦。これを浪費せずに済む代替案が存在するとすれば。

「この陣は。浄化（ピュリフィケーション）の術式。私の体調に関わらず。魔力を通せば機能

し得ます」

この場合は、それこそが彼女の術なのだろう。

淡々と告げられる娘の言葉に、しかしウルクは理解する。彼女なりの配慮と思考を。そして、この村内において彼女が果たすべき役割を。魔術師というはぐれ者でありながら、決して村八分といったものの対象というわけではなく――彼女もまた村の一員であると。

「少し。時間がかかります。待っていて」

そういって彼女は、陣と向き合う。邪魔になってはいけないとウルクは頷いて部屋を辞し、一度通された居間にて少女の仕事が終わるのを待つことにする。手持ち無沙汰だが、多少の時間など気にするほどのことでもない。生まれる空白。

そして、そこに至って。思考の余裕を得て、ウルクはようやくあることに気づいた。

この一軒に、どうやら彼女以外の人間が誰一人とて住んでいないという事実に。

よくよく考えれば、これは尋常のことではない。あるいは彼女もウルクと同様、元は流れ者だったのだろうかという仮設は浮かび上がったが、それも考えがたいことであろう。何より先刻通された部屋の、物の量は異常であった。数代の継承を経ていなければありえない、とすら言えるほどに。

――と、さして長い時間も経たない内、奥の部屋から彼女が手招く様子が垣間見えた。大の男であっても苦労するほどの重量を誇るそれである。少女に運ばせるというのは些か酷というものだ。再びウルクがその方に向かえば、娘はついと陣の中央を示す。

「これで。大丈夫。です」

その中身を確認してみれば、目に見えてわかるほどに綺麗になった水が――といったことは特に無かった。大元が泥水などであったならば話は別なのだろうが。皆目見当がつかない素人のウルクとしては、彼女の言葉を信じる他あるまい。静かに首肯して、礼を言い――踏ん張って、どうにかこうにかその手荷物を抱え上げる。その

間、娘は男の様子をじっと見守っていた。
「……お嬢さん。つかぬことを聞いても」
そのまま、何事も無く過ぎていくはずだった別れ際。魔が差したかのように――好奇心は猫を殺すとでも言うべきか。ウルクはそのように、彼女へと問い掛けた。
問いかけて、しまった。
「イレーヌです。なにか」
ごくごく平然と名乗る娘にウルクは名乗り返して、そして言葉を待つ少女に、肝要なる言葉を投げかける。
「イレーヌさんは、こちらに一人で――その、一緒に住まいの方なんかは」
「殺されました」
――――ハ、と息を吐く一瞬。ウルクの思考は娘の言葉を処理しかね、そして呆気無く固着した。あまりにも常軌を逸した答えだった。感情の機微すらうかがわせず、眉ひとつ動かさずに。否。異常なのは、その答えそのものではない。あまりにも平然と、何物でもないウルクの問い掛けに――当たり前のようにそう答えたという、その事実こそが。
異様だった。
「も――申し訳も無い、思い出させたくも無いようなことを」
凍結したウルクの思考では、その事実に気づけない。ゆえに男が紡ぐのは、純粋な謝罪ばかりである。そして同時に湧き上がるのは、安易な気持ちで問いを投げ掛けたことへの後悔。
彼女――イレーヌはその言葉に、静かに首を横に振る。
「いいえ」
あっさりと娘は、ウルクの言葉を否定する。それが男の混乱を助長させた。否が応にも。
「思い出したくもないなどということはありません。忘れてはならないことです。忘れずにいたいのです。そのために――貴方を不快にさせてしまいました」

申し訳ありません、と少女は静かに礼を落とした。その様な言葉を向けられては、ウルクとしては逆に恐縮せざるをえない。闇雲に頭を下げ通して、まるで逃れるかのようにウルクは家を出た。その姿を、何事も無かったかのように少女が見送る。

――その視線が届かなくなっても、しかしウルクの胸中には彼女の言葉が重くのしかかっていた。

「そうか。しくじったかァ。しょうがねえ奴らだなまったく。何人かいねえみてえだし。置き去りにしてのこのこ帰ってきたって奴か？　あ？」

げらげらと、悪辣な笑み。

それは洞穴。かの村からさして遠くなく、切り立った左右の峡谷に挟まれたその最奥――さながら自然をくりぬいて形作られたかのような、天然の城塞。粘着くような声すら、やけに共鳴して響き渡る。言葉尻そのものは怒りを示しているかのようで、しかしその言葉を吐いた男の様子は――上機嫌そのものだった。その身を襤褸布に包んだ、文無しのてい。瞳は糸のごとく細められ、くすんだ黒髪は無造作にあちこちへと跳ね回っている。木のグラスから酒精をかたむけ、男は大いに笑い飛ばす。――彼の目の前に、恐縮して身を小さくする男がいることも些事であるかのように。

「ま、いいだろ。いなくなった分、食い扶持は減ったってわけだあ。蓄えも無いこたねえ。なーんも盗ってこれねえってのはちと計算外だが」

「……申し訳もねえです。頭」

頭と、そう呼ばれた男。彼を中心として、十数人という人々がひしめく悪党の巣窟。まがうことない。それこそが、この場の正体だった。

「なあーに。教訓だ。腕の立つガキくらいいるだろ。無用心にほっつき歩いてんだ。なあ？」

男の言葉は、目の前のそれに語り聞かせているかのようで――ど

こか独り言じみていた。誰も聞いてはいなくとも、それはそれで構わないと言わんばかり。げらげらと笑い、酒精混じりの息を吐き――フー、と洞穴の天を仰ぎ見れば、刹那。

「頃合だな。明日にでも行くか。――おめえら」

ぐるりと男は周囲を見渡す。それに応じるかのごとく、十を遥かに超える男たち――わずかに女も含まれる――が、一斉に彼を中心とするかのごとく視線を注いだ。彼らに満ちるもの。それは期待だった。これから男から発せられよう言葉を、とっくに知り得ているかのごとく。

「許せねえよなあ。――不毛。不毛だ。実りもへったくれもねえ。我らがクソったれ祖国（ブライル）様と比べてみりゃあ」

許せんなあ――！？　と。がつんと音を立て、グラスを叩きつけんばかりの勢いで、床へと落とす。ばきりときしみを立てて溢れ、流れだす水液。その言葉に、男たちのことごとくが呼応する。響き渡る怒号。叫声。狂宴。その中心の男は、大いに笑う。糸のような瞳をさらに細めんばかりにして。

「野郎ども。命令だ。――奪え。奪うのさ。ただ一時だけじゃねえ。夏も、冬も、そのまた次の夏も。奪い続けろ。かすめ取れ。それでこそ“屍肉漁り（ヴァルチャー）”だ」

大いに。さながら地獄のような風景で、悪鬼どもは大いに沸き立つ。

夜天の三日月は赤く、いかにも不吉に――輝いていた。

Ｌｅｖｅｌ３５：『渦巻く疑惑と嵐の予兆』

「断る」

ブロンドの美女。フィアーノ。その巨躯に対して見上げる視線を掲げるウィリアムは、真っ向からその姿を見据えて言い放った。女神の眉がぴくりと動き、その口端はどこか楽しげに釣り上がる。

「と、僕らが仮にそう言ったら、どうする」

元よりくだんの賊、“屍肉漁り”には、大いに関わるつもりでいた。だが、他者の指示で――それも命を張ることまで強いられるのならば、話は少々異なってくる。いざという時の退路が存在するか否かは、冒険者にとっての命綱だ。何も背負わず気負わず縛られず、ひたすらに身軽であるということが即ち、彼らの持つ数少ない利なのだから。

「そうだねえ。まあ、ぼくには大した力の持ち合わせはないんだけどね」

胸の前で小さく腕を組み、フィアーノは小首をかしげる。束ねられていない豊かな金髪が、ゆらりゆらりと波打つように揺らめいた。いかにもとぼけた仕草。しかしその言葉とて、ウィリアムらをさして安心させるには至らない。彼女自身の自己申告であり、そして彼女の持つ基準は人のそれではなく――“神”としてのものさしだろう。

ただの人間が数人程度なら、ひとひねりに出来ても何らおかしなことはない。訝しげな視線を向ける少年に向かい、フィアーノは言葉を続ける。

「ただし。ぼくには求心力ってえのがある。少なくともこの地に限ってはね。例えばそうだなあ――きみたちが賊の一員だからとっちめろ、とでも伝えたら」

「全員が全員、そいつを信じてくれっかよ。だいたい、どーしょーもねェ手間がかかんだろ」

脇から口を挟むエリオに、しかし彼女の表情は涼しく、声は朗らかだ。

「司祭の子が信じてくれれば、それでいいのさ。ぼくの言葉は彼に伝わり、そして彼の言葉はぼくの言葉となる。それが神と人を取り持つ“司祭”の仕事。たまには働いてもらわなくちゃ、ねえ」

かたらわ、難しそうな顔をして話を聞いていたアドナが顔を上げる。そばかすの目立つ相貌、その顔色はほのかに青い。無理のないことだ。ほとんど巻き込まれた形であり、そしてそれ以上に——彼女は荒事は苦手なのだ。

「……たぶん、ハッタリじゃあないッスよ。やろうと思えば。こういうちっちゃい村こそ、身近なものに宿る神——って考え方は少なくないッス」

渡りの旅商人であるからこその言葉か。アドナはそう言って、再び口を閉ざす。おそらく、この場は静観というスタンスを貫くという意思表示か。

その言葉を聞いてウィリアムは大きくため息を吐き、ぐるりと部屋にいる皆の様子を見渡す。背に腹は代えられぬといった表情のエリオ。半ば諦観のアドナ。そして——

「……ウィル……まかせ、る」

「選択を？」

「……命を」

話半ば。思考も明瞭とせず、事態を掴みかねているであろうクロエは、あっさりとそう口にして頷く。ウィリアムは自身の灰髪をがしがしと掻きむしり、考えあぐねた末に——面と向かった。にやりといかにも人の悪い笑みを浮かべるフィアーノに。

「わかった。受ける——代りに、条件をひとつ提示する」

「へえ」

この期に及んで駆け引きをうつかと、彼女は愉快気に視線を細めた。

「無料（タダ）じゃ請け負いかねる。見返りが無いとな」

「うーん。といっても、ぼくから大したものは出せないけどねえ――あ、ぼくの身体とかどうだい、なかなか悪くないじょうけ」
「いや、そういうのはいいんで」
「ああ！？　なにか不満でも！？」
　ノーセンキュー、とでも言わんばかりにウィリアムは手のひらを突き出す。全くもって不敬極まりないやり取りだが、少年からすれば知ったことではない。ウィリアムにとってフィアーノは、この土地における神であり――彼女自身がウィリアムら一行を流れ者として扱う以上、信仰や敬意を示さなければならない道理は無いのだ。
　一方でエリオは、頭のてっぺんから足の爪先まで詳らかにフィアーノの姿を観察する。穴が空くのではないかというほど熱心に見据え、そしてそっと視線を伏せた。
「うん？」
「いや、別にいいわ。ウィル、本題行っとけよ本題」
「喧嘩売ってるのかなあ！？　きみらは！？」
「すいませんほんとスイマセンッス」
　アドナがひとり、平身低頭のしきりである。貧乏くじを引きっぱなしの少女。成り行きを見守るクロエの笑みも、そこはかとなく苦い。思わずその頬には冷や汗も流れるというものである。まっくこいつらどうしてくれようかという不穏な視線を投げかけるフィアーノ――ウィリアムはおもむろにごほんと咳払いして、彼女に向かう。即ち本題。
「僕らが賊を排除できたら、司祭殿に伝えてもらいたい。此度の功績をもって領主に働きかけてもらいたい、と」
「――ふうむ」
　引き結んだ唇に人差し指をあてがって、フィアーノは思案するような声を漏らす。緊張の色を湛えたウィリアム、その少年の姿を値踏みするように見つめながら――柔和に微笑むかのように、瞳を細めた。
「いーよ。そんなのなら。大したことじゃあないし、ねえ」

至極あっさりと。彼女はそういって、やおら立ち上がった。無造作に壁際へと歩み寄り、その窓を開く。日はすでになく、天は月。夜空のもとに広がる世界は暗闇。とても外をうろつき回るような刻限ではないが、彼女はどうということもなく窓から身を乗り出した。

――まるで空き巣が出ていくかのようだ、とはさすがに誰も言えなかった。

「じゃあね。ぼくはまた来るよ」

「ちょ、まった、例えばどうやって無力化するとかそういう」

「まかせる！」

そう言い切って彼女は、大きいながらも繊細な白い手のひらをひらりひらりと振って、その姿を夜に溶け込ませた。もっとも非常に目立つ彼女のことだ、いつどこで誰かの目についたとして、決しておかしくはないのだが。

――この段に至り、ウィリアムはようやく重い肩を落とした。アドナが疲れきったような息を吐く。莫大な緊張感が過ぎ去った後に訪れる虚脱に、魂か気力かが抜け落ちたかのごとくぐったりと身を倒れさせるという有様だ。

「安うけあいしちまったなァ。……まあ、この場合はしょうがねェか」

エリオはどっしりとベッドに腰を落として、いかにもくたびれた風に天を仰ぐ。やむをえない。だからこそ、現在のように死にかけているような暇はあまり無いと言えるのだが。

「私なんか、なーんも出来ねんスけどね……」

「頭脳くらいは貸してくれ。なんにせよ、まとめなきゃならん」

「……攻略の、算段……？」

「ああ」

ウィリアムは己の身体にむち打ち、引きずるかのように三者へと視線を投げる。「……話は速ェほうがいいか」億劫げながらも、しかしエリオはそう言って首肯。

「……そういえば。ウルクさんはいいんスか？」

「ああ。僕はどっちでもいいと思う。荒事は向かないだろうし、第一」

――この地に生きることを望む人だから、と。そのことを鑑みれば、ウルクという人間を此度の事態に巻き込むにあたっては、いささか不適切である。かの女神は、ウィリアムたちを生粋の余所者、流れ者、旅人であると認知してこそ斯様な提案――あるいは厄介事――を持ち込んできたのだから。

すでに彼から得られる情報は得た。ならばこれ以上、引きこむ理由はさしてない。そう結論づけての、ウィリアムの言葉だった。

そうして彼ら四人は、作戦会議を行うことと相成った。まずは彼らの持ち得る情報全てを互いに開示し合って、現状を確認する。

今回、ウィリアムたちがなすべきは、くだんの賊が拠点とする地の攻略。中核さえ瓦解させてしまえば、有象無象の輩が各地に散らばるというデメリットを換算しても、事実上の崩壊を招くことは可能だろう。この場合に重要なことは、加えて頭級を討ち取ること。再度人員をまとめ上げられてはイタチごっこになる。必要とされるは――殲滅。

拠点の地形は、ウルクからの情報によれば左右を切り立った崖とする山道。その最奥を洞穴とする、一見すれば逃げ道不在の危険地帯。追い込むことは容易に思われるが、しかし反面、襲撃者を迎え撃つことも容易であると考えられる。それが至極当然、むしろその点を鑑みてこその位置取りだろう。崖上に見張り台が置かれ、遥か上空から射かけられるとするならば――ひとたまりもない。

ゆえに、守衛勢力の排除は必須事項。そして、これ以上の情報がウルクから得られることはないだろう。彼は“屍肉漁り（ヴァルチャー）”という組織の中で、一介の下っ端だ。人一人をその手にかけているかも怪しいほどの。

「――となると、そいつはオレの仕事になりそうだァな」

「ああ。出来るだけ隠密に済ませられたら、なお良し」

事前に襲撃を察知さえされなければ、奇襲を成立させやすい。そして、エリオが弓の使い手であるということも利点のひとつだ。彼ならば高所という地の利を、そのまま生かし得る。剣一筋のウィリアムであればこうは行かないだろう。

次に、本陣への切り込み。高所からの妨害を断ったとて、これは最低条件――即ち下準備の段階に過ぎない。真っ直ぐな山道、ならば見張りを置かない道理はない。相手は中規模から大規模に相当するであろう人員を誇るクランなのだ。例え何刻であろうとも、交代制を敷くことで見張りを一日中機能させることは、さして難しいことではないだろう。

「僕とクロエの二人だけなら、真っ向から行ってもどうにもならない。数に潰される――そうならないように、奇襲を成功させることが絶対条件だ」

「……見張りの口を、塞がなきゃ、だめ……か、な」

「そういうこと」

これはどうにでもなる、穴倉にいる奴は火にかけてあぶり出してやればいい。――と、ウィリアムは結んで息を吐く。もちろん、全てが全て上手くいくとは限らないし、予想外の要素も存在しているに決まっている。しかし現状の把握から立てられる作戦ならば、この程度が限界といったところだろう。後はどれだけ細部を詰められるか、必要になるものは何か、予想外の事態に対応できるか――純粋に、力は足るか。

と。

不意に、沈黙を保っていたアドナが、思案げに顔を上げた。赤毛の三つ編みがゆらりと宙に揺らぐ。

「ちょっと気になったことがあるんス」

「というと」

「今の話には、あんまり関係ないんッスけどね――」

彼女がこれまで黙していたのは、話の流れを断ち切るまい、遮るまいとしていたがためかと少年は思っていたのだが――どうやら、

そうとは限らないらしい。その証左。
「領主様の騎士が出払ってる、って言ってたじゃないスか」
「司祭（あのひと）の言によれば、だけどね」
「不自然ッスよ。……いや、単に国の命ってなら納得行ったんスけど」
ふむ、とウィリアムは首をひねる。話を掴みかねる、といった様な仕草だ。クロエがぱちぱちと瞳を瞬かせ、そしてぽつりと言葉を零す。
「……人を、多く、募ってる……とこ？」
「そうッス。そこが変……というか、違うッス。密命の類じゃないんスよね。大々的に人を募って有象無象の冒険者を利用してでも、ひとつの迷宮（ダンジョン）を掘り返そうとしてる」
なにか。
彼女らの言葉になにか、違和感のようなものがウィリアムの中に積み重なっていく。靄がかったようなそれは、いまだはっきりとした形を持ってはいなかった。
「まず、そいつァ確かなことなんかね」
「騎士様が出払ってる――てのは、村の人からも聞いたんスよね。なんでかまでは伝わってなかったみたいッスけど」
商い事のひとつやふたつでもまとめてきたのかどうか、それは定かではないが――アドナがじかに言葉を交わした結果であるならば、それは間違いのないことだろう。
「おかしくないッスか。大々的に冒険者を募っておいて、一地方の騎士を使うことに固執する理由なんかないッスよ」
――ウィリアムの脳裏に浮かぶ思考、その輪郭が見えた。
固執する理由。地方での厄介事を収められないという明らかな弊害をもたらしながらも、領地の騎士を遠方に置いておく理由。真っ当な筋道を立てて考えれば、この地の領主は騎士を引き戻そうという申請を行なっているに相違ない。そして、それが何らかの理由で国から拒まれているのだと。ウィリアムはそう考えていた。――だ

が、肝心なその理由が、見当たらない。
「ひとつの国が一個の迷宮に手間取る、なんて一種の醜聞スけど。この国はもう、そんなの気にしちゃいないんスよ。とっくになりふりかまってない」
「なりふり構ってない、からこそ……っていうのは、考えにくいか」
「国の騎士で事態の収拾をはかろうとして、どうにもならなかった――っていう過程があるはずッスからね」
そこはあくまで私(わたす)の推測スけど、とアドナは肩をすくめる。
「……協力体制、つくってるとは、考えにくい……し、なあ……」
「むしろ功名心が邪魔になってんだろォよ。協力どころか落とし合いしてる可能性もあらァ」
ひひと笑い飛ばすように軽い調子でエリオはうそぶく。まるでその目で見てきたかのような物言いであった。
「……こりゃあ、うん。覚えといたほうがよさそうだ。ありがとう、アドナさん」
「や、まあ、それより気にすべきことがあるッスから、ついでくらいでいいと思うんスけどね」
そう言い繕うアドナの口ぶりは、さながら照れ隠しじみていた。
――結局のところ。
男二人（アドナとクロエは中途離脱）は無い知恵を絞って夜通しに粘ったが、それらしい結論は影も形も見当たらなかったのであった。

冒険者の目覚めは、無茶苦茶である。無秩序と言い換えても良い。夜は恐ろしい。夜の彷徨など真っ当な人間のすることではない。その程度の常識ならば存在するが、しかし彼らにとって、時間の概念は絶対のものではない。
平たく言うならば、朝かと思ったら昼だった。
「……ううん、ん……」
ずるりとクロエはベッドの上で、己の身体を引きずるように身を

起こす。ぐしぐしと瞼を擦り、採光のためガラス張りとなった窓から外を覗き見やる。暗い。夜とは言わずとも、朝と見紛ったとしてもおかしくないほどには、暗かった。曇り空。しとしとと降りしきる雫。——雨。

「あ、クロエさん。おはようッス。もう昼ッスけどね」

寝起きのクロエにかけられる声。アドナのそれだった。彼女の言葉がなければ、現在が昼であると気づくことは適わなかっただろう。

「……ん。おはよ……」

クロエはうつむき加減に言葉を返す。町の薬師としてそれなりに規則正しく生活していたクロエにとって、多大なる寝坊は割合恥ずべきことだという意識がある。慌てたようにきょろきょろと視線を見渡せば、なぜか寝床にさえつかず、雑魚寝のように床でくたばっているウィリアムとエリオの姿があった。——死屍累々。

「……な、なにゆえに……」

「ずっと話し込んでたみたいッスよ。無茶するスねえ」

からからとおかしげに笑うアドナ。こんな雨模様のことだ。おそらく彼女もすることがなく、この部屋にとどまる他なかったのだろう。雨降りそそぐ外の様子を見ては「そういえば、ウルクさんはちゃんと泊まってたんスかね——」などと、何の気なしにつぶやいている。

——その時。

ごうん、ごうん——と、けたたましく。地を揺るがし、天まで届けとばかり、高らかに。鐘の音が、村全体に鳴り響いた。

その響きは、刻限を知らせるための、日常のそれではない。延々と、まるで鳴り止むことを知らぬかのように響き続ける冷厳の音色。

その響きにか、あるいは大気の揺らぎにか。クロエはびくりと小さな身体を慄かせる。

「な……何事ッスか」

目を白黒とさせるアドナ。その問いに答えるものはなく——更なる二の矢。突如、ばたんと扉が勢い良く開かれた。ノックも何もあ

ったものではない。壁に叩きつけられんばかりの戸がふらふらと揺らぎ、そしてその向こう側。噂をすれば影がさすとは良くいったもの――ウルクの姿が、そこにあった。

「……う、ウルク、さん」

ぱちぱち、と瞼を瞬かせるクロエ。その声は、にわかに震えていた。火傷の傷痕が色濃いウルクの凶相が、しかも尋常ならざる表情を浮かべていたことも相まってか。その面持ちの強張りは、いやがおうにも見るものを焦燥に駆り立てさせた。

「……この昼間っから、賊がきたらしい。もう一度鐘がなるまでは、じっとしていてほしい、と。司祭殿の仰せだ。あの人が、話し合いに立っている」

重々しく言葉を吐くウルク。その雰囲気に流されて、思わずクロエが頷きかける。――だが、気がかりは別のところにあった。否。すでにそこにいた。

むくり、と身を起こして。先刻の鐘の音、その盛大さだ。よもや目が覚めぬはずもない。

「……おいおい」

ウィリアム。

寝息を立てていた少年が、そのくせ意気揚々として、おもむろに剣を手にして立ち上がる。

――やっぱり、とクロエは思った。それは諦観か。あるいは――予見していたこと、だったのかもしれない。彼という人間は、やはりそう来るかと。知らず知らずのうち、口端におかしげな笑みすらほころんでしまいそうになる。

「行こうぜ。なにができるかはわかんないけど、とりあえず成り行きくらいは見守らないとな」

床にくたばっているエリオをたたき起こしながら、ニィとウィリアムは悪辣な笑みを浮かべた。

Ｌｅｖｅｌ３６：『怨憎を刃に換えて』

「み――見に行くって、あんた」
「むこうが何をしでかすかはわかんないだろ。この雨だし、火にかけられるってこたあ無いだろうけど」
ウィリアムはエリオの首根っこを引っ掴み、ずるずると引きずりながら廊下を歩む。そんな少年を引きとめようとするかのようにウルクが声をかけるも、ウィリアムは全く聞く耳を持たない様子であった。ウルクからすればむしろ、ウィリアムなどの方がよほど何をしでかすか分からない――と、そう考えているかもしれないが。
「私は大人しくしておくッスよ。足引っ張るのも宜しくないッスしね――」と、大人しく部屋に残る態度を見せたのはアドナばかりという有様である。そしてクロエは、律儀にも少年の後をついてきていた。
「何とか言ってやってくれ、クロエさん」
「……私にできるのは……怪我人の手当て、くらいのもの、だから」
「畜生（シット）！」
神職者の下働きとはとても思えぬほどの悪罵を吐き出すウルク。致し方のないことではあった。彼とて生まれ育ちは不毛の大地、生粋の“荒野（ブライル）の国”の人間――決して上品に生きてきたわけではない。一日二日で、例え自らの役目を自覚したとしても、内面までも変われるはずもなかった。
口汚い言葉がからっぽの聖堂に反響する。無論、この教会の下働きをつとめるものはウルクだけではない――しかし鐘を鳴らす役割を担う者以外は、大人しく息をひそめているといったところだろうか。ウルクの言葉遣いを咎めるものは無い。
「じゃあ、こうしよう。僕らは勝手に様子を見に行く。それなら、別にウルクさんの責任にはならないだろ。オーケイ？」
「あまり良くない」

振り返るウィリアムが、真剣そのものの表情でウルクに申し立てる。互いの真顔を突き合わせ、向きあう二人。その時――おもむろにウィリアムの引きずっていた青年が、むくりと起き上がった。彼、エリオは大雑把にその金髪を整え、そして周囲を見回す。それだけでおおむねの状況を把握したのか――もしくはゆめうつつに話を聞いていたのか。彼は開口一番、こう言い放った。

「……そぉだな。傍若無人のオレらは止められなかったが代りに監視することにした、ここらへん落とし所にしとこうぜ」

「この雨の中をか」

「僕らだって雨だぜ。あまつさえクロエすら巻き込もうという腹づもりだ。すごいだろ」

「やっぱり、あんたらの方がいくらか悪党に向いてるよ」

「だろうな」

ウルクは凄絶に頭を抱え、ウィリアムは腰に手を当て大いに威張ってみせた。もちろん、全く褒められてはいない。そして褒められるべき事柄でもない。呆れか諦めか、どちらともつかない――困ったような笑みを、クロエは浮かべる。少女は男に同情するかのごとく、そっと小さな哀れみを紡ぐ。

「……がんばって……」

「ああ……」

男はどこか、遠い目をしていた。

雨。ひたすらに強まるばかりの雨脚。それはさながら、止むことを知らぬかのよう。豪雨は視界を遮り、そして声音もかき消してしまう。ゆえに手近な家屋の影から様子をうかがうウィリアムたちには、彼らの言葉は聞こえなかった。彼らの姿形、そしてその尋常ならざる数が見えるばかりだ。武装も戦力も持ち合わせない村一つに差し向けるには、いささかならぬ異様。

教会からいくばくか歩みを進め、昼間から奇妙にも閑散とした村内の中心を離れ――村はずれの開けた草原に至る。整備された道な

どとうに離れ、無秩序に緑が生い茂る平地。
教会の司祭、かの老人は堂々と――たった一人で、彼ら。十数人規模で居並ぶ“屍肉漁り（ヴァルチャー）”と、相対していた。それが己の役目と、そう言わんばかりに。護衛も見張りも、何もなく。使いの者の類すら連れることなく、傘も自らの手にたずさえて。
「すまぬな。雨具の類も用意できなんだ。かような雨の中、ご足労であったろう」
「なあに。気にもしねえよ。元より歓迎される身分でもなんでもねえさ。なあ？」
老人の、しかし闊達な言葉に――げらげらと、悪辣な笑い混じりの声が返された。一線にも似る、細められた瞳。さながら糸のような目尻には、隠し切れない悪意がありありと見て取れる。くすんだ黒髪は雨に濡れ、一段と全体の陰影（シルエット）を暗く沈めていた。
その男が即ち、彼らの代表格にあたる。悪鬼の筆頭であった。腰には一振り、白銀の鞘が煌めいている。いかにも不似合いで、際立って目立つ一点の輝き。
男の問いかけに、老体は無言で応える。無駄に神経を逆なでするつもりもないが、しかし恐怖に屈して媚びへつらう必要もない――腰一つ曲げずに、彼はその姿勢を示す。ひとつの村の代表、そしてただ一時であれ、村の命を預かるものとして。
男は、ただでさえ糸のように細い視線をさらに狭めて、その老躯を見据える。「だんまりか、悲しいねえ」などとおどけて肩をすくめ、男は口端をつり上げる。
「ま、今日はお話をしにきただけさあ。ちっとの雨くらい気にしたもんでもねえだろ。神父様よお」
「……例年と、同じだけだ」
「――あ？」
朗々と、意気揚々と。まるでふざけているかのように語る男に、翁は静かに告げる。話し合いでもなんでもなく、一方的に淡々と。
その言葉に男は眉をつり上げるが――司祭は、その様子を意に介す

る節すらもない。くっきりと皺の浮かぶ相貌に、しかし内面をうかがわせる表情が現れることはなかった。

「私たちから出せる作物は、例年と同じだけだ。さもなくば、冬を越えられない。来る年には、村そのものが消えているだろう」

重々しく続けられた言葉が示す意味は、明確だった。話し合いの余地など存在するはずもなく、すでに譲歩は限界まで済ませていると。仮にこれ以上を要求するのならば、次に困るのはお前たちだと——そのように、はっきりと彼は突きつけていた。

一見して、彼の言葉は眼前の男を逆上させかねない危険なものにも思われる。しかし、同じことなのだ。その言葉が不服で要求を釣り上げられたとて、あるいは怒りに任せた“ねこそぎ”の略奪を行われたとして——いずれにせよ、破滅はまぬがれないのだから。

彼に出来ることは、ひとつ。ただ祈る、そればかりだ。彼らの気が変わらぬことを。彼らが賢明にも、長期的な利益回収を優先してくれることを。

ゆえに老司祭は、男の言葉に大いに安堵した。意図せずそれが表情に現れかねないほどに。

「ああ、構わねえよ。おめえらが全員死んじまっても、俺たちは大して困らねえが——まあ、得もしねえからな」

口唇を三日月のかたちに歪め、男は笑む。背後に控える血盟（クラン）の者共の中には、どこか残念そうな気配を漂わせる姿も無いではなかったが、己が頭領たる男に逆らおうという無謀者までは見当たらないようだ。

彼らは、賢明だった。良くも悪くも。卑劣で、下劣で、なにより躊躇がない。人間というものを差し置いてでも、損得を優先する悪党。それは比類なき悪辣。もし——そうでなければ。

「ただし」

「……何か」

「保証が、ねえよなあ。保証が。確かに俺達の手に届くだろうって、保証がなあ。去年にもいたろう、やたらと抵抗する奴が」

これほどまでに楽しげな笑みを浮かべることは、出来るはずもないだろう。困惑の色合いが強烈に浮かぶ司祭の表情、その顔色が一瞬にして青く染まる。蒼白といっても差し支えはない、血の気の引き切った相貌。

なにも“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の男とて、村全体が一丸となっての抵抗、といった類の事態を危惧しているはずはない。それはあまりにも危険が大きすぎる選択肢だ。そもそも彼らは、過去の抵抗者を見せしめに殺害しているのだから――恐怖は、身に染み付いているに相違ない。

ならばなぜ唐突に、男は“保証”などという言葉を持ちだしたのか。――瞬間、老人の脳裏を嫌な予感が走り抜ける。最悪の予想を知らしめる老練な直感が、全くの見当はずれであることを、他の誰より老いた司祭自身が願った。

「引き換え手形でも貰っていこうと思ってよお。人質なんてどうだ、なにせこちとら女がすくねえんだ。――なあ？」

願いは、叶わず。

悪意は想像通りの形のままで、満面の笑みを浮かべていた。

そんな現場に、じりじりと迫る一行が存在していた。言うまでもなく、ウィリアムらである。雨ざらしにされても一向にめげることなく、彼らのやり取りを把握せしめんと慎重に四人が距離を詰めていく。四人のうちの一人であるウルクは、あくまでも三人の監視という名目を負ってこの場にいるのだが――すでに一員となってしまっているといっても過言ではない。やはり彼とて、自らを受け入れてくれた司祭の身が気にかからないはずも無かったのだ。

「んー……僕はだめだな。なにか聞こえるか」

「全然だめだァな。余計な音が多すぎらァ」

エリオは億劫そうに肩をすくめた。聴力は常人を優に超えるものを持っているこの男も、しかし雨中という状況に放り込まれてはその能力を生かせないようだ。ウルクは無言のままにそっと首を横に

振る。
　その最中、クロエがじっと目を閉じて耳を澄ませ――そして、意識を研ぎ澄ましていた。それは聴力ではない。尋常を遥かに凌駕する集中力。可能な限り不要な要素を排除し、必要とされる一所（ひとところ）に全ての力をそそぎこむ。それは魔術師のクロエにとって、何のことはない最たる得手であった。
「……人質を、とる……とか。言ってる……みたい」
　雨降りしきる中、少女はしかと聞き分ける。周りに告げる言葉そのものも、決して自信なさげなそれではない。一筋の汗を、幾筋もの雫を伝わせながら――確信をもって、クロエは言い切る。
　でかしたとウィリアムが呟き、そして神妙に瞳を細めた。
「人質……か。しかし、司祭さんがどう出るか、僕らにゃわからないな」
「……遮った方がいいんじゃないか。今なら割り込んで、止められると思う」
「邪魔してどぉすんだよ。全員殴り倒すにはちぃと無理があるぜ――あの人数に、この開けた場所じゃ、不意も撃てねぇぜ」
「何でも連れてきゃいい、大人しく帰ってくれるならがら空きの背中を追撃してやれる。その時に人質が回収できるか、どうか……だけど」
「……むこうは、私たちを、知らない……から。人質が有効、とは、かんがえないと……おもう」
　各々に言葉を交わし、当面の方針は“今はあえて見逃すが、後で追いかけて張り倒す”――というところに落ち着く。幸いの雨降りだ、相手方の道程も遅れざるを得まい、その背中を撃ってやれば良いという現実的な方策も相まってのことだ。人質の役を負わされる者は不幸だが、必要な犠牲ゆえにやむを得ない――出来得る限り何らかの危害を加えられる前に救出することを目指すということで、四人の意見は一致した。
　だからこれは、完全な予想外（イレギュラー）の事態だった。そしてこの時点で、

想定外のことが起こっていると、察することは出来なかった。ただウルクが、尋常ならざる視線を不意に――司祭と、男たちの向きあう場へと向けた。

「なんだどォした。親の仇見るような目ェしてんぜ」

「……いや。そうじゃない。そうじゃないんだ」

ひとりの娘が、ゆらりとさながら幽霊（ゴースト）のように雨の中を漂っていた。揺らめくように覚束ない歩みが、老司祭の元へと向かい進められていく。

「……貧乏くじ、って訳じゃ無さそうだァな。話が早すぎる」

エリオとてその姿には、訝しげな視線を向けざるを得なかった。あまりにも、“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の者共とは全く異なる方向に怪しいのだ。いわば不審。鳴り響いた鐘によって危険を知らされているにも関わらず、外をうろついている時点でもまず問題なのだが――それに留まらず、娘は傘すらもさしていなかった。向こう側が透けて見えそうな蒼穹色の髪を濡れっぱなしにして、娘は歩む。

「……あの人も。……見ていたの、かな」

私たちと、同じように。

ぽつりと零れるクロエの呟きに、ウィリアムが難しそうな顔をして唸り声を上げる。

「……何のために、だろうな。まさか、こういう話になるのを予想してたわけじゃないだろうし」

ふと見やれば、当の老司祭も驚愕の表情を浮かべていた。彼にとっても、彼女の存在は予想外のようだった。そして――彼女を見守るウルクは、その娘のことを知っている。

イレーヌ。

ウルクにそう名乗った、村の魔術師の娘に、間違いはなかった。

「……イレーヌ。どうして。鐘の音は届いたはずだろう。ここにいては、いけない」

「申し訳、ありません」

雨音に負けず劣らず、透き通るような清音。短く切られた青髪が、濡れて額にぺったりと張り付いてしまっている。それでも娘は動揺一つ、感情一つ示さず――悪鬼の群れへと向き直った。

静かに、視線を上げる。言葉も無く見据える。今ここに、彼女がのこのこと現れたわけ。それは傍から見れば、一目瞭然だった。その内面を推し量る必要さえなく、見るものは得心が行くだろう。そう、少なくとも“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の頭は、それを理解したかに見えた。

「――殊勝なこったなあ。わざわざ若い身の上が身体張ってくれるってえわけだ。泣ける話だぜ、なあ？」

心にもなく、心ない言葉を平然と。いけしゃあしゃあと男は吐き出してみせる。そして彼は、背後に位置する配下たちへと振り返った。揚々として、男は彼らに向かって告げる。

「ま、とりあえず捕まえとけよ。別に、後でなら、好きにしちまっても構わねえ」

げらげらと、笑う。悪辣ですらなく、下劣に。向かい合う少女は、表情ひとつ変えない。老司祭の顔色は青いまま、少女を引き止めんとするかのように、手を伸ばした。

「――イレーヌ！」

「貴方が。気にかけないでください。司祭様。これは。望んですることです」

老身を振り返らずに、空っぽの手をひらひらと揺らし、少女は歩を進める。ただ静かに、濡れるがままに。

「……すまぬ」

立場の上。老司祭は、許容せざるをえない。大多数を生かすための、少数の犠牲を。彼女が“望んですること”を、死力をもって留めるという行動を――選ぶことが、出来ないのだ。

少女の行く先、悪辣な笑みを浮かべた男がいる。男の眼前、イレーヌはぴたりとその脚を止めた。少女は、ゆっくりと視線をかかげる。

「ほ。そこそこお可愛い顔してんじゃあねえの。なあ？」

暗がりの雨の中、男が覗き込むように間近、イレーヌの相貌を見つめた。碧眼の視線が、男を見据える。品評するかのような品性のうかがえない言葉に、背の男たちがにわかに沸いた。

イレーヌは言葉なく、そおと右手を後ろに引く。

そして真っ直ぐに、その手を男へと向けて突き出した。

その小さな手の中には——雨雫で、形作られた、刃が、あった。

「ああ？」

ぞぶり、と。矛先の刃が、男の腹を抉る——よりも、早く。何気なく伸ばされたかのような男の腕が、少女の手首を掴み上げる。握り、そして、呆気無く捻る。ローブの袖に包まれた細腕が、ぎちりと悲鳴じみたきしみを上げた。

「——い、ぎ……ッ」

「——オイタは、いけねえなあ。どうすっかなあ。扱いが手酷くなるかもなあ」

「……オマエ。を。殺せるなら。いい。それで。——いいッ！！」

感情の色そのものがうかがえなかった相貌に、イレーヌは浮かべる。激情を。憤怒を。——殺意を、溢れでんばかりに滲ませて。怒気に涼しい表情を歪ませて、少女は掴みあげられた右手を突き出す。すでにぴくりとも動かすこと適わぬ、凶器を握りこんだ腕を。吐き出す声は、怨嗟に満ち満ちていた。

「……な、に」

その豹変に、老司祭の思考さえも、停滞させる。その刹那の空白を、シャリン——という冷たい金属音が切り裂いた。

男の刃が、雨に濡れながらも緩やかに掲げられる。

「ま、仕置きはここでやっとくか。いらねえだろ。——その腕」

ただ平坦に、情感を見せぬまま悪辣さを吐き出していた男の瞳に——はじめて。この時、感情と呼び得る光が、狭められた細い瞳から溢れ出していた。まがうことない。それは凶気以外のなにものでもなかった。

ひゅん、と。風の音を引き連れた一閃が振り下ろされ——

何のことはない。彼が真っ先に動き出せたことには、理由があった。まずもって、彼は最も少女へと意識を向けていた。加えて、彼には予備情報の持ち合わせがあった。昨夜に彼女が零した言葉のことを、彼だけは知っていた。そして最後に――彼らのことを、知っていた。その躊躇いのなさを。女子供もへったくれもなく、彼らは躊躇なく刃を振り落とすということを。

これらはすべて、前提条件。前提に過ぎない。だから、果たしてなにが彼の背を後押ししたのか。それは誰にも分からない。彼は――ウルクは、一直線に走り出した。後先のことなど何も考えず。恐るるべき頭領に自らの姿を晒すことも、そして自らが裏切り者の身であることも、ことごとく彼の頭の中からは吹き飛んでいた。

雨水を吸い込んだ土を踏み締め、地を蹴り飛ばし、空を翔るがごとく猪突猛進。眼前。今にも刃は、落とされんとしていた。

「――ッおおおおおおおあああああッ！！！」

訳の分からぬ叫びを上げ、駆け抜ける。少女の矮躯を巻き添えに、引き連れて、ぶち当たりながら引きずり倒すかのように、減速など微塵も考えずに――横からその身を、掻っ攫っていく。

瞬間、ウルクは熱を感じた。血流のほとばしる熱さだ。振るわれた刃が、彼の背を深々と切り裂いた傷に間違いあるまい。しかし、歯牙にもかけない。「ひ」と零れるか細い鳴き声は、腕の中に感じられる体温の持ち主が上げたものか。己が身を盾とするように娘の身を包み込んだまま――全ての思慮を投げ捨てた、全力の疾走。その結果。必然のごとく地を滑り、派手に身体を土と擦り合わせながら、転がる。

「――チ」

吐き捨てるような、男の声。それは予測していたものと全く異なる手応えであるがゆえか。あるいは今の一瞬で、己の正体が裏切り者の類であると露見したか。最早知ったことかとウルクは半ば投げやりに、伏した。ズタボロになった身体をぐったりと草原に投げ出

しながら、力を入れっぱなしだった腕を放り出す。――幸いなことに。

傷ひとつなくとは言えないが、腕の中にいたイレーヌは無事そのものだった。

「う――ウルクさん」

「……ぶ、無事、でしたか」

「なにを。――なにを。してくれて！」

助けた少女にかけられた言葉は、慕情ではなく感謝ですらない、憤怒であった。静かな怒りが、しかし明確に感じられる声であった。

「……俺か！？」

「私は。父上の。仇、をッ！」

憎悪を吐き出すようにイレーヌは呟きながら、今にも身体を起こさんとしている。いざとなれば、彼女は這ってでも刃をあの男へと突き付けるだろう――そう思わせんばかりの勢いだった。その様子を必死に留めながら、ウルクは理解した。そして同時に、安堵する。

彼女の静けさは、涼やかさは、無表情の仮面は。彼女の抱え込んだ濁流じみた感情を抑えこむ術に、過ぎなかったのだと。

――否。安心している場合じゃない。まだ危機が去ったわけではないのだ。

そう思考を巡らせ、向き直る。奇しくも少女と向ける視線の先は同一。本当ならば、遅すぎるタイミングだった。とっくのとうに、二度目の刃が振り下ろされていてもおかしくはない。

だが。

別個の介入が存在すれば、話は全く別になる。

――ひうん、と風を切り裂いてそれは飛来する。雨粒の暗幕を乗り越えてなお強健。驚嘆すべきはその弓の引き手。エリオのものに相違ない矢の一閃が幾度と無く、“屍肉漁り（ヴァルチャー）”への襲撃を重ねていた。

「……おぬしに助けられたよ。ウルクくん。私には、救えなかった。……全く、老いとは」

「司祭殿」

男たちの眼前から身を引いた老司祭が、傷ついたウルクの傍らに寄り添う。少しは、信頼に足るというところを示すことが出来ただろうか。あるいはそんな打算的な考えも、ウルクの頭の片隅には存在していたのかもしれない。

不意にウルクはイレーヌの様子を見やる。と、依然として憤懣遣る方無いといった視線が“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の者共へと向けられていた。けれども、起き上がろうとする様子はすでに見られない。――冷静に、悟ったのかもしれない。理解したくないことを、理解してしまったのかもしれない。一度試行してしまったがゆえに、その刃はもう届き得ないと。

果たして群勢の誰かが一矢に穿たれてか、雨粒にまぎれ、吹き上がる紅の噴水。悲鳴。未知の敵への恐怖。そして混乱が蔓延したかのように、男たちが浮き足立った様子を垣間見せる。――まさにその間隙を打つかのように、絶妙。悪辣極まりないといっても過言ではない狙いをもって、背後からの一閃が斬り込んでくる。

「全く、作戦もなにも、あったもんじゃない……ッ！」

くそったれとはき捨てながら、振るわれる少年の刃が、何者かを一刀に切り伏せせしめた。

彼――ウィリアムとウルクの視線が重なる、その一瞬。濡れそぼつ灰髪をくしゃくしゃと掻きむしって、暗い瞳をした少年は軽やかな笑みを見せた。人助けとはいえ、ウルクの勝手な行動が現在のご破算を引き起こしたには違いない。だが、それでも。

大した力も持たない少年は、しかし意地を張って――言い切る。

「後は、任せろッ！」

あるいはその言葉は――イレーヌにも、向けられていたのかもしれなかった。

Ｌｅｖｅｌ３７：『泥を食む』

眼前の一人を切り払うウィリアムは、心得ていた。この時、自分がなすべきことを。

即ち、敵対する者すべてをこの場で相手取る必要は無い、と。その選択はウィリアムにとっても好ましくはない。まずもって天候がこの悪環境。戦火が飛び火する可能性もあわせて鑑みるならば、いずれにせよ村内で事を構えることは避けるべきであった。それがまず前提。しかし、すでにそんなことを言っていられる様子ではない——すでに状況は変わってしまった。だからこそ、なすべきはひとつ。

少年自身が、対敵にとって脅威である必要はない。立ちはだかる男たちを次々と切り伏せるような、一騎当千の芸当も不要。だが、“脅威である”と思わせる必要はあった。この状況下において刃を交えれば、勝利であれ敗北であれ、看過しえない被害をこうむってしまうかもしれない——そう考えてもらわなければ、ならなかった。

だからこそ、意地を張る。大勢を前にして、圧倒的に不利な戦況を前にしても、そうしなければならない理由を、ウィリアムは抱え込んでいた。

そして、駆ける。

「——ハッ」

吐息、一拍。

己が敵が賢明であってくれることに、自らの生命を賭して——愚直に剣を掲げた。

降りしきる雨雫は朱紅を洗い流し、刃に擦りついた血を払う暇さえ与えようとはしない。間隙をあけず、少年の返す刃が慌てふためく男二人を駆け抜けざまに切り裂いた。胴を撫で切りする程度の一閃もしかし、負傷には違いない。傷を負えば、否が応でも怖気づく。悪天候の暗闇の中では、相対する者の姿さえいかにも判然としない

のだ。十数人と群れた人ごみの中に、ただ一人の少年が斬り込んできたのだから――尚更のこと。

何が起こっていると、掴みかねる状況下で慌てふためくなら、まだ良い。突如として現れた血の色に、混乱の色は隠しようもなく伝染する。悲鳴、怒号、惑乱の合間をすり抜けるように少年が行く。その向こう側に、男が一人。際立って細められ、醒めた視線を投げかける襤褸の男。“屍肉漁り（ヴァルチャー）”が頭は、退きも省みもせずにただ立つ。

「あー。面倒くせえなあ。入り口まで引いとけよ、おめえら。死んでも埋めてやれるわけじゃあねえんだからさあ」

男は至極、億劫げに髪を掻きむしってそう言い放つ。何らかの意図があってのことか、素早いその決断は――しかし言葉の通り、面倒である以上の理由を見受けられない物言いであった。そして男は、おもむろに振り返れば一瞥する。その鋭い視線の矛先には、ウルク。元はといえば、彼ら血盟の傘下にあった男。

「あーああ。まあいいさ。何があったか知らねえけど。まあいいさ。面倒くせえ。……なあ？」

雨に打たれるがまま。男の言葉に呼応して、逃げ延びるために散り散りとなる部下達の様子を見守るでもなく男は天を仰ぎ――白銀に煌く刃が柄に手をかけた。隣を脇を傍らを、大勢が駆け抜けていく、その感覚を間近に感じながらウィリアムはその男に相対す。

「ウィル、分かれた奴はどォする！？」

「追って監視してくれッ、手は出さなくていい、暴発されたらかえってまずいんだッ」

「りょーかいッ」

投げかけられるエリオの声は、茅葺きの高みから。その傍らにはクロエと思われる、小さな影がひとつ。この暗中、視界を確保するための小さな灯り――雨中にもほのかに輝いていることから、火ではなく熱に由来すると思われる――を共にしていた。

「……随分。早いんだな」

「あー？」
「見切りが」
ざあざあと、鳴り響く雨音の中。彼らが初めて交わした言葉は、何でもないような疑問のひとつだった。互いに剣をその手にたずさえたままの、奇妙な対話。刃のごとく、熱のかよわぬそれ。
「警戒してねえからなあ。こんなこたあよ。騎士様もいねえはずだしなあ。っても、おめえら、騎士じゃあねえだろ」
「ウィリアム。ただの流浪の民だ」
「ボリス。同類（クズ）だな」
ボリスの向こう側にいる三人、ウルクらに「今のうちに退け」と視線を投げかけるウィリアム。同時、がしがしと濡れた黒髪をかき乱す男――ボリスに、しかしウィリアムは言葉ではなく刃を向けた。
元よりこんなものは、会話でもなんでもない。ただの確認作業に過ぎなかった。――己の前に立つものが敵以外の何物でもないということを、確かめている、ただそれだけのことだった。吐き捨てるように、ウィリアムは言い切る。
「類としては大差ないのが結構腹立たしいから、取りあえず叩っ斬るぞ」
「骸晒しゃあ身ぐるみぐらいは漁ってやるよ。それくらいは覚悟してきてんだろう――なあ？」
そう言ってボリスは、抜剣した剣を片手に掲げる。銀色の輝きを返す、両刃の長剣。その剣は――武具に関してはさして博識でないウィリアムから見ても、ひどく奇妙なそれであった。
真っ直ぐな直刃、全長そのもので見ればウィリアムの背丈ほどはありそうな一刀。そういった性質は確かに目に付くが、それは決しておかしなことではない。しかし、一点。明確に正常ではない、あえて残されたのであろう極まって目立つ異常――まったいらに均されたかのような剣先。その形状は即ち、刀剣が保持する“突刺”という機能を完全に放棄していた。“断ち切る”という力ばかりを誇示していた。

「……そいつ、か」

ウィリアムは雨中、独りごちる。そして思い返す、ウルクが語っていたいつかの言葉を。――即ち魔剣。偽りを断ち切る魔導器（アーティファクト）。一目で尋常ではないとわかるその剣が、いつかのウルクの言葉を裏付けているかのように、思われた。雫に濡れることなく、雨粒さえも切り裂くかのように、刃は妖しげな光を刀身に映し出している。

すでにボリスに言葉はなく。ゆえに少年が返す言の葉もなし。向きあうものは最早、刃の他あらず。互いを遮るものは、雫ばかり。

――瞬間、濡れた泥土を跳ね上げてウィリアムは地を蹴った。距離を詰めての接敵（エンゲージ）。

――否。接敵に値する範囲内の、ぎりぎり外側。つまり、ボリスの刃が届きえないその間合い。ウィリアムは地を踏み締め、その寸前でとどまる。

「……チ」

密やかに舌打ちするボリス。しかし、これはウィリアムにとって当然のこと。とても戦闘用とは思いがたい刃の形状とはいえ、底の知れない魔法の剣――その上、使い手の力量そのものさえ判然としないのだ。容易には踏み込めない。

暫し持続する、睨み合いの姿勢。ふたつの影が、ぴたりと静止したまま。降り止まぬ雨ばかりが、時の流れを伝えていた。

この硬直状態から、ウィリアムはひとつの情報を得た。かの刃の剣先は、即ち見たままの性質であるということ。その剣を手にしている限り、突き刺す、あるいは貫くという選択肢は完全に閉ざされている――ということ。そうでなければ、この間合いで攻勢に出ない理由がない。体格で考えれば、目の前の男はウィリアムのそれを大きく上回っている。やろうと思えば、一拍で少年の身を貫きうる距離なのだ。

「殺（シ）ィ――ッ！」

ゆえにウィリアムは、自分から硬直を切り開く。踏み締めた地を、そのまま蹴り上げ――濡れた土くれを、男の顔面の高みにまで跳ね

上げた。同時、手に握るカッツバルゲルの刃を振りぬく。ぐん、と響き渡る大気のうねる音色。下段から胸を通りぬけ、斬り上げるように。

「――ペッ」

目眩ましの小細工に、ボリスは一度唾棄するのみ。その身を目掛けて迫る刃を、音もなく躱す。さながら一歩、地を滑ったかのよう。かすかな音色は、雨音にかき消されてしまうほどわずかなもの。

空を切る刃。ゆえに必然。一閃を振り切った無防備を晒すウィリアムに、返す刀が襲わぬはずもない。一見して華奢にも思える、しかし長大な魔剣の一振るい。烈風を引き連れウィリアムの躯を断ち切らんと来たる刃を迎えるものは、同じく刃。材質は違えども、同じ刃。頑強さで立ち向かうならば、ウィリアムの刀剣はうってつけである。カッツバルゲルの肉厚の刃は、真っ向からの打ち合いに長ける一振り。余程の力量差が無ければ、押し負ける道理はない。

――そのはずだった。

その時、ウィリアムは確かに見た。見まがうはずもなく、見止めた。眼前のボリスが、にやりと口端を吊り上げる姿を。

あっさりと、大した手応えもなく。まるですり抜けていくかのごとく、男の放った一閃がウィリアムの刃を通り過ぎた。比喩の類でもなんでもなく、刃と刃が重なりあったその時――互いに打ち合い弾けることもなく、放たれた刃は狙い違わず、ウィリアムの左胸を浅く抉っていた。

「が、うぐッ……！？」

撃ち貫かれる衝撃に、身を竦ませんばかりだ。ウィリアムの肺から、取り込んでいた空気が一気に吐き出される。急激に体躯の温度が引き下げられていく。まるで血流に氷晶を流し込まれたかのよう。しかし少年の驚愕はそればかりではない。衝撃というよりは、まるで慮外。撃たれた身体が両足ごと背の方に押し出されるところを、必死に土を踏みしめて、踏みとどまる。

そしてウィリアムは、ようやく気づいた。

ボリスの刃が通り抜けた箇所から、鮮やかに刀身が両断されて――刃は、傷ひとつ無い断面をさらけ出していた。半ばから先端にかけての剣先は転げ落ち、いっそ地にうずくまるガラクタにも等しい。

――馬鹿な。

ありえないという気持ちを引きずりながら、ウィリアムは視線をかかげる。そこには悠々と立ちはだかる男がいた。彼のたずさえた刃は、何の異常もなくその手の中にある。ウィリアムの武具に尋常ならざる異変をもたらせしめて、なお。少年の頬を流れる雨粒にまぎれて、冷や汗までもが地に伝い落ちる。――そして、男の攻勢がそこで止まってくれるはずもなかった。

「ま、こんなところだなあ。手詰まりだろよお。坊主」

ひうん、と掲げられる刃がウィリアムに向かう。大上段より振り落とされる斬撃。それを咄嗟に身を捻るも、躱し損ねた身が――骨が軋みを上げ、少年は声にならない苦鳴を漏らした。よろよろと、些かもおぼつかない足取りで、ウィリアムは距離を取る。無論、その行動に意味などほとんどなかった。ただの時間稼ぎでしかない。時間稼ぎにも――ならない。

「ま、死んどけよ。――なあ？」

暫時、いくつもの剣戟を重ねた先。首筋を掠め、脇腹を打ち据えられ、土手っ腹に刻まれ。ウィリアムを苛む幾筋もの剣閃に、疲労が――誤魔化しがたい負傷が蓄積する。流血に肌を染め血を濡らし、湿った土肌に朱紅が染みこんでいく。ぜいぜいと落ち着きのない呼吸を繰り返しながら、ウィリアムは暗い瞳を――かすかに光残す視線をボリスへと向けた。

「――くそ、がッ……！！」

誰に向けたものか。絞り出すようにした言葉を吐き捨てながら、刃と対面する。矛先は脳天目掛け。視界が眩むのは、おそらく曇天の暗がりのせいばかりではないだろう。一閃の引きずる風の唸りに、ウィリアムは睨めつけるような瞳を見開いたまま――

鐘の音が、響き渡った。
ごおん、ごうんと、物悲しく慈悲深く。幾度とともなく繰り返されて、延々と——あるいは永遠のように。
降り止まぬ慈雨の雑音も、全てまとめて打ち消して。

「——ああ？」
掲げられた刀身が、不意に停止する。その隙にウィリアムはすぐさま間隔をあけながらも、困惑の色はやはり拭いきれない。なぜ、今。少年はしっかりと聞き届けていた。「もう一度鐘がなるまで、外に出てはならない」というウルクの言葉を。ゆえに、この鐘が意味するところも理解しえた。
誰かが、この場を安全なものとした。外に出てもすでに問題はない、と。
——いったい、誰が。どういう意図で。
「……チ。面倒くせえなあ。取りあえずぶっ殺して——ああ、でもなあ」
一歩離れたウィリアムに追い打ちをかけることなく、ボリスは数瞬止まった。おそらくは彼にも、鳴り響いた鐘のその意味が掴みかねているのだろう。まさか無意味だとは思わないし、思えない。しかし、対するウィリアムは違った。——賢明だからではない。余裕が無かったからだ。死の危険に瀕したウィリアムは、迷うことなく背を向けた。一直線に地を蹴り出す。命をかけた、飽くなき逃走である。
「ってえオイ——！」
ボリスが止める暇すら、なかった。地を蹴り、土を跳ね上げ、駆け抜け、ウィリアムは転げるように地に倒れ伏した。走りだして幾許となく。それが少年の体力の、即ち限界である。距離としては漸く視認し得るという間合いであっても、しかし大した隔たりではない。ボリスがその気になれば、容易に詰め寄られる程度の途。しかしボリスはその様を見て取ると、さっと踵を返した。意図が掴めな

い渦中に放り込まれたままでいるのは、気味が悪いのか。時間をかけて殺すまでの意味はないと――そう判断されたか。おそらくは、慎重を期しての男の行動だろう。

それで悟る。ともかく、ウィリアムは生き延びた。命は――繋いだ。

泥中うずくまり、無様を晒し、引っ掴んだ生命。

「……ぎ……ッ！！」

舌を噛み切らんばかりの、思いだった。食いしばる歯には、砕け散りそうなほどの力が込められてもいよう。ぐったりと雨に打たれるがままのウィリアムは、半ば以上に力を抜き切って天を仰ぐ。

そのすぐそばに、さくりさくりと小さな足音が鳴る。見上げる体力も気力も尽きかけていたが、それでも掲げた視線はいかなる意図か。――罵倒でも何でも聞き届けよう。もうヤケだ。後は任せろと言ってこの体たらく。ウィリアムとしては、そんな気持ちになっているところが無いでもなかったのだが――幸か不幸か。

刃を手にしたイレーヌがそこにいた、などということはなく、当たり前のようにクロエが静かにたたずんでいた。

「……ウィル」

少女の身体が、膝からゆっくりと地に沈められる。どこか物憂げな色を見せる表情は、いつものとおり。伸ばされた小さな手が、ウィリアムの頬にそおと触れる。優しげな手付きだ。少年からすれば、いっそ罵られた方がいくらか救われたのかもしれないが。

「……よかった」

「よくないぞ、クロエ。……この有様だ。僕はもうお天道様の下を歩けない」

「……生きてるなら、日陰を行けばいい……」

「まあ、もともと日陰者だしな……」

泣きたいような心持ちながらも、少年にとっては幸いなことに、軽口を叩くくらいの余力は残されていた。――その代わりとでもいうかのように、クロエの頬をぽつりと雫が伝った。汗か雫か涙か。

その区別がウィリアムにつくはずもなかったが。
「……よかった。……いきて、て」
ぽつりとそう呟く少女に、言うべき言葉を無くしたかのように押し黙るウィリアム。少女の見下ろす瞳が、真っ二つになった刀身の片割れを捉える。少年の手の中、ずっと握りこまれていたそれ。とうに使い物にならなくなっていたそれを、掴んだままでいたことが——彼の力の入れようを表してもいようか。
「……剣も、こんなに、なったのに。……いきてて、くれた」
うつむき加減の少女の青い瞳が、ウィリアムの様子をうかがうように覗き込む。濡れた前髪がぺったりと張り付いて、いささか淑やかならぬ様子を晒していた。黒いローブも黒い髪も濡れそぼち、烏の濡羽色とでも言い表すべき色合い。日中はくくられていたはずの黒髪は下ろされて、濡れたうなじを覆い隠すかのように少女のちいさな背にはべる。濡れて肌に張り付くような布は、あまり心地よいものでもなかろうに、気がそこまで行き届かないかのように放ったらかしだった。
「……あ」
と。
クロエの言葉に、ウィリアムはふと自らの手の中にある剣を見る。そして少女の顔を見る。大きく目を見開き、そして己の身体を両の手でまさぐるように触れ——大きく目を見開いた。
「それだ、クロエ！！」
「ひ」
がばあと勢い良く起き上がったウィリアムが、でかしたと言わんばかりに少女の肩をひっつかむ。意図せず上がるか細い声に、しかし少年は高揚を隠しえない様子だった。
「クロエ、エリオはどうしてる」
「……え、と。……もうすぐ、戻ってくる……と、おもう」
ならよし、と少年は大いに力強くうなずいて立ち上がった。先ほどまでの死に様は一体何だったのか、と疑われんばかりの様相。ぱ

ちぱちと瞳を瞬かせるクロエは、不思議そうにしてウィリアムに問う。

「……どう、した、の？」

「分かったんだ」

はてなと小首を傾げる少女。

「魔剣の仕掛けも、打倒の術（てだて）も、全部。――出来るなら、すぐ。今すぐに追おう」

それが一番、相手にとっての慮外だと言い切るウィリアム。それに対するクロエは少年の言葉を吟味し、何度も繰り返し反芻し、冷静に鑑みて、そしてこういった。

とりあえず休んで、と。

Ｌｅｖｅｌ３７：『泥を食む』（後書き）

「そういや、あの鐘って」
「……私」
「えっ」
「……この雨だし、たぶん、わざわざ出ないかなって」
「恐ろしい子」

Ｌｅｖｅｌ３８：『犠牲に唾棄す』

ひとつの地に拠って生きるなど、夢のまた夢に過ぎないのだろうか。ウルクは天を仰ぎ見て、ため息を吐きながら心中ひそかに嘆いた。

教会の一室。外はいまだに降り続く雨。視線を落とせば瞳に映る、寝息すら立てず静かに眠る青髪の少女、イレーヌの姿。それはまるで、極度の緊張に身を晒し続けたことへの反動のような有様。ほのかに熱があるかのように見えたが、しかし傷らしい傷といったものは見当たらない。少なくとも、彼女の表面上にそのようなものはうかがえない。ウルクにはうかがえなかった――が。

仇。父の仇と、彼女は確かにそう言った。仇討ちのために彼女はその手に刃を握り、失敗した。そして損なった彼女を、ウルクは助けた。危うく四肢の一端が奪われんかという少女を、ウルクは確かに助けてみせた。

だが、それは果たして少女にとっての救いだったのか。少なくともウルクは、はっきりした考えあってのことでイレーヌを助けた――というわけでは、なかった。いわば勢いとでも言うべきか。そんな弾みのようなもので、わざわざ相手方の怒りを買うような行いをしてしまったのだから、救いようがない。ウルクは自嘲げに嘆息する。

長い目で見るならば、助けるべきではなかったのかもしれない。村という全体を優先するためならば、犠牲にしなければならないちっぽけな個だったのかもしれない。そんな思考がウルクの脳裏を掠めては通りすぎていく。もちろん、納得の行く考えとは到底言えなかった。

――瞬間、不意にウルクは室外の騒がしさに気づいた。室外とはそれ即ち聖堂にほかならず、静謐を保っているべき教会に喧騒は何よりも似つかわしくないものだが――現在は別。先刻のような有事

の直後ゆえに、村内の男たちが集まっての寄合が開かれているのだ。司祭という立場の者が村のまとめ役をつとめているからこその、これは特例。“彼女を看ていたいのならば”と言い含められていたため、ウルクは部屋に引っ込んでいたのだが。

覗いてみよう。

思考の渦に耽溺していては、気が滅入るばかりだ。気分転換も良いだろう。自分にとってあまり喜ばしくないことが語られているという可能性も大いに存在するだろうが、閉じこもっているよりはまだ良い。ウルクはそう考えて立ち上がり、一度ベッドを返り見て――変わった様子が無いことを確かめ――部屋を出る。

人の気配に誘われるかのようにウルクが向かった先。聖堂の様子を覗き込み、ウルクは大いに愕然とした。慄然と言い換えても良い。

「あー、あー。静粛にー。せい、しゅく、にぃー！」

聖像の前で高らかに声を張り上げる娘がいた。蜂蜜のような色彩のブロンドに、呆れ返るばかりの巨体。白い布切れのような着衣に、羽衣一枚を羽織るばかり。黙っていれば多少は神秘的に見えたのかもしれないが、当人がいささか賑やかなためか、威厳の類はいまひとつ望めなかった。なんというか、残念だった。残念な土地神であるところのフィアーノが、老司祭をさしおいて村の男衆に堂々とその姿を晒していた。

「ほら、サノバク。きみは、ぼくを見たのは初めてじゃあないだろう？　きちんと説明してくれなくちゃあ」

フィアーノは悪びれることなく、老父の名を呼び捨てにして命じる。彼はいささか面くらいながらも、集いに集った村の男達に、彼女がこの地の神そのものであることを告げた。即ち豊穣と肥沃をもたらすもの。聖像に描かれしもの。農耕神フィアーノ。そのどこか現実離れした事実に、男たちはひどく驚嘆した。

聖堂の片隅にひっそりとたたずむ四人のよそ者――ウィリアム、エリオ、クロエ、アドナ。事情が事情だけにこの場に引っ張り出されざるを得なかった彼らにとっては、すでに既知の情報であったが。

「して、フィアーノ様。御現れになったことには、いかなる理由で」
「うむ」
土地神の信仰が根底に息づく彼らにとって、神の実在とはさして疑いを向けるようなことでもない。男衆の概ねが納得した様子で、その代表として語りかけるサノバクに向け、彼女は大仰に頷いてみせる。
「なりゆきを見守ってたのだけれど。どうもぼくにとって話がよくないほうに転がりそうでね。――賊の者共に歯向かったせいで、いったいどんな手打ちをしてくるかもしれない、そういう話だったろう？」
フィアーノの明るい声色が、厳正な聖堂へと場違いなほどに響きわたる。その表情に浮かんだにこやかな笑顔には、深刻さというものが一片たりとも見受けられない。しかしそれは同時に、見るものの不安を拭い去ってくれるような満面の笑みでもあった。さざめく雨音にも負けないくらいの底抜けの日向（ひなた）。
「ゆえに先走った行いをしたものは責任を取るべきだ。そのものを突き出せば無茶な仕打ちはされるまいと。まあ――そうだねえ。一理は、ある」
押し黙ったままの男衆は、しかし無言をもって首肯する。当然、あるいは自然の帰結。全のために一は切り捨てられる。生き残るために、生き長らえるために。あるいはそれを酷薄と感じる心があるのだとしても、しかし他の手段など探り当てられるはずもない手詰まり。群体として存続し続けるのならば、犠牲は容認するほかないという諦観に――
「でも、それは不要（いらない）」
それはさながら、差し伸べられた救いの手。
「そのものたちは使者。このぼくが差し向けた“神の下僕”。敬虔なる使途だよ。彼らがいかようにも解決するだろう。仕打ちなどおそれることはない。彼らがひれ伏すのは――――このぼくにだけなのだからね」

いかにも大仰にフィアーノは、ウィリアムたち四人を指先で示して言い放った。どよりと男衆がざわめき、沸き立つ。彼ら一行に注がれる視線は、そのおおよそが訝しげなものばかり。それもそのはず、彼女の言葉はそのことごとくが――思いついたことを口走っているかのようなでまかせに過ぎないのだから。

アドナは大いにうろたえた。当然だ。そもそもが無茶振り極まりない。エリオはやれやれとでも言いたげに肩をすくめ、クロエは困ったように首をかしげながらも、つんつんとウィリアムの肩を柔く小突いた。そして少年は膝をつき、覚悟を決めた表情で厳かに口を開いた。

「フィアーノ様。直々に御手を煩わせた事、真に申し訳もございません」

――と。

この上ない茶番で、しかし渡りに船とばかりに。彼女がこちらを利用するのならば、逆にこちらからも利用し返してやれば良いのだと。半ばやけっぱちで、ウィリアムはそのでまかせに応じた。そしてこれは、助けられたわけでもなんでもない。大衆の目の前で、事件の解決を確約させられたということ。元よりとも言うべきか、もはや逃走はかなわず。少年はいまだその身に傷を残した容態ながらも――堂々として大見栄を張る。

もちろんのことだが、ウルクからすればこんなでまかせは見え見えだ。ウィリアム達は、ただの旅人に過ぎない。サノバクでさえも看破し得るだろう。怪しいとだけならば、誰もが感じるところに違いなかった。

しかし誰もが、そのことを口には出さなかった。

「いかようなる手段をもってしても。迅速な事態の解決をお見せしましょう」

ウィリアムは宣誓する。その言葉が自らを縛り付けることを知った上で。

「――構わないかな？」

口端を吊り上げて、フィアーノは小さく微笑みかけた。異議はない。ゆえにこれをもって、一同は合意したこととなる。“神の言葉”なればこそ致し方のないことなのだと、衆人は決断への言い訳を得た。ウィリアムらは大人しく犠牲に成り下がることに唾を吐き、そしてフィアーノは紛うことなく救いの手を差し出したものとなる。

――なんか、もう、どうなるってんだ、これ。

心中呟くウルクに理解できることは、ただひとつ。当面、彼やイレーヌが犠牲となる必要性は限りなく低くなった――というそのことばかりだった。

「とまあ、ぼくからはこんなところ、かなあ。任せるよ、サノバク」

不意に進行の権限を移譲されても慌てることなく、サノバクは頷いて一通りの注意を繰り返した。戸締りを忘れずに、不用意に出歩かないこと、そして有事の鐘は必ず守ること。勧告と共に解散を命じれば、村民らはぞろぞろと緩慢に掃ける。やがて静寂を取り戻した聖堂で、老司祭は大きなため息を漏らした。

「ふふ。ため息は幸せが逃げるよ司祭」

「こんな面倒になりゃあため息も出るだろォよ」

億劫そうに零れるエリオの呟き。その場に残ったものは冒険者四人、それに加えてウルクと司祭、そしてフィアーノ。この状況を作り出した張本人とも言える彼女は、雨の湿気にも負けじとばかりの爽やかな笑顔を浮かべる始末であった。

「ちょーっと時間的制約を設けただけだよ。そんなに大したことじゃあない――必要なことだもの」

ねえ、と問いかけられるような視線を向けられるウィリアムもまた、静かに嘆息した。やむを得ないことではあるが、なんとも気が重いことこの上ないからだろう。何より少年はいまだ手負いの身である。少し見ただけでも明らかに打撲の傷が目立つような姿。

「まあ、幸いにこの雨だ。僕らが今から行っても追いつけるくらいに行軍は遅れてるだろうけど」

なにせあの大人数だ、とウィリアムは小さく肩をすくめる。

「馬の類を使えれば、それこそ何の問題も無いんスけどね。どんな感じスか」
「乗れるけど、馬の命の保証はないよ」
「……おてあげ、かなあ」
「そんな騎士貴族御用達の技能があるわけねェだろ」
「見事なまでに全滅ッスね……」
ひどく神妙になるアドナ。と、その時――不意に老父の視線がウルクの姿を捉えた。少女（イレーヌ）の様子を看ていたと思われていたのだろう、何事かあったのかと目を丸くして問うサノバクに、ウルクは苦笑いを見せて答える。
「……元はといえば、俺の引き起こした面倒みたいなものですし」
ウルクにとっても、自らの処遇が気がかりでないはずは無かった。槍玉に挙げられなかっただけでも十二分に有り難い――と言うようにウルクは会釈する。しかしその様子を見て取ったフィアーノは、その巨躯をもってウルクを見下ろすようにして告げる。
「ふうむ。ならばきみは――彼女を助けず見捨てたほうがよかった、と？」
「それが村全体のためならば」
「見上げた考えだ。でも安心していい」
にこりと。
フィアーノは似つかわしくないほどの笑みをウルクに向け、堂々と言い切ってみせる。人間臭さもここに極まれりとさえ思われるような、一言。
「祝祭は幸いと実りによって行われるべきだ。贄なんか無いほうがいいに決まってる。少なくともぼくはね」
まぁ、その分の苦労は彼らに請け負ってもらうんだけどね。そう言って向けられる視線の先、「まかせろって言っちゃったからな」とウィリアムはやけくそ気味に笑った。
夜。夜までに準備を済ませると、ウィリアムは一応の期限を定め

た。それが四人に対する猶予期間である。時はすでに夕刻とあって幾許と無い時間だが、些少の休息はあって然るべきだろう。それまでに攻め入る術（すべ）のひとつふたつが見つかれば良いと、それくらいの気持ちで――ぐったりと少年は寝床に伏した。――思索もへったくれも無い有様だった。

「ウィル。……ちゃんと休んだほうが、いい、ような」

「大丈夫だ。もつ。というかもたせる。――そうだ」

ベッドの裾野から心配の声をかけるクロエを安心させるかのようにそう言って、ウィリアムは頭ばかりを引きずり起こす。ウィリアムには聞いておかなければならない疑問があった。そしてその答えは恐らく、アドナが知っているものだった。

「アドナさん、相手のが妙な剣を持ってたんだ。剣先が平たい両手持ちの両刃」

結局のところ、あの剣はなんだったのか。性質そのものは掴んでいても、しかしその正体そのものがウィリアムは気がかりでいた。その言葉を聞いて、ふうむとアドナはいかにも不思議そうに首をかしげる。

「執行剣（エクゼキューショナー）ッスね。首落とすための剣ッス。……正直、実戦に耐えるもんじゃないッスよ」

少女のいかにも不思議そうな様子は、その正体が掴めないからではない。死刑執行に用いられる剣だということを知っているからこそ、そんな代物を実戦に持ち出すという違和感を感じざるを得なかったからだ。

「ありがとう。……となると、やっぱり魔剣なんだろうな。僕の剣が真っ二つにやられた」

「おいちょっと待った」

「なんだエリオ」

そいつはちょっと聞き流せねェとばかりにエリオが口を挟む。それは剣そのものが真っ二つに断ち切られたという、驚愕すべき事実そのものに慄く――というよりも、もっと別のこと。

「剣って、あれだろ。あの喧嘩用の剣（カッツバルゲル）だろ？」
「もちろんだ。というか僕にあれ以外の持ち合わせはない」
久しぶりに握った真っ当な剣だったんだけどなあ、とウィリアムの惜しむような声は絶えない。しかしエリオが言いたかったのは、そんなことではなかった。すでに眼前に迫っているな危機、切迫した現状を認識してしまったかのような焦燥が、エリオの涼しい顔立ちに浮かび上がってしまっている。
それ即ち。
「――ウィル。お前の武器、無くねェ？」
「ぁ」
完全に。
完膚なきまでに頭から抜け落ちていたと、クロエがちいさな、しかし確かな驚愕の声を漏らした。

Ｌｅｖｅｌ３９：『そぼ降る雨下に流れる血潮』

クロエはウィリアムという一人の少年の身、そのものを重んずるあまりに見落としていたのだろう。剣士にとっては命綱ともいえる得物の損壊という事実を。

武器がない。

そう、ウィリアムは予備の武器というものをひとつも所持していなかった。果たしてそのゆえんはと過去を辿っていくのならば事は単純で、武器のために所持金の一部を割くような余裕を少年が持ち合わせていなかったからに他ならない。以前、ちょうどクロエと出会った頃にウィリアムが振るっていた二刀の長剣（ロングソード）にしても、古戦場跡をさらった折の戦利品に過ぎなかった。使い古しの品も良いところだ。そしてその長剣はとっくのとうに、度重なる戦闘によって叩き折られてしまっていた。

と、なれば。何かを期待するかのようにウィリアムの視線がアドナの姿を捉えた。しかし少女は静かに息を吐き、ふるふると首を横にふる。赤髪の三つ編みがゆらゆらと宙を揺らいだ。

「そんなに都合よく武器を取り扱ってるわけがないッス」

「やっぱりそうか……」

「気が利かねェなァ。『こんなこともあろうかと』とか言えねェの？」

「ねえッスよ！！」

原材料になりそうな物なら無くもないッスけど、武器に向いてるかは微妙ッスよ――と、アドナは彼らをなだめるように言う。しかし言われた当人のウィリアムはさして落胆を覚えた様子も無く、肩をすくめて仕方がないとつぶやいた。

「……村の、鍛冶屋さんは、あったと……おもう、けど」

そんな様子のウィリアムを、そぉと見上げてクロエが告げる。急を要するこの場、鍛造から始めていてはあまりにも悠長に過ぎると

いうことを、彼女とて心得ていないわけではなかった――が。それでも休養を取ることを選択のひとつと捉えるならば、一考の余地があるのではないかという条件の提示である。

ウィリアムの黒い瞳を、少女の青い視線がじいと覗き込んだ。

「確かに鍛冶屋は、ある。ただ、武器を鍛つ技術があるかというと」

「……むう」

いくら僻村とはいえども、そこは鍛冶屋のはしくれ。刃をうつことなどは訳ないだろう。その程度のことが出来なくては、例えば村の誰ぞがキッチンナイフを壊してしまったとして、それを修理することが出来ないということになってしまう。そんなことは、ありえない。だから技術的に不可能とは言いがたいのだが――しかし恐らく、“武器の鍛造”に対する知識と技術の積み重ねは存在していないのだ。

武器とそれ以外の用途では、わけが違う。武器とは即ち、最終的に持ち手を生かすことを目的としているのだから。

「……命をあずける、には。……かなあ」

「まあ、今回は相手が悪いというのも――」

あるんだけど、と。ウィリアムがそう続けかけた言葉を遮るかのように、スパァン！　とけたたましく木製の扉が壁に叩きつけられる音が響き渡った。というか、こじ開けられていた。何奴かとウィリアムが刃の鞘に手をかけるのも束の間、その向こう側にいる正体を確かめれば、少年は静かに腰を落とした。

「まーまー。そう不穏にしないで、ねえ」

威厳の欠片も漂わせずに、フィアーノがただ一人、相も変わらずの布切れ一枚のような風体――しかしその腕の中、純白の羽衣に包まれた長物の如きものを抱えて――そこにいた。先刻にはさんざっぱらウィリアムに無茶を吹っかけてきた当人である彼女だが、しかしその表情に悪びれたような様子はとんとうかがえない。全くもって常通り、にこやかな笑みをたたえるがまま。

「邪険にしねェだけオレらの心の広さを思い知るがいいぜ」

悪態を吐き捨てるエリオの態度は不信心者と切り捨てられても一向に文句の言いようもない姿ではあるが、しかしフィアーノはその様子に一段と笑みを深めてみせる。

「そういうだろうと思ってね」

――持ってきた。

彼女はそういって、さながら紐解くかのごとく腕の中にある羽衣、いわば覆い隠しとなっているその包みを静かに剥ぎとった。質素なようで、しかし上質な絹糸を思わせる衣がはらりと部屋の床に落ちて広がる。

そしてウィリアムらの視界に姿を現したそれは、黄金に良く似た土くれの色をしていた。果たしてクロエの背丈さえをも軽々と飛び越えかねない、長大な一振りの大剣。極めて幅広にあつらえられた刃は、流麗さよりも無骨な力強さを感じさせる造り。それはいかなる製法によって形作られた鉄塊なのか、最早うかがい知るすべは今生には残されていないかというように思われた。

――なんだ、それは。

惹きつけられたか、あるいは呆れ返ったとでも言うべきか。しかし視線を外すことも出来なかったという紛れも無い事実に、ウィリアムは神妙に嘆息して――フィアーノに、そう疑問の声を投げかけた。

「御神刀、というやつかなあ。けれども、同時に魔導器（アーティファクト）でもある」

「大層なものを持ちだしてきたな……」

「押し付けるばかりじゃ不満もあるだろう？　――だから、“ぼくの使徒”に相応のモノを持ってきたというわけ。どうせ死蔵品だからね」

「……使われて、ない……の？」

クロエが興味深げに、フィアーノの手の中にあるそれを見上げた。その視線はまた、どこか不思議そうでもある。なぜならば、金属で形作られているであろうその御神刀の外装（フォルム）には、錆びの一片つさえ浮かび上がっていなかったのだ。

「ぼくを降ろす依代に使って、それっきりみたいだねえ。どう？」
「えらく都合のいい話だァな。ウィルの剣が逝ったのは昨日の今日ですらねェんだぜ。どっかから見てたんかよ」
「警戒するね」
訝しむように細められたエリオの視線。しかしフィアーノは何食わぬ顔で笑みを浮かべながら、その手を胸元に忍ばせた。その指先は何かを掴み、にわかに輝きを返すそれを床に向けて放り投げる。
一目向ければ、その正体は見て取ることが出来た。なんのことはない——ウィリアムの剣の、刃先である。鋭利な断面をありありと晒す、最早ただの金属の塊と言ってもさしつかえない剣先。
「困るな。ゴミはきちんと拾っていってもらわなきゃあ」
「だそうだ、ウィル」
「僕に振るのかよ！　いや僕なんだが」
「それはそれとして。——使ってみるかい」
彼女から差し出される、一振り。にこりとフィアーノは笑みを浮かべる。その表情はどこか人の困惑を楽しんでいるかのようにも見える、意地の悪い面構えだ。
ウィリアムは静かに頷くと、その剣に向けて手を伸ばす。おのが手のひらに掴み取ると、ずしりと腕にのしかかってくるような確かな重みが少年に感じられた。ウィリアムは静かな沈黙を保ったまま、剣を地と水平に構え——ゆっくりと、鞘からその刃を引き抜いていく。
「……わ」
クロエがかすれるような、感嘆の声を上げた。——鞘より覗く刀身がうかがわせる、眩いばかりの黄金の煌き。無骨な外観を裏切るかのように、神性さえも垣間見せる輝かしさ。あるいはそれは、人を惹きつける魔性か。
「……借り受ける」
「ちゃんと返してね」
ちゃきりと音を立て、その光を覆い隠すかのように少年は刃を鞘

へと納めた。フィアーノの言葉に承知とでも言うかのごとく頷いて、そしてウィリアムは立ち上がり――ずいと歩き出す。

ベッドに座する、アドナの眼前に。

「アドナさん」

「……？　なんスかね」

至極真顔でアドナと相対したウィリアムは、彼女の怪訝な様子をさして意に介さず、ぐいと剣を握る手をまっすぐに突き出した。――果たしてこれはいかなる意図か。その心中をはかりかねるように首をかしげるアドナに、ウィリアムは表情を崩さないまま厳か極まる口調で、言い放つ。

「これ、失くさないようにしまっといてほしい」

お留守番との宣告である。

アドナの開いた口がふさがらなくなった。

「なに考えてんスか！　せっかく借りたのに！」

「結局死蔵だよ！？　ぼくの厚意の意味は！？」

若干二名より壮絶なツッコミを受けるウィリアム。クロエなど背後で思いっきりずっこける始末である。エリオばかりは「まァ、ウィルの身の丈に合ったもんじゃねェしなァ」と納得することしきりだったが。

「いや、だってなんか呪われそうだし」

「呪われない魔導器（アーティファクト）なんてあると思ったのかい？」

「クソだな……」

踏んだり蹴ったりの扱いである。

「まあ、私（わたす）に出来ることくらいはしておくッスよ――」

どこか釈然としない様子ながらも、突き出されたその一刀を重そうにアドナは受け取る。ようよう気を取り直したクロエが、その様子を見届けながら――やはり納得しかねるように、その小さな腕を組みかすかなうなり声を零した。

「……なにもないよりかは、いいと……思う、けど。……やっぱり、むずかしい……かな」

「それもある。ただ、それは別の使い方のほうがいいと思ったんだよ。相手の得物が規格外な以上、無事に返せる保証もなし――で、“それ”に頼らなくても何とかする算段は、ある。だから」

ウィリアムは身を返し、どこか不安げな表情を見せるクロエと向かい合う。互い瞬く瞳、交錯する視線。

――僕を信じろ、と少年はまっすぐに言い切る。

――うん、と少女はなにも問うことなく頷いた。

「……へえ。考えなしってえわけでもなさそうだ」

そんな彼らの様子をいとも愉快気に見守れば、すでに用は済んだとでも言うかのように、ひらりと手を振ってフィアーノはきびすを返す。

「朗報を期待するよ。ぼくの使者」

「使者じゃねェえええよッ」

去り際の言葉へのエリオの反論。果たしてそれを最後まで聞き届けたのか否か――ほのかに薫る山草の気配を残して、彼女はその姿を消した。

場をかき乱すだけかき回されたというような風情だが、しかし彼女なりの計らいであったことは間違いがあるまい。とはいえども、眼前の問題――振るうべき武器が無い――は解決していないということに変わりは無かった。

「……というわけだ、エリオ。持ってた短剣、貸してくれないか。ナイフじゃ流石にきちい」

「頑丈なのか切れ味重視、どっちがいい」

「後者で」

ウィリアムがエリオに向き直ってそう言うと共、少年に向けて一振りの小刀が投じられた。盗賊御用達の一品であると言えよう武器――“硝子をも切りうる鋭刃”。ちょうど手のひらの中に収まるほどの小振りの柄に、刃渡りもまた心もとない短刀。特筆すべきは向こう側を見通せるのではないかとすら思わせる、刃の薄さ。文字通りの薄刃と称すべきそれは、相手の攻勢を受け止めることを完全に

度外視し、切れ味のみを追求した一振りであった。
月明かり返す華奢な抜き身。それを見て、クロエはほうと嘆息した。ゆらりと視線が外界を向けば、そこはすでに月光がさし込む夜の暗闇。
それを認めて、ウィリアムはそれぞれに目配りする。
「行くか！」
「怪我なんぞで倒れんじゃねェぜ」
「……ん。追撃戦」
「留守番は預かったッスよ」
長大な剣をその腕に抱えたまま、アドナは小さくその手を振って戦に出向く彼らを見送る。
――朝には帰る、と三人は笑みと共にそれに応じた。

とどまることを知らぬかのごとく。それほどまでに降り続いていた雨は、しかし夜を迎えてようやくその勢いを弱めていた。しとしとと。はらはらと。人の身を打つ小雨はもはや、いっそ穏やかにさえ思われよう。だが――空を、そして月を翳らせるほどの雲は、いまだ健在。おまけに夜の暗闇も相俟っては、見通し良い大平原であっても周囲の様子を完全に把握することははなはだ困難であると言えた。
大平原――かの小さな村（レーヌ）を出て、半日足らず。賊の集団は本拠に向けての道程を踏破するに至らず、その途上でやむを得ずキャンプを敷くことと相成った。十を越える大人数、悪天候、そして怪我人を引きずっての行軍――といった悪条件がいくつも重なっているのだから、これは致し方のないことである。
「交代の時間だぞ――お？」
テントから這い出でた男が、この夜半に見張りに立っていた男へと声をかける。酒精を片手、岩陰にもたれて。真剣とはかけ離れた態度、見張りとしての役目を保っていたとは言いがたいが、しかしそもそもが一寸先を見通せぬほどの暗闇。気を張り詰めていたとし

ても、結果は同じであったに相違ない。
　返事を寄越さぬ見張りの彼を訝しんだように、男は彼に歩み寄ってその肩を叩く。その身はぐらりと、重力に引かれて地面に向かい倒れ込む。――その胸元には鉄の矢が突き立ち、その傷口から紅い血潮を滾々とあふれさせていた。
　――敵襲！　敵襲！！
　男が声を上げたその瞬間、彼の後頭部は暗闇から迫り来る一矢によって呆気無く射抜かれていた。しかしその男の叫びを先触れとして、危険は瞬く間に集団の全体へと伝播する。襲撃を受けているという、その事実。それに対して頭であるところのボリスは、すぐさまに事態への対応策を発した。
「俺らの中で今動ける人員、六人ずつを半々で本隊と分隊に割く。俺含む本隊は怪我してるバカを引き連れて帰還を優先、迅速にだ。分隊は相手を引きつけながら時間をかせげ。ま、向こうも深入りは望むところじゃねえだろうが――なあ？」
　――かくしてウィリアムらの眼前に立ちふさがるは六。各々に統一感なく凶器を構えた彼らは、明確な殺意を滲ませてそこにいた。三人の行路を遮る、壁にも似た陣形。
「……エリオ、もうちょっとなんとかならなかったのか」
「ちィとバレんのが早かったなァ。芋づる式で潰せねェかと思ったんだが」
　上手く行かねえもんだ、とエリオは肩をすくめる。――賊達の殺意は見るからに、エリオに向けて注がれていると断言しても良い。片手に弓を、背に矢筒を。そんな風体を隠しもせずに晒す青年が、念頭の標的にされないわけが無かった。ともすれば一斉にかかってこられてもおかしくないような一触即発の状況だが、現在は硬直が続いている。その理由は――クロエ。いかにも魔法使いじみた黒いローブに、頭からすっぽりと身を包んだ小柄な少女。
　それを果たして誰が恐怖に感じられようか。少女の姿ならば、油断さえ誘えようかという小さな影。しかしその全身が黒衣に覆い包

まれている現状では、話が別である。いかにも剣士、明らかに弓手といったウィリアム、エリオとは異なり――クロエのそれは、不気味だった。少なくとも、彼女のことを何も知らない彼らにとっては。得体が知れない、と換言してもよいだろう。

戦闘にも行軍にも明らかに向いていない身の丈。そのような人物を伴う意味。――さして多からぬ、そして脅威たる魔術の行使者を連想するに、どれほどのためらいが存在し得よう。

「……このままじゃ、逃げられる……か、な」

少女のか細い声――鈴鳴のような声色は、小雨に紛れてどこか判然としない。衣越しのくぐもった声は、賊の者にはとてもではないが届かないだろう。

「だなあ。考えても仕方ないし」

――行くか。

いかようにでも埒があけようぞ、と。ウィリアムは力強く地を踏み締め蹴り飛ばし、身を翻らせんばかりに迅速なる疾駆をなさしめた。抜けば玉散る“硝子斬りの刃”を抜剣すると共、少年は人と人の隙間をすり抜けるかのようにして一閃――駆け抜けていく。背後は振り返らず、その向こう側の前だけを見て。その躍動は決して人間離れした動きではないにも関わらず、立ちはだかる彼らの反応を許さなかった。少年のその迷いのなさ、躊躇いのなさゆえに。

通常、相対するものが凶器を握るならば身は竦む。恐怖心が起こる。わずかながらも、躊躇いは生まれざるをえない。――だが、これと決めたウィリアムにはそれが無い。一直線に眼前の目的をなすため、ただそれだけに少年の身は駆動する。

ぱしゃん、と。ウィリアムの駆け抜けた後で、鮮血が宙に弾けた。すれ違いざまに振るわれた一閃が、一人の男を切り伏せた証左。後から遅れてやってくる苦痛の叫びに、動揺が残る五人へと走り抜ける。そしてその隙につけいるかのごとく、少年はかき乱す。――背を一切返り見ること無く、真っ直ぐに走りだすことによって。

現在の彼らにとって、三人は通してはならない存在であった。ゆ

えにウィリアムが一人、壁を突っ切ったことは想定外であり――これは本来ならばすぐさま追いかけなければならない。だが冷静に考えれば、実力未知数の少年剣士がただ一人、本隊の元へ追いついたところで何が出来るというのか――という考えにも至ることだろう。この思考に基づくならばウィリアムのことは放っておいて、残る弓手（エリオ）と魔術師（クロエ）を排除することが正道である。

しかし集団の意見とは往々にして、容易にはまとまらない。追うべきか追わざるべきか、必然的に混乱が生まれる。

その時、ひうんと風切りの音が鳴る。

「――隙、ありィ」

ひひひと喉を鳴らして、エリオは悪辣な笑みを漏らした。同時、正確に男の脳天を貫く一矢。男の一人がぐらりと揺らぎ、額から血流を溢れさせながら身を倒れこませる様。それを認めた時、残された者たちは覚悟した。――時間稼ぎなどとんでもない。殺らねば殺られる、と。

次の瞬間、エリオに向けて斧の刃が迷うこと無く肉薄を果たしていた。咄嗟のこと、腰から引き抜く短刀（マインゴーシュ）が青年の命を助け――刃を止める。ぎりぎりと眼前に迫る鉄塊。零にまぎれ、エリオの額に冷や汗がひたりと伝った。

無論、それだけには留まらぬ。一閃を受け止めた直後、立て続けに迫る振り抜かれし長剣。すでに刃を受け止めるべきものは存在しない。

「――ひゅうッ」

ゆえに決死。眼前、斧持ちの男の腹部に向けて全力の蹴りをくれ――そしてすぐさま切り返す刃が、長剣と打ち合い再度の拮抗を保つ。響き渡る鋼音、綱渡りの立ち回り。否が応でも皆が皆、その注意はエリオへと引きつけられざるをえない。

ずしゃり、と。

一人の男が背後を突かれて、前のめりに地に伏した。

「……なるほど。切れ味は確か、だ」

なんのことはない。ウィリアムがその身を切って返して、エリオと相対するがゆえの必然。無防備に晒された背へ、その手に握る刃を突き立てただけのことだった。

なッ――と驚愕の声がひとつ上がるもすでに遅し。咄嗟に振り返らんとする動作の最中は、ウィリアムからすれば無防備極まりない。引き抜いた刃を一閃するに十分すぎる間隙が、そこには存在していた。

振り抜くと同時、腹部に走り抜ける紅の横一文字。ぐらりと手折れる身が、その場にふたつ転がる。

「――さァて、旗色やべェが、どうすんよ」

長剣と短剣を噛み合わせる最中。エリオの言葉に相対する相手――彼らの中で唯一無事な者――は舌打ちすると、こればかりはやむ無しかと周囲に一瞥を送り、じりじりとその身を後退させていく。

それに並行し、蹴りを喰らった男がゆらりと起き上がった。その視線は、しかしエリオを捉えておらず――ことさらに小さな影、クロエへと向いた。この至近、この矮躯。魔術師ごときに果たして何が出来るものか。現状はすでに惨状に違いないが、その上で刺し違えてでもとばかりに――斧が素早く振り上げられる。

落ちる刃が、少女へと到達する。

それよりもなお疾く。

「――ご、ぶッ」

破砕音。ずどんという爆発の音さえ伴いかねない勢いをもって――少女の小さな拳が、男の腹部へとめり込んでいた。焔さえ纏うその拳はいかようにしてか、大の男さえ地に伏せさせるほどの威力をもって発せられている。

「……これなら……つかえる、かな」

熱のこもった息を吐き出して、クロエはゆっくりと拳を引いた。身体の熱へ干渉することによる運動能力向上、加えて身体性能強化。いわば肉体へと作用する付与術（エンチャント）といったところだろう。

同朋のことごとくが倒れ伏し、取り残された男の不利はすでに確

定的。数瞬の迷いを経て彼はゆっくりと後ずさり、そして本格的な逃走を開始した。

「――はッ。余計な時間取らされちまったァな。これじゃ向うさんには結果オーライだ」

その様子を一瞥してから視線を切り、つぶやくエリオ。ウィリアムはそれに応じながら、ふたりの様子をうかがう。

「二人とも、怪我はない……な」

「……ん。だいじょう、ぶ」

「前座で消耗してらんねェさ」

ひっひ、と青年の浮かべる人の悪い笑み。クロエはこくりと首肯して、己の無事を知らせる。炎をまとわせていたその小さな手のひらは真っ白で、火傷どころか傷一つ、染みの断片さえも見当たらなかった。良しとウィリアムは頷いて、向かうべき先へと歩を進める。即ち――

「行くか。徹底的に、本拠――根っこから叩く」

「……撫で斬り？」

「そこまでしなくても」

真顔であった。

Ｌｅｖｅｌ４０：『Ｂｒｅａｋｔｈｒｏｕｇｈ』

「……どっちでも、まずは、行かなきゃ」

「んだァな」

本拠と一言に言っても、すでに本隊の姿は陰も形も見当たらぬほどの彼方である。ではウィリアムたちはいかにしてその本拠を突き止めれば良いのか。――なんということはない。先ほど無傷のまま逃げ出した賊の一人、その背を逃さぬように追いかければ良いのだ。やろうと思えばその背を射ることも出来たであろうエリオが、その逃走を許したこともそのために他ならない。

早足に遠ざかるその背を、ウィリアムらは速やかに追跡する。クロエの行使する魔術のひとつである“光明（トーチライト）”を頼りとし、進む都度に見える緑の姿が少なくなっていく道行き、幾許の刻を経て――彼らは彼方に“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の砦を垣間見る。その造りは、前もってウルクから聞き知っていたとおり。ウィリアムの目に一見して、それはさながら大山を中心から真っ二つに切り分けたかのような様にも見えた。

左右にそびえ立つ崖の合間、大蛇がのたくったかのように彼方へと伸びる道。その最奥に据えられているはずの本拠は、進軍なくしてはその影さえも垣間見えない。しかしそれも当然か、なにも城塞が打ち建てられているというわけではない。ウィリアムたちには望むところである――とはいえ。

「あー、見張り立ってんなァ。ってェか、どう見ても警戒態勢」

「だろうな……」

規模の大小はあれど、人数差が甚大であることに変わりはない。加えてこの場所はまがうこと無き敵地（アウェイ）。エリオは遠方より、その様子を双眼鏡越しに観察する。こちらの居所が露見する可能性を鑑みて、クロエの光明（トーチライト）は消してしまっているため、現在は雲間よりわずかに漏れる月明かりばかりが頼みの綱である。

「……崖の、上は……ど、う？」
「人影あり、複数。まァ、この暗さじゃ弓なんかの精度は大したこっちゃ無ェだろうが――厄介にゃあ変わりねェな」
どォすんべ、とエリオは双眼鏡から目を外して視線をウィリアムに向ける。少年は一寸、考えこむようにがしがしとその灰髪を掻きむしり、クロエの様子をうかがうように一瞥する。少女は怯むようなこともなく、その青い瞳がウィリアムを真っ直ぐと見つめ返した。
「クロエ」
「……うん」
「矢面に立てるか」
「……もちのろん」
一片の迷いも、ためらいさえもない答えであった。死など覚悟の上、危険などとうに承知、冒険とはそういうものだ。そう心得た上で、青い瞳の輝きは――眩いまま。それを見て、どうして否と吐く道理があるのだろうか。わかったとウィリアムは頷いて言う。
「てわけでだいたい元の予定通り。僕らは先駆けて正面突破、エリオは崖側の掃討を頼む」
「……んっ」
「オーケイ隊長ォ」
――誰が隊長だ、というウィリアムの言葉にもどこ吹く風。双眼鏡を腰のポーチに押しこんで、エリオは含み笑いを漏らしながら、まァ任せろよ――とうそぶく始末である。そのまま三人は二手に分かれて散開――と行くところを、ちょっと待って、とクロエがひとたび押しとどめた。
何事ぞと問いかける隙もなく、クロエはウィリアムとエリオの背にふれる。ほのかな熱を伝えさせるちいさな手のひら。数秒の呪文詠唱を伴い、少女の体温ならざる熱量が二人の身へと流れこむ。しかしそれは、身を内側から焼くような炎熱ではない。まるで体の隅々、末梢に至るまで灯火を伝わせるかのような――温かなものであった。

「……おお、なんだこれ、なんか力すごい溢れる」
「“身体能力向上（フィジカルエンハンス）”。……ちょっとは、底上げできると、おもう」
「具体的に言うと、どんくれェのもんよ」
「……私が、うごける、くらい」
「十分だ」
クロエが手を引くと共、ウィリアムは彼女を返り見て笑みを浮かべる。
「んじゃあ、ちィと気張るかね」
ひひっ、と。やけに人の悪いエリオの笑い声を皮切りとして三人が行く。
砦攻略――開始。

現状を鑑みれば事実として、すでに警戒態勢がしかれていることは間違いが無い。なればウィリアムとクロエがわざわざ真っ向から打って出る理由は、さして多くはなかった。細々と見張りの目を掻い潜ることに気をやるよりは、いっそ誘い出しての各個撃破を狙うという腹づもりか――いずれにせよ。
「て、敵しゅ――」
見張りはその言葉を言い終えるよりも疾く、ウィリアムの振るう一閃によって喉元を掻き切られる。魔術での補助（ブースト）を帯びたその太刀筋は、以前とは比べるべくもない鋭さを誇っていた。飛来するがごとき少年の迅速なる襲撃は、しかし決して秘密裏に見張りを始末しようといった意図によって行われたものではない。まず不可解であったことは、見張りがたった一人しか立てられていないということである。その現実は一見、砦へと至る道が無警戒な様をにおわせるかのように思えたが――しかし一考すれば、すぐにそれは否と知れる。
「……ひとり。……四、かな」
「だと思う。誘いこむ餌、ってところじゃないか。さぞ万全で迎え撃ってくれるだろうさ」

「……いこ」
「応」
クロエが先の道を示すと共、ウィリアムは頷いて踏み出す。迷う理由はないが、急ぐ訳はある。身体能力向上（フィジカルエンハンス）は、決して無期限に有効な術ではないのだ。その有効時間はクロエの魔力、そして体調、精神状態などによる所が大きいが――しかしいかなる条件を揃えても、持って数分。それがクロエ自身の申告であった。
二人は緩やかな坂道を駆け上がる。その足を遮るものはない。最奥の洞穴をやがて視界に収めることが出来るだろう――道行きの半ばに到達するまでは。
「よ」
夜闇、遠目には隘路（あいろ）に見えても決して狭からぬ幅の道――その真ん中に立ちはだかる、糸のように細められた瞳の男。旧年来の友人と久方ぶりに巡りあわせたかのような、気軽な声を伴って――彼、ボリスはウィリアムに相対して片腕をかかげた。
無論、彼一人のみならず。その傍ら、十を越える“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の人員を引き連れてのことだ。
とはいえそれは、想定していたものよりもずっと少ない人数。しかしウィリアムが一目見るかぎり、決して予断を許すような状況ではなかった。なぜならば彼らは、そのひとりひとりが――ある程度の能力（レベル）に達している、堂々たる戦士であるように見て取れたのだから。
「……これはまた、歓迎してくれやがる」
「ま。当たり前だろう？　まさか本気で単身突入してきやがるとは思わなかったが――なあ？」
よもや警戒を怠るはずもない、と。男たちは一様に、その各々が思い思いの武具を掲げて――ウィリアムとクロエ、即ち侵入者ふたりへと一斉に険しい視線をそそぐ。しかし彼らが向けるものは敵意に留まり、刃が振り落とされることはない。それはつまるところ、ボリスが明確に配下を統率していることの証左であろう。

「手酷くやられた矢先だ。来るわきゃあない、そう考えてくれればそれでよかった」
「ま。予想外なこたあ、違いない。ガキ引き連れてくることも含めて。予想外さ」
——ガキ呼ばわりにクロエは大いにむくれた。ふくれっ面である。そんなことをしている場合でもないし、そんな場面でもないのだが、しかし最低限の彼女の誇り（プライド）といったものだろう。ぐいと踏み出す少女を、ウィリアムが静かに制する。
「ガキじゃない」
「ハッ——」
「仲間だ」
臆面も無く、そして事実、臆すること無く。ウィリアムは短刀の誇る鋭利な薄刃を暗闇に晒し、堂々と言い放つ。クロエは少年の制する手に一歩後退って、こくりと頷いた。その様子にボリスは、呆気に取られたかのように目を丸くする。鳩が豆鉄砲を食ったような、そんな表情だ。
「囲われて囲まれてそんだけ言えりゃあ上等だろうなあ。……ウィリアム、つったよ——なあ？」
片手に刃を携えたまま、ボリスは黒髪を掻きむしってウィリアムに視線を投げかける。目蓋より眼光が零れる気配すら無いというのに、視線ばかりは感じられるという異様。少年は首肯ひとつして向かい合う。
「おめえら、“屍肉（こっち）漁り”に来てみねえか——」
「いやだ！」
「……おことわり」
「オイまだ話の途中だ殺すぞ」
男の言葉を遮るかのように重ねられた否定。ボリスはその一振りを抜剣すると同時、剣先をウィリアムらに向けるが、しかしその意志が変わるような気配すら微塵もうかがえなかった。
「聞くつもりはない。確かに僕は同類（クズ）には違いないが」

少年はクロエを返り見、そして頷き合う。果たしてそれは何かの合図か。突きつけられた刃先へと向き直り、ウィリアムは言い切る。

「安全とか、安心とか、楽して生きたいとか、そういうのはいらないんだ」

冒険者ゆえに。危険も合理も度外視してでも、求めるものがあればこそ。

弱者からの簒奪とは、“屍肉漁り（ヴァルチャー）”とは即ち――他者を排してでも手軽に安全に利を得るためのものに他ならない。少なくともウィリアムという直情的な少年には、そう見えたに相違ない。

「ま。そりゃあそうだろうな、残念だあ――――おめえら、出ろッ！！！」

唐突に、厳粛に。

ボリスは高らかに、さながら天へと猛るがごとく号する。道の両横にそびえ立つ崖の上――そこに並び立ついくつもの影が地に向けて縄梯子を滑らせると共、彼らは急勾配極まる崖を伝い降りた。それは即ちウィリアムの背後へと。この一手によって、二人の退路は完全に絶たれる。

加えて皆が皆、地に降り立ったというわけではなかった。ほんの五人ほどに過ぎぬがその少数は、弓をその手に持ち明瞭に――遙か高みから隠しもせずに、ウィリアムら二人へと狙いをつけてくる。この暗がりでは精度はいかほどかというものだが、しかし喰らえば致命的には違いない。ならばそれは、まがう事無き脅威だった。

「……こいつは、また」

「まあだ、間に合うぜ」

「くどい」

「そうか。――押し通せッ！！」

ボリスの勧告をウィリアムは一言に切って捨てる。それに応ずるかのごとく、男は魔剣を振りかざし――己が配下へ命を下した。

まさしくその号令を引き金とするかのように、十を数える戦人の波がウィリアムらへと襲い来る。剣、斧、槍、鎚。四方八方より襲

い来る凶器の群れは、受け止めるなど考えることも馬鹿馬鹿しいほどの害意を含んでいた。ウィリアムは深く地に脚を踏み込み、姿勢を低くその身を沈める。

「……ウィル、ふせてっ」

その挙動はさながら、クロエのその言葉を予期していたかのごとく。クロエは黒いローブの内側から、一本の瓶を引き出す。硝子瓶の内側に揺らめく透明の粘液、液に沈む朱色の草葉、先端に蓋する布切れ。少女のちいさな指先を先触れに、その入口へと――ちいさな火種が、ともされた。

白い手を大きく振りかぶったクロエは、呵責なく思いっきり、その瓶を人波へと投げつける。何事かとその意を掴みかねた群勢は、しかし血盟の頭だけは別であった。ボリスは心なしか顔色を青くして、跳ねるように咄嗟に口を開く。

「退け――ッ！！」

その声は、すでに遅かった。地面に勢い良く叩きつけられ、がしゃんと音を立てて破片を飛び散らせる硝子瓶。撒き散らされる透明の水液。瞬間――火種が、それへと燃え移った。あっという間に延焼する焔は、雨後の湿った大気の中にあってなおその勢いを強める。そして炎は、朱紅の草葉へと巻きつくに至った。

――轟音。光量を伴う発破。数人を巻き込んでの爆発が一切の容赦無く戦士達の身を焼き、肉抉り、その戦意をそぎ落とした。十の内の半数は、まともに爆発に巻き込まれて勢い良く後方へとその身体を吹き飛ばされる。いとも聞き苦しい悲鳴が、止めどなく響き渡った。混迷を極める、ほどではない。だがしかし、動揺は生まれざるを得ない。

「――チッ。火炎瓶、じゃねえ、なあ……！！」

火炎瓶のそもそもの目的は、焼夷。爆発をともなうものではないのだ。しかしボリスが一見したそれは、火炎瓶のそれとほとんど大差ない造りであった。クロエはちろりと唇に赤い舌先を這わせ、つぶやく。

「……ちょっと、工夫した、だけ」

そもそもの取っ掛かりは、いつかクロエがウィリアムと語らった折。火にかけるのに油でもぶちまけてやれば良いと言ったのはウィリアムであったが、そこに真っ当な草花の知識を取り入れた結果が――これだ。硝子瓶の中に水液、即ち油と複数種の薬草を配合し、良く燃える布で蓋をする。たったそれだけ。いくつも制作出来るわけではないが、しかしそれが齎した破壊はクロエの魔術によって可能な領域を軽く超越していた。“爆炎瓶”とでもなづくべき代物。

そして通常の爆発と異なり、厄介なのは――焼夷弾としての力もまた健在である、ということだ。走り抜けた炎の道は、ほんの一時とはいえ数人の戦士を個々に分断せしめる。

ゆえに目指すは手負いの身の各個撃破。

「刹(シ)ィッ」

身を沈めていたウィリアムは、踏み締めた地を全力にて蹴り出し、躊躇いなくその一人へと疾駆する。早く、速く、疾く。それは喧嘩用(カッツバルゲル)の剣を振るっていたその時よりも、一段と高みの領域に辿り着いた速度であった。ひゅん――と空を切る音色を引き連れ、少年の握る短剣が敵影を右脇下から左腰にかけ一閃。

「ッ……、撃(て)――ッ！！」

刃を振り抜くその瞬間は、必然的に無防備になることを免れ得ない。ならばその刹那を狙われぬ道理はなく、崖上より放たれし数条の矢はウィリアムの身へと一直線に向かい来る。捌ききるは不可能、完全に躱すも至難となれば、取るべき行動はただひとつ。

一刀に切り伏せられ、血流を吹きながらぐらりと揺らぐ身を――ウィリアムはぐいと強引に掴み上げる。その身体を全面に押し出して、片手にかかげた。さながら盾のように。

「……安らかに、なッ！」

ずしゃり、ざすっ、ずしゃッ――肉体を射抜く残虐な響きが、連鎖して幾度と無く連なる。幾本もの矢が突き立ったその男の風体は、まさしく盾としての役目を果たしたがゆえの末路であった。ウィリ

アムは襤褸となり果てたそれを投げ捨てながら、他の撃退すべき敵影へと視線を滑らせる。

その時、炎が切り裂かれた。

比喩でもなんでもなく、風に揺られたわけでもない。文字通り刃の一閃によって炎の壁が切り開かれ、焔は男の前に道を開いた。――断罪剣（エクスキューショナー）をその手に握るボリスが、火の粉を払いながらウィリアムと対峙する。

「……チ。面倒くせえなあ。退いとけ、足手まといは望む所じゃねえだろ――なあ？」

顎で示されて大人しく引き下がる彼らの意は、果たしていかなるものか。ボリスにとっては、不用意に使える人員を損なうことは出来るだけ避けたいことなのだろう。そして、ウィリアムと一対一にて向かい合う程度のリスクもまた――彼にとっては、大したことが無いのだった。その少年がそれなりに腕利きの剣士とはいえ、所詮一度は圧倒した身なのだから。

「クロエ」

「……ん」

「僕の背、頼めるか」

「……がんばる」

クロエの頬をひたりと伝う冷や汗。男を数人と相手して真っ当に渡り合うなど、とてもではないが彼女が可能とするような芸当ではない。しかし現在はウィリアムらの退路を塞ぐことを優先しているのだろう、幸か不幸か彼らはクロエの目の前に立ちふさがるがままであった。少女一人の力では、てこでも動かせないような状況――それでもクロエは、気丈に頷いてみせる。

それぞれが互いの背を預け――ウィリアムとクロエは背中合わせに、己が対敵へと向かい合った。

「ま。逃げ道なし、ってえわけだ。死ぬ覚悟は出来たか――なあ」

「死ぬまで足掻く覚悟なら」

「……窮鼠猫を噛む……よ」

「上々(くそったれ)だ」

頭部の傍らにまで剣をかかげ、ボリスはその平らな剣先をウィリアムの顔面へと向ける。

半ば糸筋のような瞳が薄っすらと開かれ、かすかな眼差しの光を覗かせた。

Ｌｅｖｅｌ４１：『Ｂｒｅａｋ　ｏｎ　Ｔｈｒｏｕｇｈ』

ウィリアムは短刀――“硝子斬りの刃”を手にして、ボリスに相対する。その刃渡りは少年の手首から先の長さにようよう勝るかどうか、といったところ。当然ながら、ボリスの構える長剣の刀身にははるか及ばない。火を見るよりも明らかなほどに、ウィリアムは――戦いにおける“間合い”において、圧倒的に不利な状況であった。

自然、刃は彼方（ボリス）より先んじて来たる。

「――ッ、は」

調息と共にバックステップ。ウィリアムが元いた場所を、次の瞬間に横薙ぎの斬り払いが通りすぎていく――魔剣の、一閃。

虚言を刻む。偽りを切る。それはウィリアムがかねてウルクから聞きおよんだ情報であったが、それ以外にも知れたことがある。いかなる術理によって起こるものかは定かではないが、その男の振るう魔導器（アーティファクト）は――ウィリアムの武器（カッツバルゲル）を切り捨てせしめた、という事実である。

ゆえにウィリアムは、短刀を以てボリスの一閃をしのぐことが出来ない。正体の不明瞭な剣撃をもたらすその魔導器は、ウィリアムにとってひたすら不気味だった。だが――だからといって、退くことはままならぬ。とっくのとうに、退路は閉ざされてしまっているのだ。

回避行動とほぼ同時、ウィリアムはすぐさま地を蹴り疾駆する。必要以上の後退は自ら死を招く行為に他ならない。前進は突貫となり、すぐさまに刺突へと転じる。少年の握る鋭刃が、真っ直ぐとボリスへ突き出された。

「ハン」

あざ笑うような声を漏らすと同時、男は余裕をもってウィリアムの刺突を左に躱す。軽いが、しかし遅いわけではない。それでもウ

ィリアムの刃は、ボリスに届かなかった。
　ウィリアムと、ボリス――ふたりは根本的に、所持する体格（スペック）が違うのだ。体格が異なれば、歩幅にも差異が生まれる。体格はそのまま、戦士としての資質を意味した。これまでばかりはいかな技術を学べども、どれほど強固な精神を備えようとも補えるものではない。体力の不足を直接的に補うことが出来る魔力も皆無となれば、これは尚更のことだった。
　そのままボリスは掌を返し、ウィリアムのがら空きの右半身を狙う。足元を起点として放たれる、切り上げの一振り。
「――あああッ！！」
　なんの意味もなしていない、獣じみた叫びが少年の喉からほとばしる。地面と接地した両足は、その邂逅に一片の未練すら残すことなく靴底を中空に投げ出させた。後方の壁際に飛び退ることで、ウィリアムはボリスの間合いから逃れながら――同時に崖上の射手の死角へと入り込む。人間離れした咆哮をともなって少年がなさしめた、一瞬の常人離れした挙動。それを認めてのことか、ボリスはわずかな合間に瞑目する。
　だが、驚きはさほど尾を引くものではなかった。
「チッ。重さを捨てたって訳だ――なあ？」
　一目で見て取れるウィリアムの変化といえば、その手に握る武器が第一に上がるに相違ない。本来の得物を破壊されてしまったがための、有り合わせの一振り。それがごくごく一般的な見方だといって間違いはないだろうが――しかし一方では別の観点も存在する。
　そもそも剣士としては小柄であるウィリアムに、喧嘩用（カッツバルゲル）の剣との相性はいかほどのものか。かの剣は少年の性に適合したものであったが、純粋に取り回しのみを比べるのならば――今その手に握られた“硝子斬りの刃”、即ち短剣が勝るであろう。それに加えて現在のウィリアムには、クロエの魔術による身体能力の向上が施されているのだ。
　ウィリアムがボリスと真っ向から渡り合うことを可能としている

現状。それはいくつもの条件が重なりあって生み出された、ひとつの僥倖であった。

「ま。関係ねえ――射てッッ」

一拍の間にボリスが刃を天にかざすと共、その命に応じて崖上より矢が弓につがえられる。

「――な」

ウィリアムの体躯は間違いなく、崖上の射手からすれば死角に位置していた。無理をすれば狙えないことは無いだろうが、夜の暗闇をともなった動的を正確に射抜くなど至難に過ぎる。ならばなぜ、誰を狙って――瞳を見開くウィリアムには驚く暇さえ与えられなかった。少し考えさえすれば分かるような、簡単なことだ。

「……ふ、ぅっ……」

聞こえたクロエの息遣いは、いささか穏やかならぬそれであった。火の壁を築き、焔を纏い。夜の帳を隔てて男たちの群を遮る娘。ウィリアムのすぐ後ろで展開される孤軍の奮戦。

たった一人のガキ、押さえつけちまえばどうってこたねえ――――そう哮り勇猛にも炎へ突っ込んでくる男へはクロエの小さな拳が痛烈に見まわれ、その身が仰け反り均衡を崩し緩やかな坂を見事に転げ落ちていく。

それはさながら圧倒しているような光景で、実際は否。こんなか細い有利など、少し横槍が挟まれただけでも容易に崩れ去ってしまうようなものだ。例えば――援護射撃の一矢でも放たれたならば。

つまりそういうことだった。

「クロエッ、大丈夫、だッ！」

一言吐いて飛び出すウィリアム――その刹那に弦より解き放たれた矢が、一直線に少女の身へと向かい来る。その無防備な背に飛来する一矢は仮に彼女がかわし切れたとしても、その際に多大なる隙を生み出すことはもはや必定。風切りの音を聞き届けた後では、すでに遅いのだ。

それを悟ってかクロエはウィリアムの言葉を受けて、ぴくりと頭

を震わせたのみ。瞬間に地へと突き立つ数本の矢、そして続けざまにその小さな後頭部へ突き刺さらんとした射撃を――割って入るウィリアムの手が咄嗟にかっさらう。

「……ぎ、ィッ」

疾風を伴ったかのような速度で撃ち出された矢。それを手袋もしていない片手で受け止めて、無傷でいられようはずもない。掌上には、一直線に膚（はだえ）が引き裂かれたような傷跡が残される。露わとなる朱肉、したたる血流。

「……あり、がと」

「礼に及ばずッ」

礼の言葉などなくとも、少年は手傷に相応しい代価をすでに受け取っていた。庇うことが出来ると明言したわけでもない――そんな状況で少年の発した、大丈夫だという不確かなな言葉ばかりで、その身全てをウィリアムに任せてくれたのだから。

全幅の信頼を寄せられ、それに応えぬ道理などあるものか。ウィリアムは傷の痛みを意に介さず拳を握りこみ、ボリスへと再び相対する。

「身体、張るねえ」

「……当たり前、だ！」

「仲良くオダブツしときゃ楽だぜ、なあ――」

ボリスは少年との距離を保ったまま、彼の身の向こう側へと視線を飛ばした。その目が見るものはウィリアムばかりではなく、戦闘の全域。十数の命を背負うものとしての責務。

「おめえら散るな、突っ込むな、固まれ。見たとこその火も大したもんじゃあ、ねえ。圧せ」

応と荒くれの威勢良い声が上がる。崩壊は時間の問題、そう予感させるには十分に過ぎる言葉だった。否が応でも急かされる状況、知らず内にウィリアムの頬から冷や汗が伝い落ちる。焦燥はクロエとても同様に違いあるまい。――間に合ってくれ、少年は心中独りごちて刃を握る力を強めた。

地を踏み締め、身を低く沈める。それはさながら獣の疾駆にも似た姿態、ウィリアムは駆け出すと共にボリスの間合いの一歩外から跳躍する。突き出された刃の狙いは迷うことなく素っ首、しかし男は戸惑いの一端すらも垣間見せぬ所作により身を後退させる。間を置かず放たれる返す刀は下段からの切り上げ、それはウィリアムの手中の刃を刎ねる一閃であった。

「ぐッ……！！」

いかんともしがたい刃渡り（リーチ）の差に零れるうめき声。届き得ぬウィリアムの薄刃は虚空を突き、まさに払い飛ばされんとした間際——着地と共に身体もまとめて滑らせることで、すんでのところで逃れてみせる。それでも、剣は空を裂いたばかりであるにも関わらずボリスは、勝利を確信したかのような笑みを見せた。

口元は三日月を刻む表情。薄く開かれた瞳は歓喜を浮かべず、まるで睨めつけるかのよう。ほのかな悪意が覗く、そればかりだった。

「詰みだ。——じゃあなあ。ウィリアム」

その言葉が意味するところは即ち、少年の背に広がる光景にあった。すでに風前の灯、ある程度の火傷など覚悟の上ならば障害にもなりはせぬ——男たち悪鬼の壁は波のようにクロエへと迫り来る。そして彼女が突破されるということは、隙だらけの少年の背が凶刃に晒されることに繋がる。

「……ウィル」

「うん」

「……私じゃ、だめ……かも」

「大丈夫。地獄篇で続行だ」

「……ばか」

ふざけた物言いをこぼしていられるような状況ではないのだが、否、このような状況だからこそか。他愛ない軽口を交わしながら、わずか十数歩にも満たない距離に迫り来る脅威へとクロエは瞳を向ける。

——極めて唐突に、その視線を遮るかのごとく、彼我の合間にな

にかが落下した。ぐしゃりと肉がひしゃげるような音を立て、そのなにかは鮮やかに地面へと叩きつけられていた。広がる血溜まり。惨劇と呼ばうに一欠片の迷いも抱かせないその光景は、ひどく現実離れしたそれであった。

「……へ？」

瞳を丸くして、呆けたような声をもらすクロエ。しかし急変はそればかりでは留まらない。ひとつばかりでは留まらずにふたつ、みっつ、よっつ。いくつも落下してくるそれは果たして何なのかと少女が瞳を細めると、その正体はすぐに知れた。なんのことはない。それはどこからどう見ても、人体であった。脳天から落下して完全に昏倒しているか、激痛に呻き名状しがたい叫び声を上げているか——その程度の個体差は見られたが、ともかくそれは人体であった。

ひひ、と悪辣な音色が崖上から響く。

クロエにとっても、そしてウィリアムにとってもとうに聞きなれた笑い声。

「よォ。悪ィな、バレねえように登ってたらすーっかり遅れちまった。生きてっか、まァ多分生きてんだろ、悪運ばっか強ェからなァ」

逃げも隠れもせず、威風堂々とエリオはそこにいた。その手には逆さ吊りの男が見え、拠所ない空中でゆらゆらと揺れている。恐らくは先刻まで崖上に陣取っていた分隊の一人であろう。はるか地を見下ろしてみれば、彼の末路となるだろう姿が山と積み重なっていた。

「た、たす……けっ」

「んじゃな」

ポイ、とエリオはその男を呵責なく投げ捨てる。男の悲鳴は幾ばくとも続かず、地面に激突すると共に林檎が砕けるような音を立てた。そのままぱんぱんと掌を払ってから滑り止めのグローブを嵌めると、エリオは弓をその手にたぐり寄せ、クロエに迫る群体へ狙いを定める。

「……間に合ったかよ！　遅いぞ、エリオッ」

「ばっか手前ウィル、オレにだって語り尽くせねえ苦労がなァ――まァいいや。行けよ、やっちめェ。クロエ、援護すんぜ」

言い終えると同時、エリオの一矢が暗闇を物ともせずに標的を射抜く。

「……うん」

クロエはウィリアムに目配せし、頷き合う。是非もなしと、互いは真っ向より群勢に向き合った。数の不利はさほど変わらないが、しかし先刻ほどの脅威は最早ない。――形勢は、既に返った。

「……腹わた煮えくり返りるぜ。分かるかよこの気持ち――なあ？」

「僕が逃げ打ったときを上回るんじゃないか」

「三人ごときの血じゃたりねえぞ」

呆れて物も言えぬ――自分の間抜けさに、とばかりにボリスは悪態を吐き出して刃を突き出す。瞳は憤怒にか半ばほど見開かれており、そしてそれにも関わらず振るわれる剣の冷静さは一片たりと失われていなかった。

いかに形勢が転じようとも、純然たる力量差は覆しがたい。真っ直ぐに飛び込んでくる刃をウィリアムは紙一重に躱し、同時に刃先を掠めた灰髪が宙に跳ね上がる。

軸足を踏んだまま身を反転させ――返礼とばかりに振るわれるウィリアムの刃が、胸元に吸い込まれるかのごとく鮮烈な弧を描く。その一閃をボリスは剣の柄で打ち、軌道をねじ曲げながら一歩、ウィリアムへと踏み込む。膂力を乗せての圧し切り。脳天から打ち下ろされるそれを防ぐすべが、ウィリアムにはなかった。

――彼自身の片腕を残しては。

「ぐ、ぅッ……！！」

「――ああ？」

魔剣の刃と骨が打ち合う。皮膚を引き裂き肉を刻み骨を削ぐ、嫌悪感を催す硬質な感触を感じながら――乗せられた重みによって腕が断ち切られるよりも疾く、ウィリアムは背に一歩飛んだ。幾許か

の距離を開け、少年は思考する。
実際のところ、すでにほとんど勝敗は決している。退路は遠くない内に開かれ、“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の大勢はその概ねが撃破されたと言っても良いだろう。壊滅させたとは言えないが、実質的な活動は不可能に近かった。そして当然、再建には相応の期間が必要とされる。ゆえに、眼前の頭目を倒しきる必然性は、存在しないのだ。
だが。
知るか。
そんなものは知るか、と吐き捨てる。
二度目なのだ。二度挑み、敗れおめおめと逃げ帰る――そのような無様を晒してたまるものか。それは少年の、少年なりのつまらない意地だった。
ウィリアムはその両足をもって地を踏み躙り、ボリスの身をその直線上に捉える。腰を低く、暗い瞳は睨めつけるようにして掲げ――短刀を順手に握りしめた。
「またその手か。何回繰り返しても届きやしねえよ、分かってるだろ――なあ？」
「分からんッ！！」
堂々と切り捨てる。己はそれほど物分りの良い人間ではなかったはずだと、聞き入れる耳すらなく瞳の奥ばかりに煌々とした光が灯っていた。
「そうか。なら先ずはその腕とオサラバだあな――そこから順繰りになます切りだ」
ボリスは少年の様子にいささか苛立ったように瞳を見開かせ、肩上に剣を持ち上げる。
瞬間、引き絞られた矢が放たれるかのごとくウィリアムの身は撃ち出された。一寸でも疾く、一歩でも近く懐へと力強い踏み込みを見せる。それは自然、ボリスに一撃を撃ちこませる隙を齎した。天上へと掲げられた刃はそのまま自然、重力を加え膂力を合わせ――ウィリアムへと、落ちる。

咄嗟。さながら繰り返しのようにウィリアムは空手の片手を打ち上げ、その刃を受け止めさせる。硬骨と刀身が喰らい合い、自然、少年の腕は両断された。そのように――思われた。

ぞぶり、と突き立つ。

より深く懐へと踏み込み、あえて一手遅らせて突き出されたウィリアムの刃――それはまさにボリスが一閃を放った間隙へと滑り込み、男の胸の中心を穿っていた。少年が手首をひねると共に刃は胸を抉り、臓腑へと至る。

「あ――あ？」

なぜ、と。真ん丸に見開かれたボリスの瞳は、驚愕のままに停止する。流れる血流に引き連れてその身にこめられた莫大な膂力が抜け落ちていき、ウィリアムの刃はあっという間に紅へと染め上げられてしまった。そんな男の様子を真っ直ぐに見据えながら、ウィリアムは深々と突き立った刃を引き抜く。滾々と溢れ出る紅い雫はもはや止めどない。疑いようもない、致命傷であった。

「勝算のある賭けに、勝っただけだ。……その剣、そもそも――人を斬るものじゃないだろう」

さながらボリスの疑問に答えるかのごとく、ウィリアムは言い放つ。

そもそも少年は、以前の戦いを経てからひとつ引っかかることがあったのだ。鋼鉄の剣を容易に両断してみせた魔剣の一閃を、ウィリアムは幾度と無く浴びた。そのはずだった。にも関わらず、ウィリアムの負った手傷は――浅すぎた。それほどの切れ味を誇る刃で数えきれぬほど斬りつけられたのだから、とっくに失血死していてもおかしくはない。にも関わらずウィリアムは健在で、おまけに半日程度の休息で戦闘すら可能な領域にまで回復したのだ。

ゆえにウィリアムは推論し、そして腕を盾にして刃を受け止めることで――推測は確信へと変わった。その言葉通り、少年は賭けに勝利したに過ぎない。

「……偽りを斬る剣に、生身は切れない。まさか使い手が知らなか

った訳じゃないだろ」
「ハ」
当然だ、と言うようにボリスはあざ笑う。それを心得ているからこそボリスも、切れ味に任せて剣を振るうのではなく、力を乗せ、押し切るように刃を扱ったのだろう。そういった弱点を勘定してもなお、一太刀によって敵の武具を無力化し得るという力は強力無比極まりないのだから。
なれば過ちはただひとつ。――ウィリアムが魔剣の特性に気づいていたことを察することが出来なかった、その一点ばかりだ。
ボリスは力を失った体をぐらりと仰向けに倒れこませて、血に沈む。
「じゃあ、な。ボリス」
「また地獄でな」
「……言い残すことは」
「……ねえよ。我が祖国(クソッタレ)があ――――」
ぐったりと倒れ伏したまま、男はゆっくりと瞳を閉ざして物言わぬ骸となる。
静かな死に様だった。

ウィリアムが周囲を返り見ると、粗方は片付いてしまった後。さして多くない健在な者たちは早々に逃げ出し、あるいは茫然自失のまま立ち尽くし――またあるものは、血盟の崩壊と頭目の死を悼むものたちであった。
「……ウィル……怪我」
「僕は腕が半分逝ったくらい。多分大丈夫だと思う……クロエとエリオは？」
「……私は、だいじょうぶ」
クロエがそう返す最中、縄梯子を頼りにエリオが崖上から滑り降りてくる。彼無くして今回の勝利はありえなかったが、当の青年自身は浮かぬ顔であった。濃厚な死の漂う湿気た空気が、彼の性には

いかにも合わないのだろう。ウィリアムはボリスの手の中にあった剣を拾い上げながら、小さく肩をすくめて「助かった」と一言礼をするに留める。

「ウィル、良いんかよ、それ」

エリオは指先でボリスの骸を示す。悪人といえどもクソッタレといえどもクズといえども、明日は我が身の同類のようなものだ――と、そういう意図だろう。ウィリアムはそれを再び一瞥すると、静かに首を振った。

「……僕らの仕事じゃあないだろ。たぶん」

「あー……んだァな」

例えばウルクのように、恐怖によって律せられていた者もいるにはいたが――決してそればかりではなかった、ということなのだろう。頭目として相応の実力と指揮能力、そして憎ったらしいが憎み切れないような人間性には、それなりの人望が伴っていたということでもあったか。

――復讐に来られたって文句は言えないな。一切の皮肉を抜きに、ウィリアムは素直にそう考えた。もちろん大人しく殺されてやるつもりなど微塵もないが、それでも殺されたって仕方がないとも思うのだ。そしてこれは、紛うことなくウィリアムの選択が産み出した結果だった。

「……ウィル……？」

ふとクロエの見上げる目と視線が合う。どこか不安げな様子には、吹けば消えてしまう揺れる灯火にも似た儚さがうかがえた。

「なんでもない、ちょっと考えこんでた。……帰るかあ」

「朗報持って帰れんだ、深く考えたってしょーがねェさ」

「……ウィル」

「なんだろう」

「……腕、すごく血、でてる」

「――ほんとだ痛ッ！？　というか骨見え痛ァッ！？」

「あー。やってる時ってすげェ脳内麻薬出てるもんなァ」

「……せめて痛みのあるうち、に」

ひひとエリオが軽やかに笑い飛ばす最中、苦悶に呻くウィリアムをクロエがいそいそと治療する。

空を仰げば、夜を切り裂く朝焼けが雲間より垣間見える。

何はともあれ当初の目的を達した三人は――ほんの一時、平穏へと帰ることにした。

Ｌｅｖｅｌ４１：『Ｂｒｅａｋ　ｏｎ　Ｔｈｒｏｕｇｈ』（後書き）

〈汝は人狼（ヌーヴェル・リュヌ）なりや〉

偽りのみを斬る刃を持つ魔剣。

偽証者、そして物言わぬ無機物に対し常軌を逸した切れ味を発揮する。

ただしそれ以外にはなまくら以下となる難儀な剣でもある。

かつて魔女狩りに使用されたという記録が残存。

Ｌｅｖｅｌ４２：『帰結のかたち』

翌朝のこと、ようようレーヌ村へと帰りついたウィリアムらが先んじてするべきことは、報告であった。三人が三人、出来ることならばすぐにでも寝床に倒れこみたいところであったが、何をさしおいても司祭サノバクへと事の顛末を告げなければ話にならない。即ち――“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の離散。指導者の死亡を火付けとする動員力の消滅、事実上の壊滅、という結果である。

「――にわかには信じがたいことだ」

老いた司祭が思わずそう零したのも無理はない。神の使いとして担がれているのだとしても、それは彼ら自身の実力とは無関係であるということをサノバクは気づいている。一介の旅人に過ぎない少年少女が三人、一個体の“血盟（クラン）”とぶつかりあって凱旋を果たそうなどとは――とてもではないが了解できることではなかった。

だがしかし、証拠があれば話は別である。

ウィリアムは手中のそれをサノバクへと突きつける。少年の体躯に比してはいささか長すぎる、一振りの刀剣。ひとたび刃を抜けば、剣先が平らであるという特徴的なその剣の正体は、たちまちに知れる。鞘の造形から見ても、ボリスが所持していたものであるということは明らかであった。それを今、ウィリアムが所有しているという事実が示す意味は――その理解に、さほど時間はかからなかった。

「……信じさせてもらおうかのう。村の者のため、一度ならずとも身体を張ってくれた君たちのことだ。皆へは私から伝えておこう。……なんなりと礼をせねばな。私たちの出来る範囲のこと、にはなるが――」

なにか、望むものはあるかね。サノバクが穏やかな声でウィリアムへと問いかければ、彼はクロエとエリオのそれぞれに視線を送り、頷きあう。そして眼前の老司祭へと、厳かに告げた。

「三日ほど休ませてください」

――至極真剣に。改めて見ればウィリアムら三人は無理な行軍と連続の戦闘が祟ってか、いかにもみすぼらしい様相となりはてていた。その表情には疲労の気色が色濃く表れ、ともすればその場にくずおれてしまいそうな程である。

そんな様子に司祭は小さく笑みを浮かべる。予想とはかけ離れた、なんとも欲のない答えもあったものだとは思うが――彼らの様子を見れば分かる通り、それが今の彼らにとっては最も望むところに値するのだろう。

「三日とは限るまい。何せ恩人よのう――程よい季節だ。収穫祭にでも顔を出していくが良い。礼は別にこちらから用意させて頂く」

有難う、と。司祭は感謝の意を大いにこめて、遥か年少の彼らへと頭を下げた。

それから三日後のこと。ウィリアムたちがもたらした報はすでに村全体へと行き渡り、その真贋については――それなりの時間を隔てても“屍肉漁り（ヴァルチャー）”からの報復行動など、一切の働きかけが無いということが一段と信憑性を強める。それが示すところは即ち、例え一時的なものとはいえども、何者に脅かされるでもない平穏な日々の去来であった。

「――にしてもまあ賑やかで。貯えとかいいのかコレ」

「……反動……みたいな感じ、かなあ」

ぽつりと落とされたクロエの呟きは、まさしくその通りと言うべきものであった。抑圧から解放された人々の反動――それは村の一画で催される、ささやかな収穫の祝いに表れる。大地の神へと礼賛を捧げるといった趣旨であろうそれは、村そのものの小ささとは裏腹に盛大を極めた。集まる人々そのものはせいぜいが百に届くかどうか、といったところ。さほど大きくはない規模とはいえども、ウィリアムたちがひっそりと身を隠すには十全の賑わいである。

秋播きの作物であるところの小麦、ライ麦を主たる供物として――人々は昼間っから大いに酒精に酔い、神に捧げる言を謳い、披露

される舞踊を楽しむ。大地への感謝を、解放から来たる歓喜を。そんな様子を人混みから外れて見守るウィリアムの気持ちは、いささか面映ゆいものがあった。

――というのも、堂々と“神の使い”などと名乗りを上げた手前だ。一介の冒険者でしかないところの少年としては、祀り上げられたとしてもたまったものではない。必然としてその身を隠しつつ顔を出すことが、いわば自明のことであった。

「酒もらってきたぜェー」

「エリオォォお前ちょっとは隠れろ！　堂々としすぎだろ！　当たり前のように飲みやがって！」

「オレの溢れでんばかりの美貌を隠し通せるはずも無ェな！」

「白々しさばっかり一級品ッスね……」

元より隠すつもりなども無く金色の髪をさらけ出すエリオの面相に、アドナの冷ややかな視線が突き刺さる。堪えた様子のないエリオの悪辣な笑みはしかし、その元気に過ぎる様にこそアドナは呆れたのかもしれない。――というのも、あれから疲労のあまりに倒れ伏したウィリアムらを甲斐甲斐しく世話したのは、まさしく彼女であった。

「私（わたす）は大したことしてないッスけどね、力仕事はウルクさんに投げたり、他にも何人か手伝ってくれたッスし。預かった留守番のついでッス」などとうそぶきはしても、存外に世話焼きの性質であるらしかった。そもそもウィリアムたちが無事に帰ってくるという保証は一切無く――ゆえに彼女には、約束を守らねばならない義理などあってないようなもののはずなのだから。

「……そういえば。ウルクさん、どうしてる……の、かな」

「僕は見てないけど――この盛況だしなあ。イヤになるほど働かされてそうだ」

「……お祭りも、また神事……かあ」

どこかしみじみとした呟きを漏らすクロエ。村に一員として生きることの大変さ、その一端を感じ取ってのことだろう。生まれてこ

のかた、自由な都市の市民として生きてきたがゆえの感慨であった。
「あー。そぉだな。折角だし探してくるか。ちぃと付き合えよアドナ」
これ持っててくれ、頼まァ――とエリオはウィリアムに醸造酒（エール）を突き出して、強引にアドナの腕を引っ掴んだ。
「えっ？　あ、ああ」
「えっ」
ウィリアムは困惑しながらもそれを受け取り、そして一方でアドナはエリオの言葉に反応する暇さえ無い。呆気に取られたかのようにぽかんと口を開くと、次第に大した力をこめられるでもなくその腕を引かれた。
「――なんで私ッスかねえ!?」
「商売話聞きつけよぉと村廻りでもしてんだろ。土地勘良くわかんねぇんだよ」
ぎやあああと繊細さのかけらもうかがえない悲鳴を上げながら引きずられていくアドナ、それに伴いエリオの姿もまた遠ざかっていく。その時ウィリアムとクロエの脳裏に、市場へと売られてゆく仔牛の幻像（イメージ）が去来したことは、果たして偶然ではあるまい。
「……どう、する？」
「流石に今の僕にあの人の波に突入する気合はないな……」
「……ゆっくり……しとこ、か」
「だなあ。祭りの空気が味わえれば、それで十分だ」
そう言って頷くと、ウィリアムは何の気無く寝転がる。道から外れて青々と茂る草原、空には燦々と輝く太陽。背を委ねるにあたっては、これで十分の環境と言えた。そんな様子を見下ろして、クロエは小さく笑みを口元にほころばせる。ともすれば久方のようにも思われた緩やかな刻――
「見つけた」
その最中で不意に、彼らの背後から聞こえる声。少女のものと思しき涼やかなそれであった。その声にウィリアムは咄嗟に身を起こ

し、クロエはゆっくりと振り返る。何者かが自分たちを探していたのか、一体それは誰なのか、そして何のために。頭の中に浮かび上がるいくつもの疑問は、しかし堂々とそこにいた姿にかき消された。短く蒼い髪。碧眼。絶対ではないが、しかし農作業に従事するものとは思えないほどに白い肌――総じて、透き通るように儚げな印象をもたらす少女。

「……あなた、は……？」

「イレーヌ、です。このたびお世話になりました」

ゆるりと首を傾げ問うクロエに、明瞭と言葉を返す娘――イレーヌ。クロエも、そしてウィリアムもまた知らぬ名であった。だが、知らぬ姿ではない。ウィリアムは数秒の間、暗がりの視線を細めて彼女の姿を繁々と眺め――そしてようやく合点が行ったように、軽く手のひらを打ち合わせた。

「……ウルクさんが、助けた……ひと」

「あの時の！」

「はい。まさしく」

あの雨の日から続く展開を引き起こした、いわば引き鉄とでも言うべき少女。恨み骨髄を一身に背負い、怨敵へと刃を突きつける――その行いそのものは決して褒められたものではないが、鮮烈な印象を刻み込むには十分に過ぎる出来事であった。ウィリアムとクロエは彼女に名乗り返し、そして問う。

なぜ斯様な行為に及んだか。ともすれば集合体そのものを脅威に晒しかねないほどの危険（リスク）を伴うにも関わらず、刃を突きつけざるをえなかったか――その理由。

「……本来は私の責務。尻拭いを。してもらって。しまいましたから――答えないわけには。いきません」

無論、ウィリアムらは彼女のために“屍肉漁り（ヴァルチャー）”を壊滅させたというわけではない。結果としてイレーヌに与したというだけのことだ。ゆえに、少年としては言っておかなければならないことが存在していた。

「正直、僕の目的は別んところにあったからな。無理に言ってくれる必要はない、と思う」
「……気には、少し、なる……かも」
「まあ気になるんだけど」
――ふたりは、無駄なところで正直であった。
イレーヌは表情の希薄なその顔に、ほんのかすかな笑みを一瞬ばかり垣間見せ、頷くと共に語りだす。彼女の父親が、“屍肉漁り（ヴァルチャー）”へと表立って叛意を唱えたこと。それが原因となって彼は殺され、所領の土地は焼き尽くされたこと。たった一人のために村全体を危機に晒すことは出来ないという判断によって、父親の仇を打つことは半ば絶望的であった――ということ。
どうにもならないのならば、いっそ死してでも。それが即ち彼女の決意であり、先日の蛮行へと至らしめた相応の理由ということになるのだろう。ウィリアムとクロエはじっと静かに、彼女の告解のような言葉へと耳を傾けていた。
「正直。未だ心残り」
「というと」
「自身の手で。かたきを取れなかったこと」
「……それ、は……」
イレーヌの瞳は伏せられもせずに、真っ直ぐと前に向けられていた。後悔はなく、後ろぐらいところもない。過ちに近しくはあるが、しかしそれと知って殉じる様な意志さえもうかがえよう。それほどまでに、真っ直ぐな――本気の眼であった。
言葉に詰まるクロエには、それを否と言うことが出来ない。大切なものを傷つけられて、それを許すことなど想像もつかなかった。似通った境遇に立たされて、果たしてイレーヌと同様の行為へ走らずにいられるかどうか。
「それは、すまん。僕が殺（や）っちまった。どうしようもない」
「……はい。でも。そうでなければ私が責任に問われたことには間違いなく」

故。その上で。ありがとうございました――と、彼女は静かに礼を落とした。

一方のウィリアムとしては、いささか拗ったいような気持ちが拭えない所ではある。がしがしと灰色の髪を掻きむしって、少年は軽く肩をすくめた。

「まあ、勢いで任せろって言っちゃったしなあ。約束くらいは守るよ」

「……覚えて。いませんでした――義理堅い人」

娘は呆れたようにウィリアムを一瞥して、そして視線をクロエに向ける。じっと見つめるようなその目に、クロエはいささか萎縮した。同じく少女とはいえイレーヌの背丈は、ウィリアムに及ぶほどではないが――しかしクロエのそれを大きく上回っているのだ。そんな彼女からあまり感情のこもらない瞳を迷いなく向けられては、恐縮してしまうのも無理からぬことである。

「よい人ね」

「……よく無茶する、けども……うん」

「お兄さん。ですか」

「えっ」

「……弟」

「ええ!?」

突っ込みどころしかないにも関わらず、突っ込みを入れる暇は見当たらない。幾許かの逡巡の後にもたらされたその答えが果たしてどういう意図によるものだったのか、それは全くもって定かではなかった。クロエの方が年上であるということへの、申し訳程度の主張だったのかもしれない。

「とりあえず血縁関係とかそういうのはない。確かに僕のが年下なんだが」

「……いわゆる、旅の連れ……です」

「――予想外」

そんな益体のない会話への一歩を踏み出しかけたところで、彼方

に見える人混みの中からはみ出し、そして外側から見れば一際目立つ一団がウィリアムらの方へと向かってくる様子が見られた。――というか、どう見てもエリオだった。散々に振り回された結果としてぐるぐると眼を回しているアドナを片手に伴い、苦笑交じりのウルクがエリオの後ろにつく。

「よォ、見つけてきたぜ――って何ぞそこの娘さんは。この短い間に引っ掛けてんじゃねェー」

「そうじゃない！」

「どこが違ェんだ」

「むしろ合ってるところが無い！！」

ひひとエリオは軽やかに笑みを吐き出すばかりである。ちょっとした冗談だ気にすんじゃねェよ――などと飄々としてうそぶきつつ、エリオはアドナの肩を掴んでがくがくと揺すった。

「オイ起きろ。アドナ起きろ。祭りだ。宴には酒がいるっつゥわけだまァ飲め。てェか飲ます」

「もうとっくに人に酔ったッス」

「……私も、飲めないし、なあ……」

身の丈が小さいぶんだけ許容量が少ないということもあるのだろう、酒精の類にあまり良い思い出がないクロエだ。彼女はそおとアドナの背をさすりながら、不意にウルクの方を見やった。

「焼けた土だけども。どうにか。なるものでしょうか」

「俺には良く分からんのですが――牧草なんかを肥料にして休ませておけば、時間はかかりますが、地力は回復していくと」

「ふ、む。司祭様も。前もって教えて下されれば良かったのに」

「それは俺も思ったんですが。イレーヌさん一人の手に余るだろうと、人手も無かったということで」

「……成る程。ではその時に。お願いします」

――なんだか生活感溢れる会話が聞こえてきた。そう感じたのはどうやらクロエばかりでは無かったらしく、同じ方向を見据えるエリオの瞳には好奇の色合いがありありと浮かぶような有様である。

「なァ、ウィル」
「なんだろう」
問い返す少年は最早、色々なことを――主に思考を――放棄したように醸造酒（エール）を傾けていた。というか、やけくそだった。
「こういうのって、なんて言うんだろォな」
「一件落着」
「……まるく、おさまる……？」
「雨降って地固まる、ッスね」
「それだわ」
――逆境にも人は耐え忍び、強く生き続ける。それは決して個人としての誇りの喪失ではない。恐れという感情は少なからずあれども、同時に村の全てを存続させるという意志が同居しているはずなのだから。
まるでその証左のように宴も半ば、人々は歓びを分かち合っていた。

Ｌｅｖｅｌ４２：『帰結のかたち』（後書き）

「で、実際どういう関係なわけよウルクさんよォ」
「俺に言われても」
「同居人以上。家族未満」
「僕では聞いてもわからん」
要するにそれはただの同居人じゃなかろうか、とは言えないクロエであった。

Ｌｅｖｅｌ４３：『生命の楔』

「そんな物で良いのかね。恩人へのそれとするには、なんとも淡白ではないか」

四人分の水に旅糧、そして数日間の宿駅代に消えるのではないかという程度の路銀。それが村の代表者たる司祭へとウィリアムが所望した褒賞であった。一通りの収穫を済ませた村は略奪などを受けていない影響としてそれなりの蓄えがあり、少々の食糧などどうということはない。加えて、村の魔術師であるイレーヌの存在があるために水の供給も十二分。それらのことを鑑みれば、ウィリアムの要求はなんとも慎ましやかなものであったが――。

「領主様に口添えしてもらってんですしね。僕にとっちゃ十全に過ぎる」

「恩に着りゃァ賊と変わんねェしな。これで帳消しだろォさ」

教会を辞する折。彼らを案ずる言葉さえ軽やかに受け流すウィリアムらに、司祭サノバクも肩を落とすばかりであった。その傍らにはひとり下働きとして、ウルクがちいさな苦笑いを浮かべている。

「あんたらは、なんというか……いや、そういう人だったな」

「含みあるッスね」

「でなきゃ、俺が無茶こいた時に横から突っ込まなかったでしょう」

「あー」

どこか納得したようにアドナは頷いてみせる。私（わたす）は貰えるもん貰っとけと思うんスけどねー、などとうそぶきながらも強気に出るような様子は彼女に無かった。そもそも自分が何をしたわけでもなし、という思いあってのことだろう。

「……俺はこの人に拾い上げられて、あんたらに救われた身だ。正直、返せる物もなんにもあったもんじゃないが――ありがとう」

そういって頭を低くするウルクの面相を、じっとクロエが見つめる。顔に何か付いてでもいたのかと思わず顔を上げれば、彼女から

向けられた返答はてんで予想外のものであった。
「……傷。少しは……消えた、かな」
傷。即ちクロエの魔術によって刻み込まれた火傷の名残。村を訪れた当初はありありと浮かび上がっていた傷跡も、今は幾許か和らいだかに見えた。それをウルク当人が日常的に意識するような機会はほとんど無いのだが、いささか痛ましいそれはクロエが気にかけたとしても致し方のないことだろう。
「……ああ。前は熱があった感じだけど、今はそれも無いよ」
「よかった。……お元気で、いて下さい」
それがなによりと、クロエから彼に送る言葉の締めくくりとする。これまでよりも、これからを。——かたじけない、とウルクは改めて礼を落とした。
「まァ、生きてりゃどっかで巡りあえんだろォよ」
「巡り会ったらだめだろ!?」
「……それ、放浪してる……」
湿っぽい別れにするつもりもない。まるでいつも通りのような言葉を交わしながら、しかしサノバクに達者でな、と受ければ彼らは応と答えたろう。豪華絢爛でもなければ、壮大でもない。しかし壮健であれと、それは穏やかな旅立ちの朝であった。
——とはいえ。
ウィリアムたちにはまだこの村にやり残したことというものが存在しており、そのひとつは彼らの眼前に今、堂々とそびえ立っていた。それは村のはずれにでも位置するかという山林に程近い立地でありながら、領地内において最も立派な建築物といって間違いのない代物——即ち、領主の館。山へと鷹狩にでも赴くことを考えればこその立地か、そして入り口には待ち構えるように警備の門兵が二人。
「……通して、もらえる、かな……」
「どうだろうなあ……」
「正直、怪しいッスね」

領主への直談判。遠征に送り出されている騎士を領地内に差し戻すための交渉。これ無くしては、ウィリアムたちが賊を排除したことも無駄足のようなものだ。一個の人間の集団、“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の解散は結果として――魔物の台頭という事態を引き起こす可能性が、存在するのだから。

もっとも、そのような問題の発生はウィリアムにも容易に想像が付くこと。ならば前もって対策を講じない理由はない。そして手っ取り早い問題の解決のためには、領地を守護する騎士の存在が必要不可欠なのだ。

「侵入して脅しかけても保証が無ェしなァ」

「まあ。そのために口添えしてもらったんだ――まずは行ってみよう」

思い悩むよりも先んじるは行動。それがウィリアムの基本的な行動原理である。当たって砕けたとして、問題は砕け散った後で考えれば良いのだ。そういうわけでウィリアムらは姿一つさえ隠すこと無く門兵の前に堂々と現れ、そして出会い頭に第一声。

「済まない。僕はウィリアムという者だが、領主殿にお会い願えないか。司祭殿から話が行ってるはずなんだが」

「申し訳ないが、そのような話はうかがっていない。何者も通すこと許すなと」

――なんたることか。第一の関門さえまかり通らずに追い返されるこの扱い、出鼻を全力でくじかれるような仕打ちにウィリアムはいささか面食らった。だがここで退いては話にもならない。食い下がる余地を必死にあぶり出そうとしているところで、傍らのクロエからひっそりと援護射撃が放たれる。

「……私たち、フィアーノ様の使いの者、で。どうしても、お話しなければいけないことがあって……本日、参らせて頂きました」

神の威名を利用するという食わせ者の一言であった。“何者も”と言った手前であれ――信仰心を逆手に取った言葉、これを無碍に退けることは容易なことではあるまい。目の前の門兵は、しかし常

備軍でもなんでもないのだ――他の農夫たちと同様、土を耕して生きるこの土地の人間に過ぎない。豊穣の神という明確な信仰も同じく持っているに違いないと、クロエはそう踏んだ。

「……ならば、証明してみせるのだな」

返された言葉は、当然といえば当然。しかしそれは同時に、証明しさえすれば入門を認めるという言質にもなり得た。クロエはちらりとウィリアムに視線を送り、少年はそれに応え頷き――背に携えていた長大な剣、その刃を一息に引き抜いた。大剣と称するに差し支えない一振りをその手に握られ、ひとたび場に走り抜ける緊張。しかし刀身を晒したまま斬りつけるでもない様子に、門兵らは顔に浮かんだ警戒をにわかに和らげる。

「……それは」

「フィアーノ様より直々に賜った一振り。即ち御神刀だ。それを証する術はないが、一介の破落戸の持ち合わせとも見えんのではないか」

――まあ僕自身は一介の破落戸みたいなものなんだけど、とは言わなかった。少なくとも、豊穣神より賜った一振りであるということは間違いのない事実である。アドナに保管を頼んだ際、考慮に入れていた“使い方”とは正にこのことだった。言うなれば神の威光の象徴。精緻な造りの刀身が帯びた神性、果たして彼らがそれに影響されたかどうかは定かではないが――問いを投げかけた門兵は頷くと、静かにウィリアムの申し出を承服した。同時に彼が邸内の案内を努めるかたちで、ウィリアムたちを先導していく。

「正直なところ、特別に言い含められていてな。誰かが来るかもしれないが、通さんようにと。まさか噂の“神の使い”とは思わなかったが」

案内する途上、門兵の男はほのかに柔らかみを帯びた調子でウィリアムらに語りかける。その言葉は、村内でのウィリアム達に対する印象（イメージ）のようなものをいくらか想像させた。話の中ではおそらく、個人としての特徴は廃され――“神の使い”という点が大きく取り

上げられているのだろう。それは結果として、間接的にフィアーノへの信仰心を強めることにも繋がるのだ。

「はァん。んじゃ、サクッと通しちゃマズイんじゃねェのか」

「……罰則、とか。……大丈夫、です……？」

「神に叛くよりかはマシさ」

――罰は今一時のことだが、豊穣の喪失は永劫だ、そうだろう？

何気ない調子で紡がれた言葉が即ち、根付いた信仰の力強さをそのまま意味していた。彼はやがて通路の突き当りとなる部屋の前で立ち止まると、その身を脇に退けてウィリアムたちへとその先を示す。本来は何者を通すことも許されていないという言葉通り、自分はこの先には行けないということなのだろう。

ウィリアムは男に礼を言い、一歩。

――ここからが、本番だ。扉の前に踏み出して、観音開きのそれに手をかける。

「……何者だッ」

戸の向こう側から聞こえてきたのは、こちらを歓迎する声とは全くかけ離れたものであった。その言葉をかき消すかのように勢い良く扉を押し開くと、遠慮はなしに室内へと踏み込んでウィリアムは高らかに名乗りを上げた。

「ウィリアム、クロエ、エリオ、アドナ。一同、豊穣神フィアーノ様の使いの者。此度は尋常に話をさせて頂きたく参上した次第だ！」

多少の無礼は承知の上。元より本陣に乗り込んで取るもの取ってやろうという腹なのだ。そもそもウィリアムらに「何者か」と問われて満足に返すことの出来る身の上の証明など存在しないが――今に限っては、可能だ。領主と相対して対等に話すことの出来る力が、神の名にはある。

「……用件を、聞こう」

静かながらも重々しい声。そこでようやく、ウィリアムは相対する相手の姿を捉えた。領主という相当の地位でありながらに、若い男だった。当然ながらも警戒の色を隠さない視線は、釣り上がった

切れ長のそれ。やや線の細い男の様相は、同時に神経質そうな印象をうかがわせた。

以前にサノバクから聞きおよんだことだが、彼は――賊の略奪という危難に際して、出来る限りの減税を行った男だという。それを鑑みれば、少なくとも愚鈍ではあるまい。即ち、話の通じる相手だ。話で――片付けられる相手だ。

「領地の守護を騎士の者へ委任して貰いたい」

単刀直入に、要求をぶつける。小細工も何もない。しかし、決しておかしくはない――要求そのものが、本来はわざわざ求めるようなことですらないという一点を除けば。

「賊――血盟“屍肉漁り（ヴァルチャー）”の行い。これの看過は道理に叛く。故、今後の同様の事態は阻止しなければならない。それには防衛の兵力を要する。……土地の守護。それを“土地の神の使い”として此方は要求する」

――捲くし立てるような勢いで言葉を並べ立てる。それを静かに聞いていた眼前の領主は、さして間を置かず口を開いた。

「……受け兼ねる。いえ、可能ならば私としても行わなければならないことだ。だが、出来得ぬことをおいそれと引き受けるわけには行かない。現に騎士たちは――」

「本国へと遣わされてる、と？」

つとめて理性的に、男が否定の理由（わけ）を述べているところへ――アドナの言葉がするりと割って入る。そして、彼が「そうだ」と答えかけたところを遮るかのように、アドナはすぐさま二の矢を放った。

「迷宮探査任務（ダンジョンクロウル）。――アレには今、一般に探索者を募ってるらしいッスね。無理に領地の騎士を遣わすわけが見当たらないッス。まあ、王の迷妄ってことも万が一ありえるかもしれないッスけど」

反論を差し挟む暇すらなく。加えて、とアドナは続けざまに言葉を打つ。

「“稲穂（イースト）の国”の王に、そんな強権は振るえないはずッスよ。この国に冒険者ギルドは敷かれてないッスからね。さしたる武力がない。

だからこそ一般に募ってるってのもあるんッスけど」

ゆえに導き出される結論。騎士の遠征そのものは何のこともない、国の命令などではなく――眼前のこの男、領主の独断によるものではないか、と。アドナは真っ向から突きつける。れっきとした証拠はないが、否定することも困難。事実として騎士が遠征に出ている以上、あるいはそれが証明とすることも不可能ではないだろうが――

半ば隠しもせずに、男は口端に小さな笑みを浮かべる。

「……少々の期間を有する。だが、領地の守護に当たらせることは約束しよう」

危険な迷宮の探査に騎士を遣わせる理由。思い当たる理由といえば、功績を上げさせて権力者に取り入るといったところが狙いか。いずれにせよ下衆の勘繰りであり、それを問うことはウィリアムはしなかった。彼の承服に頷いて、そして同時に少年は言葉を返す。

「それともう一つ。個人的な話がある」

指を立ててそう言うウィリアムに、領主は眉根をひそめる。色濃くなる疑問の色合い。しかしそれはむしろ当然のことで、“神の使い”などというものが“個人的な話”を切り出すことがおかしいのだ。しかしウィリアムは、そんな自己矛盾を意にも介さない。否、本題はすでに済んだことだ。だから、ここからは――“神の使い”の仮面を捨て去った、ウィリアム自身の言葉だ。

――勘繰りはしない。それはしない。しかし眼前の領主が、上昇志向だの功名心だのを抱え込んだ俗人であるならば。ウィリアムは、彼が“そう”であることを大いに望んだ。

その表情に悪童の笑みを浮かべて。

「――僕たちを使ってみないか。迷宮のひとつくらい、根こそぎさらってやれるぞ」

求めるもの。

領地へと帰還する遠征の騎士、その代理としての地位。

「クソみてえな話し合いだったッス」

「クズ揃い踏みみてェなもんだな」

「クズだのクソだの散々だな！　領地の騎士として行ければそれなりの信頼があるわけで支援が受けれるかもしんない、向こうはこっちが良い働きすりゃ部下の功績が認められて地位向上にも繋がるかも、当初の目的は達成したで良いとこ尽くしだろ！」

あくまで。結果だけを言うならば、ウィリアムの言う通りであったといえよう。当初の目的であるところの要求は認められ、領主――名をレーヌ伯とする――には悪辣な笑みと共に半ば意気投合したという結末が付随した。一言で言えば、始末に負えないといったところか。

法も権利もまともに存在しないこのご時世、一個の人間などなにものでもない。

――自分というものを立てる術のひとつ。ウィリアムにとっての身分や地位とはその程度のものだが、かの領主にはそれをはるかに上回る執着が存在していた。あるいは今“持っている者”であるからこそ、しがみつくのか。

「……じゃあ、やっぱり次は、首都のほう……かな」

「僕としてはそのつもり。迷宮行くにせよどうにせよ」

「……あぶなそう、だったら……？」

「もちろん逃げる」

即答である。いっそ堂々とすらしている命優先の決断には、しかしクロエはいささか安心したようにほうと息を吐く。安全度外視の無茶がしばしば飛び出すからこそ、基本的な姿勢が逃げ腰であることはかえってありがたいのだ。

――そしてもうひとつ。最後にやらなければならないことが存在した。それは即ち、騎士による領地の守護という要求が正式に履行されているかどうか。それを確認する術はウィリアムらにはなく、よって第三者による監視の目が必要だった。そしてそれは、出来ればレーヌ伯と対等な立場である方が良い。そう考えれば、頼める相手は自然と絞られる――即ち、フィアーノであった。どうせ彼女に

は“魔導器（アーティファクト）”を返却しなければならないのだ。
しかしここで、困ったことが発覚する。
フィアーノの居所など、四人の誰一人として知るものはいなかったのだ。
「オレが見つけた時は、なんか、入会の湖？　で寝てやがったけど」
「……あんまり、ありがたみ、ないなあ……」
「他の時、だいたい向こうから勝手に来てたんスよね……」
――そんな経緯で四人は、山林の奥深くを延々とさまようという事態に陥っていた。なんたることか。とっくのとうに領地を出てしまっていても決して不思議ではない。そしてその場合は、結果的にとはいえ御神刀を見事なまでに盗んでしまっているわけだから、罰当たりにもほどがあった。
未だ日中ゆえに太陽は高くも、このまま夜を迎える羽目になると少し危険か――そんな風にウィリアムが空を見仰いだ、その時だった。
ぬう、と少年の視界を一挙に遮る影。さながら木陰が間近に迫り来たかのよう。驚愕にびくりと見開いた瞳が、その正体を視界いっぱいに見止める。伸びっぱなしにも関わらず鮮明なブロンドのロング、湖面のように透き通った双眸。
「……神出鬼没すぎるぞ、おまえ」
さながら背後からウィリアムへと被さるように現れた、フィアーノの姿であった。身体に触れてこそいないが、それでも並々ならぬ圧迫感を感じるほどの巨躯。思わず歩みも止まろうという存在感に、他の三人も一斉に振り返ってしまう。
「やあ。ずいぶんと働いてくれたみたいだねえ――御苦労さま。働きに報いてぼくが直々にお礼をいってあげよう」
ありがとう。と、物言いは神を名乗るだけ尊大ながら――人と向き合い言葉を交わす人間臭い彼女は、相も変わらず前触れもなしに現れた。ウィリアムはまずもって、働きはしたけどその後始末までは請け負えないから、騎士がちゃんと働いてくれるかどうかなんて

のはそっちで監視してほしい――といった旨を伝える。
「いいよ。方法をまかせたのはぼくだからねえ――そこはきみたちの裁量で、最良であったと、ぼくは考えるよ」
フィアーノはにっこりと笑みを湛えて、それを承服した。
――最良。果たして僕の手段は、選択肢の中でも最良と呼べるものであったか。他にやりようがあったのではないか。“屍肉漁り（ヴァルチャー）”を物理的に押しつぶすまでもなく、事態を収める手段。
そんなウィリアムの懊悩も、知ってか知らずか。フィアーノは裸足のままずんずんと山林を先導するように歩み、指先で一方の方角を指し示した。
「ここを真っ直ぐいくと、そのうち首都につながる道が見えるんじゃないかなあ。行くんだろう？」
「……もちろんだ」
「っつぅわけで土産か餞別かなんか頼む」
「最後までふてぶてしいッスね！」
アドナ、愕然。物怖じせずエリオが突き出した手のひらに、しかしフィアーノはそう言うと思ったとでも言うかのような周到さで、その掌上になにかを握りこませる。
「――なんだコレ」
「……種、かな……」
エリオが手のひらを広げると、そこには容易に目視出来る大きさの種が乗せられていた。それを見たクロエは、しきりに首をかしげている。一端の薬師であるクロエは植物の知識に長けているのだが、その彼女をしても正体の掴めないもの。
「なんの種よ」
「それはねえー。ぼくの……あ、やっぱり乙女の秘密」
「うぜってえな！？」
んなもん良いから剣くれよ！　などとのたまってみせるエリオは中々に剛毅であった。
「そうだ、剣を返してもらわなきゃねえ。いや、別にきみたちが持

ってもぼくはいいんだけどさあ」
「いいの!?」
御神刀であるにも関わらず適当すぎる扱いに、思わず涙さえ零れそうになるウィリアム。とはいえ貰えるのならば儲けものであると、フィアーノに差し出しかけた“魔導器（アーティファクト）”をそのまま腕に抱える――が。
「いいけど、呪われるよ」
「具体的には？」
「物理的にこの土地から離れられなくなる」
「返します」
「それがよい！」
――元より窃盗など不可能だった、というわけだ。思わずエリオはがっくりと肩を落としてしまう。
「実際、きみら、それ持ってるせいで出られなくなってたからねえ。ぼくが出ていかなきゃずーっとこの辺をぐるぐる回ってるんじゃないかとひやひやしたよ」
「もちっと早いとこ言えよォオオオ」
怨嗟に似た声を吐き出すエリオに、フィアーノはにこにこと気の良い笑みを返す。そのあまりにもあんまりな曇りのなさが、しかしどこか憎めない姿でもあった。フィアーノは剣を受け取ると共、ゆったりと四人に向かって居直る。
「言ったろう。ぼくはこの地を呪う神（まじな）。土地に生きる人々を土に縛り付け、離れることを許さない。道に宿駅も出ていないことを不思議に思わなかったかい？」
そういうこと、とフィアーノはうそぶいた。ならばこそ、人の迷い惑う姿を眺めるのも彼女にとっては一興に過ぎなかったか。ハー、とエリオなどは思わずため息を勢い良く吐き出す始末である。
「……ちょっと待てよ。そいつは僕らも出られないんじゃ」
「――大丈夫さ」
ウィリアムの困惑を、しかしフィアーノは打ち消すように遮って

言う。
「ぼくの呪いは地に足つけて生きる人へのもの。――――きみたちのような“渡り鳥（たびびと）”には、届きはしないよ」
直接持ってでもいない限りはねえ、と言うその相貌にいっぱいの笑みを浮かべるフィアーノ。
それはどこか儚くも見え、吹き抜ける風に揺らぎ、舞い散る青々とした木の葉にかげる。
――じゃあね、という別れの言葉がどこか遠くに聞こえていた。
一行が視線を戻した時、眼前にいたはずの姿はすでに無い。……別れも聞かずに、と零れたクロエの言葉も道理であったか。まさに神出鬼没と言わざるをえない有り様に、ウィリアムは思わず肩をすくめて呟く。
「――行くかあ」
「んだァな」
「……うん」
「……道、大丈夫なんスかねえ」
なんとかなるだろ、笑って踏み出したウィリアム達の目の前。
切り開かれた森林の向こう側には――広大な世界が広がっていた。

Ｌｅｖｅｌ４３：『生命の楔』（後書き）

〈生命の楔（セフィラー）〉
剣の形状をした魔導器（アーティファクト）。
剣ではなく、人を縛り付けるための呪具。楔。
呪いは一個の領地を範囲として強力に作用する。

「くそ、くそ、なぜ、この私がッ――」

私が、どうして、こんな事態に陥っているのか。無為以外のなにものでもない怨嗟の呟きを吐き出しながら、男は瞳を険しくする。兜に鎧（よろ）われた金色の頭髪は、いささかならず薄汚れて惨愴たる有様だ。毒づきもしなければやっていられない状況。苦し紛れに見回した四方は、まるで捌かれた獣肉の断面がごとき薄紅の色合いの――肉壁に囲われていた。

肉壁の、小部屋。それはさながら魔物の体内のようであると例えられよう。明らかに建築構造物として適当でないにも関わらず、肉壁はわずかな蠢きを見せながら依然としてそこにある。

「……ルーファン殿。じきに扉が破られます。このままでは、わたしたちも」

「分かっているッ。分かっている、分かっているがッ――」

金髪の男。ルーファンは最後の生き残りである部隊（パーティ）の同朋、白の法衣に身を包んだ若い宮廷魔術師の女を一瞥してから――肉壁に縁取られた木製の扉へと視線をうつす。扉はひっきりなしにみしみしと軋みを上げながら、否が応でもその崩壊を予感させた。

そして室内に、扉はそのひとつしかない。それが意味するところは――袋小路の手詰まり。

「……覚悟を。決めましょう」

女――ニアはココアのように柔らかな色彩の瞳を険しく狭め、その懐から探り当てた石を取り出す。彼女の指と指の間に収まるほどの、ほんの小さな鉱石。それは海の色彩にも似た光を照らし出して輝く――結晶（クリスタル）であった。

「……転移結晶（ワープクリスタル）か」

「はい。……既に撤退を余儀なくされる状況であると鑑みます」

「……馬鹿ッ、なぜそれを早く使わなかった！　ならばこれまでの

犠牲を出さずに済んだものをッ！！」

彼女の言葉に、ルーファンは反射的に食ってかかる。金色と、ブラウン。互いの頭髪が重なるほどの距離だ。着衣の襟首を掴み上げ、怒りの表情を露わとする様には――そう、かつてウィリアムと相対した彼が浮かべていたような余裕は、微塵も見当たらなかった。

ルーファンとて、自分の物言いが理不尽であることは理解している。脱出手段のひとつとして、彼女は前もってルーファンにその道具のことを説明していたのだから。後先省みぬ逃走という選択肢を、ルーファンは選ぶことが出来たはずだ。それを選べなかったことにはいくつもの原因が存在するだろうが――しかし、もはや悔やんでも悔やみ切れない。

「転移術式の起動に、その都度の時間を要するのです。時間は三分。独断でこれを使用しなかったことは――わたしの失敗でした」

搾り出すように吐き出される彼女の言葉を、ルーファンは項垂れてただ受け止める。三分。この一室にとどまって、一分は経過しただろうか。ならば残り二分という時間をどうやって生き延びるか。ぎしぎしと表層を膨らませながら軋みをあげる扉は、とてもではないが――それだけの時間を稼いでくれるとは思えなかった。ルーファンはその脆弱な防壁を厳然と睨めつけながら、呟く。

「……すまない。取り乱した。これは、私の落ち度だ。――だが、どうするね。天にでも身を任せるか」

「敵を、おさえますっ。一分半。それがわたしの限界でしょう。ですから、この結晶はお持ちください」

そう言ってニアは、間近に詰め寄っていたルーファンの手のひらへと結晶石を押し付ける。彼女の言葉には、一片たりとも迷いというものが無かった。自らの命を捨てても良いと、呆気無く言ってのけてみせた。いったい、何のために。まるで意図というものが掴めないルーファンに、しかし構わずニアは言葉を続ける。

「外来の騎士殿に命を捨てられては、わたしにも立つ瀬がありません。――ご安心を。この身はすでに我が祖国（イースト）へと捧げたものゆえ」

どうか御報告はお任せいたしますとだけ告げて、彼女は扉へと向き直る。そしてルーファンが何らかの言葉を吐き出すよりも早く、崩壊の時は訪れた。考える余裕など一時たりとも与えられることなく、ルーファンは咄嗟に身を退く。瞬間、崩れ去った扉から染み入り小部屋へとなだれ込んでくる――――粘液状怪魔（スライム）の群れ。

「――停止（とまれ）！」

同時に振りかざされるニアの杖より迸る極寒の冷気が、怪魔を瞬間的に凍てつかせる。迫り来る群生へと振るわれる氷爪はゼリー状の化物へと有効に作用し、彼らの動きを停滞させる――が、それはあくまで表層だけの話だ。彼ら（スライム）は一個の化物ととらえるよりも、複数の魔物が寄り集まったものと認識するべきである。一個が即ち群生の魔物であり、例えば凍氷が表面を凍りつかせたとして――その内側に胎動する幾つもの怪魔ことごとくを完全に停止させることは、極めて至難と言えよう。

そしてこの怪魔は、一体のみでも十二分な脅威であるというのに――今、群れをなして襲い来るという絶望。

「……なんという、ことだ」

氷点下の衝撃波が怪魔を停滞させては、それを押し返すために次々と襲い来る粘液の波。魔術を行使することが出来ないルーファンは、ただその様子を眺めていることしか出来ない。怪魔には斬撃を筆頭とする物理的衝撃が、ほとんど通用しないといっても良いのだ。何も出来ないという無力感を噛み締めながら時が過ぎるのをただ待つ時間は、まるで地獄のように長い。否――地獄そのものだ、とルーファンは思う。

――こんな地獄に居続けることは一時たりともままならぬ。

ルーファンは衝動的に、脳天を覆い包む兜を地面に叩きつける。そして身に纏った鎧の留め金を外し、これもまた捨て去るかのごとく無造作に床へと落としていった。眼前の怪魔を相手に重苦しい鎧など棺桶も同然である、そう考えても決して無理からぬ戦況だ。

「――ルーファン殿ッ！？」

突然の予期せぬ行動に、ニアは慌てた声をあげる。咄嗟に振り返った瞬間、彼女の身体が地上から浮かび上がった。――なんということはない。ルーファンが彼女の背後からその身を抱え上げたという、ただそれだけのことだ。刹那、魔術による妨害が消え去った結果として怪魔が津波のごとく小部屋へと押し寄せる。ルーファンはぶよぶよと奇怪に弾む地を蹴り、その上空を、飛んだ。

「――ルーファン殿ッ！　若し貴殿が亡くなられては、一体誰がこの内情をお伝え」

「私の立つ瀬も、あったものでは無いだろうッ！？」

「な」

その口は驚愕に開かれたまま。二の句も継げぬままにぱくぱくと唇を震わせる彼女をよそに、ルーファンは着地して一本道の通路を駆け出した。

「ただでさえこの田舎くんだりまで流されてきたんだ、私は！　おまけに部隊丸々損失の被害を出して、おめおめと逃げ帰れだと！？　私の出世街道はどうなる！　くそッ」

「……それはすでに手遅れでは」

「くそ！　なぜこの私がッ」

――ウィリアムの捕縛という任において失態を犯したルーファンが果たしていかなる数奇な運命を辿ったかは定かではないが、どうやら穏やかならぬ人生を送っていることは間違いが無いようだ。溜め込んだ鬱憤を漏らすように悲痛な叫びを吐き出しながら、ルーファンは行く。背後に迫るは無数の怪魔。幸いは彼らが粘液状であることに相応しく、極めて鈍重であるということだ。

「ルーファン殿、そこは」

「承知の上ッ」

通路から開けた広間に出る、その境界線。一見して何もない床をルーファンが飛び越えると同時、一点の床が前触れ無く穴を開けた。底にはいくつもの杭が仕込まれており、落下したものは例外なく串刺しになるという仕組みである。この仕掛けをルーファンは知って

いた。――先刻、部隊の一人がこの罠の犠牲となったからだ。
程なくして天井にも穴が開き、そこから一気呵成に流れ込む怪魔が落とし穴へと蓋をする。念には念を入れた仕掛けであった。一度起動したはずの罠が自動的に復活している以上、この迷宮（ダンジョン）内部には人智を超えた力が作用しているに相違ない。
「――今の落とし穴にはまってくれんものかね」
「なりません、穴がいっぱいになるまで怪魔（スライム）が流れこんでますので」
「そうか」
ルーファンは苦々しく息を吐く。背後の警戒はニアに任せ、急ぎで周囲を見渡した。ルーファンの手持ちには、一枚の地図がある。彼の部隊に先んじて迷宮に乗り込んだ国の先遣隊が調査し、この迷宮内の地理情報を記したものである。
しかしルーファンは――前もって覚悟していたとはいえ――予想以上の衝撃を受けた。この地図は、まるで役立たずだ。低位階層では多少の面影を残していたため、多少は信じてしまっていたことがより傷を深めたのだろう。高位階層に至れば地形は半ばでたらめで、罠の所在もてんで見当はずれ。おまけに存在しないはずの宝箱（えさ）が転がっていたりと、何者かの作為すら感じられるほどの異常。一時は地図の誤りという考えも過ぎった。些少の変化であるならば、幻惑などの術に寄るとも考えられた。しかしそれらの可能性はすでに無い。
この迷宮（ダンジョン）は、自律して内部構造を変化させている。
それが厳然たる事実であった。
「頼れんどころか妨げだ、くそッ」
広間を横切るように駆け抜け、再び通路へと滑りこむ。とにかく時間をかせぐためには、立ち止まるわけには行かなかった。しかしこの迷宮に、安全などというものは存在しない。罠。罠。罠に次ぐ罠。一度の過ちが即ち死亡へと繋がる地獄。針山、火炎、毒煙、怪魔、強制転移による人員の孤立――そして。
魔物。通路を塞ぐかのように立ちはだかる魔物だ。ルーファンの

目の前に現れたそれは、肉塊の怪物とでも称すべき奇妙な不定形生物である。色彩は迷宮内部の外壁を織りなす薄紅と同等、つまりは同一の素材によって形作られた造魔と推測し得よう。ルーファンは片手に握る長剣を遮二無二に突き刺し、切り払う。

吹き出す赤黒い血流。ふたつに分かたれた化物は、しかしそれぞれに独立して計二体の怪物へと変じた。

「……馬鹿な」

分裂しながら通路に立ちふさがる魔、そして次第に背後より迫り来る怪魔（スライム）。通路になだれ込んできた彼らにより、一切の退路は塞がれた。行くも退かぬもままならぬ今、果たして出来ることは――

「――停止（とまれ）ッ！」

詠唱。言の葉を伴い現界する氷結の具現。一切の細胞活動を停滞させる氷の魔術に、塊の怪物が動きを止めた。戸惑う間もなく氷塊と化したそれらにルーファンは刃を叩きつけ、その生命活動を完全に断ち切る。もはや分裂は、しなかった。背後の怪魔は、すでに間近。距離を広げんと地を踏みしめた瞬間、ルーファンは目を見開く。

男の足元が、床へと沈み込んでいた。――まるで肉の沼に飲み込まれるかのごとく。

「……ルーファン殿ッ！！」

足を取られるがごとく前のめり。そのままの勢いで投げ出された彼女は、まさに怪魔に覆いかぶさられる直前のルーファンの姿を目の当たりとする。その刹那、男の手からニアへと投げ放たれる輝きがある。――転移結晶だ。

三分。転移術式の起動に課せられた、その時間は目前のはずだった。

時間を無限にも感じられた経験は、これまでに一度とも無い。

「行け」

「――然しッ」

「部隊全滅の責務は私にある。返り咲きの目も既に無い。いささか、疲れたよ。……行け。私と最期を共にする義理はあるまい。だが、

この惨状を国へと伝える義務はあるのではないかね」

間に合えと念じるかのようにニアの手に握りしめられた結晶石は、しかしいまだ反応を示さない。『停止（とまれ）』といくら唱えたとて、後から後へと次々に押し寄せる怪魔の軍勢を押しとどめることはままならなかった。無機質な怪物は、一片の容赦すら無く無慈悲にルーファンの身体を押し包み――最期の言葉すら飲み込んで、男の肉体を融解する。

ニアはぐしゃりと目元を法衣の袖で拭い去り、駆け出す。数秒の後、結晶を源として溢れ出す光が彼女の身体を包み込み――転移術式が、起動した。

訪れる静寂。後には遺骸すら残らず、全ては飲み込まれ迷宮の一部と化す。

――真の脅威たる高位階層に至ってしまったがため、彼女の報告は迷宮の危険性を大々的に広めることとなる。

飽食塔。

それがこの巨大迷宮の名であった。

王都『モースモール』は二重の城壁に囲われた“稲穂（イースト）の国”の首都である。おふれに誘われた無法者を無秩序に受け入れることを避けるためか、入国には一定額の税金が要され、宿泊先などを届け出るようにとのお達しがなされたが――いざ入ってしまえば、そこは活気盛んな商業都市が広がっていた。その規模はかの城塞都市を大きく上回ると言って構わないだろう。

「……なんだかんだで、此処まで護衛してもらっちゃったッスね。ありがてえこってス」

無事に到着し得たという感慨も相まってか門前、大きく息を吐きながらアドナは呟く。一人とて欠けること無きウィリアムらの到着である。とはいえ森を抜ければある程度は道が整備されていたため、半ば安全の保証された旅程ではあったのだが。

「僕らも鑑定だの案内だの頼んだしなあ。持ちつ持たれつだ」

「ついでに城下の方の案内も頼めねェ？」
「正直、広くてあっちゃこっちゃに店あるせいで、私（わたす）も良くわからないんスよねー……いくつかの地区に分かれてて、宿とかいろいろは此処――商業地区に集まってるんで、とりあえず不自由はしないと思うッス」
ぐるうりと辺りを見渡せば目に入るは道を行き交う人々。昼間ともなれば人の流れは絶えること無く、ちらほらと鎧――重装、軽装を問わず――に身を包む者の姿もうかがえた。おそらくは自分たちの同類といったところだろう、とウィリアムは大雑把にあたりをつける。
「……そういえば。アドナさんは、宿、なんかは……？」
「私は見習いの身ってことで、お師さんの店の方に厄介になるッスよー。手伝いの身ッス」
かくり、と首をひねるクロエに何気ないアドナの答え。どっか行く時は一声かけてって下さいッス、と軽い調子でうそぶきながら彼女は一歩踏み出す。
「そんならここまで、だァな」
「またご贔屓に、ッスよ」
「うん。またな」
どうせまた会うこともあるだろう、と。永き別離が想定されるわけでもないことを考えれば、それは実にさっぱりとした別れである。数少ない同年代にして同性の同朋であったためか、ぱたぱたとせわしなく手を振るクロエにはいささかならず寂しげな表情が浮かんでいた。――とはいえども元より決まっていたこと、立ち直りにそれほど時間のかかるものでもない。何せやらなければならないことは、目の前にいくつも立ちはだかっていたのだから。
先んじて為すべきは、ウィリアムの武器を新調することである。金子が滞りなく手持ちに残されている以上、これを使わない手は無かった。レーヌ村にて頂戴した分が残ってはいるものの、当面の食糧や水分などもいくらか補充しておくに越したことはあるまい。こ

れら買い出しの類はウィリアムとクロエで済ますこととなり、では残されたエリオは何をするのかといえば、決して怠けていたというわけではなく――前述した準備に負けず劣らず重要な必須事項が存在するのだ。

諸々の雑事を済ませ、夕時。三人は前もって取っておいた商人宿で落ち合うことと相成った。室内での夕食を挟みながらの相談の刻限である。

「――取りあえず僕のほうからなんだが」

「そォいや、何も買ってねェのん。それっぽいのさげてねえけど」

「いや、注文するにはしたんだ。両手大剣（クレイモア）。ほんとは雑種剣（バスタードソード）のが良かったんだけど、僕には無理そうだ」

「……製造直売の、職人さん……だった、みたいで」

付け加えられたクロエの言葉に、あァ成る程な――とエリオは相槌を打ちながらエールを一口する。

「ちゃんとしたもん作って貰った方がいいだろォよ。鎧なんかは大体がそうだしな」

「……そう、なんだ……」

「全然知らなかった」

「変なとこで世間知らずだァな……まァ、クロエにゃ縁が無ェこったろうし当然か」

「鎧なんか仕立てる金があった覚えは一度たりともないな！」

「自慢できねェよ！」

仕切り直しの意味でエリオは酒精混じりの息を吐き出して言い切る。クロエは何やら口にしたパンの柔さに目を見開いていた。その表情に浮かんだものは紛れも無い驚愕と至福である。なんとも言いがたい温さを覚える光景に気も緩みかける所を押さえ付けて、エリオは口を開く。

「じゃあ、オレの方から――ここらの情報、情勢なんかだ。テキトーに金握らせてかき集めて来たが、ちィと長くなっからサクサク行くぜ」

その言葉に一寸、ウィリアムの瞳が鋭く狭められる。口の中に食糧が詰め込まれている様相のためいささか真剣味には欠けたが、ともかく本人が大真面目であるということに変わりはない。クロエがこくりと神妙に頷いて、同時。

「まず。あの迷宮――“飽食塔”って呼ばれてる塔なんだが。あれの攻略に懸賞がかけられてるのは確かで、それが健在なのも間違いねェ」

「でも、発見は結構前のことなんだろう。もう誰かが手をつけてたっておかしかないと思うんだけど」

「……だからこそ……情報を売り物に、してる……？」

「そう思ったんだけどな。どォも聞くと話が違ェ――」

いわく、かの迷宮は魔物の産物である。かの迷宮は、迷宮そのものが生きている。低階層に留まる内はそれほどでも無いが、ひとたび深入りすれば牙を剥くかのごとくその形を変え、一切の事前情報はまるで役に立たない。繰り返された調査が半ば無為と化し、攻略は難航。つい最近には迷宮の踏破にあたって比較的大規模な部隊が組織されたが、たった一人を残して全滅。おまけに、かの迷宮は時を経るにつれて外装から少しずつ“肥大化”している――と。

絶望的な情報がひとつひとつ明らかになるにつれて、迷宮に踏み込む無謀な輩は日に日に減り続ける一方――というのが最も正確な昨今の情勢のようだった。

「うーん」

「どったよ、ウィル」

「逃げるか……」

「早ェな！？」

柔らかなパンをちぎって口の中に放り込みながら、少年は思わず唸り声をあげる。聞くだに冷や汗が止まらぬ情報の数々。それに飛び込んでいくのは余程の命知らずか気狂いの何者でも無いのではないかと考えざるを得ないからだ。無理ないことである。ウィリアムはがりがりと髪を掻きむしって、軽く頭を抱えた。――強制的では

ないといえども、決定権は半ば彼に委ねられている形なのだ。それは即ち、少年一人の決断によって三人の命運が左右されるということに他ならない。

悩まない方が、どうかしていた。

「……ううん、ん」

湯気を立てる焦がしチーズ和えオニオンスープに息を吹きかけながら、クロエは暫しの思索に瞳を閉じ――やがて思い至ったかのように、ふわりと視線を緩めた。

「……とりあえず」

「うん」

「……見に、いって、みる？」

「……う、うーん」

なんとも漸進的な提案で、実りがあるかというとあまり意味がある行為には思えなかった。あるいは純粋な興味で、その様子を直に見るということにクロエは意味を見出していたのかもしれない。

「ま、注文したのが出来るまで二日だかそこらかかるだろォよ。それまでに決めときゃあ良いんだ」

一個の判断材料にするんなら悪くねェんじゃねえか、とエリオは忠言程度にとどめる。

「他にもなんか無ェかな、ってのは浚ってみるが。あんま期待しねェ方向で頼む」

「わかった。……よしッ！」

その言葉を受けてウィリアムは口にした食物を一息に飲み込むと、机に手を突いて勢い良く立ち上がる。元より少年は思い悩むよりも行動が性分だ。考えなければならないことがいささか多すぎるためか思索にふけることは少なくないが、それでも性に合うのは間違いなく身体を動かすことである。

「行ってくる！」

「……今、から？」

「もちろん」

「……じゃあ。私も、行く。……見てきたい、から」
そう言って熱々のスープを飲み切るクロエ。舌に火傷でも負いそうなものだが、構うことなくごちそうさまと言って立ち上がる少女の様子をふいに見上げて、エリオはぽつりと呟く。
「行くってェのは良いんだが」
「うん」
「場所わかってんのか」
「あ」
「……あ」
「おまえらは……」
ほのかに酒気を漂わせるエリオは、奇妙に冷静であった。

――巨大迷宮“飽食塔”は王都の城壁をにわかに離れて、しかし何ものに憚ることも無しに天高くそびえ立っていた。街道を外れて森の中を分け入った先、その足元に至るまでもなく見ることが出来るほどの巨塔。外殻の一切は襞をあしらった肉壁のごとき薄紅に覆い包まれ、見るものの悉くを尋常ではないと圧倒する威圧感を全方位に射出している――そういっても決して過言ではない光景だ。
「……帰りてェー」
「見るからにマズイ気配が漂ってるな……」
土を踏みしめるたびに近づく、異形の巨塔から感じられる圧迫感。極めて生物的な外観はなるほど、迷宮そのものが生きていると評されるも道理であると言えよう。クロエの表情の渋さといったら生半可ではない。心底から食後での探訪を後悔しているそれである。
三人が非常に穏やかならぬ心地で歩みを進める途上、不意に――夜の闇の向こう側、森を切り開いた細道の真ん中に立ちはだかる人影を認めた。
「――この先へ行くつもりですか」
何のこともなく、敵意を示されることもなく。投げかけられた言葉は静やかな女の声だ。その声音には、かすかに訝しむような色が

入り交じる。
「……それを、考えてる。国をきっての攻略なんだろう。軽々には行けない」
それに物怖じすることなく応えるウィリアムの返答は、しかし慎重であった。
「どうしても、と言うのなら止めません。ですが、迷うのならば行くべきではありません。引き返すべきでしょう。――それとも、この国の事をお考えで？」
「いや全然。完全無欠にオレ本位だぜ」
清廉に言い切る女の言葉。それに向かいひひと悪辣に笑ってみせるエリオは、さながら汚れ役を買って出たかのような有様だ。そしてそれが不自然ではなく、彼の整った美貌がむしろ胡散臭さを助長させるようですらある。
「そうですか――いえ、いずれにせよ同じ事。すでにこの迷宮の探索は、形式上はともかく――半ば“帝国”に委任されています。兵力に乏しいこの国の手に及ぶものでは、ありません」
ゆえに、と彼女は依然として立ちはだかる。そんな女の様子を不思議げに、ウィリアムはその視線を鋭く細めて見据えた。
――彼女がそんな言葉を吐く理由がどこにある。その必要がどこにある。恐らくは国に遣わされた警備兵、といったところだろう。僕たちのような無法者がくたばったところで、彼女は一向に構わないのではないか。人を通してはならないのならば、それに相応しい警備を置いておくべきだ。ならば導きだされる自然な道理。考えられる理由はひとつ。彼女には僕たちを止めるような権限も力も義務も無く、ならば――無駄な犠牲者を減らすために一定の情報の開示を認められている、といったところか。
「……成る程」
この世界において間違いなく最高峰の戦力を有する“帝国”、その介入をもって漸うの攻略を果さんとする迷宮。常人を引き止めるにあたって、これ以上はない脅し文句だ。ウィリアムは一度頷きな

がら――しかし静かに首を横に振った。
その言葉はウィリアムにとって、決定的に逆効果だ。
「……ウィル」
「なんだろう」
「……“帝国”に先んじて、どうにか、できたら……？」
「クロエ――僕も全く同じことを考えていたとこだ」
――それは己等の力を示すにあたって、これ以上となない好機になり得る。
ニッ、とウィリアムは口端をつり上げるかのような笑みを見せた。悪童の笑顔だ。その表情を浮かべたまま、少年は女へと歩み寄る。ココアのように暖かな、そして柔らかな印象を与えるブラウンの髪。白く眩き法衣。その瞳は驚愕にか、ぱちぱちと忙しなく瞬いていた。
「――また、来る」
「お偉いさんの鼻っ柱折りてェのが動機ってのもどうなんだろうなァ」
「……ご心配、おかけ、します」
ひひ、と奇妙に小気味良いエリオの笑い声を残して彼らは来た道を振り返り行く。呆然と立ち尽くした彼女――第三次迷宮探査大隊唯一の生き残りにして巨大迷宮“飽食塔”観測班ニアは、ただただ彼らを見送る他なかった。

Ｌｅｖｅｌ４５：『ＡＲＣＨ／ＥＮＥＭＹ』

あれから二日後。休養のためでもなんでもない二日の間、何事もない平穏な日常が続くことが果たしてこれまでのウィリアムの人生に一度とてあっただろうか――とまで言えばいささか過言に過ぎたが。それでも少々の拍子抜けを覚えてしまう程度に、王都『モースモール』はおおむね平和であった。

広大な都市の隅々にまで警備兵の目が行き届いている、というわけでは決して無い。むしろその規模の巨大がゆえに法の目をまぬがれる場はいくつも点在しており、それは例えば下町に位置する職人街であったり、より多くの人々を収めんとするように建ち並ぶ、数階に及ぶ石造りの貸家であったり――そういった無法とも呼べる地域に、しかし無秩序ゆえの荒涼は見当たらなかった。

「正直、意外だ」

「……う、ん？」

真昼の職人街の通りを行く三者の少年少女。広場の様子を見渡しながらの途上、ふいに零れたウィリアムの言葉にクロエが小さく首をかしげる。

注文の品であるところの武器をウィリアムが受け取りに行く、ならばついでに街中を見てまわろうではないか――という好奇心に駆り立てられた発想は、彼らにとって極々自然なものであった。

「あれだ。……そんなに差し迫った危険があるわけじゃあないんだな、アレ」

そう言って彼方を見据えるウィリアムの視線。その目が向く方角に存在するものは、その意味は――即ち“飽食塔”。くだんの巨大迷宮に他ならない。見るものを寄せ付けぬかのような不気味な外観、そして探索者をことごとく退ける厄介な性質。しかしかの存在が人間に対して積極的な被害を齎しているかといえば、否。

「気味悪ィし、お偉いさんには漠然とした不安があるのかもしんね

ェけど。具体的に何してるって訳でも無ェのがな」
そりゃあ侵入者は殺しまくってるわけだし良かァ無ェが――とエリオは軽い調子で言い放ち、肩をすくめる。
「妙じゃあないか。僕の経験上だと、迷宮（ダンジョン）の近くなんかにゃ魔物がイヤになるほどうろついてたもんだけど」
この場合の迷宮（ダンジョン）とは、その形状にこだわらない。例えば洞穴、あるいは山間。人跡未踏の森林、果てには何者かの手によって建造された遺跡など。人が踏み入ること敵わぬ領域に人外が集い、魔物の巣窟となるならば――それらはおしなべて迷宮（ダンジョン）と呼称されるに足る環境だ。この定義をもって“飽食塔”を推し量るならばこれは迷宮に相違なく、加えてその付近一帯に魔物が跳梁跋扈することも予想される事態である。
しかし現実には、そのような悲劇的な事態に見舞われては、いない。
「確かに、ちっと変だァな――城壁、のせいかね。魔物でも突破出来ねェってんで、今は硬直状態みたいなモンとか」
「……出る、理由がない……とか、かな」
こつこつと石造りの道を歩んでいた足音が、ふと止まる。それはぽつりと零されたクロエの呟きに起因するものであった。
わざわざ魔物が出張る理由。ウィリアムの経験の上では、魔物は迷宮を拠点としてその周囲を徘徊するものである――という認識が根付いていたために、その発想には至らなかった。驚かされたかのように一寸目を丸くして、ウィリアムは少女に向き直る。幸いに広場の一角であったがため、急に立ち止まったところで誰が気にとめることでもない。
「……と、いうと」
「出る理由っつゥと、狩りだろ――後は数が増えると場所が足りなくなるってェのも考えての、領地拡大ってとこか」
「……うん。だいたい私も……そう、考える」
でも、とクロエは言葉を続ける。

「……狩猟は、食糧問題……これは分からない、けど。……後者は、心配しなくていい、から」

ぴんと指先を立てて示唆するクロエの言わんとするところ。一拍遅れで、ウィリアムはそれを理解する。解はすでに、先日エリオから聞き知った情報の中にあったのだから。――いわく、かの迷宮は日に日に“肥大化している”と。それによってもたらされる魔物の利は、居住区域の確保。なんらかの作用によって糧食が供給されているとも考えれば、自然――魔物が人里を襲わなければならない必然性は、限りなく薄れる。

「……なるほど。そう考えると、そんなに妙なことでもないか」

「魔物にそこまで考えられる頭あンのかね」

「それはそれで厄介そうだな……」

本能とかでそう動いてるってのが妥当な線じゃないか、と発すると共――全くの不意に、ウィリアムは異方からの視線を知覚する。真っ直ぐと向けられるクロエのそれでなければ、緩やかな笑みに狭められたエリオのものでもない。広場の片隅にたたずむ三人をふと見止めた、程度のものと認識するにはあまりに異質。

「……ウィル。……だれか、の」

「――ああ。見られてる、な」

クロエにも感じ得るそれは隠すつもりすらなく明瞭に感じられる、粘着くような監視の目。周囲のどこを見渡しても警備の人間の姿が見当たらないこの職人街に、その類の存在を求めることは不毛であった。ならばこそ、続くエリオの言葉にも間断なく答えられようというものであった。

「何か。心当たり無ェのん」

「……ものすごく不本意なことに、ひとつだけある」

つい先日にその名を聞いた時から、ほのかに予見していた事態。出来ることならば考えたくはなかったが、それでも考えずにはいられない存在。――“帝国”。“稲穂（イースト）の国”が“帝国”に迷宮の攻略を委任したという情報は、それ即ちこの二ヶ国間で、ある程度は友

好的な関係が結ばれている――ということを意味する。
そしてその理由は不明瞭ながらも――ウィリアムが“帝国”の王の子息であるという事実はしかし、彼が末弟であるため決定打に欠ける――“帝国”から追手をかけられているウィリアムに、彼らの目が届いているという可能性は大いにあり得る。辺境もいいところであったレーヌ村ならばまだしも、“稲穂（イースト）の国”の首都に相当する王都『モースモール』には、“帝国”の人間が紛れ込んでいてもなんら不思議ではない。
「その筋か。しち面倒臭ェな――どうすんよ、撒いとく？」
言動とは裏腹にひひと軽やかに笑うエリオの言葉は、どこかウィリアムを気づかう様でもあったか。面倒な厄介ごとを背負い込んでいるウィリアムに呵責なく付き合う腹づもりが、どことなく感じられる口ぶりだ。
「……いや。あくまで他国領、しかもこの昼間っからだ、無茶は出来ないはず。人の多い通りに出て紛れた方がいい――クロエ」
「……うん」
ウィリアムが差し出した掌を掴むため、クロエはその小さな手を伸ばす。一目見るだけでは意図を測りかねる行為だが、なんのことはない。仮想敵の狙いがウィリアムであると仮定して、しかし最も肉体的に脆弱である少女（クロエ）が人質に取られる可能性を考慮しないわけには行かなかった。なにせこの昼間、人通り多くさほど大きくもない広場に向かえば、人混みに紛れることはそれほど難しいことではない。だが同時に、ちょっとした拍子で仲間と逸れてしまう危険性は――わずかながらも付きまとう。
「オーケイ、逃走経路（ルート）は――まァだいたい分かんだろ。オレが先導すっから後から来てくれ」
「……頭の中に、はいってる……の？」
小さく見上げる双眸、彩る蒼のきらめきを揺らがせたのはおそらく驚愕。そして感嘆の吐息。人の足では一帯を網羅することも困難であろう王都の地理を把握するという難事、一朝一夕ではままなら

ぬことだ。それをなさしめた大元は果たしてエリオの情報収集能力を根源とするのだろうか――――

「アドナ引きずって案内させて回ったからなァー」

「そんなことやらせてたのかよ！　この二日間！」

手酷い扱いもいいところである。とはいえウィリアムのように漫然と散策を続けるよりかは幾許か効率的で、有効であることには違いない。ひひと笑みを浮かべるエリオの様子を目にしては半ば感心にも近しい呆れた様なため息を零すウィリアム。そのまま、続く一歩を踏み出そうとした――その時、であった。

「――待ちたまえッ！　そこの少年ッ！」

突如として広場に響き渡る声音。ウィリアムにその手を引かれんとしていたクロエが、びくりと反射的に背を返りみる。果たして何事かと辺りに視線を走らせる人影も決して少なくはない。彼女がひとたび意識を掬われてしまった以上、先導するはずであったエリオにしても下手に動くわけにはいかなくなった。

しかるにクロエが目を向けた先、そこには堂々と――確かにウィリアムを指さしたまま相対する、一人の男の姿があった。年頃は二十に達するか、否か。癖毛がかった金色の髪は色鮮やかに、垂れ目がちの青い目はしかし、真っ直ぐと迷いない視線を灰色頭の少年にそそぐ。背に羽織られた紅のマント、その布地には永劫を表す尾を食む竜が縫いこまれていた。全体を見れば貴族のような優雅さを思わせるその姿は、職人街の所帯じみた有り様の中にどこか似つかわしくない。

「……何用だ。僕に呼び止められるようないわれは無いが」

ウィリアムもまた向き直ると同時、男に向けてそう言い放つ――が、内心では“やられた”という気持ちが拭えなかった。無意識ながらも少年の内には、相手も大っぴらには行動出来まいという思い込みがあったのだ。だが――いざ堂々と呼び止めて、相手方に一体なんの不都合があるというのだろうか。無論、彼はその行いがために自らの所在をさらけ出したわけだが――しかし、それだけだ。明

らかなる追跡の目を向けるものがそこにいる、そう知れたところでこちらに打つことが出来る手が、果たしていくつあるというのか。今、ウィリアムの心中は、彼の零す言葉ほど穏やかではない。

「まあ、まあ。そう邪険にしないでくれたまえ、ウィリアム君――なにも取って食おうってわけじゃあない。勿論、君の意志を無視してふん縛っていこうなんて腹でもない」

男はいかにも調子よく朗々と、ウィリアムらに歩み寄りながら言い切る。金髪を掻きあげる仕草を伴って紡ぎだされる言葉は、どこか無闇にきざったらしく――優男風という印象を感じさせる顔つきも相まって、ウィリアムをにわかに辟易させた。

「……じゃあ。……何が……目的？」

ウィリアムは男に名乗っていないにも関わらず、彼は少年の名を確かに呼んだ。その事実は、男が即ち“帝国”側の人間であるということを示唆しており――その帰結はつまるところ、クロエの警戒を深めさせることにも繋がる。些かならず険しく男を見据える少女の目、その意は詰問以外のなにものでもない。

「なるほど。それが疑惑の根というわけだ、麗しのお嬢さん」

「……おべんちゃらは、いい」

クロエの言葉を聞いたその時、男の目がひときわ開眼したように見えたのは錯覚であったのか。それを確かめる術はもうすでに無い。

「なにを言うんだね、今のは僕の偽らざる本心さ。円な蒼星石（サファイア）の様な瞳、艶めく黒檀は実に珍しい、少々幼子（おさなご）じみてはいてもそれもまた愛嬌、むしろ僕の好みだと――」

――ぞくり。繋がる手と手からクロエの震えを感じ取るウィリアム。間違いない。このふるえは寒気によるものだ。そしてその寒気は、尋常ならざる怖気に起因するものであった。でなければ、温暖な季節の真昼間であるにも関わらず――その真っ白な柔肌に鳥肌を浮かばせる理由が見当たらなかった。

――……変態、だ。

人知れず零れたクロエの呟きは、戦々恐々とした響きをたずさえ

ていた。
「オイ、ウィル」
「ああ、撃ってくれ」
「おうよ」
にべもない。以心伝心のやり取りを通じて手際よく一矢が弦へと番えられたその時、ようやくエリオへと制止の声がかかる。そして制止の声がかかったとはいえ、その鏃を男へと向けることに一切の戸惑いはなかった。
「まあ待ってくれ。待ちたまえ。すまない。確かに今のは僕が悪かった。せめて誠意は示したい」
「まずは先の問いに答えろ！　それが誠意だろ！」
そうまくし立てるウィリアムに、まあ落ち着きたまえよと掌を突き出しながら男は言う。ウィリアムとしてはむしろお前が落ち着けと返したいところであるが、しかし眼前の男はいたって平静そのものであるようにも見えた。がりがりと灰色髪を掻きむしりながら、大きなため息を漏らすウィリアムに、ようよう男は本題を切り出す。
「僕はギルバート。“帝国”属の魔術師だ――――王の直々の命により、ウィリアム殿、君をお迎えに上がった」
「断る」
「ちょっとは考えたまえ早すぎるぞ君！　実の父君がお近くにいらっしゃるというのに！」
即断即決、ギルバートの言葉をバッサリと断ち切り背を向けたウィリアムの姿が――続く言葉にぴたと止まる。ぎこちない挙動で男へと向き直るその様子は、さながら油の切れた歯車のようであった。
「……ちかく、に……？」
その言葉に思わず首をひねるクロエに、ギルバートは静かに頷いてみせる。
――近辺。一国の天辺たる王が庶民じみた職人街をほっつき歩いていると、目の前の男はそう言ったのか。虚言にしても無理が過ぎるとウィリアムはいぶかしげに瞳を眇める。

「その通りだ。従いてきたまえ。王は子息との対面を所望しておられる！」

「――オレらはどうする気だ。信用しづれェ相手の言うとおりにウィルを一人にしろ、とでも言うかよ」

ふんと鼻息を鳴らして、あからさまな不信感をぶつけるエリオ。だがギルバートはそれを意に介することもなく、高らかな笑いを上げながらその言葉を否と断ずる。

「王は懐が深くてあられる。同行者の一人や二人、構われるまい。王の出自とて無法者、しかし力のみでのし上がった傑物よ」

「そうか。んで、どォするよ」

「行こう」

「速ェなオイ。良いんかよ」

「僕の出自が知れてるってのもある、からな」

どこぞの山師の類でもあるまい、とウィリアムはギルバートの御姿を見すえて肩をすくめた。素早い判断とは裏腹になんとも気が重い。

「……悪くはない、かな。……寝ているとこを、襲撃されるよりは、まだ……良い」

「なに、心配しないでくれたまえ。王の女癖は大層悪いが、流石に子息殿の同行者にまでは――ひィッ」

冗談めかした言葉を返すギルバートが、その声を遮られるかのごとく唐突に悲鳴をあげる。何事かと周囲を見渡す、までもなかった。ウィリアムの眼前にいまだ健在であるギルバートは、しかし背後から彼の頤（おとがい）に銀色の刃を押し当てられていたのだから。一目瞭然の危難である。後ほんの少しでも刃が進められれば、動脈から血流を吹き出すであろうことは想像に難くない。

「ま――まあ待ちたまえ。決して王を貶めようという意図じゃあない」

彼がそうなだめると共に退けられる刃、それはよもや見知った者による凶行であったか。ゆらりと宙に揺らめく銀色、それを握る手

はちいさな花弁にも似る。ふぅと安堵の息を吐くギルバートの背後、それは声も出さず音さえも立てずにただそこにいた。黒くゆったりとした貫頭衣に身を包み、頭髪を覆い隠すスカーフもまた同色。ほんの僅かに露わな肌は浅黒く日焼けたそれ。小さな姿は、さながら影が実像に寄り添うがごとく。

「……なにか物騒なのを連れてるらしいな」

「うむ。事を構えることになれば僕だけでは手狭なのでな。君が提案を断った場合、彼女が君たちの跡をつける手はずとなっている！」

「……正直、だね」

「なんで王サマは手前みてェなのよこしたんだろォな……」

腹芸もへったくれもあったものではない。平然と何を悪びれることもなく言い切るギルバートに瞳を細め、至極神妙な呟きを漏らすエリオであった。

それほど長い距離を歩き続けたわけではない。広大な王都とはいえども、あくまで城壁に囲われた一都市。だからこそ、限られた領地に多くの人々を収容するためにも高層階建設の石造り借家が建ち並んでいるのだとも言えよう。

先導するギルバートに従広場をひとつ通り抜け、はて別の地区にまで向かうのだろうかとウィリアムが考えだしたところで、彼はぴたりと歩みを止めた。ぐるりと辺りを見渡した視線が、程なくして求めたものを見つけ出す。揚げピザの路地売りであった。

「王。その様な物に手を出しては、今の立場というものを――」

「馬鹿めがッ！　美味いもん食わずして帰れるか、大体その王ってのはやめろ、目立ってしょうがないだろうが！」

「父さまは自覚というものが足りません」

何ぞか賑やかな会話が聞こえる軒先、実に穏やかな空間であると和ませられる――はずがなかった。

「――王。御用命の通り」

彼らへと歩み寄り、恭しくかしずくギルバートの姿もいっそ滑稽

にすら見えた。場違いにも程がある。幸いにしてこの地区の隅に位置する広場であるためか、人通りは多からんが――ウィリアム、否、彼ら三人共々が他人のふりをして回れ右をしたくなるものの、ここまで来てしまって背を見せるわけにもいかなかった。ギルバートと連れ立っていた黒尽くめの姿は音もなく、“王”――そう呼ばれた男の影に舞い戻るかのごとく、その傍らに寄り添う。

無造作に短く切り散らされた銀色の髪。理知と勇猛が同居する精悍な容貌。なるたけ目立つことを控えるためにか服装は決して豪奢なものでないが、そんなことは申し訳程度の繕いにしかなっていない。年の頃は三十に至るか、若々しい――否、若すぎる姿がいっそ異様。王の相貌の面影、そのほんのわずかをウィリアムに見ることが出来たが、しかし似ていると言うには程遠い。ほの暗く闇に近似する蒼黒の双眸が、かしずくギルバートを一瞥した。

「良くやった。お前を遣わせたのは正解だったようだな」

有難きお言葉、ギルバートはそう答えてさながら彼の道を開くかのごとくその身を脇に退ける。

王。

その間近に伴うは三者。一人はひたすらに無音。一人は、王に良く似た銀髪を左右に結い上げて侍らせる若い娘。そしてもう一人は、ウィリアムの記憶にも引っかかる相貌。――レイチェル・シュナイデ。白金のセミロング、碧眼が目立つ玲瓏の女剣士は、流石に街中でプレートアーマーを装備してはいなかった。

彼は揚げピザ――ハムやサラミ、たまねぎにピーマンに馬鈴薯とたっぷりのチーズを乗せ、トマトのソースを和えた皿状のパン生地を油で揚げたもの――を悠長にかじりながら、ウィリアムらへと視線を向ける。何を急くこともなく悠然と、口を開く。

「お前らもどうだ。一つ」

「それが僕らにかける一言目か、おいッ！？」

「美味いぞ」

「……それは、自分で買います」

「真面目にやれよテメエらはよォォオオオオ！」
　魂の慟哭にも似たエリオの声が通りに響き渡る。クロエなどは至極真面目な表情で言葉を返しているには違いないのだが、しかしそういう問題ではなかった。レイチェルが横から王を小突き、傍らの娘が何やら物言いたげな視線を向ける。ハァー、と大仰にため息を吐き出す彼はどうやら真っ当な人格者とは言いがたい人間であるらしい。銀色の頭髪を投げやりにくしけずり、一歩。歩み寄る——ウィリアムの、目の前へ。
「久しいな。ドラ息子」
「会いたくなかったよ。——レオンハルト帝」
　父とは、呼ばず。ウィリアムの薄暗がりじみた瞳が炯々とした光を帯び、一人の彼と相対する。少年よりも、その背丈はずっと高い。男はくっくと隠し切れないように忍び笑いを漏らし、口元を三日月に歪めた。“帝国”が天辺——“獅子王”レオンハルト。
　ウィリアムがちらと視線を曲げれば、今にも飛び出さんとする若い娘をなだめるように押さえこむレイチェルの姿があった。
「母親に似たのか、アレはどうにも生真面目でな——覚えているか？　俺はお前くらいにいい加減でもいいと思うんだがなあ」
「いや、全く記憶にない」
「だろうな。お前が出ていった時はガキもいいとこだった——というより、覚えていても記憶のそれと合わんだろうな」
　あれは僕の姉なのか、ひとしきりなだめられて落ち着いた様子の彼女をウィリアムは一瞥する。やはり判然としない記憶の中に、その姿が思い当たることはなかった。
「そォいや、二十番目の子息って言ってたな」
「うん」
「じゃあ、十九人も上がいんのかァ……」
「母さんは別々だから住まいは違ったけど」
「……な、なんで、別々？」
「僕は知らなくてもいい世界があると思う」

困惑することしきりのクロエにそのわけを真っ向から言い切る無体は、ウィリアムにとってあまりにも難事に過ぎる。レオンハルトは最早漏れ出すような笑い声を隠すことさえもせずに、彼らのやり取りをかかと大いに笑い飛ばした。

「なに、ウィリアム。お前にも、じきに分かる」

「それはない。絶対にない」

「いいや、分かるさ」

――――お前は一等、俺に似ているからな。

その言葉は、まるで呪縛のようだった。

ウィリアムはそれを振り払うかのように、緩慢に首を横に振る。

「さ、て。そろそろ本題だ。俺がお前を放逐したままにしない理由、そして俺がお前を無理やりにへし折る真似もしない訳。単純なことだ」

無言。ウィリアムは何も答えないことをもって答えた。抱く疑問もお見通し、というわけか。あるいはそんなことは分かっていて当然、とも言わんばかりだ。

「一介の無法者の分際で生き足掻くその様。俺に、良く似ている。かつての俺に、良く似ている。それを俺は、評価している。否、俺はお前の“欲望”を――――俺以上だと評価している。俺にはそもそも何もなかったが、お前は持っていたものを投げ捨ててそこに立っているのだからな」

顔を上げ、決して目を逸らさないように。男の声を真っ直ぐと聞き入れながら、受けたそばからくそっくらえと吐き捨てるために前を向く。

お前が僕の何を知る、否、あるいは自分が想像する以上の情報を掴んでいるのだとしても――それでも。

「俺はお前に応えられるぞ。来い。――お前の意志でもって」

それは誘いの意志。力を欲するならば、金を欲するならば、地位を欲するならば、求めに報いを。答えを迷うはずもない問いかけ。

そしてその声にまぎれた、小さな響き。

――……あ、と。少女の、クロエの小さな声が、確かに耳に届いた。それは声と言うもはばかられるような幽かな音でしかなく、もちろん言葉をなしているはずもなかった。それでもそれは、十全の意味を持つ。

「……断る。やり方は、その過程は――僕が選ぶ」

答えを迷う、はずもなかった。

あらゆる力を求めるという大前提があり。

しかしそのための手段は、選ばなければならない。真に手段を選ばないのならば、この冒険を続ける理由はどこにあるというのだ。その選択こそが、ウィリアムをウィリアムたらしめているというのにも関わらず。

ならばこそ、その誘いを切り捨てないという選択は、存在し得ない。

その言葉に――レオンハルトは、ニィと不吉な笑みを浮かべてみせた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1107t/

光遠き地の冒険者たち

2011年12月18日07時46分発行